

県道諏訪茅野線建設事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

—茅野市内—

こま がた
駒 形 遺 跡

2007.3

長野県諏訪建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

県道諏訪茅野線建設事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

—茅野市内—

こま がた
駒 形 遺 跡

2007.3

長野県諏訪建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



駒形遺跡遠景（南側から）



検出された遺構（真上から）



黒曜石の原石



SB 48 出土



SB 47 出土

凹石類 (ベンガラ? 付着)

はじめに

既に、大正時代の頃には知られていた駒形遺跡は、地元開業医の田実文朗氏によって、多くの黒曜石や石鏃が拾われました。また、駒形遺跡は霧ヶ峰や和田峠周辺の黒曜石原産地に近く、黒曜石交易や石器製作に関与した遺跡と評価されてきました。

平成6・8（1994・1996）年、長野県教育委員会は大規模開発に備えた分布・試掘調査を実施し、駒形遺跡は100軒を超える大規模集落であったことが明らかになるとともに、多くの黒曜石や石器、そして石鏃の未製品が出土し、石器作りに関与したとされる駒形遺跡のこれまでの評価を裏付けることになりました。この結果を受けて、平成10（1998）年、駒形遺跡が国史跡に指定されたのは周知のとおりです。

長野県埋蔵文化財センターでは、平成15・16（2003・2004）年、県道諏訪茅野線の建設に伴い発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行いました。調査の位置は国史跡の南側ですが、今から約7000年前となる縄文時代前期のムラの一画を調査し、55,000点を超える黒曜石の原石や石器、石鏃の製作工程を示す資料が出土するなど、多大な成果を挙げることができました。こうした成果は、駒形遺跡だけに止まらず、縄文時代前期の生活や黒曜石交易、石鏃製作の実態などを解明していくための、不可欠な資料と評価されます。

県道諏訪茅野線の開通により、縄文時代は黒曜石の交易ルートであったとされる駒形遺跡が、今日では霧ヶ峰方面へと観光客を運ぶルートに変貌しつつあります。今回の調査結果から、国史跡範囲の外側一帯にも、貴重な文化遺産が埋もれていることが明らかになりました。また、駒形遺跡の背後には豊かな自然が残されており、今後はこうした自然環境とともに、駒形遺跡が十分な保護措置のもと、保存・活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた長野県諏訪建設事務所、茅野市、茅野市教育委員会などの関係機関、地元の地権者や関係者の方々に深甚なる謝意を申し上げます。





平成19年3月

長野県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は県道諏訪茅野線建設に先立ち調査された、茅野市米沢駒形遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが長野県諏訪建設事務所からの委託をうけ、平成 16・17 (2004・2005) 年に実施した。
- 3 本遺跡の調査概要は、すでに『長野県埋蔵文化財センター年報 21・22』で紹介しているが、内容において相違がある場合は本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図 (1:50000)、茅野市発行の基本図 (1:10000) をもとに作成した。なお、今回は新世界測地系に基づいた。
- 5 発掘調査にあたって以下の機関、諸氏に業務委託もしくは協力を得た (敬称略)。
㈱アイシー：測電基準点設置および地形測量、単点測量等の測量、航空撮影
第一合成㈱：土器の注記 ㈱シン技術コンサル：石器の実測
㈱アルケーリサーチ：石器のトレース、遺物写真の撮影、報告書編集
㈱加速器分析研究所：土器付着物の年代測定
㈱パレオ・ラボ：顔料分析、土器胎土分析
信州大学理学部教授 原山 智：黒曜石以外の石器石材鑑定
沼津工業高等専門学校教授 望月明彦：黒曜石産地同定分析
- 6 石器石材鑑定には、原山智氏が直接鑑定したもののほかに、原山氏の指導を受けて調査・整理担当者が行ったものが存在する。
- 7 本調査にかかわる記録および出土遺物は、報告書の刊行後に茅野市教育委員会へ移管する。
- 8 本書の作成にあたり、以下の諸氏、諸機関にご指導・ご協力を得た (敬称略)。
会田 進 鞆飼幸雄 大竹幸恵 大竹憲昭 河原喜重子 小池 孝 小池岳史 小林達雄 小松隆史
河西清光 渋谷昌彦 島田哲男 下平博行 武居幸重 谷藤保彦 戸沢充則 林 賢 樋口誠司
町田勝剛 宮坂 清 武藤雄六 望月明彦 守矢昌文 山田武文 山田昌久 諏訪考古学研究会
茅野市教育委員会 尖石縄文考古館
- 9 発掘調査の担当は以下のとおりである。
平成 16 (2004) 年度：調査研究員 小林秀行 賛田 明
平成 17 (2005) 年度：調査研究員 賛田 明 藤原直人
- 10 平成 16・17 年度の発掘調査補助員、整理作業補助員は本文第 1 章に記載した。
- 11 本書の執筆・編集は調査研究員小林秀行、賛田明が行い、調査部長市沢英利が校閲し、調査第 1 課長の上田典男が校正した。また、本書付録 DVD の土器観察表は賛田明が、石器観察表・黒曜石産地同定分析表は小林秀行と賛田明が作成した。

凡例

- 1 遺構図・遺物図のスクリーントーン等の表現は下記の通りである。
遺構図 ：被熱面 ●：土器 ▲：石器 S：礎
遺物図 ：土器断面図中の表現は繊維を含むことを示す
：石器石皿の平面図中の表現は磨面を示す
：石器石皿の平面図中の表現は黒色の付着物を示す
- 2 本書に掲載した遺構図、遺物図の縮尺は、原則として下記の通りである。その他の場合は、図版中のスケールを参照していただきたい。
竪穴住居跡 1：60 方形柱穴列 1：60 掘立柱建物跡 1：60 土坑 1：30 屋外が 1：30
黒曜石集積遺構 1：30 配石遺構 1：30 流路跡 1：200
土器実測図 個体 1：4 破片 1：3
石器実測図 石鏃・未製品・石器・スクレイパー・石錐・器種不明・両極石器・石製円盤 1：1
石核 1：1 打製石斧・磨製石斧・敲き石 2：3 凹石類 2：3
石皿 1：3、1：4、1：6 軽石製品 1：1 砥石 1：2 挾状耳飾 1：1
- 3 本書に掲載した遺物写真は、概ね以下の通りである。
土器破片資料 1：3 土器個体資料 1：4
石器 石鏃・未製品・石器・スクレイパー・石錐・器種不明・両極石器・石核・打製石斧
磨製石斧・凹石類 2：3、石皿 1：4、1：6、1：8
- 4 基本層序および遺構覆土の色調は、『新版 標準土色帖』による。
- 5 竪穴住居跡の面積は、住居の下場線を床面積として、プランメーターで計測した。
- 6 方形柱穴列および掘立柱建物跡の規模は、各柱穴の中央部を長方形に結線して、その長辺と短辺を計測した。
- 7 本書付録 DVD に、遺構全体図（1：200）、土器観察表、石器観察表および自然科学分析結果（放射性炭素年代測定分析、土器胎土分析、赤色顔料分析、黒曜石産地同定分析）の報告書を収録したので参照されたい。
- 8 本文および表中に示した遺物の管理 No. は、復元・実測・写真撮影などの整理作業時に付した No. である。

目次

扉	
巻頭カラー	
はじめに	
例言	
凡例	
目次	

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 保護協議から本調査に至る経緯	1
1 保護協議	1
2 発掘届と発掘の指示	1
3 受委託契約	2
第2節 発掘調査・整理作業の体制	2
第3節 調査の方法	3
1 遺跡の名称	3
2 調査区(グリッド)の設定	4
3 写真と測量	4
(1) 写真 (2) 測量	
4 遺構の名称と記号	4
(1) 遺構の種類 (2) 平成16年度に調査した竪穴住居跡の遺構番号	
5 遺構の調査	6
6 遺跡の公開	6
第4節 調査日誌抄	7
第5節 整理作業	9
1 基礎整理作業	9
2 本格的整理作業	9
第2章 遺跡の環境	10
第1節 遺跡の位置と立地環境	10
第2節 歴史的環境	12
(1) 現況 (2) 中世～古代 (3) 古墳・弥生時代 (4) 縄文時代 (5) 旧石器時代	
第3節 基本層序	17
第3章 縄文時代の遺構	18
第1節 遺構分布の傾向	18
第2節 竪穴住居跡	21
1 概要	21
2 竪穴住居跡の構造	40
(1) 平面形状 (2) 規模 (3) 形状・規模と分布の関係 (4) 住居内施設	
第3節 掘立柱建物跡	45
1 掘立柱建物跡の認定	45
2 特徴	45
3 分布と性格	46
第4節 方形柱穴列	46
1 方形柱穴列の認定	46

2	特徴	47
	(1) 柱穴数 (2) 規模 (3) 柱痕跡 (4) 付属施設の可能性	
	(5) S T 6の遺物出土状況	
3	長軸方向の比較	50
第5節	土坑	51
1	概要	51
2	特徴	52
	(1) 時期 (2) 分布 (3) S K 44の遺物出土状況	
第6節	黒曜石集積遺構	53
第7節	屋外炉	54
1	概要	54
2	特徴	55
	(1) 概要 (2) 分布と性格	
第8節	配石遺構	56
第9節	流路跡	56
1	概要	56
2	特徴	57
第10節	その他	57
第4章	縄文時代の遺物	107
第1節	遺物出土状況	107
1	縄文土器	107
2	石器	108
3	遺構外山上遺物の性格	108
第2節	縄文土器	113
1	土器の分類	113
2	第Ⅱ群土器(早期末葉)の様相	116
	(1) 各土器の特徴 (2) 第Ⅱ群土器の評価	
3	第Ⅲ群土器(前期初頭)の様相	118
	(1) I・Ⅱ段階の様相 (2) 塚田式と他型式の比較	
	(3) 口縁部にみられる塚田式と中道式の系統性	
4	第Ⅳ群土器(前期前葉)の様相	121
	(1) 第Ⅳ群土器の出土状況 (2) 第Ⅳ群土器の変遷	
5	第Ⅰ・Ⅴ～Ⅶ群土器の様相	127
第3節	石器	127
1	各器種の概要	127
2	器種組成	133
3	石材と器種の関係	133
4	石鏃製作の可能性	136
	(1) 第69号竪穴住居跡出土石器と両極石器 (2) 石鏃製作工程	
	(3) 石鏃製作に関する若下のまとめ	
第5章	中世の遺構と遺物	234
第1節	概要	234
第2節	遺構	234
1	土坑	234
2	流路跡	234
第3節	遺物	237
第6章	自然科学分析	238

第1節	放射性炭素年代（AMS）測定分析	238
1	分析試料と結果	238
2	分析結果の整理	238
第2節	土器胎土分析	240
1	分析試料	240
2	分析結果の提示	240
第3節	赤色顔料分析	243
1	分析試料	243
2	分析結果と赤色顔料関係資料	243
第4節	黒曜石産地同定分析	244
1	分析試料	244
2	分析結果と比較	245
第7章	総括	247
	参考・引用文献一覧	250
	報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	発掘調査の範囲と調査年度	2	第 35 図	第 61・62 号竪穴住居跡 (S B 61・62)	80
第 2 図	調査区(グリッド)の設定	5	第 36 図	第 64・68 号竪穴住居跡 (S B 64・68)	81
第 3 図	遺跡周辺の地形	10	第 37 図	第 66 号竪穴住居跡 (S B 66)	82
第 4 図	駒形遺跡周辺地質図	11	第 38 図	第 67 号竪穴住居跡 (S B 67)	83
第 5 図	駒形遺跡周辺の黒曜石原産地遺跡	13	第 39 図	第 69 号竪穴住居跡 (S B 69)	84
第 6 図	駒形遺跡周辺の遺跡分布図	14	第 40 図	第 70・71・72 号竪穴住居跡 (S B 70-72)	85
第 7 図	基本層序	17	第 41 図	第 73 号竪穴住居跡 (S B 73)	86
第 8 図	遺構配置図	19	第 42 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 1・3)	87
第 9 図	竪穴住居跡の形状と面積	41	第 43 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 2) 1	88
第 10 図	形状・規模からみた分布状況	42	第 44 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 2) 2	89
第 11 図	ST2 の柱痕跡	49	第 45 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 4・10) 1	90
第 12 図	長軸方向の比較	50	第 46 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 4・10) 2	91
第 13 図	第 37 号竪穴住居跡 (S B 37) 1	58	第 47 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 5・7)	92
第 14 図	第 37 号竪穴住居跡 (S B 37) 2	59	第 48 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 6・9)	93
第 15 図	第 38・39 号竪穴住居跡 (S B 38・39)	60	第 49 図	掘立柱建物跡・方形柱穴 (S T 8)	94
第 16 図	第 40・41 号竪穴住居跡 (S B 40・41)	61	第 50 図	土坑 (S K 4・5・7-10)	95
第 17 図	第 42 号竪穴住居跡 (S B 42)	62	第 51 図	土坑 (S K 11-16)	96
第 18 図	第 43 号竪穴住居跡 (S B 43)	63	第 52 図	土坑 (S K 17・18・20・21)	97
第 19 図	第 44・45 号竪穴住居跡 (S B 44・45)	64	第 53 図	土坑 (S K 19・22-25)	98
第 20 図	第 46 号竪穴住居跡 (S B 46) 1	65	第 54 図	土坑 (S K 26-28・30-32・34)	99
第 21 図	第 46 号竪穴住居跡 (S B 46) 2	66	第 55 図	土坑 (S K 35-39)	100
第 22 図	第 47・52 号竪穴住居跡 (S B 47・52)	67	第 56 図	土坑 (S K 42・44・45・46)	101
第 23 図	第 48 号竪穴住居跡 (S B 48)	68	第 57 図	土坑 (S K 43・47・50・51・54)	102
第 24 図	第 49 号竪穴住居跡 (S B 49)	69	第 58 図	屋外炉 (S F 1-5)	103
第 25 図	第 50 号竪穴住居跡 (S B 50) 1	70	第 59 図	屋外炉 (S F 6-10・18)	104
第 26 図	第 50 号竪穴住居跡 (S B 50) 2	71	第 60 図	屋外炉 (S F 11-16)	105
第 27 図	第 51 号竪穴住居跡 (S B 51)	72	第 61 図	屋外炉、配石遺構、流路跡 (S F 19、S H 1、N R 1・2)	106
第 28 図	第 53・63 号竪穴住居跡 (S B 53・63)	73	第 62 図	遺構外出土石器の重量分布図	109
第 29 図	第 54 号竪穴住居跡 (S B 54) 1	74	第 63 図	遺構外出土石器の点数分布図	111
第 30 図	第 54 号竪穴住居跡 (S B 54) 2	75			
第 31 図	第 55 号竪穴住居跡 (S B 55)	76			
第 32 図	第 56 号竪穴住居跡 (S B 56)	77			
第 33 図	第 57・58 号竪穴住居跡 (S B 57・58)	78			
第 34 図	第 59・60・65 号竪穴住居跡 (S B 59・60・65)	79			

第64図	第Ⅱ群土器	117	第104図	第66号(2)・67号(1) 竪穴住居跡出土土器	175
第65図	第Ⅲ群土器の変遷	119	第105図	第67号(2) 竪穴住居跡出土土器	176
第66図	周辺遺跡の出土事例	123	第106図	第67号(3) 竪穴住居跡出土土器	177
第67図	第Ⅳ群土器の変遷	125	第107図	第67号(4) 竪穴住居跡出土土器	178
第68図	第37号 竪穴住居跡出土土器	139	第108図	第67号(5) 竪穴住居跡出土土器	179
第69図	第38・39号(1) 竪穴住居跡出土土器	140	第109図	第69号(1) 竪穴住居跡出土土器	180
第70図	第39号(2) 竪穴住居跡出土土器	141	第110図	第69号(2)・70号(1) 竪穴住居跡出土土器	181
第71図	第39号(3) 竪穴住居跡出土土器	142	第111図	第70号(2)・71号 竪穴住居跡出土土器	182
第72図	第41号(1) 竪穴住居跡出土土器	143	第112図	第73号 竪穴住居跡、土坑(1)出土土器	183
第73図	第41号(2) 竪穴住居跡出土土器	144	第113図	土坑(2)、方形柱穴、ⅡE11、I Q01・07 出土土器、表探土器	184
第74図	第41号(3) 竪穴住居跡出土土器	145	第114図	I Q08・13 出土土器	185
第75図	第42号(1) 竪穴住居跡出土土器	146	第115図	I Q15・20(1) 出土土器	186
第76図	第42号(2) 竪穴住居跡出土土器	147	第116図	I Q20(2)・25(1) 出土土器	187
第77図	第43・45号 竪穴住居跡出土土器	148	第117図	I Q25(2) 出土土器	188
第78図	第44号(1) 竪穴住居跡出土土器	149	第118図	I Q25(3)、IR16 出土土器	189
第79図	第44号(2) 竪穴住居跡出土土器	150	第119図	I R21(1) 出土土器	190
第80図	第46号 竪穴住居跡出土土器	151	第120図	I R21(2)・22(1) 出土土器	191
第81図	第47号(1) 竪穴住居跡出土土器	152	第121図	I R22(2)・23、IW01 出土土器	192
第82図	第47号(2) 竪穴住居跡出土土器	153	第122図	I W03(1) 出土土器	193
第83図	第47号(3)・52号 竪穴住居跡出土土器	154	第123図	I W03(2)・04 出土土器	194
第84図	第48号(1) 号 竪穴住居跡出土土器	155	第124図	I W07・08(1) 出土土器	195
第85図	第48号(2) 号 竪穴住居跡出土土器	156	第125図	I W08(2) 出土土器・土製品	196
第86図	第49号 竪穴住居跡出土土器	157	第126図	I W09・04・09 出土土器	197
第87図	第50号(1) 竪穴住居跡出土土器	158	第127図	I W14・15(1) 出土土器	198
第88図	第50号(2) 竪穴住居跡出土土器	159	第128図	I W11・15(2)・16・19・20、I X16・17・21 出土土器	199
第89図	第51号 竪穴住居跡出土土器	160	第129図	早期末葉 - 前期前葉以外の土器	200
第90図	第53号(1) 竪穴住居跡出土土器	161	第130図	石鏝(1)	201
第91図	第53号(2) 竪穴住居跡出土土器	162	第131図	石鏝(2)	202
第92図	第53号(3) 竪穴住居跡出土土器	163	第132図	石鏝(3)	203
第93図	第54号(1) 竪穴住居跡出土土器	164	第133図	石鏝未製品(1)	204
第94図	第54号(2)・59号 竪穴住居跡出土土器	165	第134図	石鏝未製品(2)	205
第95図	第55号(1) 竪穴住居跡出土土器	166	第135図	石鏝未製品(3)、石匙(1)	206
第96図	第55号(2) 竪穴住居跡出土土器	167	第136図	石匙(2)	207
第97図	第56号 竪穴住居跡出土土器	168	第137図	石匙(3)	208
第98図	第57号 竪穴住居跡出土土器	169	第138図	石匙(4)	209
第99図	第58号(1) 竪穴住居跡出土土器	170	第139図	石匙(5)	210
第100図	第58号(2)・60号 竪穴住居跡出土土器	171	第140図	スクレイパー(1)	211
第101図	第61号 竪穴住居跡出土土器	172	第141図	スクレイパー(2)	212
第102図	第62号 竪穴住居跡出土土器	173			
第103図	第64・65・66号(1) 竪穴住居跡出土土器	174			

第142図 スクレイパー (3)	213	第156図 磨製石斧 (2)、敲石	227
第143図 スクレイパー (4)	214	第157図 凹石類 (1)	228
第144図 スクレイパー (5)	215	第158図 凹石類 (2)	229
第145図 スクレイパー (6)	216	第159図 凹石類 (3)	230
第146図 スクレイパー (7)、石錐 (1)	217	第160図 凹石類 (4)、石皿 (1)	231
第147図 石錐 (2)	218	第161図 石皿 (2)、軽石製品、石製円盤	232
第148図 石錐 (3)、器種不明、挟入石器	219	第162図 砥石、挟杖耳飾	233
第149図 両極石器 (1)	220	第163図 中世の上坑	235
第150図 両極石器 (2)	221	第164図 中世の流路跡と遺物出土状況	236
第151図 石核 (1)	222	第165図 中世の土器・陶磁器類	237
第152図 石核 (2)	223	第166図 年代測定分析の結果	239
第153図 石核 (3)	224	第167図 分析試料	241
第154図 石核 (4)	225	第168図 ベンガラ・赤色物付着凹石類の 出土地点	244
第155図 礫器、打製石斧、磨製石斧 (1)	226		

挿表目次

第 1 表 遺跡地名表	16	第 9 表 石器と石材の関係 (2)	135
第 2 表 掘立柱建物跡観察表	45	第 10 表 年代測定分析試料と結果	238
第 3 表 方形柱穴列観察表	48	第 11 表 土器胎土分析試料	240
第 4 表 建物跡の長・短軸比	48	第 12 表 胎土分析結果	242
第 5 表-1 上坑一覧表	51	第 13 表 顔料分析の試料	243
第 5 表-2 上坑一覧表	52	第 14 表 ベンガラ・赤色物付着凹石類の 出土地点と内容	243
第 6 表 屋外伊弉諾表	54	第 15 表 黒曜石産地同定分析結果	245
第 7 表 石器の器種組成	133		
第 8 表 石器と石材の関係 (1)	134		

写真目次

PL1 遺構分布状況	中世土坑
PL2 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (1)	PL11 前期初頭～前葉土坑 (1)
PL3 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (2)	PL12 前期初頭～前葉土坑 (2)
PL4 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (3)	PL13 前期初頭～前葉土坑 (3)
PL5 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (4)	PL14 前期初頭～前葉土坑 (4)・流路跡、中世流路跡
PL6 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (5)	PL15 前期初頭～前葉屋外炉、遺構外遺物出土状況
PL7 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (6)	PL16 前期初頭～前葉土器 (1)
PL8 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (7)	PL17 前期初頭～前葉土器 (2)
PL9 前期初頭～前葉竪穴住居跡 (8)、掘立柱建物 跡・方形柱穴列 (1)	PL18 前期初頭～前葉土器 (3)
PL10 前期初頭～前葉掘立柱建物跡・方形柱穴列 (2)、	PL19 前期初頭～前葉土器 (4)
	PL20 前期初頭～前葉土器 (5)

- PL21 前期初頭～前葉石器 (1)
- PL22 前期初頭～前葉石器 (2)
- PL23 前期初頭～前葉石器 (3)
- PL24 前期初頭～前葉石器 (4)
- PL25 前期初頭～前葉石器 (5)
- PL26 前期初頭～前葉石器 (6)
- PL27 前期初頭～前葉石器 (7)
- PL28 前期初頭～前葉石器 (8)
- PL29 前期初頭～前葉石器 (9)
- PL30 前期初頭～前葉石器 (10)

第1章 調査の経緯と方法

第1節 保護協議から本調査に至る経緯

1. 保護協議

駒形遺跡は、茅野市米沢の北大塩地区に所在する縄文時代前～後期の大規模な集落遺跡で、黒曜石の原産地として著名な霧ヶ峰から平野部に向けてのルートで、最初の平場に位置している。黒曜石の集積・搬出や、石器製作などに関与していた集落跡と推定され、当時の交易や石器製作技術の実態を知る上で重要な遺跡として、平成10年1月16日には国史跡に指定されている。史跡指定範囲は、今回の事業地より北側の一段高い平坦な台地上である。

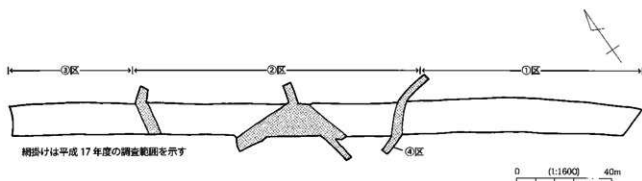
県道諏訪茅野線建設事業に伴う保護協議は、史跡指定以後の平成11年度から、長野県諏訪建設事務所・茅野市教育委員会・長野県教育委員会の三者で実施されてきた。三者協議では、本線の位置が絞り込まれ事業地が確定した。それを受けて、平成15年12月8日～12日に茅野市教育委員会による試掘調査が実施され、事業地内も縄文時代の集落跡が展開し、部分的には文化層が複数確認されることが明らかとなった。また、茅野市教育委員会は、事業に伴う発掘調査主体を担うことが困難である旨を長野県教育委員会に申し入れた。そこで、平成16年1月14日に、長野県諏訪建設事務所・茅野市教育委員会・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センターの四者による保護協議が実施され、以下の事項が確認された。

- ・ 県道諏訪茅野線建設事業にかかる駒形遺跡の保護措置は、記録作成目的の発掘調査とする。対象面積は表面積で3,000㎡、ただし、部分的に2～3面の調査が必要と考えられ、それを加味すると最大で6,600㎡の調査が必要である。
- ・ 調査者は長野県埋蔵文化財センターで発掘期間は1年ないし2年、その後に整理作業を実施する。出土遺物は発掘調査報告書を刊行後、茅野市教育委員会が譲与申請を行い、茅野市が所有する。
- ・ 駒形遺跡は黒曜石の交易や石器製作に関わる遺跡であり、調査計画策定にあたっては十分に配慮しておく必要がある。

2. 発掘届と発掘の指示

平成16年3月9日付15課建第812号で長野県諏訪建設事務所長から通知のあった、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、長野県教育委員会教育長は、同年3月31日付15教文第18-192号で、記録作成のための発掘調査を長野県埋蔵文化財センターに委託のうえ実施する旨を長野県諏訪建設事務所長あてに通知した。平成16・17年、長野県埋蔵文化財センターは、下記の内容で長野県教育委員会あてに文化財保護法第57条（平成17年は第92条）に基づく発掘届を提出し、教育長もしくは教育長職務代理人から調査許可を受けた。

- ・ 平成16年度 発掘届：平成16年3月18日付16長理第167-4号
調査許可：平成16年4月6日付16教文第4-4号
- ・ 平成17年度 発掘届：平成17年6月30日付17長理第12-13号
調査許可：平成17年7月5日付17教文第4-13号



第1図 発掘調査の範囲と調査年度

平成16年度は県道諏訪茅野線本線部分、平成17年度は本線部分の一部と本線への取り付け道路部分、本線を横切る現農道下の部分をそれぞれ調査した(第1図)。

3. 受委託契約

長野県諏訪建設事務所と長野県埋蔵文化財センターとの契約内容は下記のとおりである。

- ・平成16年度 内 容：発掘調査・基礎整理作業
期 間：平成16年4月1日～平成17年3月25日
受託料：当初契約 45,000,000
変更契約 54,666,000
- ・平成17年度 内 容：発掘作業・基礎整理作業・本格的整理作業
期 間：平成17年4月1日～平成18年3月27日
受託料：当初契約 36,068,000
変更契約 40,920,000
- ・平成18年度 内 容：本格的整理作業・報告書刊行
期 間：平成18年6月1日～平成19年3月27日
受託料：当初契約 20,227,000
変更契約 19,424,000

第2節 発掘調査・整理作業の体制

平成16年度

- ・発掘調査期間 平成16年4月22日～12月22日
- ・調査面積 3,000㎡
- ・基礎整理期間 平成16年12月22日～平成17年3月25日
- ・調査体制 所 長：小沢将夫 副所長：藤岡俊文 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第二課長：平林 彰
調査研究員：小林秀行 賛田 明

発掘補助員：相沢勝浩 伊藤益郎 小川文吾 金子清春 小池美秋 小平 寛
小松純子 篠原治郎 新村 力 大勝弘子 森 浩子 宮坂 功
宮坂 勇 柳沢省一

基礎整理補助員：田口雅夫

平成17年度

- ・発掘調査期間
- ・調査面積
- ・基礎整理期間
- ・本格的整理期間
- ・調査・整理体制

平成17年8月22日～12月2日

400㎡

平成16年12月3日～平成17年3月27日

平成17年4月1日～8月21日

所 長：仁科松男 副所長：根岸誠司 管理部長補佐：上原 貞

調査部長：市澤英利 調査第二課長：平林 彰

調査研究員：小林秀行 藤原直人 賛田 明

発掘補助員：伊藤益郎 小川文吾 金子清春 北沢俊弘 小池美秋 小松純子

渋谷賢太郎 篠原治郎 新村 力 森 浩子 宮坂 勇 柳沢省一

基礎・本格的整理補助員：

市川ちず子 今井博子 宇賀村節子 丑山和江 大林久美子 黒岩美枝

倉石志のぶ 佐藤志津子 鳥羽仁美 半田純子 山崎明子 渡辺恵美子

平成18年度

- ・本格的整理期間
- ・整理体制

平成18年6月1日～平成19年3月27日

所 長：仁科松男 副所長：根岸誠司 管理部係長：山崎勇治

調査部長：市澤英利 調査第一課長：上田典男

調査研究員：賛田 明

本格的整理補助員：

阿部高子 石田多美子 市川ちず子 白田知子 大林久美子 近藤朋子

高橋康子

第3節 調査の方法

1. 遺跡の名称

遺跡名は長野県教育委員会および茅野市教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている「駒形」とした。発掘調査や整理作業の便宜上、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号「GKG」を用いた。

3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区記号で茅野市が該当する「G」、2文字目、3文字目は遺跡をローマ字表記した「KOMAGATA」から「KG」を用いた。この記号は本遺跡に関する遺物および図面、写真など全ての記録で使用している。遺跡名と読み方、遺跡記号は以下のとおりである。

遺跡名：駒形遺跡 読み方：こまがたいせき 遺跡記号：GKG

2. 調査区(グリッド)の設定

発掘調査にあたって調査区(グリッド)を設定した(第2図)。

調査対象範囲に国土地理院の平面直角座標系の原点第Ⅷ系(長野県はⅨ系、 $X = 0.000$ 、 $Y = 0.000$)を基点に 200×200 mの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区はローマ数字を用いたが、駒形遺跡では2つの大々地区(I・II)にまたがるため、各種記録類にもローマ数字が記入されている。大々地区内を25区画(40×40 m)に分割して大地区とし、さらに大地区を25区画(8×8 m)に分割して中地区を設定した。

測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者に委託して設定した。調査で検出した遺構の記録および遺物の取り上げは、遺構の個別名のほかは中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。

3. 写真と測量

(1) 写真

遺跡の景観や遺構などの撮影にはペンタックス67(6×7)とニコンFM2(35mm)を併用し、ともにモノクロネガフィルム(ネオパン)、カラーリバーサルフィルム(富士クローム)で撮影した。遺物出土状況や遺構の完掘などは基本的に35mmフィルムで記録し、6×7フィルムは遺構全体撮影などに用いた。

撮影は全て調査研究員が行い、現像と焼付けは業者委託とした。また、調査区全体を周辺地形とともに把握するため、平成16・17年度に各1回づつ、航空写真撮影を業者委託により実施した。

(2) 測量

遺構の測量は簡易通り方測量により、調査研究員およびその指導のもとに発掘補助員が行った。遺構測量の縮尺は遺構個別図と土層断面図が1:20、遺物出土状況図は1:20と必要に応じて1:10を併用した。遺構配置図は、遺構個別図と業者委託の単点測量で作成した地形図を合成した。

4. 遺構の名称と記号

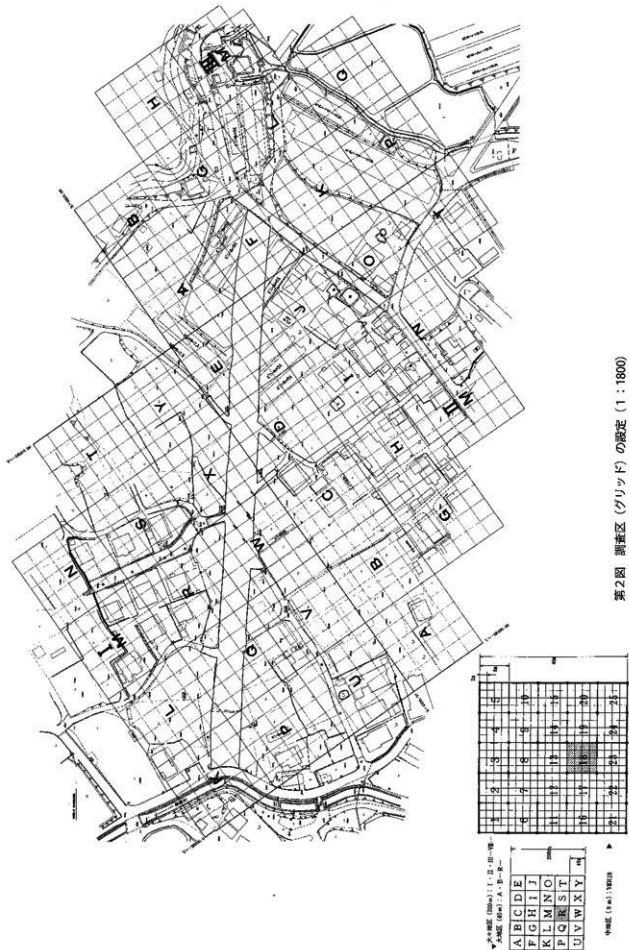
(1) 遺構の種類

調査では遺跡記号と同様に遺構についても記録と遺物の注記などの便宜を図るための記号を用いている。この記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面形や分布の特徴を指標としており、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。原則として遺構記号の変更はない。しかし、遺構番号には土坑を方形柱穴列の柱穴に変更したなどのものが存在し、変更前の番号は全て欠番で処理した。また、後述するが、平成16年度調査の竪穴住居跡は遺構番号を変更した。

発掘作業で用いた遺構記号と本書での表記は、以下のとおりである。

- ・SB: 平面形が方形～長方形で1辺が2mを越える掘り込み。 例…竪穴住居跡
- ・SK: SBよりも平面形が小さい掘り込み、穴。 例…土坑、黒曜石集積遺構
- ・ST: SBよりも小さな掘り込みが一定間隔で方形に配置するもの。あるいは列として配置するもの。 例…方形柱穴列、掘立柱建物跡
- ・SF: 火を焚いた痕跡が面的に広がるもの。 例…屋外炉など
- ・SX: 平面形が不整形で、アメーバー状に広がる掘り込み。 例…風倒木痕など
- ・NR: 帯状の掘り込み。 例…流路跡など



第2図 調査区 (グリッド) の設定 (1 : 1800)

(2) 平成16年度に調査した竪穴住居跡の遺構番号

平成16年度調査の竪穴住居跡は、当初、遺構番号を1(例:SB1)から順に付した。しかし、これまでの駒形遺跡の調査では、竪穴住居跡の遺構番号が以下のように連番で用いられていることが判明した。

- ・ 昭和36年 宮坂英弐氏および諏訪実業高校地歴部の発掘調査
第1・2号竪穴住居跡を使用。
- ・ 昭和41年 宮坂英弐氏および諏訪実業高校地歴部の発掘調査
第3・4号竪穴住居跡を使用。
- ・ 平成6・8年 長野県教育委員会による試掘調査
第6～33号竪穴住居跡を使用。
- ・ 平成12年 茅野市教育委員会の、県営ほ場整備に伴う発掘調査
第34～36号竪穴住居跡を使用。

そのため、調査途中ではあったが茅野市教育委員会と協議の上、竪穴住居跡の番号を過去の調査の連番で付すこととした。拠って、竪穴住居跡の番号を、下記のように変更した。

- ・ 平成16年調査の竪穴住居跡:SB1～SB22→変更→SB37～58

また、平成17年度の調査では平成16年度からの連番となるSB59から付し、SB73までを使用した。なお、竪穴住居跡以外についてはこの限りではない。過去の調査では、いずれの遺構も調査ごとに番号1から付していたので、平成16年度の調査も番号1から付し、平成17年度はその続き番号を使用した。

5. 遺構の調査

竪穴住居跡は上層観察用のベルトを設置し、土層の堆積状況を観察しながら、覆土を床面まで掘り下げた。また、床面では精査を行い、柱穴、炉、土坑、周溝などの住居内施設の検出に努めた。検出時に住居プランが不明確であったものは、想定されるプランに対して先行トレンチを入れて、床面と壁の立ち上がりを確認した後に全体の掘り下げを行った。

土坑や方形柱穴・掘立柱建物跡の柱穴、焼土跡は覆土を半載して、土層の堆積状況を観察した後に完掘した。土坑の場合、規模の大きいものは十字ベルトを設定して掘り下げたものも存在する。

流路跡は全体のプランを検出した後、数ヶ所にプランと直行する方向の土層観察用ベルトを設置し、それぞれの土層堆積状況を観察しながら掘り下げた。

遺構内出土遺物の取り上げについては、纏まりをもって出土した場合に、意図的な廃棄・埋納などの可能性を検討するため、出土位置と標高を記録して取り上げた。

遺構外出土遺物の取り上げについては、遺物分布状況を把握するため、基本層序のもとに出土層位を認識しながら、中地区の8mグリッドをさらに2mごとに16分割して、2mの区画ごとに取り上げるよう努めた。しかし、様々な事情から、一部遺物については8mグリッドで取り上げたものも存在する。なお、2mの区画は中地区名称にハイフン(・)を付けて次のように表現した。

例: I Q 20 グリッドの左最上部の区画→ I Q 20 - 1

6. 遺跡の公開

駒形遺跡は学史的に著名な遺跡であり、地元住民の関心も高く、発掘調査中に多くの見学者が訪れた。このため、見学者に対応するとともに現地説明会や小学校の見学会、体験発掘などを実施し、さらに遺跡報告会などへも積極的に参加した。主なものを紹介する。

- ・ 平成16年 5月18日 諏訪市立城北小学校6年生28名。遺跡の見学と体験発掘を実施。

- ・ 平成 16 年 6 月 16 日 地元説明会。区長・地元住民多数見学。
 - ・ 平成 16 年 8 月 21 日 第 1 回現地説明会。見学者 150 名。
遺跡・遺物の公開、石器作り、体験発掘、弓矢的あてゲームを実施。
 - ・ 平成 16 年 12 月 4 日 第 2 回現地説明会。見学者 170 名。遺跡・遺物の公開。
 - ・ 平成 17 年 2 月 11 日 諏訪地区遺跡調査研究発表会において、調査成果を報告。
 - ・ 平成 17 年 10 月 12 日 茅野市米沢小学校 1～6 年生 6 名。遺跡の見学。
 - ・ 平成 18 年 8 月 2 日 長野県埋蔵文化財センター事務所内で、駒形遺跡が所在する、または周辺の市町村教育委員会担当者を参集して、黒曜石情報交換会を開催。
 - ・ 平成 18 年 9 月 30 日 茅野市北大塩地区で開催された、「駒形遺跡報告会」へ参加。
 - ・ 平成 18 年 10 月 29 日 第 3 回信州黒曜石サミットの会場で、黒曜石製石畿製作工程を展示。
- また、平成 16 年度の調査では、調査成果をいち早く地元住民に還元するため『駒形だより』1～8 号を刊行し、近隣へ配布した。

第 4 節 調査日誌抄

平成 16 (2004) 年度

- 4月19日 駐車場・ユニットハウス用地に重機を投入して整地を行う。③区の重機による表土剥ぎ開始。
- 4月20日 調査区をロープで囲い、看板を設置するなど、調査区周りの安全対策を施す。
- 4月21日 ユニットハウス・仮設トイレの設置。発掘器材を搬入。発掘補助員の開始式。
- 4月22日 ③区へ人力を投入し基本層序第Ⅱb層の検出、遺構掘り下げ、精査を開始する。
- 4月26日 ①区の湿地に重機でトレンチを入れ、層序の観察および遺構・遺物の有無を確認する。出水が著しい。遺構・遺物ともに検出されなかったため、湿地については面的調査を行わないことを決定した。
- 5月7日 ③区より黒曜石を主体とする遺物が多く出土し始める。
- 5月13日 ①区へ人力を投入し、基本層序の第Ⅱb層で検出、遺構の掘り下げ、精査を開始する。
- 5月18日 戸沢充剛氏（泉遺跡調査指導委員会）が視察。また、諏訪市立城北小学校 6 年生 28 名が見学。
- 5月25日 山田昌久氏（首都大学東京准教授）、ロシア・ハヴロフスク市の研究者 3 名が視察。
- 6月2日 守矢昌文・百瀬一郎両氏（茅野市教育委員会）、林賢氏（岡谷市在住）が視察。
- 6月14日 ①区の地形測量を業者委託で行う。
- 6月15日 ①区の調査を終了。②区の表土剥ぎを開始。

- 6月16日 地元説明会。地元区長・住民の見学者多数。
- 6月18日 ②区へ人力を投入し、検出、遺構の掘り下げ、精査を開始する。
- 6月22日 ②区で黒曜石、石器、土器など、多量の遺物が出し始める。
- 6月24日 樋口昇一氏（泉遺跡調査指導委員会）、西山克己氏（長野県教育委員会）、守矢昌文氏が視察。
- 7月5日 駒形遺跡近隣の十五社神社のお祭りで、ご神体が公開される。ご神体は駒形遺跡出土と伝わる石棒であった。
- 7月6日 ②区に測量基準杭を業者委託で打設。
- 7月14日 ③区の調査を終了する。
- 8月21日 現地説明会開催。見学者 150 名。
- 8月31日 水野正好氏（財）大飯町文化財センター理事長）、戸沢充剛氏、小林達雄氏（國學院大学教授）ほか、茅野市教育委員会 3 名が視察。
- 10月4日 上田典男氏（長野県教育委員会）が視察。
- 10月7日 ②区の西側について、地形測量と単点実測を業者委託で実施する。
- 11月18日 ②区西側について、遺跡の航空撮影を行う。
- 11月25日 渋谷昌彦氏（大正大学講師）、谷藤保彦氏（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）から、駒形遺跡現地に於て前期初頭～前葉土器についての指導を受ける。
- 11月26日 渋谷昌彦氏、谷藤保彦氏の指導 2 日目。
- 12月3日 ②区東側について、遺跡の航空撮影と単点測量

第1章 調査の経緯と方法

- を業者委託で実施。望月明彦氏（沼津工業高等専門学校教授）から、駒形遺跡現場にて黒曜石原産地について指導を受ける。
- 12月4日 現地説明会。見学者170名。
- 12月7日 ②区東側の単点測量、地形測量を業者委託で実施。
- 12月17日 ②区の調査を終了する。今年度の調査は実質的に終了。発掘機材の整理を行う。
- 12月20日 調査区の埋め戻しを開始する。
- 12月22日 発掘補助員の終了式。発掘器材の撤出。調査区の埋め戻しがほぼ終了。
- 12月24日 ユニットハウス・仮設トイレの撤去。地元への挨拶まわり。発掘現場の安全対策を業者に引き継ぐ。
- 1～3月 平成16年度調査分の基礎整理を行う。
- 平成17（2005）年度
- 4月18日 本格的な整理作業開始。遺物の接合、分類、観察表作成、図化遺物の抽出、黒曜石産地同定分析試料の抽出を行う。
- 4月24日 遺物の実測およびトレース作業を開始。
- 7月18日 平成16年度調査出土土器の実測が終了し、版組を開始する。
- 8月12日 駒形遺跡の発掘作業が次週から開始されることを受けて、本格的な整理作業を大幅に縮小する。
- 8月18日 発掘調査の準備開始。
- 8月19日 発掘器材の搬入。
- 8月22日 発掘補助員の開始式。テント設置、草刈りなどの環境整備。
- 8月23日 昨年度の続きである②区の一部に重機を投入、表土剥ぎを開始。
- 8月24日 調査区に残る汚水排水管・電柱撤去工事が進まないため、重機による表土剥ぎを一旦中止する。
- 8月25日 人力での調査開始。調査区にトレンチを入れ、下部の状況を確認する。
- 8月29日 重機による表土剥ぎを再開。
- 8月30日 基本層序第Ⅱb層で、検出、遺構の掘り下げなどを開始する。
- 9月1日 ②区を横切る農道下部分を④区とし、④区の重機による表土剥ぎを開始する。戸沢充則氏が視察。
- 9月2日 測量基準杭の打設を業者委託で行う。
- 9月17日 調査区に残る電柱が撤去された。
- 9月22日 小池昌史氏（茅野市教育委員会）が視察。
- 9月23日 長野日報の記者が取材。翌9月24日に記事が掲載される。
- 9月28日 重機による表土剥ぎが終了。
- 10月3日 武尾幸重氏（茅野市文化財審議委員）が見学。
- 10月4日 上田典男氏が視察。
- 10月12日 茅野市米沢小学校1～6年生7名が見学。長野県諏訪建設事務所、長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センターの3者協議で、本線への取り付け道路の取り付け部分（7地点）について、期間を延長して調査を行うことが決定される。
- 10月17日 取り付け道路の調査に対応するため、調査研究員1名と発掘補助員が増員される。
- 10月18日 補助員の増員と調査期間の延長ともない、ユニットハウスを設置する。
- 10月19日 重機を投入して、取り付け道路部分の表土剥ぎを開始する。
- 10月20日 取り付け道路部分の調査区3地点から遺構が検出されたので人力を投入し、掘り下げを行う。
- 10月25日 守矢益文氏が視察。
- 11月11日 単点測量を委託業者が行う。
- 11月16日 百瀬一郎氏が視察。
- 11月25日 航空撮影の準備開始。
- 11月29日 航空撮影を委託業者が行う。
- 11月30日 単点測量を委託業者が行う。今年度の発掘調査を終了する。
- 12月1日 発掘補助員終了式。発掘器材の搬出。
- 12月2日 ユニットハウスの一部撤去。挨拶回り。
- 12月5日 残りのユニットハウスを撤去。完全撤退。平成17年度調査分の基礎整理作業開始。
- 1月10日 基礎整理作業と並行しながら、平成17年度調査出土遺物の接合、分類、観察表作成、計測、図化遺物の抽出、図化などを開始する。
- 3月15日 平成17年度分の基礎整理作業が終了する。
- 平成18（2006）年度
- 6月1日 本格的な整理作業を再開する。
- 8月2日 長野県埋蔵文化財センター事務局内で、駒形遺跡が所在する、または周辺の市町村教育委員会担当者を参集して、黒曜石情報交換会を開催。
- 9月29日 土器実測・トレース作業が終了し、版組を開始する。
- 10月1日 原稿の本格的な執筆、挿図作成を開始する。
- 10月5日 土器実測・トレース作業が終了し、版組を開始する。
- 12月26日 発掘報告書の編集委託業務を開始する。
- 1月10日 報告書掲載用の遺物写真撮影委託業務を開始する。
- 2月28日 発掘報告書の編集業務委託が終了した。
- 3月1日 記録類・遺物の収納作業を開始する。
- 3月5日 発掘報告書の印刷業務
- 3月27日 発掘報告書の刊行。

第5節 整理作業

1. 基礎整理作業

調査記録の矛盾や書き漏れを補ったり、遺物洗浄・注記作業などを行う基礎整理を平成16・17年度の冬期に実施した。

図面は記載内容を点検・修正しながら、矛盾を調整したり、記録漏れを補った。修正済の遺構個別の図面はデジタル・トレースを行い、それと業者の作成した調査範囲・地形測量のデジタル・データを合成して遺構配置図を作成した。遺構個別図面のデジタル・トレースから遺構配置図作成までの作業は、業者に委託した。写真類は現像し、35mm・6×7モノクロネガはベタ焼きプリントを貼付し、35mmスライドはマウントを付け、6×7スライドはマウントを付けずにアルバムに収納した。アルバムには撮影口・地区・撮影内容・撮影方向などを転記した。

遺物の洗浄・注記は原則として現地での発掘調査期間中と基礎整理作業の中で行ったが、土器の注記については一部を業者へ委託した。

2. 本格的整理作業

記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、発掘成果を公表できるように整備する報告書へ向けての整理作業を、平成17年度の一部と18年度に実施した。

図面類は基礎整理作業でデジタル・トレース化されたものを用いて、遺構個別図、出土した遺物の位置を示す出土状況図などを作成した。写真類は報告書掲載用を選択した後、スライドのスキャニング・トリミングを行い、報告書へ掲載した。

遺物は土器と石器に大別して、整理作業を進めた。

土器は接合作業と同時に分類、観察表の作成、量の計測および図化するものの抽出を行った。図化するものの中で脆弱なものは、実測前に接合補強と復元作業を行った。土器の図化は遺存度の良好なものととも、遺構覆土の出土状況を考慮しながら、時間幅を示すもの、伴関係を示すもの、希少性を示すものなど、破片資料も多く実測した。実測は手実測により、1/1縮尺で長野県埋蔵文化財センターの実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器の破片は拓本を取った。トレースは全て長野県埋蔵文化財センターで、手作業にて実施した。土器の出土量は個体識別の不可能なものが多いため、重量比で示した。

石器は遺構・出土グリッド(中地区、8m)ごとに分類と観察表の作成、計測を行いながら、図化するものを抽出した。石器の図化は遺存度の良好なものを選択した。出土量が多いことから、実測・トレースの一部を業者に委託した。実測は表面と横断面を基本とし、必要に応じて裏面も図化した。長野県埋蔵文化財センターで実測・トレースしたものは、土器と同様の方法による。石器の出土量は個数で示した。

遺物の写真は業者委託で実施した。デジタルカメラを用いて、単体写真と集合写真を使い分けた。図化した遺物全ての写真撮影は実施していない。

遺物の通し番号は遺物ごとに付け、各種台帳や収納にもこれを用いた。

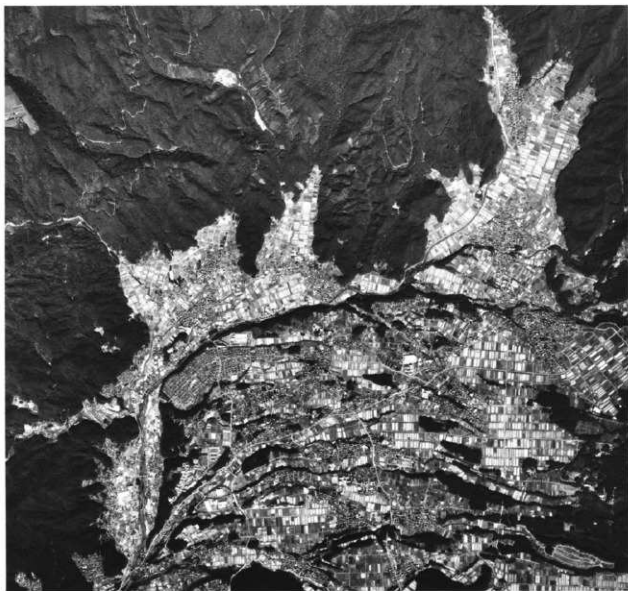
報告書の編集については、業者へ委託した。

第2章 遺跡の環境

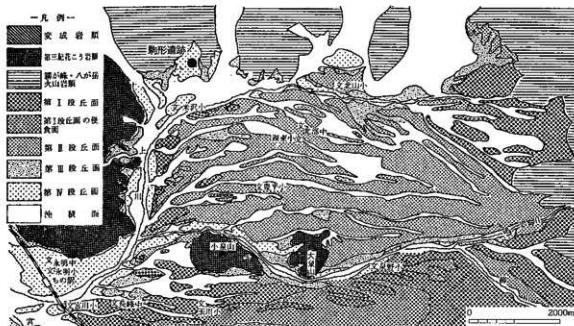
第1節 遺跡の位置と立地環境

駒形遺跡は、茅野市米沢字駒形から字南大塩の地籍に位置する。東経138度11分、北緯36度2分である。太平洋（静岡県沼津市）までは約120km、日本海沿岸（富山県富山市）には約130kmと、関東～東海～北陸地方にかけてのほぼ中間地点にあたる。

駒形遺跡のある諏訪地方は、天竜川流域と山梨県に続く八ヶ岳の裾野以外は急峻な山地で囲まれており、西に杖突峠・真志野峠・有賀峠・勝弦峠・塩尻峠、北に和田峠・大門峠・雨境峠・大河原峠、東に大石峠・麦草峠・夏沢峠といくつもの峠道が山稜の鞍部を通過して諏訪地方に入ってきている。南西に延びる八ヶ岳



第3図 遺跡周辺の地形（平成12年国土地理院撮影）



第4図 駒形遺跡周辺地質図（諏訪教育会 1975）に加筆

の裾野にしても、釜無川とは分水嶺をもち、峠とはいえないまでも標高差をもって山梨県側を下る。以上のように諏訪地方は、中部高地においても山に囲まれたひとつの地域をなす。また、諏訪地方は大別して諏訪湖を中心とする地域と、標高 800～1300 m に展開する八ヶ岳山麓（山浦地域）とに分けられ、駒形遺跡の位置は後者にあたり、東に八ヶ岳連峰、北に霧ヶ峰、西に入笠山、南は赤石山脈、遠く富士山を望む。

駒形遺跡は霧ヶ峰の南麓に位置し、標高は 895～930 m である。宮川、上川が諏訪湖に向かって北に流路をとる沖積低地部（諏訪市中洲付近）から約 6 km 北東にあたり、比高は 100 m を測る。霧ヶ峰南麓は、霧ヶ峰山系から流下してくる横河川、松沢川、藤原川、前嶋川、音無川などによって扇状地地形が形成され、蓼科・八ヶ岳を源流とする上川の右岸に沿って弧状に広がる沖積地につながる。霧ヶ峰山系から南に伸びる尾根にはさまれた奥座敷的なこの緩傾斜地は、これらの扇状地および第Ⅳ段丘面からなる。第Ⅳ段丘面とは、上川・柳川沿いに発達する地形面で、河床からの比高は数 m 前後となり、厚さ 2 m 前後の砂礫層を乗せる侵食段丘である。沖積地の砂礫のみによって形成された面も存在する（諏訪教育会 1975）。駒形遺跡の国史跡指定範囲は松沢川左岸の、この段丘上の平坦地が指定されている。

今回の調査となった泉道諏訪茅野線のルートは、国史跡指定範囲の段丘面とは比高 10 m をもつ崖下の沖積面にあたり、松沢川から扇状に広がる比較的緩やかな傾斜面で、北西から南東に傾斜していく。国史跡範囲と地形的には不連続だが、表面採集で黒曜石をはじめとする多くの遺物が採集されてきた。駒形遺跡は、集落の拠点となる平坦な段丘面とその段丘面より傾斜をもつ松沢川の扇状地の扇尖・湧水により湿地化した扇端部という 3 つの地形的な要素をもった立地である。今回の調査はその内、後 2 者の地形に立地する地点を調査したことになる。また、標高 800～1000 m のラインで湧出する湧水地の 1 つで、現在茅野市の上水道水源地となっている「大清水」の湧水地は駒形遺跡に南隣し、幅 9 m にわたって湧き出す水量は現在も変わっていない。

この扇状地の中央を流下する松沢川の源流は霧ヶ峰の高層湿原の 1 つ、「池のくるみ」となる。霧ヶ峰一帯には諏訪星ヶ台などの黒曜石原産地が、さらに和田峠や星ヶ峠の黒曜石原産地が存在するのは周知のことである。駒形遺跡は、黒曜石原産地である山塊一帯から、南に向かう谷筋において、距離的に最も近い平坦地に立地し、霧ヶ峰周辺の黒曜石原産地直下の集落遺跡として位置する。

第2節 歴史的環境

駒形遺跡周辺の歴史 - 現在から旧石器時代（A T降下期）へ遡る -

霧ヶ峰・和田峠・夢科の黒曜石原産地を背後にひかえる駒形遺跡一帯は、どのような歴史を展開させてきたのだろうか。現代から遡ってみる。

（1）現況

駒形遺跡の周辺一帯は、桧沢川によって形成された扇状地で、日当たりが良好な南向き斜面となり、大六段遺跡（5）がある扇頂からは場整備が進んだ水田地帯である。国史跡範囲付近は畑地で、標高850m前後の扇端に北大塩集落が軒を連ねて形成されている。近年、扇尖に向かって宅地が増加し、集落域が広がってきた。そして、駒形遺跡の一面に県道諏訪茅野線が通り、込み入った集落内を迂回する道路として使用されている。

（2）中世～古代

今回の県道諏訪茅野線建設に伴う発掘調査により、駒形遺跡において初めて中世の遺構・遺物が検出された。位置は調査区の東側、湿地へと続く緩斜面（II E 17・18・22～24グリッド）で、土坑2基と自然流路ともに13世紀代のカワラケや陶磁器類が出土した。中世の遺構・遺物はほかのグリッドには一切みられず、この緩斜面に纏まる。

ア 十五社とご神体

駒形遺跡の南東に十五社が位置する。本殿は嘉禄3年（1237年）以前の創建といわれ、年に一度の例祭で本尊をご開帳する慣例となっている。その由緒などは明らかではないが、ご神体は長さ約30cm、直径約20cmの石棒上部が鎮座している。

イ 駒形神社と塩原牧

十五社とともに、駒形明神嘉永年間（1848～1853年）の書に記載が認められる駒形明神は、駒形遺跡の国史跡範囲内に祭られている。駒形神社は塩原の牧の守護神で、近くにある駒繫石には鹿持りの際に馬を繋いだという話が伝わる。本社付近には塩分を含む井戸がみられ、「塩之原」「塩坪」「塩沢」などの地名のごとく、牧に必要な塩にまつわる地名や「野馬久保」「駒見石」など牧に関係する地名がある。一説には信濃十六牧の内、延喜式に記載されている「塩原牧」の所在地として、北大塩地籍周辺が推察されている。南を上川に、北を霧ヶ峰山系に囲まれた緩斜面で、塩井があること、「塩之原」地籍の地名の類似性などが推察される所以である。加えて、塩之原が畑地として開発されたのが延宝7年（1679年）のことで、それ以前は未開墾地またはそれに類似した草地、つまり、牧の草地であった可能性がある（茅野市史編纂委員会1986）。さらに、古代の交通として、杖突峠を越えて諏訪に入ってきた東山道は、上川沿いに雨境峠を越えたと考えられている。

（3）古墳・弥生時代

大塚遺跡（32）で弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている。この時代は生活域の中心が低地部にあり、霧ヶ峰南麓の様相は不明である。ただし、上川上流域の台地上では磨製石畿が多く発見され、弥生時代は狩猟の場として利用されたテリトリーであったことが想定される。

（4）縄文時代

霧ヶ峰南麓は上川に流下する河川に沿った扇状地や、やや高位な台地に多くの遺跡が立地し、大小合わせて43遺跡を数える。これらの遺跡では多くの黒曜石が出土し、早・前期から後・晩期の遺物がみつ



第5図 駒形遺跡周辺の黒曜石原産地遺跡 (大竹・中島 1999) に加載

かっている。しかし、八ヶ岳山麓全域からみると、中期を中心に大集落が営まれた八ヶ岳西南麓とは若干様相を異にし、相対的に早・前期の遺跡が多い。

上川上流にあたる蓼科山麓より、音無川流域の高風呂遺跡 (17)、朝倉山を挟み西に藤原川・前鳴川流域のよせの台遺跡 (12)・一ノ瀬・芝の木遺跡 (10) など、さらに尾根一つ隔てて谷沢川流域の駒形遺跡 (1)、横河川流域の大板遺跡 (32) などがあり、最西端には棚畑遺跡 (41) が永明寺山の東に立地している。

高風呂遺跡は早期末葉から前・中期にかけての集落跡である。早期末葉は竪穴住居跡 3 軒と土器集中区 1 カ所であったのが、前期初頭では竪穴住居跡 14 軒と焼土・石皿を伴う 4 基の集石群、黒曜石集中箇所 4 カ所と遺構数・集落規模が増加し、それ以降、前期前葉では竪穴住居跡 7 軒と方形配列土壇 1 基、前期後葉では竪穴住居跡 5 軒と減少する傾向がみられる。中期に至っては、各時期に 1～2・3 軒の竪穴住居跡が検出される程度で、早期末葉～前期初頭に主体をなした拠点集落が台地上に拡大し、そして終焉していく姿が示された (茅野市教委 1986)。本書で報告する県道諏訪茅野線地点の駒形遺跡では、前期初頭～前葉の竪穴住居跡が検出され、55,000 点を超える黒曜石が出土し、黒曜石の交易や石器製作に関わる



第6図 駒形遺跡周辺の遺跡分布図 (1:28,000)

集落跡であったことが判明した。早期は鶺鴒島台式や末葉の絛条体匠痕文土器群が出土しているものの、それに伴う遺構は存在しないことから、早期末葉の集落形成は高風呂遺跡よりやや遅れるのであろうか。早期末葉～前期前葉における集落のあり方として、石器製作に関わる駒形遺跡、黒曜石の集中産所が顕著な高風呂遺跡とともに霧ヶ峰南麓の黒曜石搬出ルート上に立地し、黒曜石の夥しい量からも、黒曜石と強い結びつきのある前期初頭から前葉にかけての黒曜石原産地直下の拠点集落が、距離を置いて営まれていたことがうかがえる。

前期後葉より、八ヶ岳西南麓の台地にはいくつかの集落が展開し始め、中期に爆発的な広がりを見せる。それに対して霧ヶ峰南麓は、前期より断続的ではあるがその多くが中期へ継続する複台遺跡である。よせの台遺跡では、早期から後期初頭までの時期、断続しながらも、拠点集落より小規模な集落が営まれ、支村的な性格付けがなされている(茅野市教委 1978)。よせの台遺跡と密接な関係を有する一ノ瀬・芝の木遺跡では、旧石器時代から生活の場として利用され、縄文時代においては早期から晩期に至る遺構が検出されている。前期前葉・末葉の竪穴住居跡 18 軒のほか、中期の竪穴住居跡 53 軒が環状集落を形成し、中期前葉から後葉における拠点的な集落であることが判明した(茅野市教委 2001)。

大坂遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居跡 28 軒、墓坑と推測される土坑約 90 基が調査され、墓域と居住域からなる環状ないし馬蹄形集落を形成する、横河川の扇状地に立地する拠点集落であることが示唆された(茅野市教委 2001)。

駒形遺跡では、諏訪実業高校地歴部が宮坂英之氏の指導のもと、昭和 36・41 年に実施した発掘調査で、

中期後葉の竪穴住居跡が検出されたほか（茅野市1986）、平成6・8年の長野県教育委員会による試掘・分布調査でも、国史跡の範囲内で100軒を超えると推測される中期前葉・後葉の集落跡が確認された（長野県教委1997）。

棚畑遺跡では、前・中期の集落が検出されているが、集落が大きく展開するのは、竪穴住居跡146軒が検出された中期以降である。中期中葉では、Ⅰ～Ⅵ期にわたる変遷の中で、北方台地と南方台地における集落規模や動向の推移が捉えられた。また、後葉では、Ⅰ～Ⅳ期までは南北の台地上に環状集落を形成し、Ⅴ期で大きく衰退化していく様相が明らかにされた（茅野市教委1990）。なお、第500号土壙では、全長27cmの大形土偶がほぼ完形で出土し、「縄文のヴィーナス」と命名され国宝に指定された。

このように中期では、霧ヶ峰南麓にも八ヶ岳西南麓と同様に拠点集落が現れ、上の平遺跡・駒形遺跡・大桜遺跡、西端の「縄文のヴィーナス」が出土した棚畑遺跡まで、一定の集落間距離を置きながら、それぞれの河川によって形成された1つの地形的エリアごとに点在する。

後・晩期では遺跡数は減じ、後期後半になると八ヶ岳山麓は激減期を迎える。霧ヶ峰南麓では、駒形遺跡において、茅野市教育委員会による2002年のほ場整備に伴う発掘調査地点で、敷石住居跡、墓坑群、埋設土器、配石、上器集中地点、黒曜石集中地点など、後期前葉から中葉に関わる集落跡が検出され、「居住域と墓域から黒曜石製の石器製作に関わる場（貯蔵場、加工場、選別場または廃棄場など）へと移り変わる」状況が把握された（茅野市教委2002）。また、一ノ瀬・芝の木遺跡、上之段遺跡は、数少ない後・晩期の竪穴住居跡が調査された。

縄文時代早期から晩期に跨り、生活の場として利用された霧ヶ峰南麓の遺跡は、夥しい黒曜石製石器のあり方において、黒曜石原産地からの黒曜石搬出ルート上にあることで共通する。諏訪星ヶ台など、霧ヶ峰周辺の黒曜石原産地からの搬出ルートについては、霧ヶ峰南麓の沢沿いの遺物分布調査から、霧ヶ峰南麓のいくつもの沢筋が搬出ルートと仮定された（米沢考古学クラブ1973）。駒形遺跡に至るルートは、霧ヶ峰台地上の溼原「池のくるみ」から南方に伸びる尾根筋「大久保一池のくるみ線」より、検沢川の谷筋にルートをとる、「桧沢線」が推定されている。駒形遺跡の位置は、この谷のまさに開口部にあたる。

（5）旧石器時代

黒曜石は旧石器時代の重要な石器石材である。黒曜石の流通を想定するのならば、この時代まで遡ることが必要である。ただし、生活環境は、後氷期の寒冷な時期にあたり、今の気温からさらに冷涼な気候である。この時期の生活痕跡は確認できないが、駒形遺跡では旧石器時代の尖頭器が以前に採集されていることをみると、この地が旧石器時代から利用されていた場所であった可能性もある。

しかし、今回の県道諏訪茅野線に伴う調査で、トレンチを設定して深掘りをかけてみたが、当該期の遺構・遺物を検出することはできなかった。また、24,000年前のA T層も確認できなかった。

駒形遺跡の人々の営みは、旧石器時代まで遡ることも考えられるが、主体とする縄文時代において、黒曜石原産地直下に位置することは、各時期において遺跡の性格に大きく影響を及ぼしている。

第2章 遺跡の環境

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄 文						弥 生			古墳	奈良	平安	中世	偏呼
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	中期	後期					
1	駒形	米沢 北大塩	●		●	●	●	●							●		
2	大六殿	米沢 北大塩			●	●	●	●									
3	大六殿上	米沢 北大塩														●	
4	高窪沢	米沢 北大塩								●							
5	大田苺	米沢 北大塩				●	●										
6	出ノ脇	米沢 北大塩								●							
7	上の山	米沢 北大塩					●										
8	大清水	米沢 北大塩					●										
9	馬の壘	米沢 北大塩				●	●									●	
10	一ノ瀬・芝の木	米沢 塩沢	●			●	●	●	●		●				●		
11	牛ノ尻	米沢								●							
12	よせの台	米沢 塩沢			●	●	●	●									
13	丸山	米沢 塩沢				●	●										
14	上の平	米沢 塩沢	●			●	●										
15	横山	米沢 塩沢				●	●										
16	朝倉城跡	北山 湯川															●
17	高風呂	北山 湯川			●	●	●										
18	窪田	北山 湯川					●										
19	枅形	北山 湯川				●	●								●	●	
20	上の平	北山 湯川					●										
21	湯川藤塚	北山 湯川															●
22	下島	湖東 芹ヶ沢				●					●						
23	花蔀	湖東 山口							●	●							
24	中ツ原	湖東 山口				●	●	●									
25	辻屋	湖東 中村				●											
26	山口	湖東 山口					●										
27	松原	湖東 山口					●										
28	新井下	湖東 新井					●	●									
29	向林	米沢 北大塩			●	●											
30	賈地	米沢 北大塩			●	●	●										
31	三軒家	米沢 北大塩				●											
32	大松	米沢 北大塩				●	●	●			●						
33	八幡坂	米沢 北大塩				●	●										●
34	間久俣	米沢															不明
35	中ノ平	米沢 鐘物師屋					●	●									
36	蛇石	米沢 鐘物師屋								●							
37	丸山	米沢 北大塩			●	●	●										
38	下管沢	豊平 下管沢					●										
39	中村	湖東 中村				●											
40	高尾戸	豊平 福沢													●		
41	棚畑	米沢 塩原田	●		●	●	●	●	●						●	●	
42	上半田	豊平 福沢									●				●		
43	子の神	豊平 福沢				●											
44	中原	豊平 福沢				●	●										
45	笹原	湖東 下管沢					●										
46	石塚坂	豊平 山寺															不明
47	八幡社前	豊平 南大塩													●		
48	山寺	豊平 山寺													●	●	
49	中尾	豊平 献塩								●						●	
50	水尻	豊平 南大塩			●		●										
51	城	豊平 南大塩				●	●								●		
52	珍部坂B	湖東 塩															不明
53	珍部坂A	湖東 塩					●										
54	中ツ原B	豊平 南大塩								●						●	
55	中ツ原A	豊平 南大塩				●	●	●							●		
56	立石	豊平 南大塩				●	●	●							●		

第1表 遺跡地名表

第3節 基本層序

駒形遺跡の基本層序は、下記のとおりである。基本層序は本調査に先立ち、茅野市教育委員会が実施した試掘調査の報告（茅野市教委 2003）を参考に、本調査において層序の観察を行いながら決定した。

第Ⅰ層 黒褐色土 (Hue10YR2/3)

現表土、耕作土。根の入り込みが著しい。粘性・しまりともに全くなし。

第Ⅱ層 黒褐色土をベースとし、礫や黄褐色ロームブロック・粒の入り方などから、さらにa～cの3層に分層される。

・第Ⅱ a 層 黒褐色土 (Hue10YR2/3)

粘性なし、しまりはⅠ層よりも良い。直径20～30cm大の礫を多量に含む。本層の下限付近から、縄文時代早期末葉～前期前葉を主体とし、前期後・末葉、中期後葉、後期中葉の遺物が出土した。しかし、その量は少ない。

・第Ⅱ b 層 黒褐色土 (Hue10YR2/3)

粘性はないが、しまりは第Ⅱ a 層よりもさらに良い。黄褐色 (Hue10YR7/8) ローム粒を3～5%含む。また、直径30cm以下の礫を含むものの、第Ⅱ a 層と比較するとかなり少ない。本層の上限が、縄文時代前期初頭～前葉の遺構検出面である。さらに、早期末葉～前期前葉を主体として、前期後・末葉、中期後葉、後期中葉の遺物を含む包含層。本層上限に沿って、水平に出土した石皿・平石が認められる。

・第Ⅱ c 層 暗褐色土 (Hue10YR3/3～10YR3/4)

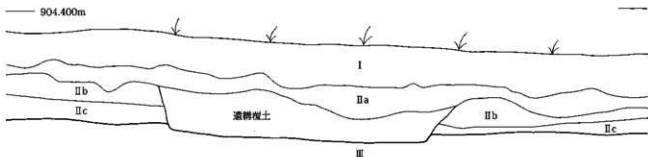
粘性なく、しまりも弱い。直径30cm以下の礫を主体に、50cmを超える礫などを多量に含む。

第Ⅲ層 黄褐色ローム土 (Hue10YR7/8)

粘性があり、しまりも良い。直径30cm以下の礫を少量含む。

第Ⅱ a・c 層は調査区北側からの、礫の押し出しと判断され、調査区東側に展開する湿地方面へと向かうに従って礫の量は減少する。また、第Ⅱ a 層は湿地周辺には堆積しておらず、第Ⅰ層直下が第Ⅱ b 層に相当する。遺構は第Ⅱ c・Ⅲ層を掘り込み、構築されているので、第Ⅱ c 層が基盤となって形成された地形の上に、縄文前期初頭～前葉の集落が立地すると考えられる。

なお、遺構検出面は第Ⅱ b 層上限に設定したが、第Ⅱ b 層では遺構覆土と類似するため把握できず、掘り下げて、第Ⅱ c 層中あるいは第Ⅲ層上限で検出した遺構が存在する。しかし、そうした遺構の掘り込み面が、第Ⅱ c 層中、第Ⅲ層上限であるのか、といった点については不明確である。



第7図 基本層序 (1:40)

第3章 縄文時代の遺構

第1節 遺構分布の傾向

縄文時代の遺構は竪穴住居跡 37 軒、方形柱穴列 8 棟、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 43 基、黒曜石集積遺構 1 基、屋外が 20 基、配石遺構 1 基、および流路跡 2 条が検出された。遺構の時期は中期後葉の土坑 1 基と不明確な流路跡を除き、出土遺物の時期や遺構分布状況、遺構の重複関係などからみて、前期初頭～前葉の所産と考えられる。

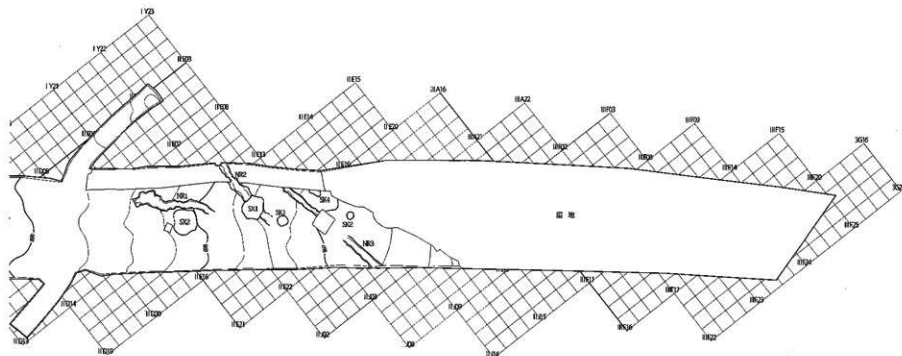
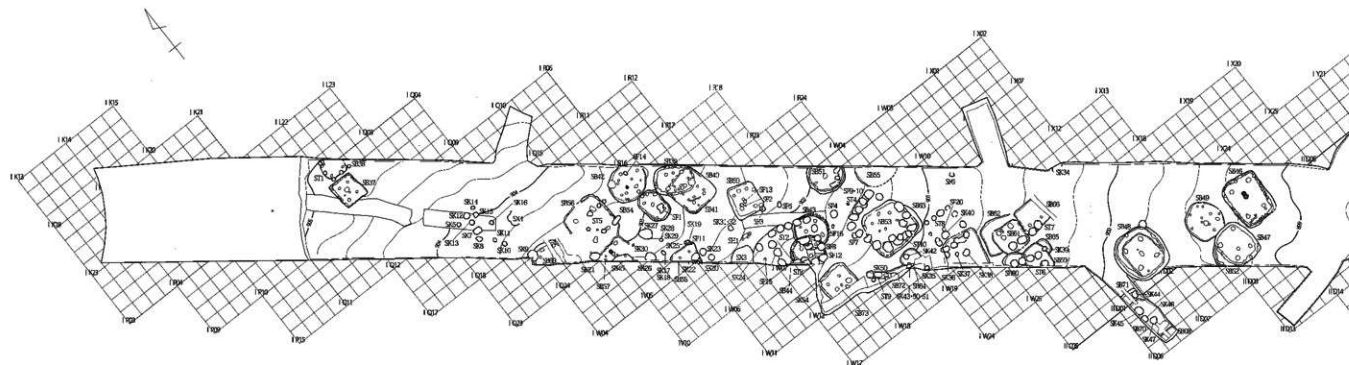
今回の調査区は、南東から北西方向へ向かって延びている。地形的にみると、北西側の I Q 01・02 グリッド付近が標高 905m と最も高い。そこから、南東方向へ向かい緩やかな斜面を形成しながら、I Q 01・02 グリッドより約 175 m 離れた II E 13・18 グリッド付近で、湿地へと至る。湿地縁地の標高は 897 m となり、最も高い I Q 01・02 グリッド付近との高低差は 8 m 余りである。一方、I Q 01・02 グリッドの北西側は急斜面となり、約 35 m 離れて検沢川が流れる。

前期初頭～前葉の遺構は I Q 02 グリッド～I X 24・II D 04 グリッドに至る、長さ 132 m の範囲に分布する。遺構密度は分布範囲の中央付近で最も高く、遺構の重複も顕著である。しかし、中央付近から北西側では、I Q 14・19 グリッド～I Q 01・02 グリッドに跨る、長さ約 35 m の範囲で遺構密度が希薄となり、I Q 02 グリッドを境界に遺構の分布が途切れる。また、中央付近から南東側では、希薄になりつつも連続的に遺構の分布がみられ、I X 24・II D 04 グリッドを境界にして分布が途切れる。調査区内で遺構分布の境界が把握されたことで、南東～北西方向については、集落における居住域の範囲がある程度特定されたものと考えたい。

また、遺構には調査区の南側へと広がるものが多くみられる。調査区の南側一帯は安定した平坦地であり、現在は畑が営まれている。その畑では当該期の遺物が採集されている点からも、調査区で検出された集落跡は南側一帯へ広範囲に展開すると予想される。それに対して北側は、I Q 09・10 グリッド、I W 10～I X 06 グリッド、II D 05～II E 01 グリッドで遺構が全く検出されず、遺物も出土していない点から、集落跡が広がる可能性は低い。しかし、当該期の遺構は、調査区の北側にある、国史跡の範囲内でも 6 軒の竪穴住居跡などが検出されている（長野県教委 1997）。国史跡の範囲は調査区よりも地形的に一段高く、両地点には約 80 m の距離と 7～10 m の標高差が介在する。調査区と国史跡範囲との間に、遺構の連続性がないとすれば、同時期に 2 つの集落が並存して営まれていた状況を想定しなければならない。しかし、この間の 80 m 範囲には調査実績がほとんどなく、実態は不明確であり、集落範囲や性格などを検討するにあたり、今後の大きな課題の 1 つとなろう。

中期後葉の土坑と時期不明の流路跡は、前期初頭～前葉の遺構分布範囲よりもさらに南東側の、II E 06 グリッドから湿地付近の II E 13・18 グリッドに至る約 35 m の範囲に分布する。流路跡は出土遺物が前期初頭～前葉、中期後葉と時期幅をもつなど、時期決定の根拠が存在しない。もし、流路跡が前期初頭～前葉の所産であれば、居住域と湿地の間に流路が流れていたとする集落景観が描ける。また、中期後葉であれば、湿地や湿地付近に流れる流路跡とともに土坑が存在することになり、土坑の性格および国史跡の範囲で検出されている集落跡との関係などが問われよう。

以上、遺構分布の傾向を述べてきたが、次に、遺構ごとに所見を整理する。



第8図 遺構配置図(1:500)

第2節 竪穴住居跡

1. 概要

第37号竪穴住居跡（S B 37） 第13・14図、P L 2 位置：I Q 01・02グリッド

形状：隅丸方形 規模：長軸3.96 m、短軸3.60 m、床面積11.28 m² 長軸方向：N - 4° - W

調査の経緯：茅野市教育委員会による試掘トレンチ内部で、基本層序の第Ⅲ層を掘り込む方形プランの一部を確認した。また、トレンチ周辺の第Ⅱ層で検出・精査を実施し、残りのプランを確定した。

遺構の重複：なし。

住居内施設：柱穴、炉、周溝を検出した。柱穴は円形を呈し、45～65cmの深さをもつP 1～4の4基が、規則的に配置される点から主柱穴と考えられる。そのほか、P 1～4よりも小形で深さ20cmの柱穴P 5・6が、炉の南側に位置している。炉は住居中央よりもやや北壁側にある、長軸69cm、短軸58cm、深さ15cmの窪みを、位置からみて地床炉と判断した。しかし、焼土粒子・炭化物などが散布せず、底面や壁に明瞭な被熱の痕跡が認められないなど疑問も残る。周溝は、東壁と南壁の一部を除いて断続的にみられる。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整えており、ほぼ全面が堅緻であった。

遺物出土状況：覆土1～2層を主体に、多量の礫とともに遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、総量3716.9 g中、前期初頭が221.7 g、前期前葉が3495.2 gを量る。石器は石鏃および未製品6点、スクレイパー3点、石錐1点、両極石器4点、加工痕の有る剥片6点、石核・原石10点、凹石類4点、石皿3点、そのほかに黒曜石剥片265点、チャート剥片1点、石英剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体が前期前葉で、大形破片や個体復元が可能な土器（第68図1・2・9・10・11）が認められる点をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第38号竪穴住居跡（S B 38） 第15図、P L 2 位置：I Q 02・I L 22グリッド

形状：隅丸方形 規模：長軸3.20 m、短軸3.20 m、床面積8.10 m² 長軸方向：N - 1° - W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱ層で検出。第Ⅱ層と住居覆土の差があまりみられず、平面検出は困難であった。そのため、住居内の調査区境にトレンチを入れ、床面と壁の立ち上がりを見極めプランを確定した。

遺構の重複：S B 38（旧）→S T 1（新）。S B 38の壁と床面精査時にS T 1を検出。S T 1の柱穴覆土上部に、S B 38の床面が広がらない点を根拠として、S T 1の柱穴がS B 38の壁・床面を壊して掘り込むと考え、新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴、性格不明の土坑を検出。柱穴は円形・不整形を呈し、40～60cmの深さをもつP 1～3の3基が、規則的に配置される点から主柱穴と考えられる。調査区外のP 1・3の延長上に、もう1基の主柱穴を想定したい。性格不明の土坑P 4・5はP 1に近接し、深さはともに25cm前後と主柱穴よりも浅い。床面は基本層序の第Ⅲ層上を掘り込み整えたのみで、貼り床や硬化面は認められない。なお、炉と周溝は検出されなかった。

遺物出土状況：1～3層で出土し、床面に近い2～3層出土が多い。土器は前期前葉が主体で、総量1113.6 g中、前期初頭が262.5 g、前期前葉が851.1 gを量る。石器は石鏃6点、両極石器1点、加工痕の有る剥片3点、石核・原石4点、打製石斧1点、凹石類1点、そのほか、黒曜石剥片87点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第39号竪穴住居跡（S B 39） 第15図、P L 2・3 位置：I R 16・21グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸5.48 m、短軸4.04 m、床面積16.76 m² 長軸方向：N - 54° - W

調査の経緯：基本層序の第Ⅲ層上面で、S B 40・41のプランを検出途上にS B 39の存在を知る。S B 39のプランを考慮しつつ、南北・東西方向へトレンチを入れた結果、第Ⅲ層中にて堅緻な床面と周溝の一部、壁の立ち上がりを確認した。壁と周溝を追いながら掘り進め、S B 39のプランを決定した。

遺構の重複：S B 39(旧)→S B 41(新)。S B 40との新旧関係は、判断材料がなく不明。S B 41との新旧関係は、S B 41の周溝がS B 39の堅緻な床面を掘り込む点、S B 39の堅緻な床面がS B 41のプラン内部に広がらず、S B 41がS B 39の床面を掘り込むと考えられる点、S B 39の炉をS B 41の周溝が壊す点、礫を含むS B 39の覆土2層がS B 41の範囲に広がらない点、などを根拠に判断した。

住居内施設：柱穴、土坑、炉、周溝を検出。柱穴は円形・不整形を呈し、30～60cmの深さをもつP 1～4が、規則的に配置される点から主柱穴と考えられる。また、P 3には近接してP 7が位置するので、主柱穴の建て替えや複数本の主柱を建てていた可能性もあろう。P 2～4列の中央に位置するP 6は、深さ15cmと浅い。さらに、周溝内部には部分的に直径20cm前後の壁柱穴が並ぶ。P 5は性格不明だが、住居に付属する土坑で、南東方向の住居短辺に位置する。円形を呈し長軸85cm、短軸82cmを測り、深さは15cmと浅い。炉は地床炉で長軸40cm以上、短軸36cm、深さ8cmを測り、住居のほぼ中央に位置する。覆土に若干の焼土ブロックを含むが、底面や壁の被熱痕跡は明瞭でない。周溝は深さ15～20cmで、壁に沿って1周する。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整えており、堅緻である。

遺物出土状況：1～3層で遺物が出土し、多量の礫を含む2層での出土が顕著。検出時にS B 39を認定するのが遅れたため、一部はグリッド遺物として取り上げられたが、整理作業時にS B 39へ帰属させた。土器は前期初頭が主体で、総量12775.9g中、早期末葉が452.0g、前期初頭が8994.0g、前期前葉が3329.0gを量る。石器は石鏃および木製品25点、スクレイパー17点、石匙2点、石錐6点、抉入石器1点、両極石器28点、加工痕の有る剥片38点、石核・原石48点、凹石類4点、石皿5点、のほか黒曜石剥片611点、チャート剥片1点、石英剥片1点、珪質凝灰岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期初頭の所産と考えたい。

第40号竪穴住居跡(S B 40) 第16図、P L 2・3 位置：I R 16・21グリッド

形状：円形(推定) 規模：長軸4.20m、短軸3.88m、床面積13.14㎡ 長軸方向：N-20°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅲ層上面で、黒褐色のプランを確認。南北・東西方向にトレンチを入れ、壁の立ち上がりや床面および周溝を検出した。周溝が2条みられたので、住居が重複すると考え、それをS B 40・41と命名した。両者の新旧関係は、S B 40の覆土に多量の黒曜石剥片が含まれる点に着目し、黒曜石を含まないS B 41の覆土を切ると判断して調査を進めた。しかし、整理作業の段階で、黒曜石を含む覆土がS B 40の範囲に限定されず、S B 41の覆土にまで広がることが判明した。そして、両S Bの覆土を再検討した結果、黒曜石を含む覆土はS B 41の覆土1～3層(主に1層)に該当するとの結論に至り、S B 40とS B 41の新旧を修正した。第16図に示すA-B断面図をみながら説明する。覆土1～3層を、調査所見のようにS B 40とした場合、S B 40・41は床面レベルがほぼ同一なので、S B 40は覆土4層を掘り込むはずである。しかし、1～3層は4層上部に堆積して、S B 40の床面に届かず、4層はS B 41の床全面を覆い空地を形成している。以上から、1～4層はS B 41の覆土と判断され、S B 40はS B 41に壊された床面・柱穴・周溝のみが残存すると考えられる。形状と範囲は、周溝の状況から推測した。

遺構の重複：S B 40(旧)→S B 41(新)。S B 39との新旧関係は、判断材料が存在せず不明確。S B 41との新旧関係は、上記のとおりである。

住居内施設：柱穴、周溝が認められる。柱穴はS B 40・41に所属するものが合わせて検出され、その分離を整理作業中に行ったので不明確な部分が残る。まず、隅丸長方形のS B 41の柱穴を、同じ形状を呈するほかの竪穴住居跡に倣って規則的な配置と考え、P 1-3-5列、P 2-4-6・7列と推定した。

北壁のP8はSB41の長軸線上に乗るので、SB41の補助柱穴となる可能性があろう。SB41に帰属させた柱穴を除外するとP9～14が残り、この6基をSB40に伴う柱穴と捉えておきたい。6基の柱穴はSB40の周溝上や、周溝付近に位置している。周溝は、壁に沿って巡ると考えられるが、P11付近で途切れる。また、北～東壁にかけてはSB41と重複するので不明確である。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：SB41との重複から、覆土がほとんど存在せず遺物も少ない。床面に近いレベルで出土したものや、床面精査で出土したものをSB40に帰属させたが、SB41の遺物であった可能性も残る。土器は山上総量6.8gで、全てが前期前葉である。小破片の資料なので、図示するようなものはない。石器は石鏃2点、石核1点、黒曜石剥片1点が出土したのみである。

時期：不明確だが、SB40を切るSB41の時期が前期前葉と推測されるため、SB41以前の時期となる。

第41号竪穴住居跡（SB41） 第16図、PL2・3 位置：IR16・21グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸5.56m、短軸4.90m、床面積23.11㎡ 長軸方向：N-12°-W

調査の経緯：SB40を参照。

遺構の重複：SB39・40（旧）→SB41（新）。SB39との関係はSB39に、SB40との関係はSB40に示したとおりである。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴は円形を呈し、50～70cmの深さをもつP1～4・6が、規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、P1-3列とP2-4列の間には、主柱穴よりも浅いP5・7が位置する。P8は長軸線上に乗り、補助柱穴と思われる。周溝内部には、住居のコーナー付近に壁柱穴と思われる小形の土坑がみられる。炉は地床炉で長軸46cm、短軸44cm、深さ6cmを測り、住居中央よりもやや北壁側に位置する。覆土に若干の炭化物を含むが、底面や壁には明瞭な被熱痕跡が認められない。また、炉の南西側には、床面に1点の石皿が置かれていた。周溝は壁にそって巡り、西壁中央と南東コーナー付近で途切れる。北壁～東壁にかけては、SB40と重複するので、不明確な点が残る。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：覆土1～3層、および4層上部にかけて遺物が出土した。4層堆積後の窪地へ、廃棄された遺物であろう。また、1～3層（主に1層）では小礫混じりに、微細な黒曜石剥片が多量に出土した。土器は出土総量19023.6g中、早期末葉が724.1g、前期初頭が12452.6g、前期前葉が5816.4g、そのほか時期不明のものが30.5gでやや時期幅をもつ。石器は石鏃未製品を含めて102点、スクレイパー20点、石匙6点、石錐16点、挟入石器2点、両極石器135点、加工痕の有る剥片98点、石核・原石93点、打製石斧2点、磨製石斧2点、凹石類3点、そのほか黒曜石剥片3585点、チャート剥片22点、安山岩剥片3点が出土している。

時期：不明確だが、SB39・40を切るなので、その2軒よりは新しい。また、覆土から出土した土器は時期幅をもち、住居の時期を決定する根拠としてはやや弱い。しかし、SB41が切るSB39の時期に前期初頭の可能性を考えた点、SB41出土土器に前期前葉よりも新しい時期のものが存在しない点、住居の形状や施設のあり方などの点から、前期前葉の所産と考えたい。

第42号竪穴住居跡（SB42） 第17図、PL3 位置：IR16、IQ20グリッド

形状：円形 規模：長軸5.58m、短軸4.80m、床面積17.47㎡ 長軸方向：N-146°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱa層下部を掘り下げたところ、土器の山上が顕著なため、北側の調査区域に沿ってトレンチを入れた。その結果、第Ⅲ層上面まで遺物が包含されていることが判明し、さらに、第Ⅲ層を掘り込む床の硬化面と、壁の立ち上がりが見つかり、竪穴住居跡と判断した。その時点で、第Ⅱ層中

においてS B 42のプラン検出を試みたが、検出面と住居覆土の性質が類似し不明確なので、再びトレンチを入れ、床面と壁の立ち上がりを追いつながらプランを確定した。第Ⅲ層は、S B 42付近では、南方に向かって緩やかに傾斜している。北壁付近は、第Ⅲ層を掘り込むので、壁の立ち上がりと床面は明確に把握できた。しかし、東壁付近は第Ⅲ層への掘り込みが浅く、さらに、南～西壁付近は覆土と性質が類似する第Ⅱc層中に床面があり、そこから壁が立ち上がるのでプラン検出は困難であった。

遺構の重複：なし。

住居内施設：柱穴、土坑、炉が認められる。柱穴はP 1～12で、深さは20～35cm、円形もしくは不整円形を呈する。この中で、P 1～4は規則的な配置をみせる点から主柱穴と考えたい。また、P 1～2列とP 3～4列の中心線上には、炉とともにP 6が乗る。西壁に位置するP 13は、円形を呈し直径110cm、深さ20cmを測る。重複の可能性も否定できないが、住居の検出時には認められず、床面と壁の精査時に検出されたので、住居に付属する土坑と推測しておきたい。炉は石囲炉で、南西側の壁に寄って位置する。長軸42cm、短軸34cmで、炉縁石上部から底面までは12cmを測る。石囲炉は短辺に1点、長辺に2点の平石を長方形に組み合わせ、さらに炉縁石と同様の平石を底面に敷く。炉の掘り方は明瞭ではなく、床面上に炉縁石を直接立てたような状態である。なお、炉縁石の一部は接合する。炉縁石や底面・壁に被熱痕跡はほとんどみられず、覆土にも焼土粒子・炭化物などを含まない。石囲炉のすぐ北側では、3点の石皿が床面に置かれていた。床面は基本層序の第Ⅱc～Ⅲ層を掘り込んで整形しており、ほぼ全面が硬い。

遺物出土状況：覆土1～2層上面にかけて遺物が出土した。1層には20～50cmの礫が多量に含まれ、遺物は1～2層の堆積過程の中で、窪地へ礫とともに廃棄されたものであろう。礫の中には24点の石皿や石皿の破片と思われる板状の礫が存在していた。土器は出土総量9584.4g中、早期末葉が489.9g、前期初頭が4717.0g、前期前葉が4372.7g、不明確なものが4.8gで、前期初頭と前葉がほぼ同量である。石器は石鏃および未製品が33点、スクレイパー12点、石匙3点、石錐3点、両極石器42点、加工痕の有る剥片40点、石核・原石56点、凹石類19点、石皿27点（上記の24点を含む）、そのほか黒曜石剥片1077点、チャート剥片3点、珪質泥岩剥片1点が出土している。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第43号竪穴住居跡（S B 43） 第18図 位置：1W 02・03・07・08グリッド

形状：円形 規模：長軸4.90m、短軸4.72m、床面積16.45㎡ 長軸方向：N-83°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱa層下面～Ⅱb層上面で、屋外炉のS F 8・12と方形柱穴列のS T 2を検出し、その調査と並行しながら、周辺部を第Ⅲ層まで掘り進めた結果、第Ⅲ層を掘り込むS B 43のプランの一部（西壁）が見つかった。S B 43は第Ⅲ層への掘り込みが浅いので、全体のプランや壁の立ち上がりを把握するのは困難であった。そこで、再び第Ⅲ層上面に精査を実施したところ、周溝が現れ、周溝が巡る範囲と確認された住居プランの一部を統合することにより、S B 43のプランを決定した。

遺構の重複：S B 43（旧）→S B 44、S T 2、S F 8・12（新）。S B 44の周溝がS B 43の床面を壊して掘り込む点、S T 2の柱穴がS B 43よりも上部で検出され、S B 43の覆土に掘り込まれたと考えられる点、S F 8・12がS B 43よりも上部で検出され、S B 43の埋没後（あるいは埋没途中）の所産と考えられる点などから新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴はP 1～5で円形・不整円形を呈する。P 1～4は深さ50～60cm、P 5は深さ20cmで、P 1～4が位置や深さからみて主柱穴と考えられる。炉は住居中央よりもやや北西側の壁に寄り、不整楕円形の窪みを地床炉と判断した。長軸48cm、短軸は42cmだが、深さは3～5cmと浅く、覆土に焼土粒子・炭化物を含まず、壁や底面に明瞭な被熱痕跡が認められないなど疑問も残る。周溝は壁に沿って途切れなく1周する。周溝内部には直径10～15cm、深さ10cm前

後の、円形を呈する掘り方が数多く認められた。浅く小形だが、支柱穴の痕跡であろうか。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形するのみで、貼り床や硬化面はなく、ややしまる程度である。

遺物出土状況：検出面の基本層序第Ⅱb層で検出できず、第Ⅲ層上面まで掘り下げたので、当初からS B 43の出土遺物として取り上げたものは少数である。第Ⅲ層へ掘り込まれた住居の壁高が浅いので、住居の掘り込み面は第Ⅱ層中にあると判断して、整理作業時にS B 43の住居範囲に該当するグリッド出土遺物の一部をS B 43の遺物として帰属させた。土器は前期初頭が主体で、総量2408.7g中、早期末葉が34.8g、前期初頭が1438.3g、前期前葉が935.6gを量る。石器は石鏃10点、スクレイパー2点、石匙4点、石錐2点、両極石器26点、加工痕の有る剥片11点、石核・原石22点、磨製石斧1点、凹石類3点、石皿1点、そのほか黒曜石剥片410点、チャート剥片2点、砂岩剥片1点が出土した。

時期：不明確である。覆土から出土した土器の主体は前期初頭だが、前期前葉も一定量が存在するので、前期初頭～前葉の所産と考えておきたい。

第44号竪穴住居跡（S B 44） 第19図、P L 3 位置：I W 07 グリッド

形状：円形 規模：長軸4.80m、短軸3.78m、床面積13.97㎡、いずれも推定。

長軸方向：N-55°-W 調査の経緯：基本層序の第Ⅱa層下部～Ⅱb層上面上で、屋外炉のS F 8・12と方形柱穴列のS T 2・3を検出し、その調査と並行しながら、周辺部を第Ⅱb層～第Ⅲ層にかけて掘り下げた。第Ⅱb層の掘り下げ時に、焼上粒子・炭化物を含む点が明らかとなり、当初は先に検出されたS T 2・3との関係に注意を払った。第Ⅲ層到達時に、それを掘り込む壁の一部（西壁）が検出され、竪穴住居跡の存在を認識した。連続して壁を追ったが、ほかの部分では第Ⅲ層への掘り込みが浅く、壁を把握するのは困難であった。その後、第Ⅲ層面の精査でS B 44に伴う周溝が検出でき、壁の立ち上がりと周溝を統合することでS B 44のプランを確定した。第Ⅱb層でみられた焼土粒子・炭化物は、範囲がS B 44のプランに取り込まれたので、S B 44の覆土2層と判断した。さらに、床面で炭化材の一部が検出されたので、S B 44を焼失住居と考えた。炭化材は遺存状態が悪く、調査後に破棄した。

遺構の重複：S B 43（旧）→S B 44→S T 2・3（新）。S B 44の周溝がS B 43の床面を壊して掘り込む点、S T 2・3の柱穴がS B 43の床面を掘り込み、S T 2・3の柱穴覆土にS B 44の堅緻な床面が認められない点などを根拠に、新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴はP 1～4の4基で、円形・不整形円形を呈し、30～40cmの深さをもつ。P 2～4は規則的に配置される点などから、支柱穴と考えられる。また、S T 3と重複する位置に、P 2～4と組む柱穴1基が存在した可能性は高い。周溝内部には支柱穴の可能性があり、直径20cm前後、深さ10～30cmの円形を呈する掘り方が、間隔をおいてみられる。炉は地床炉で、住居中央よりもやや南東側の壁に寄って位置する。長軸117cm、短軸113cm、深さ15cmを測り、第Ⅲ層に含まれる自然礫が底面であった。底面の被熱痕跡は明瞭で、覆土には焼土・灰がブロック状に堆積していた。周溝は壁に沿って途切れず、西側の一部が2重になる。しかし、その部分はS T 3と重複するうえ、大半が調査区外となるので詳細不明。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、堅緻である。

遺物出土状況：検出面の基本層序第Ⅱb層ではS B 44が検出できず、第Ⅲ層上面まで掘り下げたので、整理作業時に、S B 44の住居範囲に該当する第Ⅱb層出土のグリッド遺物を、一部、S B 44の遺物として帰属させた。覆土は1～3層が堆積し、遺物は主に1・2層から出土した。S B 44は焼失住居で、2・3層に焼土粒子・炭化物を顕著に含み、床面の一部には炭化材が遺存していた。礫や遺物が出土した位置は、2層中であっても焼土粒子・炭化物よりも上部であり、住居焼失後に2層が堆積する時間幅の中で廃棄されたものと推測したい。

土器は前期初頭～前葉が主体で、総量13272.8g中、早期末葉が235.5g、前期初頭が5950.4g、前

期前葉が7006.5g、時期不明のものが80.4gとなる。石器は石鏃および未製品が20点、スクレイパー15点、石匙6点、石錐7点、両極石器33点、加工痕の有る剥片21点、石核・原石43点、磨製石斧2点、円石類13点、石皿4点、挾状耳飾1点、そのほか黒曜石剥片416点、チャート剥片4点、珪質泥岩剥片1点、珪質凝灰岩剥片2点、安山岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だがS B 43を切る点や、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第45号竪穴住居跡（S B 45） 第19図、P L 3 位置：I Q 24・25グリッド

形状：不明 規模・長軸方向：住居の大部分が調査区外のため不明。

調査の経緯：基本層序の第II a層下部～II b層上面で、平石を含む礫のまとまりを確認した。記録の後、礫を取り上げ、その部分へ調査区に沿ってトレンチを入れたところ、第III層上面で黒褐色のプランがみつき、形状や規模から竪穴住居跡のコーナー部分と判断した。

遺構の重複：S B 57 (旧) → S B 45 (新)。S B 45の調査時点ではS B 57を把握しておらず、さらに、S B 57の調査でもS B 45との重複について詳細な検討ができなかった。しかし、第II a層下部～II b層上面で確認した礫の一部が、S B 45の壁に沿った傾斜で出土していることから、S B 57の床面をS B 45が壊して掘り込み、礫はS B 45の覆土に堆積したものと考え、新旧関係を判断した。

住居内施設：円形で15cmの深さをもつ柱穴状の土坑が、北東壁コーナー付近で検出された。床面は基本層序の第III層を掘り込み整形するのみで、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土1～2層上部で遺物が出土した。石器は前期前葉が主体で、総量971.0g中、早期末葉が46.6g、前期初頭が149.7g、前期前葉が774.7gである。石器は石鏃および未製品が2点、スクレイパー1点、石匙1点、石錐1点、両極石器8点、加工痕の有る剥片4点、石核・原石2点、石皿4点、そのほか黒曜石剥片44点、緑色片岩剥片1点出土した。

時期：不明確だが、覆土から出土した土器の主体となる時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第46号竪穴住居跡（S B 46） 第20・21図、P L 4 位置：I X 23・24、II D 03・04グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸7.00m、短軸5.40m、床面積28.30㎡ 長軸方向：N-3°-E

調査の経緯：平成15年に茅野市教育委員会が実施した試掘調査のトレンチ内部で、基本層序の第III層を掘り込む住居プランの一部を確認した。そのため、トレンチ周辺第II b層上部において精査を行い、残りのプランを検出した。第II b層と住居覆土の性質はかなり類似するが、覆土のほうがより黒色で暗い。平面検出のみでは明確さに欠けるので、住居の掘り下げに先立ち、東西・南北方向にトレンチを入れ、第III層を掘り込む床面と壁の立ち上がりを確認した。

遺構の重複：なし。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴は円形・不整形を呈し、90～100cmの深さをもつP 1～4が、規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、周溝内部や周溝に接して、多数の支柱穴がみられ、北壁に沿う部分ではやや間隔を置いて、東・南壁に沿う部分では北壁よりも密に位置する。支柱穴の深さは30～60cmと幅をもつが、北壁の中央に位置し、炉とともに住居の長軸線上に乗るP 5と、主柱穴P 1～2列の線上にのるP 6・7は、P 5が60cm、P 6・7が50cmと深いうえに深さが揃う。周溝は壁に沿って1周するほか、P 3の南側にも部分的に認められる。炉は石囲炉で、中央よりもやや北壁側に寄って位置する。新旧2基の炉が存在し、住居中央より近い南側の石囲炉（炉（旧））から、北側の石囲炉（炉（新））へと作り替えられている。規模は炉（新）が長軸63cm、短軸57cm、深さ20cm、炉（旧）が長軸66cm、短軸54cm、深さ15cmである。長・短軸はほぼ同一だが、深さは炉（新）の方がわずかに深い。また、長軸の方向が、炉（旧）の東西方向から、炉（新）の南北方向へと変化する。炉（新）

では深さ20cmの掘り方内部に炉縁石を組み、底面は平石を敷く。炉縁石は短辺に2点、長辺に1点の平石を、やや多角形状に組み、角には直径10cm程度の円礫を置いていた。底面と炉縁石の平石は接合でき、1点の平石を分割して使用した状況が窺える。炉(旧)は埋め戻され、床面と同一レベルで整えられていた。また、炉の東・西側には1点ずつの石皿が床面に置かれていた。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形するのみで、貼り床や硬化面はなく、ややしまる程度である。南壁付近がやや高く、段を形成する。遺物出土状況：遺物は覆土1～2層で出土したが、特に1層出土が多い。土器は前期前葉が主体で、総量8193.2g中、早期末葉が111.6g、前期初頭が1387.9g、前期前葉が6693.7gを量る。前期前葉の土器は、住居の南西コーナー付近に比較的纏まって出土した。石器は石鏃および未製品が8点、スクレイパー3点、石錐1点、両極石器17点、加工痕の有る剥片6点、石核・原石18点、凹石類12点、礫器1点、石皿9点、そのほか黒曜石剥片283点、チャート剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、器形復元の可能な大形破片を含む、前期前葉土器が住居南西コーナー付近で纏まって出土し(第80図292・293)、覆土全体で前期前葉が主体となる点から、前期前葉の所産と考えたい。

第47号竪穴住居跡(SB47) 第22図、PL4 位置：IX23、II D2・3グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸5.28m、短軸4.88m(推定)、床面積18.25㎡

長軸方向：N-172°-E 調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層上部で住居プランを検出した。第Ⅱb層と住居覆土の性質はかなり類似するが、覆土のほうがより黒色で暗い。平面検出のみでは明確さに欠けるので、東西・南北方向にトレンチを入れ、第Ⅲ層を掘り込む床面と壁の立ち上がりを確認した。調査当初はSB52との重複がわからず、2軒同時に掘り下げてしまった。SB47の壁を追った時点でSB52との重複を把握し、周溝の位置を根拠にしてSB47のプラン修正を行い、2軒を分離した。

遺構の重複：SB49・52(旧)→SB47(新)。SB49の床面および壁を壊してSB47が掘り込まれる点、SB52の床面と周溝を壊してSB47の周溝が掘り込まれる点を根拠とする。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴は円形・不整形円形を呈し、60～90cmの深さをもつP1～4が、規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、周溝内部のP5・6は支柱穴と思われ、P5は南壁際の中央に位置して住居の長軸線上に乗り、P6は西壁にあってP4に近接する。深さはP5が30cm、P6が40cm。炉は中央よりもやや南壁側に位置する長軸44cm、短軸42cm、深さ5cmの窪みを地床炉と判断した。しかし、焼土粒子や炭化物の散布がみられず、壁・底面に明瞭な被熱痕跡が認められないなど疑問も残る。地床炉の脇に1点の石皿が置かれていたが、この石皿にも被熱痕跡は認められない。周溝は壁に沿って1周し、P4に繋がる。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形するのみで、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土1～2層で遺物が出土し、1層出土が極めて多い。SB52との重複を見落とし、2軒同時に掘り下げてしまった。しかし、SB47の遺物は住居の南西コーナー付近に纏まり、1～2層の出土が多く、それに対してSB52は、床面付近で少数の遺物が出土したのみで、覆土中にはほとんど存在しなかった。尚住居の遺物は分かれて出土したので、遺物の混在はほぼないと考える。土器は前期前葉が主体で、総量15464.3g中、早期末葉が238.7g、前期初頭が2509.7g、前期前葉が12662.6g、時期不明が53.3gを量る。石器は石鏃および未製品が13点、スクレイパー10点、石匙3点、石錐2点、抉入石器2点、両極石器32点、加工痕の有る剥片37点、石核・原石83点、凹石類21点、石皿6点、そのほか黒曜石剥片536点、チャート剥片7点、石英剥片3点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出土した土器の主体となる時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第48号竪穴住居跡(SB48) 第23図、PL4・5 位置：IX21・22グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸6.78m、短軸6.46m、床面積29.65㎡ 長軸方向：N-4°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層上部で住居プランを検出した。第Ⅱb層と住居覆土の性質はかなり類似するが、覆土のほうがより黒色で暗い。また、検出面の第Ⅱb層では多くの礫がみられたのに対して、住居プランの範囲に礫はほとんど存在しなかった。その状況を、S B 48が第Ⅱb層を掘り込んだのでプランの範囲に礫がみられず、埋没過程において第Ⅱb層と類似する覆土（礫はあまり含まない）が住居に堆積したものと判断した。平面検出では明確さに欠けるので、東西・南北方向にトレンチを入れ、第Ⅲ層を掘り込む床面と壁の立ち上がりを確認して調査を進めた。なお、調査区の問題から、S B 48の調査は平成16・17年度に跨った。遺構の重複：なし。

住居内施設：柱穴、土坑、炉、周溝が認められる。柱穴は円形・不整形円形を呈し、50～70cmの深さをもつP1～4が、規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、P5は支柱穴と思われる柱穴で、北壁際の中央に位置し、炉とともに住居の長軸線上に乗る。深さは55cmである。炉は地床炉で、住居のほぼ中央に位置する。長軸76cm、短軸46cm、深さ5cmを測り、底面には弱い被熱痕跡が認められた。周溝は壁に沿って1周し、南壁を基準に2重に巡る。内側を巡る周溝が、外側を巡る周溝に壊される点から、内側（旧）から外側（新）へと住居が拡張された可能性を指摘できる。柱穴のP1～5や地床炉は、外側を巡る周溝に伴う施設であろう。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み、整形するのみで、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土1～2層にかけて遺物が出上し、2層出土が極めて多い。遺物は3・4層堆積後の窪地に、廃棄されたものと思われる。土器は前期前葉が主体で、総量30563.5g中、早期末葉が88.3g、前期初頭が5909.8g、前期前葉が24447.1g、時期不明が118.3gを量る。石器は石鏃および未製品が57点、スクレイパー32点、石匙14点、石錐8点、両極石器75点、加工痕の有る剥片53点、石核・原石105点、磨製石斧1点、凹石類21点、石皿4点、そのほか黒曜石剥片1029点、チャート剥片6点、凝灰岩剥片1点、安山岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第49号竪穴住居跡（S B 49）第24図、P L 5 位置：IX 22・23グリッド

形状：円形 規模：長軸5.20m、短軸4.88m、床面積18.25㎡（推定）長軸方向：N-3°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層で住居プランを検出。第Ⅱb層と住居覆土の性質は類似するものの、覆土のほうがより黒色で暗い。平面検出のみでは明確さに欠けるので、東西・南北方向にトレンチを入れ、第Ⅲ層上部を掘り込む床面と壁の立ち上がりを確認した。

遺構の重複：S B 49（旧）→S B 47（新）。S B 49の壁と床面を、S B 47が掘り込む点を根拠とする。住居内施設：柱穴状の土坑と炉が認められる。柱穴状の土坑は11基で、円形・不整形円形を呈し、深さ20cm前後を測る。壁際と炉の周辺に位置するが、土坑覆土と第Ⅲ層の差があまり見られず、検出は困難であった。そのため、柱穴と認定できるのか、といった点ではやや確実性に欠ける。炉は地床炉で、住居中央よりもやや南壁側に位置する。長軸64cm、短軸62cm、深さ5cmを測るが、焼土粒子・炭化物が散布せず、底面や壁に明瞭な被熱痕跡が認められないなど疑問も残る。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形するのみで、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土1層で遺物が出土した。2層上面では多量の礫が出土しており、遺物が出土した位置はこの礫中～礫の上部である。土器は前期初頭と前葉がほぼ同量で、総量4073.9g中、早期末葉が47.5g、前期初頭が1904.6g、前期前葉が2125.0g、時期不明が6.8gを量る。石器は石鏃および未製品が7点、スクレイパー3点、石匙1点、石錐3点、両極石器6点、加工痕の有る剥片5点、石核・原石12点、凹石類5点、石皿2点、そのほか黒曜石剥片85点、チャート剥片3点、砂岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出土した土器の時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第50号竪穴住居跡（S B 50） 第25・26図、P L 5 位置：I R 22グリッド

形状：隅丸方形 規模：長軸4.62 m、短軸4.18 m、面積14.47 m² 長軸方向：N-10°-E

調査の経緯：基本層序の第II c層で住居プランを検出。第II c層と住居覆土の性質は類似するが、第II c層は礫を多く含むのに対して、住居覆土は礫をほとんど含まない点、住居覆土の方がより黒色で暗い点などを根拠にプランを決定した。平面検出のみでは正確さに欠けるので、掘り下げに先立ちトレンチを入れて、床面と壁の立ち上がりを確認した。

遺構の重複：S B 50（旧）→S F 2・3・13（新）。S F 2・3・13を、S B 50の覆土上部で検出した点を根拠とする。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴はP 1～7で、円形・不整形を呈する。その中で、深さ30～40cmのP 1～4が、規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、深さ40cmのP 5は、炉とともにP 1-2列とP 3-4列の中心線上に乗る。そのほか、東壁に深さ20cmのP 6・7が位置する。P 6・7は別の遺構が重複する可能性も考慮したが、P 1～5と同時にS B 50の床面で検出され、さらに、S B 50の周辺でP 6・7と関連しそうなほかの遺構が検出されなかったことなどから、S B 50に伴うものと考えておきたい。炉は住居中央にある、長軸40cm、短軸34cm、深さ15cmの窪みを地床炉と判断した。しかし、焼土粒子・炭化物などの散布がみられず、壁や底面に明瞭な被熱痕跡が認められないなど、疑問も残る。また、炉の南壁で楕円形の礫が検出され、被熱痕跡の有無は明確でないが、炉に伴う可能性も推測される。周溝は北・西・南壁に沿って途切れることなく巡り、東壁には存在しない。床面は基本層序の第III層を掘り込み、整形するのみで、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土1層で多量の礫と遺物が出上した。礫と遺物の多くは、2層堆積後の窪地へ廃棄されたものであろう。土器は前期前葉が主体で、総量23689.4 g中、早期末葉が569.2 g、前期初頭が4377.7 g、前期前葉が18732.4 gを量る。石器は石鏃および未製品46点、スクレイパー25点、石匙3点、石錐9点、両極石器53点、加工痕の有る剥片36点、石核・原石48点、磨製石斧1点、凹石類11点、石皿17点、そのほか黒曜石剥片1119点、チャート剥片6点、珪質泥岩剥片3点、砂岩剥片1点、珪質凝灰岩剥片1点、安山岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、器形復元が可能な個体や大形破片が多く（第88図442～447）、覆土で圧倒的に主体となる前期前葉土器の時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第51号竪穴住居跡（S B 51） 第27図、P L 5 位置：I W 03グリッド

形状：円形（推定） 規模：長軸6.0 m、短軸、床面積ともに不明

長軸方向：不明 調査の経緯：基本層序の第II b層で検出。第II b層で多量の遺物が出土したので掘り下げたところ、第II c～III層上面に到達しても遺物の出土状態と量が変化せず、遺構覆土の可能性を考慮した。周辺を第III層上面まで下げた時点で、第III層を掘り込む住居プランを検出するに至った。

遺構の重複：S B 51（旧）→S F 9・10・18（新）。S F 9・10・18を、S B 51の覆土上部で検出した点を根拠とする。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められる。柱穴は円形・不整形を呈し、深さ40～55cmのP 1・2が規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、P 1・2に対応する主柱穴が、調査区外に存在するものと思われる。P 3はP 1・2と同様、壁際に位置し、掘り方の大きさもP 2に近いが、深さが10cmとP 1・2よりもかなり浅いため、主柱穴からは除外して考えたい。炉は地床炉で、住居のほぼ中央と思われる位置にある。長軸68cm、短軸56cm、深さ5cmを測り、覆土に若干の焼土と焼土粒子を含む。周溝は、調査範囲の中では壁に沿って途切れなく1周する。西～南側にかけては壁に直接沿わず、壁からやや距離を置いて掘り込まれる。床面は基本層序の第III層を掘り込み整え、ややしめる。

遺物出土状況：覆土1層で、礫とともに遺物が出土した。礫と遺物のほとんどは、2層堆積後の窪地へ廃棄されたものと考えられる。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量6547.9g中、早期末葉が196.7g、前期初頭が3919.3g、前期前葉が2404.4gを量る。石器は石鏃および未製品が17点、スクレイパー7点、石匙1点、石錐1点、両極石器11点、加工痕の有る剥片10点、石核・原石25点、凹石類5点、石皿1点、そのほか黒曜石剥片225点、チャート剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出た土器の時期をもって、前期初頭～前期前葉の所産と考えたい。

第52号竪穴住居跡（S B 52） 第22図 位置：II D 02グリッド

形状：不明 規模：長軸、短軸、面積、長軸方向ともにS B 47と重複するため計測不可。

調査の経緯：調査当初はS B 52の存在がわからず、S B 47に含めていたが、S B 47の壁を追った時点でS B 52との重複を把握した。S B 47は周溝が壁に沿って1周するので、周溝を追いながらプランを修正し、周溝に切られて残った範囲をS B 52と認定した（S B 47の調査経緯も参照）。

遺構の重複：S B 52（旧）→S B 47（新）。S B 52の床面を壊してS B 47の周溝および床面が掘り込まれる点を根拠とする。

住居内施設：周溝が認められ、調査された範囲では壁に沿って巡る。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込んで整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：床面近くで遺物が出土した。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量960.3g中、早期末葉が80.5g、前期初頭が555.8g、前期前葉が324.0gを量る。石器は石鏃および未製品が3点、石匙1点、両極石器2点、加工痕の有る剥片2点、石核・原石4点、凹石類2点、そのほか黒曜石剥片25点、チャート剥片1点、砂岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出た土器の時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第53号竪穴住居跡（S B 53） 第28図、P L 5 位置：I W 08・09グリッド

形状：隅丸方形 規模：長軸6.50m、短軸6.40m、床面積33.95㎡ 長軸方向：N-6°-W

検出：基本層序の第Ⅱc層において、北・東・南壁のプランを検出したが、西壁は第Ⅱc層では見えず、第Ⅲ層上面まで下げたところで明確になった。また、東西・南北方向にトレンチを入れて、床面と壁の立ち上がりを確認しながら調査を進めた。

遺構の重複：S B 63、S T 4（旧）→S B 53（新）。S B 63の床面を壊してS B 53の周溝が掘り込まれている点、黄褐色ローム粒や礫を多量に含むS T 4の柱穴覆土が、S B 53の覆土中にみられず、床面以下で確認された点をそれぞれの根拠とする。

住居内施設：柱穴、周溝が認められた。柱穴は円形・不整形を呈し、50～80cmの深さをもつP 1～4が、規則的に配置される点から主柱穴と考えられる。また、P 1～4よりもやや小形で、支柱穴と思われるP 5・6がP 1～3・P 2～4列の間に、P 7が住居の中央付近にそれぞれ位置する。炉はほかの竪穴住居跡のように、住居の中央、あるいはやや北壁へ寄った位置に存在すると考え、床面精査を実施したが、検出できなかった。しかし、北壁際中央付近の床面において、掘り込みをもたず、25～55cmの範囲で広がる被熱痕跡が認められた。周溝は南西壁コーナー付近で途切れるほかは、壁に沿って1周する。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込んで整形し、貼り床や硬化面は認められず、ややしまる程度である。そのほか、北・西壁では各1点の石皿が壁に立てかけてあったような状態で出土し、また、北壁際と住居中央よりもやや北壁側の位置には、床面に石皿が置かれていた。

遺物出土状況：覆土上層と、ほぼ床面で遺物が出土した。覆土上層から出土した遺物は多量である。土器は前期前葉が主体で、総量31988.8g中、早期末葉が137.1g、前期初頭が11121.5g、前期前葉が20730.2gを量る。石器は石鏃および未製品169点、スクレイパー51点、石匙15点、石錐19点、塊

入石器5点、両極石器327点、加工痕の有る剥片119点、石核・原石233点、磨製石斧4点、凹石類21点、石皿12点、そのほか黒曜石剥片4931点、チャート剥片48点、石英剥片5点、珪質泥岩剥片3点、珪質凝灰岩剥片7点、安山岩剥片1点、泥岩剥片1点、流紋岩剥片2点が出土した。ほぼ床面で出土した遺物は、前期前葉の土器1個体で(第90図473)、出土位置は北壁際のほぼ中央、被熱痕跡の西側で、石皿の前面である。この土器は、1個体分がそのまま潰れた状態で出土した(PL5)。

時期：床面出土の土器が前期前葉に所属する点、覆土出土土器の主体が前期前葉である点から、前期前葉の所産と考えたい。

第54号竪穴住居跡(SB54) 第29・30図、PL5・6 位置：IR16・20グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸4.50m、短軸3.40m、床面積11.26㎡ 長軸方向：N-5°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層を掘り下げたところ、多量の礫と略完形個体の土器が出土した。礫や遺物の出土状況を記録後、第Ⅲ層で精査を行った結果、第Ⅲ層を掘り込む住居プランを検出した。礫と遺物は、全て住居プランの範囲内に含まれたので、礫と遺物が出土した層を住居覆土と判断して、SB54に帰属させた。

遺構の重複：北東壁コーナー付近において、SB39とわずかな範囲で切り合うが、新旧関係は不明。覆土から出土した土器の主体となる時期をみれば、SB54の方が新しいといえようか。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められた。柱穴は円形・不整形を呈し、40～50cmの深さをもつP1～4が、規則的に配置される点から支柱穴と考えられる。また、北壁に沿う周溝内部には、深さ15cm程度の支柱穴と思われるP5・6が位置する。炉は地床炉で、住居中央に位置する。長軸56cm、短軸40cm、深さ5cmを測り、覆土に若干の焼土粒子を含む。炉脇では、1点の平石が検出された。被熱痕跡の有無は不明確だが、位置からすれば炉に伴う可能性も推測される。周溝は壁に沿って、途切れなく1周する。そのほか、P4の北側では、床面に石皿が置かれていた。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込んで整形するのみで、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：覆土上層で、礫とともに多量の遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、総量19037.1g中、早期末葉が444.1g、前期初頭が3043.8g、前期前葉が15539.9gを量る。石器は石鏃および未製品13点、スクレイパー12点、石匙1点、石錐2点、挟入石器1点、両極石器47点、加工痕の有る剥片19点、石核・原石37点、磨製石斧1点、凹石類4点、石皿14点、そのほか黒曜石剥片776点、チャート剥片2点、珪質泥岩剥片1点、凝灰岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土で前期前葉土器の略完形個体(第93図529・530・532・533)が多く出土した点、覆土出土土器の主体が前期前葉である点をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第55号竪穴住居跡(SB55) 第31図 位置：IW04グリッド

形状：不明 規模：長軸方向：多くの部分が調査区外に広がる点、プランの一部に不明確な部分が残る点などから不明 調査の経緯：調査区境の壁を観察して、基本層序第Ⅱb層由来の礫が、第Ⅲ層に落ち込む部分を確認。平面検出では把握できなかったが、落ち込みの規模からみて、第Ⅲ層を掘り込む竪穴住居跡の可能性を考慮した。この時点で、調査面は既に第Ⅲ層の掘削を行っており、その影響から南壁プランには不明確な部分が残る。竪穴住居跡としての施設が一切検出されておらず、竪穴状遺構とすべきか。

遺構の重複：なし。住居内施設：検出できなかった。底面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み、整形する。

遺物出土状況：当初から、SB55出土遺物として取り上げたものは少ない。整理事業時に、SB55のプランに含まれる遺構外出土遺物を、SB55の遺物として帰属させた。土器は前期前葉が主体で、総量18979.4g中、早期末葉が730.3g、前期初頭が6553.0g、前期前葉が11696.1gを量る。石器は石鏃および未製品7点、スクレイパー7点、両極石器14点、加工痕の有る剥片13点、石核・原石33点、

打製石斧1点、凹石類4点、石皿3点、そのほか黒曜石剥片162点、石英剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、主体となる土器の時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第56号竪穴住居跡（S B 56） 第32図、P L 6 位置：I Q 19・20 グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸7.04 m、短軸5.88 m、床面積37.40 m² 長軸方向：N-5°-E

調査の経緯：検出面の基本層序第Ⅱb層では検出できず、第Ⅲ層上面で確認した。既に、床面が露出した状態であり、周溝を追って住居プランを確定するに至った。

遺構の重複：S B 57 (旧)→S B 56→S T 5 (新)。S T 5の柱穴がS B 56の床面を掘り込む点、S B 57の堅緻な床面がS B 56の床面上に広がらない点などを根拠に、新旧関係を決定した。

住居内施設：柱穴、周溝が認められた。柱穴は円形・不整形円形を呈し、深さ40～50cmのP 1～4が、規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。P 2～4にはP 5・7・8がそれぞれ付随し、建て替えの可能性もあろう。また、深さ10～15cmの柱穴が、住居の中心線上にP 6の1基、東側の周溝内部に1基、南側の周溝内部に2基位置しており、支柱穴となろうか。炉は検出されていない。ほかの竪穴住居跡の例から、住居中央もしくは中央よりもやや北側に位置すると考えられたが、検出できなかった。周溝は壁に沿って1周すると思われるが、西壁際の一部は攪乱で壊され不明。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：検出面で住居プランが検出できず、当初からS B 56出土遺物として取り上げたものは少ない。整理作業時に、S B 56のプラン範囲に含まれる遺構外出土遺物を、S B 56出土遺物として帰属させた。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量9080.2 g中、早期末葉が618.2 g、前期初頭が3995.0 g、前期前葉が4482.3 g、時期不明が266.1 gを量る。石器は石鏃および未製品が40点、スクレイパー20点、石錐6点、両極石器35点、加工痕の有る剥片12点、石核・原石41点、凹石類6点、石皿4点、そのほか黒曜石剥片873点、チャート剥片6点、石英剥片1点、珪質凝灰岩剥片1点が出土した。時期：不明確だが、出土した土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第57号竪穴住居跡（S B 57） 第33図、P L 6 位置：I R 19・20 グリッド

形状：不明 規模：長軸、短軸、面積ともに計測不可 長軸方向：不明

調査の経緯：検出面の基本層序第Ⅱb層では検出できず、第Ⅲ層で確認した。既に、床面が露出した状態であり、東壁に沿うと思われる周溝を追った。

遺構の重複：S B 57 (旧)→S B 45・56、S K 21 (新)。S B 45がS B 57の床面を壊して掘り込む点、S B 56の周溝がS B 57の床面を掘り込む点、S K 21がS B 57の床面を掘り込む点、などを根拠に新旧関係を決定した。

住居内施設：柱穴状の土坑、土坑、炉、周溝が認められた。柱穴状の土坑はP 2～5で、深さ15～30cmを測るが、位置に規則性がないなど疑問も残る。また、東側周溝内部にも深さ30cm前後の柱穴2基が位置しており、支柱穴となろうか。炉はほかの竪穴住居跡の例から、住居中央もしくは中央よりもやや北側に位置すると思われるが、検出された住居の範囲が狭く、正確な位置は不明。地床炉と石囲炉が重複し、地床炉(2)から石囲炉(1)へと作り替えられている。地床炉(2)は長軸50cm、短軸45cm、深さ15cmを測る。覆土にわずかな焼土粒子を含むが、壁や底面に明瞭な被熱痕跡は認められない。石囲炉(1)は長軸58cm、短軸48cm、炉縁石からの深さ15cmを測り、長辺に2点、短辺に1点の平石を長方形に組み合わせる。覆土は焼土・炭化物を含まないものの、炉縁石にはわずかに被熱痕跡が認められる。なお、地床炉(2)の長軸は北東-南西方向であるのに対して、石囲炉(1)は南北方向にあり、作り替えに伴い長軸方向が変化している。周溝は東側に一部が残存するのみで、詳細不明。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、堅緻である。

遺物出土状況：第Ⅱb層で住居プランが検出できなかったため、当初からSB 57の出土遺物として取り上げたものは少ない。整理作業時に、SB 57の範囲に含まれる遺構外出土遺物を、SB 57出土遺物として帰属させたものが存在する。土器は前期前葉が主体で、総量5028.0g中、早期末葉が562.5g、前期初頭が1323.5g、前期前葉が3092.0gを量る。石器は石畿および未製品が4点、スクレイパー3点、両極石器2点、石核・原石2点、凹石類4点、石皿1点、そのほか黒曜石剥片17点、安山岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、出土した土器の主体となる時期をもって前期前葉の所産と考えたい。

第58号竪穴住居跡（SB 58） 第33図、PL 6 位置：IQ 25、IR 21 グリッド

形状：不明 規模：長軸、短軸、面積ともに計測不可 長軸方向：不明

調査の経緯：検出面の基本層序第Ⅱb層でプランを把握できず、第Ⅲ層上部で検出した。

遺構の重複：SB 58（旧）→SK 19・22・25、SF 11（新）。SK 19・22・25、SF 11を検出した時点で、SB 58の存在を認識していないといった状況から、新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴が認められた。柱穴はP 1・2で、深さはP 1が20cm、P 2が30cmを測る。位置からみて、主柱穴と考えたい。炉はほかの竪穴住居跡の例からすれば、P 1-2列の中心線上で、調査区境付近に位置してもよいが、床面精査では検出されなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土中から遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、総量8486.6g中、早期末葉が455.8g、前期初頭が2598.7g、前期前葉が5369.0gを量る。石器は石畿および未製品が8点、スクレイパー1点、両極石器7点、加工痕の有る剥片2点、石核・原石4点、凹石類1点、石皿1点、そのほか黒曜石剥片110点、チャート剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出土した土器の主体となる時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第59号竪穴住居跡（SB 59） 第34図 位置：IW 20 グリッド

形状：不明 規模：長軸4.20（推定）m、短軸3.20m、面積10.87㎡（推定） 長軸方向：N-0°-W

調査の経緯：南側の調査区境に沿ってトレンチを入れ、石囲炉を検出した。調査区境の断面で、石囲炉が所属する住居の、東西両壁の立ち上がりを確認するとともに、南北方向へ直行するトレンチを入れて、住居の範囲と北壁の立ち上がりをつみつけた。同時に平面検出を試みたが、基本層序第Ⅱb層と住居覆土の差がほとんどなく不明確であったので、壁を追い、掘り進めながら住居プランを確定していった。

遺構の重複：SB 60・65、ST 6（旧）→SB 59→SK 39（新）。SB 60・65の床面を、SB 59が壊して掘り込むと判断した点、ST 6の柱穴上部にSB 60の石囲炉が作られ、そのSB 60をSB 59が切る点、SB 59・65の覆土でSK 39のプランを検出した点などを根拠に、遺構の新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴状の土坑と炉が認められた。柱穴状の土坑はP 1の1基で、北西壁コーナー付近に位置し、深さ20cmを測る。炉は石囲炉で、住居中央よりも南壁側に寄った位置にある。長・短軸ともに50cm以上、深さ10cmを測り、長辺の一部に被熱痕跡が認められる炉縁石1点が残存していた。また、炉の底面にも若干の被熱痕跡がみられる。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土中から遺物が出土した。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量4886.8g中、早期末葉が81.8g、前期初頭が2158.8g、前期前葉が2646.2gを量る。石器は石畿および未製品10点、スクレイパー7点、石匙1点、石錐2点、挟入石器1点、両極石器30点、加工痕の有る剥片22点、石核・原石51点、磨製石斧1点、凹石類6点、石皿1点、そのほか黒曜石剥片264点、チャート剥片2点、石英剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出土した土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第60号竪穴住居跡（S B 60） 第34図、P L 6・7 位置：I W 19・20グリッド

形状：不明 規模：長軸、短軸、面積ともに計測不可 長軸方向：不明

調査の経緯：南側の調査区境にトレンチを入れ、石囲炉を検出した。調査区境の断面で、石囲炉が所属する住居の、西壁の立ち上がりで、東壁がS B 59に切られる点を確認した。同時に平面検出を試みたが、基本層序の第Ⅱb層と住居覆土の差があまり見られず、壁を追い、掘り進めながら住居プランを決定した。第Ⅲ層への掘り込みが浅く、特に、北壁には不明確な部分が残る。

遺構の重複：S B 61、S T 6（旧）→S B 60→S B 59（新）。S B 61の壁を壊してS B 60の壁が掘り込まれる点、S B 60の石囲炉下部でS T 6の柱穴を検出した点、S B 60の壁と床面をS B 59が壊して掘り込む点などを根拠に、遺構の新旧関係を判断した。

住居内施設：炉を検出したのみである。炉は石囲炉で長軸32cm、短軸30cm、炉縁石上部からの深さは10cmを測る。炉の短辺を1点、長辺を1～2点の平石で方形に組み合わせ、底面にも平石を敷く。炉縁石は接合でき、1点の平石を分割したことがわかる。炉縁石や底面の平石には、明瞭な被熱痕跡が認められず、覆土にも焼土粒子・炭化物を含んでいなかった。柱穴は、床面精査を実施したにもかかわらず、検出できなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込んで整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土中から遺物が出土した。土器は前期初頭～前葉が主体で総量4196.9g中、早期末葉が130.7g、前期初頭が2179.2g、前期前葉が1887.0gを量る。石器は石鏃および未製品が7点、両極石器15点、加工痕の有る剥片10点、石核・原石18点、凹石類4点、そのほか黒曜石剥片200点、チャート剥片2点が出土した。

時期：不明確だが、覆土から出土した土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第61号竪穴住居跡（S B 61） 第35図、P L 7 位置：I W 15・20グリッド

形状：隅丸方形 規模：長軸4.12m、短軸3.92m、面積12.83㎡ 長軸方向：N-90°-W

調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層でS B 62・66とともに検出。第Ⅱb層に含まれる多量の隙が、S B 61・62・66の範囲ではみられず、この状況を第Ⅱb層が掘り込まれていると判断した。S B 61・62・66にかけて、南北・東西方向にトレンチを入れ、S B 61の床面と壁の立ち上がりを確認した。同時に平面検出を行ったが、第Ⅱb層とS B 61の覆土は類似し検出は困難で、トレンチから壁を追い、掘り進めてプランを決定するに至った。

遺構の重複：S B 62（旧）→S B 61→S B 60・66（新）。S T 7との関係は不明確。S B 62との関係は、S B 62の床面をS B 61が掘り込む点から、S B 60との関係は、S B 60がS B 61の壁を壊して掘り込む点から、それぞれの新旧関係を判断した。また、東側に隣接するS B 66との関係は、S B 66の南西壁コーナーに3点の大形平石が置かれていて、その内の1点がS B 61の壁に覆い被さることから、S B 66はS B 61を切る可能性が高いと判断した。S T 7は、S B 61の床面で柱穴が検出されている。S T 7の柱穴覆土上部に、S B 61の床面らしき痕跡が認められないので、S T 7はS B 61の床面を掘り込んで構築された可能性はある。しかし、S B 61の床面は貼り床や硬化面が認められず、S T 7の柱穴覆土上部が、S B 61の床面であったか否かという点は、明確さを欠く。

住居内施設：柱穴状の土坑P 1～4を北壁付近で検出した。P 1・2はP 3・4よりも大形である。深さはP 1が30cm、P 2が50cm、P 3・4は20cmを測る。P 1・2は主柱穴、P 3・4は支柱穴の可能性もあるが、ほかの竪穴住居跡の例をみると、P 1・2の長・短軸が竪穴住居跡の規模と比較して大形で、位置が壁際に寄り過ぎるなど疑問が残る。また、P 5はP 1・2に形状と長・短軸の長さが近い。しかし、深さは10cmと浅く、柱穴以外の機能が推測される。炉は住居中央、あるいは中央よりもやや北側に位置すると思われたが、床面精査で検出できなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層上部を掘り込み整形し、貼

り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土中から遺物が出上した。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量 10925.1 g 中、早期末葉が 287.9 g、前期初頭が 4362.8 g、前期前葉が 6214.5 g、時期不明が 59.9 g を量る。石器は石鏃および未製品が 25 点、スクレイパー 8 点、石錐 1 点、両極石器 27 点、加工痕の有る剥片 20 点、石核・原石 44 点、凹石類 4 点、そのほか黒曜石剥片 400 点、チャート剥片 2 点、流紋岩剥片 1 点が出土した。時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第 62 号竪穴住居跡 (S B 62) 第 35 図、P L 7 位置：I W 15・20 グリッド

形状：隅丸長方形(推定) 規模：長軸計測不可、短軸 4.52 m、面積計測不可 長軸方向：N-75°-W 調査の経緯：基本層序の第 II b 層で S B 61・66 とともに検出。第 II b 層に含まれる多量の礫が S B 61・62・66 の範囲ではみられず、この状況を第 II b 層が掘り込まれていると判断した。S B 61・62・66 にかけて、南北・東西方向にトレンチを入れ、S B 62 の床面と北・西側における壁の立ち上がりを確認。同時に平面検出を試みた結果、北側はトレンチで確認した壁と第 II b 層に含まれる礫の切れるラインが一致したので、それを北壁のプランと判断した。西側はプランの検出は困難であり、トレンチから壁を追い、掘り進めてプランを認定するに至った。

遺構の重複：S B 62(旧)→S B 61→S B 66(新)。S B 62 の床面を S B 61 が掘り込むなどを根拠に、新旧関係を判断した。東側に隣接する S B 66 との関係は、S B 62 のプランが S B 66 の直前で把握できなくなるが、S B 66 は S B 61 よりも新しい。拠って S B 62 よりも新しいと判断される。

住居内施設：柱穴・炉・周溝など、住居内施設は床面精査を実施したが検出されなかった。規模的には竪穴住居跡と同一だが、住居内施設が検出されなかった点からすれば、竪穴状遺構とすべきか。遺構底面は基本層序の第 III 層上部を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土から遺物が出上した。土器は前期初頭が主体で、総量 6122.0 g 中、早期末葉が 213.2 g、前期初頭が 4126.5 g、前期前葉が 1749.2 g、時期不明が 33.1 g を量る。石器は石鏃および未製品 7 点、スクレイパー 4 点、石錐 1 点、両極石器 14 点、加工痕の有る剥片 2 点、石核・原石 9 点、打製石斧 1 点、磨製石斧 1 点、凹石類 2 点、そのほか黒曜石剥片 120 点、珪質泥岩剥片 11 点、珪質凝灰岩剥片 8 点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期からすれば、前期初頭の可能性がある。

第 63 号竪穴住居跡 (S B 63) 第 28 図 位置：I W 09 グリッド

形状：不明 規模・長軸方向：S B 53 と重複する部分が多く不明。

調査の経緯：S B 53 の調査中に検出。S B 53 の東壁を追ったところ、S B 53 の東側で基本層序第 III 層を浅く掘り込む壁と、S B 53 よりもやや高い床面を確認。その部分は、S B 53 の住居プランよりも外側に張り出すので、S B 53 とは別の住居との判断に至り、S B 63 を認定した。

遺構の重複：S B 63(旧)→S B 53(新)。S B 63 の床面を S B 53 が掘り込む点、などを根拠に遺構の新旧関係を判断した。S B 63 は、多くの範囲が S B 53 に壊されている。

住居内施設：S B 53 に多くの範囲が壊されており不明。床面は基本層序の第 III 層上面を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土中から少数の遺物が出上した。土器は出土総量 39.9 g で前期初頭が 28.7 g、前期前葉が 11.2 g となる。石器は凹石類 5 点と、黒曜石剥片 1 点が出土したのみである。

時期：不明確だが、前期前葉と思われる S B 53 に壊される点、覆土出土土器の時期が前期初頭～前葉である点をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第 64 号竪穴住居跡 (S B 64) 第 36 図、P L 7 位置：I W 08・13 グリッド

形状・規模・長軸方向：遺構の重複や攪乱等の影響から、遺構本来の形状・規模・長軸方向が判断できず不明。調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層下部で検出。平面検出では第Ⅱb層と覆土の差があまりみられず、明確さに欠けたので、南北・東西方向へトレンチを入れて底面と壁の立ち上がりを確認した。そこから、壁と底面を追いながら掘り進めてプランを決定したものの、検出面の直上まで攪乱の影響を受けていたうえに、第Ⅲ層への掘り込みが浅く、プランを把握するのは困難であった。ほかの竪穴住居跡と比較して、規模がかなり小形であり、竪穴住居跡というよりは竪穴状遺構とすべきか。

遺構の重複：S B 64 (旧) → S B 72、S K 42・43・50・51 (新)。S B 64の底面をS B 72が掘り込む点、S B 64の覆土でS K 42・43・50・51を検出した点、などを根拠に遺構の新旧関係を判断した。住居内施設：柱穴、炉、周溝などの住居内施設は、底面を精査したものの検出できなかった。底面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土2層から少数の遺物が出土した。S B 64の埋没過程にある、2層と5層の境に3層の焼土が堆積しており、遺物はこの焼土に伴う可能性が高い。土器は前期初頭が主体で、総量1224.5g中、早期末葉が50.7g、前期初頭が1124.9g、前期前葉が48.9gを量る。石器はスクレイパー3点、両極石器2点、加工痕の有る剥片2点、石核・原石4点、そのほか黒曜石剥片44点が出土した。

時期：不明確だが、2層出土土器の時期が前期初頭である点から、前期初頭以前の所産と考えたい。

第65号竪穴住居跡(S B 65) 第34図、P L 7 位置：I W 20グリッド

形状・規模・長軸方向：S B 59に多くの範囲が壊されており計測不可。

調査の経緯：S B 59の調査中に検出。S B 59の東壁を追ったところ、推定したS B 59のプランよりも張り出す部分が認められた。そこへトレンチを入れた結果、壁の立ち上がりとしてS B 59よりも高い遺構底面を検出したので、別のS Bとの判断に至り、S B 65を認定した。同時に、基本層序の第Ⅱb層で平面検出を実施したが、第Ⅱb層と遺構覆土の差が明確ではなかったので、トレンチから壁を追い、掘り進めながらプランを決定した。ほかの竪穴住居跡と比較して規模が小さく、住居内施設も検出されなかったので、竪穴住居跡というよりは竪穴状遺構とすべきか。

遺構の重複：S B 65 (旧) → S B 59 → S K 39 (新)。S B 65の底面をS B 59が掘り込む点、S B 65の覆土でS K 39を検出した点、などを根拠に遺構の新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴、炉、周溝などの住居内施設は、一切検出されなかった。遺構底面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土から遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、総量9568.0g中、前期初頭が900.5g、前期前葉が8667.5gを量る。石器は石鏃1点、スクレイパー2点、両極石器1点、加工痕の有る剥片3点、石核・原石7点、そのほか黒曜石剥片320点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第66号竪穴住居跡(S B 66) 第37図、P L 7・8 位置：I W 15、I X 11グリッド

形状：隅丸方形(推定) 規模：長軸3.88m、短軸3.84m(推定)、面積12.10m²(推定)

長軸方向：N-2°-E 調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層でS B 61・62とともに検出。第Ⅱb層に含まれる礫がS B 61・62・66の範囲内ではみられず、この状況を第Ⅱb層が掘り込まれていると判断した。S B 61・62・66にかけて、南北・東西方向にトレンチを入れ、S B 66の床面と壁の立ち上がり、および東壁は攪乱を受けて完全に壊されていることを確認した。S B 66は、攪乱の東側へは広がらない点から、東壁は攪乱の範囲にあったと考えられる。また、第Ⅱb層の平面検出において、南西壁コーナーに沿って3点の大形平石が置かれている状況を把握した。

遺構の重複：S T 7 (旧) → S B 66 (新)。S B 66の南西壁コーナーに沿った3点の平石が、S T 7柱

穴上部に置かれていた、などの点を根拠に遺構の新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴が認められる。柱穴は深さ40cmで円形を呈するP1・2が、規則的な配置をなす点から支柱穴と考えられる。しかし、P1・2に対応する柱穴は検出できなかった。また、ほかの竪穴住居跡の例からすれば、住居中央あるいは中央よりやや北側に炉が位置すると考えられたが、床面精査では検出できなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層上部を掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：覆土1層、床面から遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、総量12367.7g中、早期末葉が108.6g、前期初頭が3591.6g、前期前葉が8667.5gを量る。石器は石鏃および未製品が20点、スクレイパー14点、石匙2点、石錐1点、挟入石器3点、両極石器23点、加工痕の有る剥片8点、石核・原石42点、磨製石斧1点、凹石類9点、石皿10点、そのほか黒曜石剥片320点が出土した。石皿は住居の中央から南側半分の範囲にかけて、礫とともに横位に重なりながら出土した。床面の遺物は前期前葉土器の略完形個体1点(777)であり、南西壁コーナーに置かれた大形平石の前面で出土(PL7・8)。土器内部にはベンガラの粉末が入れていた。

時期：床面出土土器の時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第67号竪穴住居跡(SB67) 第38図、PL8 位置：IW14グリッド

形状：隅丸方形(推定) 規模：短軸5.04m、長軸・面積は計測不可 長軸方向：N-15°-E

調査の経緯：基本層序の第Ⅱc層相当で検出。検出面上部にまで攪乱が及んでいて、平面検出は困難を極めた。そこで南北・東西方向にトレンチを入れ、北・東・西壁の立ち上がりと床面を把握した。その部分から、床面と壁を追い掘り進めて住居プランを決定していった。その際、平石と棒状の礫が北壁と推測される部分に位置し、住居の内側方向へ傾いて出土した点など、礫の出土状況も参考にした。しかし、第Ⅲ層への掘り込みが浅く、住居プランには不明確な点が多く残る。特に、住居の南側は調査区外へと広がるにも関わらず、調査区境の断面で、住居プランが確認できていない。

遺構の重複：ST8(旧)→SB67(新)。ST8のP7上部に、SB67の石両炉が作られていた点を根拠に、新旧関係を判断した。なお、調査では誤ってST8のP7を先に掘り始めてしまい、SB67の炉の一部を壊してしまった。

住居内施設：炉が認められた。炉は石囲炉で、北壁際の中央よりも若干東側へ寄った位置にある。掘り込みを伴わず、被熱痕跡の脇に1点の伊緑石が立てられていた。長軸50cm、短軸45cm、深さは伊緑石上部から計測して5cmを測る。ほかの竪穴住居跡では、炉は住居中央もしくは中央からやや北側に寄って位置するのが通常であり、それからみればSB67の炉は特異な位置にあるといえる。また、北壁中央付近では長さ80cm前後、幅15~20cmの2点の棒状を呈する礫が、壁の傾斜に沿った斜めの状態で出土した。覆土から出土したほかの礫は、壁から離れて比較的住居の中央に分布していた点を考慮すれば、棒状の礫は住居の壁を意識して意図的に置かれた可能性もあろう。しかし、その性格や置かれた時期は不明である。また、北西壁コーナー付近には、石皿が2点置かれていた。石皿はこのほかに8点存在するが、全て覆土上部で礫と混在しながら出土したものである。床面は基本層序第Ⅲ層を浅く掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。なお、柱穴は床面精査を実施したにもかかわらず、検出できなかった。

遺物出土状況：覆土から多量の遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、総量46112.2g中、早期末葉が218.4g、前期初頭が14250.7g、前期前葉が31505.2g、中期後葉が137.9gを量る。石器は石鏃および未製品が5点、スクレイパー4点、石匙3点、石錐1点、両極石器3点、加工痕の有る剥片2点、石核・原石10点、凹石類12点、石皿10点、そのほか黒曜石剥片110点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第68号竪穴住居跡(SB68) 第36図 位置：ID01グリッド

形状：不明 規模・長軸方向：長軸、短軸、面積、長軸方向、全て計測不可

調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層で、S B 70・71とともに検出。第Ⅱb層と遺構覆土の性質は類似するが、覆土の方が黒色でより暗い。平面検出のみでは明確さに欠けたため、西側の調査区境に沿ってトレンチを入れ、第Ⅲ層を浅く掘り込む壁の立ち上がりと底面を確認した。検出範囲は狭いが、壁や壁から底面までの、掘り込みの形状などから竪穴住居跡の一部と判断している。しかし、不明確なので本来は竪穴状遺構とすべきか。遺構の重複：なし。住居内施設：調査された範囲では、検出されなかった。底面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土から少数の遺物が出土した。土器は出土総量 41.7 g で、前期前葉に属する。石器は両極石器 3 点、石核・原石 2 点、磨製石斧 1 点、そのほか黒曜石剥片 15 点、チャート剥片 1 点が出土した。時期：不明確だが、覆土出土土器の時期をもって、前期前葉の所産と考えたい。

第 69 号竪穴住居跡 (S B 69) 第 39 図、P L 8 位置：I Q 18・19 グリッド

形状：不明 規模・長軸方向：長軸、短軸、面積、長軸方向、全て計測不可

調査の経緯：農道下部に埋設していた竪穴住居跡で、農道および埋設されていた排水管などの攪乱を広い範囲に受けていた。そのため、攪乱を取り除いた後に、基本層序の第Ⅲ層で住居プランを検出した。西壁の一部から南壁は調査区外となり、東壁は攪乱によって完全に壊されていた。

遺構の重複：S B 69 (旧) → S K 9 (新)。S B 69 の覆土で S K 9 のプランを検出した点、などを根拠に新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴、周溝が認められた。柱穴は P 1～4 で北壁に沿う周溝の脇にあり、深さは P 1・3 が 50cm、P 2・4 は 20cm を測る。周溝は壁に沿って巡るが、北壁から東壁に移行する部分で一端途切れる。東壁は攪乱によって完全に壊されているが、S B 69 は攪乱の東側には広がらないので、攪乱の範囲内に東壁が位置していたと考えられる。炉はほかの竪穴住居跡の例からすれば、住居中央もしくは中央よりやや北側に位置すると考えられたが、床面精査では検出できなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：床面～床面に近いレベルと覆土上部から遺物が出土した。床面～床面に近いレベルで出土した遺物は黒曜石の原石であり(第 39 図中 5～14)、8 点が P 3 付近に分布する。また、P 3 の西側を壊す攪乱埋土でも原石が出た点から、本来はもっと多くの原石が P 3 付近に分布していた可能性が指摘される。攪乱埋土では、S B 69 の範囲で遺物が出土し、範囲外では遺物が出土しなかったため、S B 69 の範囲で攪乱埋土から出土した遺物を、S B 69 出土遺物として扱った。一方、覆土出土の遺物は多い。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量 12430.2 g 中、早期末葉が 762.3 g、前期初頭が 5190.6 g、前期前葉が 6477.3 g を量る。石器は石鏃および未製品が 28 点、スクレイパー 27 点、石匙 4 点、石錐 4 点、扶人石器 1 点、両極石器 41 点、加工痕の有る剥片 19 点、石核・原石 74 点、打製石斧 1 点、凹石類 12 点、石皿 3 点、そのほか黒曜石剥片 840 点、チャート剥片 5 点、安山岩剥片 1 点が出土した。時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第 70 号竪穴住居跡 (S B 70) 第 40 図、P L 8 位置：II D 01 グリッド

形状：不明 規模：長軸 5.58 m、短軸・面積は計測不可 長軸方向：計測不可

調査の経緯：基本層序の第Ⅱb層で、S B 68・71とともに検出した。第Ⅱb層と覆土の性質は類似していたが、覆土のほうがより黒色で暗い。平面検出のみでは明確さに欠けたため、西側の調査区境に沿ってトレンチを入れ、第Ⅲ層を掘り込む床面と北・南壁の立ち上がりを確認した。南壁は多くの範囲を攪乱によって壊されているが、西側の調査区境付近で壁の立ち上がりを確認している。住居内施設は検出できなかったが、形状・規模からみて竪穴住居跡と判断した。

遺構の重複：S B 71 (旧) → S B 70 → S K 45 ~ 47 (新)。S B 70がS B 71の床面を掘り込む点、S K 45 ~ 47がS B 70の床面を壊して掘り込むと考えた点などを根拠に、新旧関係を判断した。

住居内施設：柱穴、炉、周溝などの住居内施設は、床面精査を実施したにもかかわらず、検出できなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土上部から遺物が出土した。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量 9368.8 g中、早期末葉が 330.7 g、前期初頭が 3726.5 g、前期前葉が 4902.9 g、中期後葉が 78.0 gを量る。石器は石鏃および未製品が 17点、スクレイパー 6点、石匙 2点、石錐 2点、抉入石器 1点、両極石器 37点、加工痕の有る剥片 16点、石核・原石 28点、磨製石斧 1点、凹石類 13点、そのほか黒曜石剥片 494点、チャート剥片 4点、珪質泥岩剥片 1点、砂岩剥片 1点、珪質凝灰岩剥片 1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期をもって、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第 71 号竪穴住居跡 (S B 71) 第 40 図 位置：I X 21 グリッド

形状：不明 規模・長軸方向：長軸、短軸、面積、長軸方向、全て計測不可。

調査の経緯：基本層序の第Ⅱ b 層で、S B 68・70 とともに検出。第Ⅱ b 層と遺構覆土の性質は類似するが、覆土の方がより黒色で暗い。平面検出のみでは明確さに欠けたため、西側の調査区境に沿ってトレンチを入れたところ、第Ⅲ層上部を掘り込む底面と北壁を確認した。S B 71 は調査範囲が狭く、多くの部分を S B 70 に壊されているので不明確な点は残るが、北壁や底面から壁へ立ち上がる形状などから、竪穴住居跡の一部と判断した。

遺構の重複：S B 71 (旧) → S B 70、S K 44 (新)。S B 71 の床面を S B 70 が掘り込む点、S B 71 の床面で S K 44 のプランを検出し、S B 71 の床面を S K 44 が掘り込むと判断した点、などを根拠に決定した。

住居内施設：床面精査の結果、調査された範囲からは住居内施設は検出できなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層を浅く掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。

遺物出土状況：覆土から少数の遺物が出土した。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量 2632.6 g中、早期末葉が 79.8 g、前期初頭が 1130.3 g、前期前葉が 1422.5 gを量る。石器は石鏃および未製品が 5点、スクレイパー 1点、石匙 1点、抉入石器 1点、両極石器 1点、加工痕の有る剥片 2点、石核・原石 13点、凹石類 4点、そのほか黒曜石剥片 74点、チャート剥片 1点、砂岩剥片 1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期から、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第 72 号竪穴住居跡 (S B 72) 第 40 図 位置：I W 13 グリッド

形状：不明 規模・長軸方向：長軸、短軸、面積、長軸方向、全て計測不可

調査の経緯：基本層序の第Ⅱ b 層で検出。第Ⅱ b 層と遺構覆土の性質は類似するが、覆土のほうがより黒色で暗い。平面検出のみでは明確さに欠けたため、南側の調査区境に沿ってトレンチを入れたところ、第Ⅲ層を掘り込む西・北壁の一部を確認した。調査された範囲が狭く不明確だが、北・西壁や底面から壁へと立ち上がる形状などから、竪穴住居跡の一部と判断した。

遺構の重複：S B 72 (旧) → S T 9 (新)。S B 72 の覆土上部で S T 9 の柱穴プランを検出した点、などを根拠に新旧関係を判断した。

住居内施設：調査された範囲では検出されなかった。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面は認められない。 遺物出土状況：遺物は全く出土しなかった。

時期：時期決定の根拠が存在せず不明。しかし、周辺には前期初頭～前葉の遺構・遺物が分布し、そのほかの時期は全く存在しない状況からみて、S B 72 も前期初頭～前葉の所産である可能性は高い。

第 73 号竪穴住居跡 (S B 73) 第 41 図、P L 9 位置：I W 07 グリッド

形状：隅丸長方形もしくは隅丸方形 規模・長軸方向：長軸 4.44 m、短軸・面積、長軸方向は計測不可

調査の経緯：農道の下部に位置し、埋設管など攪乱の影響を広範囲に受けていたが、攪乱を除去しながら第Ⅲ層で住居プランを確認した。東・西壁の一部から南壁は、攪乱に破壊されて検出できなかった。

遺構の重複：S B 73 (旧) → S K 54 (新)。S B 73 覆土で、S K 54 のプランを検出した点を根拠とした。

住居内施設：柱穴、炉、周溝が認められた。柱穴はP 1～5の5基で、その内、深さ30～40cmのP 1・2・5が規則的な配置をなす点から主柱穴と考えられる。また、攪乱で壊されているが、P 1とP 5の延長上にP 1・2・5と組み合わせるもう1基の柱穴が存在した可能性は高い。P 3・4はP 1・2・5よりも大形で、深さはP 3が35cm、P 4が55cmを測る。P 1・2・5とともに床面で検出され、S B 73の周辺にはP 3・4と関わりをもつような遺構が存在しない点から、S B 73の施設と考えた。しかし、形状・規模・位置などからすれば、P 3・4はS B 73と重複するほかの遺構であった可能性も残る。炉は地床炉で、住居のほぼ中央に位置すると思われる。長軸45cm、短軸27cm、深さ10cmを測り、底面に弱い被熱痕跡が認められた。周溝は調査された範囲では、壁に沿って途切れなく1周する。床面は基本層序の第Ⅲ層を掘り込み整形し、貼り床や硬化面はない。

遺物出土状況：覆土上部から遺物が出土した。土器は前期初頭～前葉が主体で、総量4902.4g中、早期末葉が296.4g、前期初頭が1680.9g、前期前葉が2913.2g、中期後葉が11.9gを量る。石器は石鏃および未製品4点、スクレイパー5点、石錐1点、両極石器10点、加工痕の有る剥片9点、石核・原石10点、凹石類2点、そのほか黒曜石剥片163点、珪質凝灰岩剥片1点が出土した。

時期：不明確だが、覆土出土土器の主体となる時期から、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

2. 竪穴住居跡の構造

(1) 平面形状 (第9図)

検出された竪穴住居跡37軒中、平面形状が明らかなもの、あるいは形状の推定が可能なものは24軒である。竪穴住居跡の形状は円形・隅丸方形・隅丸長方形の3形状に分類され、その構成は隅丸方形を呈するものが最も多く9軒(24%)、次いで隅丸長方形が8軒(22%)、円形が7軒(19%)となる。また、遺構の重複や調査範囲などの理由で、形状不明のものが13軒(35%)に達する。形状不明のものは、残存部の壁が直線的であるなど、方を基調とするプランであったことを窺わせるものが多く、それを隅丸方形・長方形に加味すると、方を基調とする竪穴住居跡が円を基調とするものよりも数的に優位であったと推測されよう。円形を呈するものは、S B 40・42・43・49などを代表例とする。S B 40は重複して検出されたので、壁の残存状態が悪く、周溝から円形プランと判断した。また、S B 42・43は比較的整った円形を呈するのに対して、S B 49はやや不整的な要素をもつ。隅丸方形を呈するものは、S B 37・38・48・50・53・61・66などが代表例である。その中で、S B 53は南壁よりも北壁の長さが短く台形状を呈する。壁のコーナー部分をみると、S B 37は比較的角張るのに対して、そのほかは大きく丸みを帯びるものが多い。壁線はS B 37・66のように直線的なものと、S B 38・48の膨らみをもつものがみられる。隅丸長方形を呈するものはS B 39・41・46・47・54・56・59などが代表例で、隅丸方形と同様に、壁のコーナー部分が大きく丸みを帯び、壁線に膨らみをもつものが存在する。

(2) 規模 (第9図)

面積は平面図の下場線を床面積として、プランメーターで計測した。面積の最小はS B 38の8.10㎡だが、S B 38は北西壁コーナー付近から東壁中央までが調査区外にあり、図版上で壁線を推測した計測値である。一方、面積の最大はS B 56で37.40㎡を測り、S B 38の約4.6倍の床面積をもつ。

竪穴住居跡の床面積は8.10～37.40㎡の範囲にあると推測され、それを小形・中形A・中形B・大形に分類した。小形は床面積が10㎡未満のもの、中形Aは10～15㎡のもの、中形Bは16～24㎡のもの、

10㎡未満
(小形)

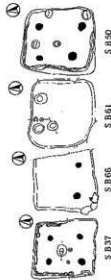
円形



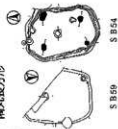
隅丸方形



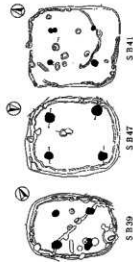
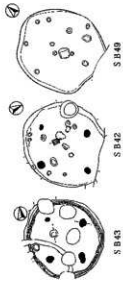
10~15㎡以下
(中形A)



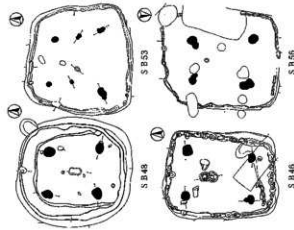
隅丸長方形



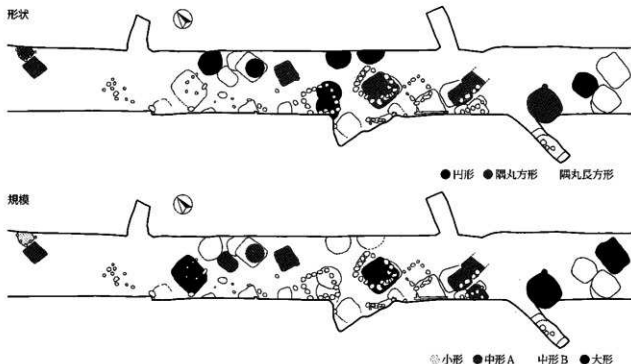
16~24㎡以下
(中形B)



28㎡以上
(大形)



第9図 竪穴住居跡の形状と面積



第10図 形状・規模からみた分布状況

大形は28㎡以上のものである。平面形状との関係を見ると、円形は中形A・Bに、隅丸方形は小形と中形Aおよび大形に、隅丸長方形は中形A・B、大形にそれぞれ認められる。円形は中規模の住居に纏まり、隅丸方形は比較的小規模と大規模に分かれ、隅丸長方形は中・大の規模が揃うといった傾向が読み取れる。

(3) 形状・規模と分布の関係 (第10図)

形状では、円形を呈する竪穴住居跡がI Q 20・I R 16グリッドからI W 02～04グリッドに至る長さ33m、幅13mの範囲に7軒中、6軒が集中し、遺構密度の高い、遺構分布範囲の中央から北西方向にかけて纏まりをもつ。中央のI W 02～04グリッドには4軒が分布し、その内の2軒に重複関係が認められる。このグリッドには、ほかの形状は存在せず、円形の竪穴住居跡がこの場所を選択して営まれた期間が存在した、とみることもできる。しかし、この場所は屋外炉が集中する場所でもある。屋外炉の性格は不明だが(本章第7節参照)、竪穴住居跡の炉と類似するものがみられる点から、検出漏れの竪穴住居跡が存在した可能性は残る。円形のもう1軒は、この纏まりから南東方向に39m離れた、I X 22・23グリッドに位置する。この場所は、遺構分布範囲の境界に近く単独であるなど、遺構分布範囲の中央で纏まりをもつ6軒とは、時期や性格が異なることも推測される。ほかの形状を呈する竪穴住居跡との関係は、2軒が隅丸長方形と重複し、2軒ともに隅丸長方形に壊されるので、円形の方がより古い時期である。

隅丸方形・長方形の竪穴住居跡は、遺構分布範囲のほぼ全体に位置する。分布状況は、隅丸方形は比較的点在し、隅丸長方形は重複するものを含めて、2～4軒の纏まりをもちながら分布しているようにみえる。しかし、その間には南側の調査区外へと広がるために、あるいは攪乱の影響から隅丸方形・長方形の判別ができないものも多くみられ、この分布状況が実態を示すか否かは不明である。また、遺構分布の境界付近では、桧沢川へと至る北西方向には2軒の隅丸方形が分布し、湿地付近の南東方向には2軒の隅丸長方形が分布する。重複関係は、隅丸方形の竪穴住居跡2軒が隅丸長方形と重複し、2軒ともに隅丸方形が新しい時期に位置付けられている。

竪穴住居跡の規模では、小形・中形Aの各1軒が、北西方向の遺構分布範囲の境界に位置するのに対して、南東方向の境界では、中形B 2軒と大形1軒となり、双方で住居の規模が異なる。また、大形は特定

の場所に集中するような分布の仕方はせず、1軒ずつ点在するのが特徴といえよう。中形A・Bは、ともに遺構分布範囲の中で広く分布し、遺構密度の高い場所では重複する例も多い。調査区の制約から、全体を調査できなかった竪穴住居跡も、調査された部分からみれば、多くのものが中形A・Bに分類されると思われ、中形A・Bは駒形遺跡の中で最も一般的な竪穴住居跡のサイズであったといえよう。

(4) 住居内施設

住居内施設として検出されたのは柱穴、周溝、炉、土坑である。

① 柱穴および周溝

隅丸方形・長方形の竪穴住居跡では、主柱穴と支柱穴が検出されている。主柱穴は4本で、対称構造が基本となり、住居の壁に平行して、方形・長方形に配置される。平面形状が台形状を呈するSB53では、主柱穴の配置も台形状であり、方を基調とする竪穴住居跡の柱穴配置は、住居の平面形状と深く関わるものがうかがえる。主柱穴の規模をみると、住居の規模に応じて大形化する傾向が指摘できる。しかし、大形に分類されたSB53の主柱穴は、中形クラスと同一である。SB53は、1基の主柱穴に複数の掘り方をもつものが3基検出されている。複数の主柱穴が建てられていたとすることもできよう。SB53の上屋構造は、主柱を大形化することで支えたのではなく、柱の数を増やすことで支えていた可能性がある。一方、支柱穴は主柱穴よりも小形で、主に周溝内部や壁際に認められる。住居の長軸線上で、炉から壁までの距離を計測し、その距離が短い方の壁際に、1基の支柱穴を配置する例が多い。長軸線上で、炉から壁までの距離が長い側を出入り口部の方向とすれば、この支柱穴の位置は奥壁側であり、棟持柱と呼称される場合もある。SB46では棟持柱とされるもののほかに、棟持柱に近い主柱穴の両壁際へ、50cmと深さが揃う支柱穴を1基ずつ配置している。支柱穴と主柱穴は一直線に並び、棟持柱とされる支柱穴が乗る住居の長軸線とは直交する。また、SB46では周溝内部で北・東・南壁に沿った、密接に並ぶ支柱穴が検出されている。周溝が検出された竪穴住居跡全てが、こうした状況を呈するのではなく、SB39のように間隔が開き、部分的に並ぶ支柱穴が検出された例の方が多い。SB46も西壁では、支柱穴は中央付近のみと部分的である。

円形の竪穴住居跡でも、主柱穴と支柱穴が検出された。主柱穴は4本を方形に配置した例と、壁付近に配置したと思われる例が存在する。前者はSB42・43・44・51などである。SB43・44・51は遺構の重複や調査された範囲などの問題から一部不明確だが、隅丸方形・長方形にみられたような規則的な配置に近い。SB42は主柱穴の中間に支柱穴を配置し、主柱穴と支柱穴を結ぶと亀甲状を呈するなど、SB43・44・51とはやや違いをみせる。一方、後者はSB40・49だが、SB40はほかの竪穴住居跡と重複し、SB49は柱穴の検出が困難であったなど、配置の確定には不明確な要素が伴う。主柱穴は住居中央には存在せず、壁より近い周溝付近、あるいは周溝内部に配置している。SB40・49の主柱穴配置が妥当であれば、円形の竪穴住居跡には2種類の主柱配置がみられ、それぞれで上屋構造が異なっていた可能性が高いといえる。また、円形の中で、支柱穴と思われるものがSB43・44の周溝内部に認められる。隅丸方形・長方形の支柱穴と比較すると、かなり小形で浅い。特に、SB43で検出されたものは直径10～15cm、深さ10cm前後とより小形で、隅丸方形・長方形の支柱穴とはかなり異なる。

② 炉

炉は地床炉と石囲炉で、竪穴住居跡37軒中、18軒でどちらかの炉が確認されている。また、炉が確認されていない19軒では、遺構の重複や調査範囲の制約などで不明確なものが14軒、残り5軒は床面精査を実施したにもかかわらず検出できなかった。それぞれに該当するものは、下記のとおりである。

・地床炉：12軒（SB37・39・41・43・44・47・48・49・50・51・54・73）

- ・石囲炉：6軒（S B 42・46・57・59・60・67）
- ・未検出：5軒（S B 38・40・56・61・66）
- ・調査区外など：14軒（S B 45・52・53・55・58・62～65・68～72）

炉は1住居あたり1基で住居の中央、もしくは住居の長軸線から壁までの距離を計測し、その距離が短い方の壁側へやや寄った位置にある。方を基調とする住居では、棟持柱と呼称される場合もある、支柱穴とともに住居の長軸線上にのる。検出された炉のうち、約68%が地床炉であった。

地床炉の平面形状は不整形・楕円形を呈する。長軸40～117cm、短軸27～113cm、深さ15cm以下で、深さは5～10cmが多い。S B 48のように、ほぼ深さがないものもみられる。炉の掘り方は床面を明瞭に深く掘り込む、というものではなく、浅くなだらかなくぼみ状を呈している。底面や壁の被熱痕跡は弱く、加えて覆土に焼土粒子や炭化物などを含むものは少ない。また、含む場合であってもその量はわずかである。S B 50・54では地床炉の脇に平石が置かれており、平石が地床炉とともに使用された可能性はある。しかし、平石は平坦に置かれ、平石を立てた、あるいは組んだ石囲炉とは構造が異なる。

石囲炉は長軸32～66cm、短軸30～57cm、深さは地床炉と同様に浅いものも多く、炉縁石上部から底面までは15cm以下である。平石を長方形に組み合わせたものと、多角形に組み合わせたもの、一部に炉縁石が残存するものが認められる。長方形に組み合わせたものはS B 42・60で、炉の短辺を1点、長辺を1～2点の平石で囲む。多角形の場合はS B 46で、炉の短辺を2点、長辺を1点の平石で囲み、さらに、組み合わせ部分に拳大の円礫を置く。当該期の関東地方では、三辺を炉縁石で囲い、一辺は開放する「三方石囲炉」が一般的とされるが、駒形遺跡で検出された石囲炉は、炉縁石の組み合わせ方に違いはあるにせよ、四方を確実に囲う点が特徴といえる。また、S B 42・46・60は炉の底面にも炉縁石同様の平石を敷いており、炉縁石と底面の平石は接合できるものが多いので、1点の平石を適当な大きさに分割して、炉縁石や底面の敷石に利用したことがわかる。石囲炉の一部に炉縁石が残るものは、S B 59・67である。炉の縁に1点の平石を立てているが、炉縁石は当初から1点であったのか、あるいは炉の使用後に抜かれたものかは不明である。なお、炉の作り替えがS B 46・57にみられる。S B 46では石囲炉(古)から石囲炉(新)へ、S B 57では地床炉(古)から石囲炉(新)へ、作り替えがなされる。S B 46の古い炉では、底面に平石が残存しており、床面と同じレベルで埋め戻していた。いずれも、古い炉の北側に新しい炉を作り、新しい炉が石囲炉となる点共通する。

③ 上坑

住居内施設の可能性をもった円形の土坑が、S B 39・42・48で検出されている。土坑の機能は、推定できるような材料はなく、性格不明といわざるを得ない。S B 39で検出された土坑は直径80cm、深さ15cmを測る。床面を掘り込む土坑で、住居長軸の炉から壁までの距離が長い方の壁際に位置する。S B 42で検出された土坑は直径110cm、深さ20cmで、壁～床面にかけて掘り込む。また、S B 48の土坑は直径100cm、深さ30cmで、北東壁コーナーから張り出し壁を切る。掘り込みは床面に達せず、テラス状を呈するのが特徴である。

④ その他 一石皿一

竪穴住居跡の床面や壁際に石皿を置いたり、あたかも壁に立てかけたような状態で出土した例がみられる。最も多いのは、炉の周辺に1～3点の石皿を置く例で、S B 40・42・46・47などがこれに該当する。壁に立てかけたような状態で出土したのは、S B 53などである。S B 53は住居中央よりもやや北壁側へ寄った位置の床面に1点の石皿を置き、さらに、北・西壁では壁に立てかけたかのような状態で出土した。石皿がどの時点で、そうした状態を呈していたのかは不明確だが、石皿と壁の間には住居の覆土が堆積することから、住居が埋没過程に入った初期の段階との見方もできる。

第3節 掘立柱建物跡

1. 掘立柱建物跡の認定

今回の調査では、次のような条件を満たす建物跡を掘立柱建物跡と認定した。

- ① 柱穴列の桁行方向と梁行方向が交差する四隅に柱穴が存在し、全体として柱穴が方形もしくは長方形に配置される。
- ② 個々の柱穴は、一定の間隔を保ちながら配置される。
- ③ 柱穴の規模が長軸・短軸ともに50～60cm前後が主体と、方形柱穴列よりも小形である。

駒形遺跡で①～③の条件に該当する建物跡はST1・5であり、この2棟を掘立柱建物跡とする。2棟は机上の操作で組み合わせたものではなく、発掘調査時に現場で把握したものである。それぞれ、検出面の基本層序第II b層では検出できず、ST1はSB38の壁および床面精査時に、ST5はSB56とともに第III層上面およびSB56の床面で検出した。

2. 特徴

個々についての属性は下表に示したので、ここでは掘立柱建物跡の全体的な特徴を整理する。

ST1 第42図、PL9

ST1は調査区外へと広がるため、全体の様相は不明確だが、周辺にST1と組み合わせるような柱穴がほかに存在しないことから、約半分の範囲は調査されたものと考えられる。その範囲から推測すれば、ST1はP1東側の調査区外に、P4・5に対応したもう2基の柱穴が存在すると思われる、柱間が2間×1間を呈する掘立柱建物跡であったとみておきたい。P2はP1-3列の中央に位置するものの、P1-3列の線上には乗らず、やや西側にずれており、棟持柱等の可能性をもつ支柱穴となろうか。

規模は、調査区外に推定した2基の柱穴を含めた推定値で、長・短軸がともに2.80m、内部面積が7.84㎡を測る。柱穴は比較的等間隔に配置され、各柱穴の規模は長・短軸が40～52cmの範囲にある。底面の位置は、P1・3～5が揃い、P2はそれよりも浅くなる。柱根・柱痕跡は、P1・4では底面の掘り方が段状を呈し、深い部分の幅が25cmと同一である点から、柱痕跡となろう。また、P3・4には、柱穴南壁に盤状の石皿が立てられていた。特に、P4は柱痕跡の際に石皿が遺存しており、柱を固定するなど、柱との何らかの関係が考えられる。

ST5 第47図、PL9

ST5は柱穴配置や、周辺に組み合わせるようなほかの柱穴が存在しない点から、全体形状が明らかにされたと考えられる。形状・規模は柱間が2間×1間で、長軸2.96m、短軸2.64m、内部面積は7.81㎡を測る。

ST No.	時期	位置	長軸方向	柱間	P No.	平面形	規模 (cm)			出土遺物				遺物の位置	検出面	
							長軸	短軸	深さ	早期赤土層 (g)	前期赤土層 (g)	前期赤土層 (g)	石 器 (点数)			
1	前期前期	I Q22 Q22	N-90°-W	2間×1間	P1	不整形	50.0	48.0	80.0	—	—	—	加工片: 1	SB38を切る。	第42図	PL9
					P2	不整形	52.0	46.0	76.0	—	—	—	—			
					P3	不整形	50.0	45.0	64.0	—	4.0	—	石皿: 1			
					P4	不整形	52.0	48.0	58.0	—	—	—	石皿: 1			
					P5	円形	46.0	40.0	46.0	—	—	—	—			
					P7	円形	74.0	70.0	36.0	—	—	—	—			
					P2	円形	52.0	52.0	28.0	—	12.9	—	鏡片: 2			
5	前期前期	I Q19 Q20	N-92°-W	2間12間	P4	不整形	64.0	50.0	35.0	—	—	—	—	SB56を切る。	第47図	PL9
					P5	円形	64.0	58.0	55.0	—	—	—	—			
					P6	円形	80.0	38.0	64.0	—	—	—	—			
					P7	円形	46.0	44.0	27.0	—	—	—	—			
					P7	円形	46.0	44.0	27.0	—	—	—	—			
					P7	円形	46.0	44.0	27.0	—	—	—	—			
					P7	円形	46.0	44.0	27.0	—	—	—	—			

第2表 掘立柱建物跡観察表

長軸方向の西側にはP7が付随し、その位置からみて棟持柱等の支柱穴となるうか。

柱穴配置は長軸方向の柱間隔が異なり、P1-3列ではP2・3の間隔がP1・2よりも短く、P4-6列ではP5・6の間隔がP4・5よりも短い。P2・3とP5・6は、ほぼ同一間隔で配置され、P5・6は上部が溝状の掘り方で連結する。各柱穴の規模は、長・短軸が44～74cmの範囲にある。底面の位置は、東側のP3・5・6が、P1・2・4・7よりも深い。SB56床面で検出されたP1・2・4・7は、深さが27～35cmだが、ST5はSB56床面を壊して掘り込むと推測されるので、仮にSB56の完全埋没後にST5が構築されたとすれば、深さにSB56の壁高分(30～40cm)を加算する必要がある。柱根・柱痕跡は各柱穴とも明確ではないが、P7は底面の掘り方が段状を呈することから深い部分にその可能性がある。P5は底面に偏平礫を置いている。

3. 分布と性格

検出された2棟の掘立柱建物跡は、柱穴や配置に若干の違いはみられるものの、共通する点も多い。全体形状・規模は2棟ともに柱間が2間×1間で、長軸方向の西側に棟持柱等の可能性をもつ支柱穴が付随し長・短軸、面積はいずれも非常に近い数値を示す。建物の性格・上屋構造等は不明確だが、規模としては同一であったといえる。

ST1・5の位置は遺構分布範囲の中で、竪穴住居跡と重複する。しかし、その場所は遺構密度が高く、竪穴住居跡や方形柱穴列等が頻繁に重複するような中心部ではなく、遺構密度の低い、西側の場所に該当する。特に、ST1は西側の遺構分布範囲の境界に建ち、ST5の位置とは約33mの距離を置く。その一方で、ST1はN-90°-W、ST5はN-92°-Wと、同一方向を長軸としている。

遺構分布の中心部が、集落におけるいわば居住の主体部となれば、掘立柱建物跡は居住域の比較的縁辺に、1棟ずつ距離を置いて建てられていたと考えられ、その建物が同一規模で、同一方向に長軸をもっていた点に注目しておきたい。また、掘立柱建物跡の全体的な柱穴配置、柱間隔などの規模をみると、竪穴住居跡の支柱穴・支柱穴に類似する。しかし、竪穴住居跡は、基本的には支柱穴の柱間隔が1間×1間で、支柱穴の中間に柱穴を配置する場合は、支柱穴よりも小形の支柱穴を配置する。従って、竪穴住居跡の柱穴は、比較的近い規模の柱穴が等間隔で揃う掘立柱建物跡とは、基本的に異なるものである。

以上、掘立柱建物跡について検討してきたが、今回調査された範囲は本章第1節で触れたように、前期前葉集落の範囲としては北端部の可能性が高い。集落の主体部はむしろ、調査範囲の南側に広がると推測され、そこでの状況次第では今回の検討結果と異なる要素が生ずることも充分予想される。2棟のみの検討では限界があるので、駒形遺跡における掘立柱建物跡の性格については周辺部の調査状況を窺いつつ、課題として将来に委ねたい。

第4節 方形柱穴列

1. 方形柱穴列の認定

方形柱穴列は阿久遺跡(長野県教委1982)や阿久尻遺跡(茅野市教委1993)の発掘報告書、また、平成3年に茅野市教育委員会が開催した研究会「阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって」(茅野市教委1991)などにおいて、様々な検討がなされてきた。その一方で、阿久尻遺跡の発掘報告書では「方形柱穴列とは柱

穴が数基ずつ方形に並ぶ為付けられた名称」で、柱穴が「長方形となるものについては、掘立柱建物址などとも呼称されている」とし、名称について「特に固執するつもりはない。将来、方形柱穴列の具体的な構造や用途が明らかになったとき、改めて名称について考えていきたい」と述べているなど、両者はさほど厳密には区別されていないような状況もみられる。しかし、上記の発掘報告書や研究会などで、方形柱穴列の特徴とされたものは、一般的に掘立柱建物跡とされるものとは形状・規模・柱穴の特徴等が異なる。本報告では、特徴の差異から掘立柱建物跡と方形柱穴列は区別して扱い、方形柱穴列については従来の研究成果を援用しつつ、以下の特徴をもつ遺構について認定した（掘立柱建物跡は本章第3節参照）。

- ① 柱穴は桁行方向と梁行方向が交差する四隅には存在しない。しかし、柱穴配置は八角形ではなく方形もしくは長方形を呈する。
- ② 柱穴間隔が概して狭く、柱穴が連結して溝状にみえる例が認められる。ただし、溝状であっても柱穴としての掘り方は個々に認識できる。また、1棟の中で柱穴が連結する部分と独立する部分がある。
- ③ 柱穴の規模は長さ・幅ともに60cm以上、深さ30cm以上と大形である。
- ④ 柱穴の掘り方に、内側は直立し、そのほかは傾斜しながら立ち上がるものが存在する。

ST1～10で掘立柱建物跡としたST1・5を除き、①～④の条件を備えるものはST2・4で、この2棟を方形柱穴列と認定する。また、ST8は柱穴規模が③よりも小形だが、検出面が低いために小形で検出された可能性があり、さらに、柱穴配置が①である点からこれも方形柱穴列に含める。

残りのSTの内、ST3・6・9は遺構範囲の多くが調査区外へと広がり、全体の形状は不明確だが、調査された範囲では、柱穴規模や配置等の特徴が方形柱穴列と同一なので、方形柱穴列の可能性は高い。また、ST7は、調査では4基の柱穴列として検出され、桁行もしくは梁行方向に相当する柱穴列が存在しない。調査段階から注意はしていたが、これに伴うような柱穴は検出できなかった。しかし、柱穴規模や配置は方形柱穴列の特徴と一致するので、そのほかの柱穴を見逃した可能性が残る。ST10はST4の調査時に検出された、柱痕の可能性があり、段状の掘り方をもった5基の柱穴列である。周辺部において、この柱穴列と組み合う柱穴を探したものの、検出することはできなかった。柱穴規模や柱間隔等の特徴から、ST10も方形柱穴列に含めてはいるが、ST4の南側に沿うように位置し、独立した遺構ではなく、ST4に関係する施設の一部であった可能性も否定できない。

以上から、駒形遺跡で検出された方形柱穴列はST2・4・8の3棟で、ST3・6・9の3棟も方形柱穴列の可能性が高い。ST7・10については、柱穴の特徴が方形柱穴列に類似するとはいえ、柱穴列で検出されたこともあって不明確といわざるを得ない。

2. 特徴

方形柱穴列の個々の属性については第3表に示したので、ここでは全体的な特徴について整理する。

(1) 柱穴数

柱穴数は柱間隔ではなく、阿久尻遺跡の発掘報告書に倣って長・短軸における柱穴の数で示し、長軸の柱穴数から順に表記する。対象になるのは遺構全体が調査された3棟で、次のとおりである。

ST2・4：5基×3基 ST8：4基×2基

阿久尻遺跡の発掘報告書では、それぞれ5-3型、4-2型と呼称しているので、本報告も以下、この分類名を用いる。また、全体形状が不明なもの内、ST6はP1-4列とP5の配置関係から、ST9はP1-4列の配置から、長軸の柱穴が4基以上であったと推測される。

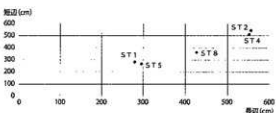
(2) 規模

第3章 縄文時代の遺構

ST No.	時期	位置	長軸方向	P#	原積 (cm)		平面形	早掘土量 (g)	前掘切戻土量 (g)	前掘前戻土量 (g)	出土遺物		遺構の層様	調査区画 No.	調査区画 No.
					長軸	短軸					石器 (点数)	石 器 (点数)			
2	前期 前期	IW02 IW07	N-16°-E	P1	102	84	58	楕円形	32.7	38.7	73.6	石器: 1 スクレイパー: 2 銅片: 10	SB 43・44、 ST 3を切る	第43・ 44区	PL 9
				P2	112	98	30	不整形	—	72.2	212.9	スクレイパー: 1 石器: 1 燧石: 1 銅片: 13			
				P3	104	99	68	円形	16.6	65.4	21.7	石器: 1 加工銅片: 1 石器: 1 燧石: 1 銅片: 10			
				P4	106	81	51	楕円形	—	137.6	43.9	加工銅片: 1 燧石: 1 銅片: 24			
				P5	104	96	86	円形	—	70.9	30.5	加工銅片: 1 銅片: 23			
				P6	102	90	84	円形	—	37.7	74.5	銅片: 4			
				P7	94	88	86	不整形	—	58.9	53.0	加工銅片: 1 銅片: 11			
				P8	100	81	69	楕円形	—	31.4	116.3	スクレイパー: 2 燧石: 1 燧石: 1 銅片: 4			
				P9	100	80	39	楕円形	12.9	—	31.4	銅片: 4			
				P10	84	83	41	円形	—	17.9	9.9	加工銅片: 1			
				P11	98	95	37	円形	—	9.4	61.5	石器: 1 銅片: 7			
				P12	114	98	60	楕円形	—	48.8	244.1	燧石: 1 燧石類: 1 銅片: 5			
				P13	—	—	63	不形	—	96.2	151.8	石器: 1 銅片: 7			
P14	—	—	—	不明	—	—	—	118.3	銅片: 2						
P2	—	—	—	不明	—	22.0	13.5	石器: 1 銅片: 2							
3	前期 前期	IW07	不明	P1	126	110	74	楕円形	—	49.6	96.7	石器類製品: 2 スクレイパー: 3 石器: 1 両縁石類: 7 加工銅片: 7 石器: 3 燧石: 3 銅片: 74	SB 44を切る ST 2に切られる	第42区	
				P2	100	86	51	円形	—	98.6	5.3	石器: 1 燧石: 1 銅片: 30			
				P3	116	106	79	不整形	—	49.9	—	石器: 1 スクレイパー: 2 両縁石類: 1 加工銅片: 1 石器: 1 銅片: 19			
				P4	101	90	62	不整形	—	22.5	2.1	銅片: 7			
				P5	94	82	32	円形	—	158.8	106.5	スクレイパー: 4 加工銅片: 1 石器: 1 両縁石類: 1 燧石類: 1 銅片: 17			
				P6	124	90	58	楕円形	35.6	142.1	60.9	スクレイパー: 2 両縁石類: 1 加工銅片: 2 燧石: 2 銅片: 6			
				P7	116	99	103	円形	233.0	312.0	284.5	燧石: 1 銅片: 8			
				P8	104	87	66	不整形	—	52.5	147.8	両縁石類: 2 加工銅片: 1 銅片: 2			
				P9	112	84	80	不整形	33.3	316.3	132.8	両縁石類: 1 加工銅片: 1 燧石: 1 燧石類: 1 銅片: 5			
				P10	128	113	85	不整形	116.4	899.2	920.5	スクレイパー: 1 両縁石類: 1 燧石: 1 銅片: 13			
				P11	134	120	73	不整形	25.8	17.3	160.7	石器: 1 両縁石類: 1 加工銅片: 1 燧石: 1 燧石: 1 銅片: 18			
				P12	96	95	80	不整形	—	10.6	52.2	—			
				P13	112	98	94	不整形	—	—	—	—			
P14	108	94	66	円形	—	10.0	40.4	—							
6	前期 前期	IW09 IW14	不明	P1	98	96	90	円形	37.2	439.2	106.9	石器: 2 石器類製品: 1 スクレイパー: 1 挿入石器: 1 両縁石類: 6 加工銅片: 4 燧石: 2 燧石: 1 銅片: 80	SB 59・60に 切られる	第48区	PL 9
				P2	100	97	67	円形	51.9	485.8	150.0	石器: 1 スクレイパー: 1 燧石: 1 燧石: 2 両縁石類: 3 加工銅片: 6 燧石: 7 燧石: 1 銅片: 43			
				P3	102	88	52	円形	82.0	303.3	155.6	石器類製品: 1 燧石: 1 加工銅片: 3 燧石: 2 銅片: 42			
				P4	102	90	48	円形	—	825.3	257.0	石器: 2 スクレイパー: 1 燧石: 2 燧石: 1 両縁石類: 3 加工銅片: 4 銅片: 32			
				P5	92	—	51	円形	7.5	394.9	126.5	石器: 2 スクレイパー: 1 燧石: 1 燧石: 1 両縁石類: 3 加工銅片: 3 燧石: 1 銅片: 23			
7	前期 前期	IW15 IW20	不明	P1	108	106	57	円形	42.3	47.5	128.2	石器: 1 燧石: 1 両縁石類: 2 加工銅片: 1 燧石: 1 銅片: 16	SB 61を切る SB 66に切られる	第47区	PL 9
				P2	128	96	54	楕円形	14.7	56.6	151.3	石器: 2 両縁石類: 3 加工銅片: 3 燧石: 1 銅片: 15			
				P3	106	95	60	不整形	41.7	165.4	77.8	石器: 1 挿入石器: 1 両縁石類: 3 加工銅片: 1 燧石: 1 銅片: 14			
				P4	120	106	54	不整形	—	211.9	45.3	両縁石類: 1 銅片: 11			
8	前期 前期	IW09 IW14	N-3°-E	P1	54	54	24	円形	—	—	—	SB 67に切られる	第49区	PL 10	
				P2	62	60	16	円形	—	—	—				
				P3	108	52	52	楕円形	—	290.3	6.4				石器: 1 両縁石類: 1 加工銅片: 2 銅片: 21
				P4	66	51	12	不整形	10.1	43.1	22.3				燧石: 2 スクレイパー: 1 燧石: 1 銅片: 3
				P5	78	68	24	円形	—	—	—				—
				P6	88	84	51	不整形	29.4	142.0	5.1				加工銅片: 1 燧石: 1 銅片: 5
				P7	83	74	28	円形	20.0	53.6	26.9				石器: 1 加工銅片: 1 燧石: 1 銅片: 3
				P8	86	80	38	不整形	—	148.0	20.1				加工銅片: 1 燧石: 1 銅片: 18
				P9	86	78	30	不整形	—	—	—				—
				P10	—	—	—	不明	—	45.8	12.1				—
				P11	78	66	26	不整形	—	—	—				—
				P12	—	—	—	不明	—	—	—				—
				P13	44	36	11	楕円形	—	—	—				—
9	前期 前期	IW08 IW13	不明	P1	95	95	116	不整形	—	—	—	SB 72を切る	第48区	PL 10	
				P2	104	64	82	不整形	—	—	—				
				P3	60	44	49	楕円形	—	—	—				
				P4	—	—	—	不明	—	—	—				
10	前期 前期	IW08 IW09	不明	P1	—	—	54	楕円形	—	—	—	SB 53、ST 4 に切られる	第45・ 46区	PL 9	
				P2	83	80	42	不整形	—	—	—				
				P3	102	70	42	不整形	—	—	—				
				P4	136	90	51	不整形	—	—	—				

第3表 方形柱穴別観察表

ST 2・4・8の3棟は、人小2つのグループに分離することができる(第4表)。前者はST 2・4の5-3型で、ST 2は長軸が5.56 m、短軸が5.40 m、ST 4は長軸が5.52 m、短軸が5.08 mを測り、両者はほぼ同一規模である。後者は4-2型のST 8で、長軸が4.28 m、短軸が3.60 mである。長・短軸の長さとして、5 mが大小グループの境界を示している。

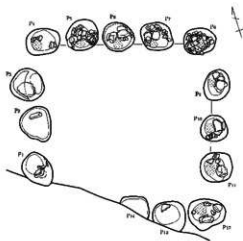


第4表 建物跡の長・短軸比

もう1つの建物跡である掘立柱建物跡と比較すると、掘立柱建物跡2棟（ST1・5）は長・短軸が3mを超えず、方形柱穴列よりもかなり小形の建物跡であったといえよう。

(3) 柱痕跡

柱痕跡と思われるものは、柱穴覆土断面の堆積状況と柱穴底面の段状を呈する掘り方などから、その有無が推定される。さらに、今回調査された方形柱穴列の柱穴覆土に、直径30cm前後の礫を多量に含むものが存在し、礫の在り方からも柱痕跡の可能性を指摘することができる。柱穴覆土に礫が認められるものは、ST2・4・7・8・10で、特にST2・4は良例である。その中からST2を選出し、礫と柱痕跡の状況を観察する。



第11図 ST2の柱痕跡

ST2はP1・2・4～12の覆土に多量の礫がみられ、特にP4～8に顕著である。礫は柱穴の掘り方全体にわたって遺存するのではなく、P4～7は掘り方の中で方形柱穴列の内側部分に堆積する黒褐色土（第11図スクリーントーンの部分、以下同様）を囲むように礫が認められる。P8では、中央部分の黒褐色土をドーナツ状に礫が囲う。P9～11では方形柱穴列の内側部分に、礫で囲まれた黒褐色土がみられ、その部分を通すと一列に並んでいる。P5～7・9のエレベーション図（第44図）を確認すると、方形柱穴列の内側に相当する部分に礫は存在せず、柱状に抜けたような状態を示す。こうした黒褐色土を柱痕跡とみれば、P4～8列、P9～11列で整然と一列に並ぶ。また、P12もP8に対応して柱痕跡がみられるので、P12～14列が、P4～8列に対応して並んでいた可能性が高い。さらに、掘り方における柱痕跡の位置から、柱は方形柱穴列の内側部分に建てられたといえる。掘り方には内側部分が直立して立ち上がるものが認められ、柱痕跡は直立する部分と合致するので、柱は真っ直ぐに建てていたと考えることができる。その柱を、礫で固定する構築方法によって支えていたのであろう。

(4) 付属施設の可能性

これまで、方形柱穴列には付属施設が存在しないとされてきたが、ST8では内部でほかの遺構が検出されたので、付属施設の可能性を含めながら状況を説明しておきたい。

ST8は、基本層序第Ⅲ層上面で柱穴を確認している。それとともに、内部で、屋外炉（SF20）と土坑（SK40）が検出され、土坑では前期前葉土器2個体と、土坑の東側で石皿2点が出土した。

ST8と内部で検出された遺構・遺物には、2つの可能性が考えられる。1つはST8の付属施設として屋外炉と土坑が存在し、遺物もその施設に伴うものとする考えであり、もう1つはST8とほかの遺構が重複する考えである。これを判断する重要な視点として、ST8の柱穴が掘り込まれた面が問題となる。ST8の柱穴は、ほかの方形柱穴列と比較してかなり浅い。その理由は検出面を下げたことによるもの、つまり、本来は第Ⅱb層から掘り込まれていた柱穴をそこで検出できず、第Ⅲ層上面まで下げて検出した結果で浅いとすれば、柱穴が掘り込まれた面において、内部で検出された遺構・遺物は既に埋没しており両者は関係しない。この場面では、ST8は石囲炉をもつ竪穴住居跡など、ほかの遺構と重複する状況が考えられる。一方、検出された面の第Ⅲ層上面が、ST8柱穴の掘り込み面とすれば、内部で検出された遺構・遺物はST8と関わる可能性も出てくる。ST8は柱穴が浅く、付属施設をもたないほかの方形柱穴列とは性格が異なる建物跡であったとすることもできよう。ST8周辺に位置する、遺構の検出面を確認すると、SB53では第Ⅱb層で検出できず第Ⅱc～Ⅲ層まで下げて検出しており、SB61・62・67は第Ⅱb層で検出してはいるものの、不明確な部分があってトレンチを入れている。一帯は第Ⅱb層では明

瞭に遺構検出ができておらず、検出層序にも幅があつて、遺構の掘り込み面を特定するには至らない。本報告では検出された状況のまま、ST8と内部で検出された遺構・遺物を同一函版で掲載して2つの可能性を示し、その性格については今後の課題としたい。

(5) ST6の遺物出土状況

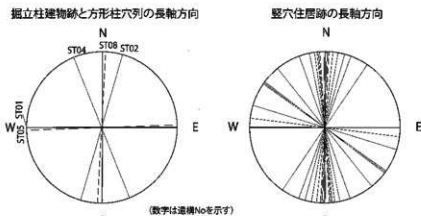
方形柱穴列は柱穴覆土から、前期初頭～前葉の遺物が出土している(第3表)。その多くは土器の小破片など、断片的な資料にすぎないが、ST6ではP4より底部を欠損する前期初頭土器の1/4個体(第48・113図974、PL9)が出土した。

前期初頭土器はP4北壁際で、口縁部を東側に向けて、横位の状態で出土した。P4は1～5層の覆土が堆積し、その中で土器が出土したのは、底面から10～15cm高い位置の2層中である。覆土に柱根・柱痕跡はなく、1～5層はほぼ水平に堆積しているの、P2は柱を抜き埋め戻したと考えることもできる。掘って、前期初頭土器が2層に残された時期に、P4には柱が存在していなかった可能性がある。

P1・5の覆土も同様で、水平堆積のうえに柱根・柱痕跡は認められず、柱を抜いて埋め戻した可能性が高い。その一方で、P2・3はいずれも覆土2層が柱痕跡と思われる堆積状況をみせ、柱が残されていた可能性が指摘される。この結果、ST6には柱を抜いた柱穴と、柱が残った柱穴が存在したと推測され、P4に前期初頭土器が残された時期に、ST6は方形柱穴列としての建物構造を成していなかったとみることもできよう。しかし、前期初頭土器が、P4に遺存する理由は不明確である。方形柱穴列は一般的に、前期前葉の建物跡とされる。しかし、ST6は前期初頭土器が遺存する理由によっては、時期が前期初頭にまで遡る可能性を示している。

3. 長軸方向の比較

全体が把握されるST2・4・8の方形柱穴列と、前節で触れたST1・5の掘立柱建物跡について、長軸方向を比較したい。掘立柱建物跡の長軸は東西方向、方形柱穴列の長軸はおおよそ南北方向で、2つの建物跡は長軸方向が異なるといえる(第12図)。しかし、ST1・5とST8の長軸方向は、ほぼ直行するといえる。また、竪穴住居跡の長軸方向と比較すると、方形柱穴列と掘立柱建物跡はともに竪穴住居跡の軸幅に納まるものの、竪穴住居跡でより多くみられる南北方向の軸に方形柱穴列の長軸が重なる。方形柱穴列の長軸方向は、不明なものも多いので一概にはいえないが、竪穴住居跡の方向を意識して建てられたものが存在するようである。方形柱穴列と竪穴住居跡の重複は、遺構分布状況からも指摘される。両者は調査区中央において、遺構分布密度が非常に高い同一範囲に位置し、いわば居住域の中心部に共存した施設であったことがうかがえる。



第12図 長軸方向の比較

第5節 土坑

1. 概要

土坑はSK4・5・7～16・18～24・26～32・34～47・50・51・54の、合計43基を数える。形状・規模などが様々であり、多機能のものを含むことが容易に推測される。しかし、土坑の機能・性格を云々するには駒形遺跡のみならず多くの資料集成为必要であり、さらなる資料操作が必要であることは言うまでもない。そうした検討は課題として将来に委ね、今回は資料の提示に留める。以下、土坑については一覧表(第5表)を参照されたい。

SK No	時期	位置	規模 (cm)			形状		出土遺物		備考	掲載図版 図版No. PL No.
			長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	土器	石器		
4	中期	IE13 IE18	(142)	(80)	(42)	不明	鍋底状	中期後葉: 16.2g	青磁石罫: 1点 石核: 1点 黒曜石割片: 1点		第50図
5	前期	IQ13	56	54	50	円形	すり鉢状	前期初頭: 33.3g 前期前葉: 6.3g	黒曜石割片: 1点		第50図
7	前期	IQ13	112	83	28	隅丸長方形	鍋底状				第50図 PL 11
8	前期	IQ13	72	69	45	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 16.1g	凹石罫: 2点		第50図 PL 11
9	前期	IQ18 IQ19	72	(39)	70	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 161.2g 前期前葉: 86.4g	スクレイパー: 2点 両極石罫: 1点 加工剥片: 1点 黒曜石割片 1点	SB 69 を切る	第50図 PL 11
10	前期	IQ13	68	58	42	円形	すり鉢状				第50図 PL 11
11	前期	IQ13	56	45	20	円形	鍋底状				第51図 PL 11
12	前期	IQ13	88	78	52	円形	鍋底状	前期初頭: 133.8g			第51図 PL 11
13	前期	IQ13	68	67	42	円形	鍋底状				第51図 PL 11
14	前期	IQ08 IQ13	52	42	36	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 87.1g 前期前葉: 66.9g			第51図 PL 11
15	前期	IQ13	64	63	34	隅丸方形	鍋底状				第51図 PL 12
16	前期	IQ13	60	54	31	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 88.7g	両極石罫: 1点 原石: 1点 黒曜石割片 3点		第51図 PL 12
17	前期	IQ25	42	—	42	円形	鍋底状			SK 18 に切られる	第52図 PL 12
18	前期	IQ25	42	42	25	円形	鍋底状			SK 17 を切る	第52図 PL 12
19	前期	R21	58	44	34	不整形円形	鍋底状		磨製石罫: 1点	SK 25 を切る	第53図 PL 12
20	前期	IW01	84	80	90	円形	鍋底状	前期初頭: 118.2g	石罫: 1点		第52図 PL 12
21	前期	IQ19	138	105	44	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 176.4g	石罫: 1点 スクレイパー: 2点 両極石罫: 2点 石核: 2点 凹石罫: 1点 黒曜石割片: 25点 石籠: 1点 両極石罫: 2点 加工剥片: 1点 石罫: 1点 黒曜石割片: 29点 チャート割片: 1点	SB 56 を切る	第52図 PL 12
22	前期	IQ25 R21	137	92	112	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 273.8g 前期前葉: 236.8g		埋土3層上部にて石罫が出土	第53図 PL 12
23	前期	R21 IW01	96	84	76	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 137.6g 前期前葉: 14.6g	扶入石罫: 1点 石罫: 2点		第53図 PL 13
24	前期	IW01 IW02	103	86	24	楕円形	鍋底状	前期初頭: 79.1g	石罫: 1点 加工剥片: 1点 石核: 1点 黒曜石割片: 1点		第53図 PL 13
26	前期	IQ25	142	(108)	30	(隅丸長方形)	鍋底状	前期初頭: 278.4g	石罫: 2点 スクレイパー: 1点 両極石罫: 2点 加工剥片: 1点 石核: 2点 打製石罫: 1点 黒曜石割片 38点		第54図 PL 13
27	前期	IQ25	176	136	26	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 73.4g 前期前葉: 363.2g	両極石罫: 1点 加工剥片: 2点 石核: 1点 黒曜石割片: 8点		第54図
28	前期	IQ25	45	42	55	円形	すり鉢状	前期初頭: 64.0g 前期前葉: 317.0g	黒曜石割片: 3点		第54図 PL 13
30	前期	IQ25	34	24	36	楕円形	柱状	前期初頭: 9.5g 前期前葉: 89.5g	加工剥片: 1点 石核: 1点 黒曜石割片: 9点		第54図 PL 13

第5表-1 土坑一覧表

第3章 縄文時代の遺構

SK No	時期	位置	規模 (cm)			形状		出土遺物		備考	掲載図版 図内No PL No.
			長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	土器	石器		
31	前期	I R21	—	—	43	円形?	すり鉢状			S K 32を切る	第54図 PL 14
32	前期	I R21	—	—	44	円形?	鍋底状			S K 31に切られる	第54図 PL 14
34	前期	I X11 (144)	—	(90)		不明	不明		石皿: 1点	土坑底層付近に石皿が置かれていたと思われる	第54図 PL 14
35	前期	I W14	32	26	18	円形	鍋底状				第55図
36	前期	I W14	38	32	10	不整形円形	鍋底状	前期初頭: 362.6g 前期前葉: 65.7g	石皿: 2点 黒曜石器: 1点 加工剥片: 1点 凹石皿: 2点 石皿: 1点 黒曜石剥片: 18点		第55図
37	前期	I W14	27	12	14	楕円形	柱底状	前期初頭: 20.5g 前期前葉: 13.5g	黒曜石剥片: 4点		第55図
38	前期	I W14	47	45	23	不整形円形	柱底状	前期初頭: 15.3g 前期前葉: 28.9g	両極石器: 1点 加工剥片: 1点 黒曜石剥片: 3点		第55図
39	前期	I W20	30	29	19	不整形円形	鍋底状				第55図
40	前期	I W14	105	90	18	円形	鍋底状	前期初頭: 27.8g 前期前葉: 122.9g	黒曜石剥片: 10点	ST 8内側に位置する、礎をとまなう	第49図 PL 10
41	前期	I W07	54	48	38	円形	柱底状	早期水滲: 35.2g 前期初頭: 27.8g 前期前葉: 122.9g	両極石器: 1点 加工剥片: 1点 石核: 1点 石皿: 2点 黒曜石剥片: 17点	ST 9の礎に位置する	第48図
42	前期	I W13	35	33	12	不整形円形	すり鉢状	前期初頭: 60.8g 前期前葉: 5.1g	黒曜石剥片: 2点		第56図
43	前期	I W13	—	—	(20)	不明	不明	前期初頭: 46.5g 前期前葉: 20.7g	石皿: 1点 黒曜石剥片: 4点	SB64・SK50を切る、SK51に切られる	第57図
44	前期	I X21	90	78	38	楕丸長方形	鍋底状	前期前葉: 780.0g (完形1個体)	石匙: 1点	土器内面に合計 1.5 kgの小礫(自然礫)が充填されていた	第56図 PL 14
45	前期	IID01	123	(108)	69	楕円形	鍋底状	前期初頭: 134.6g 前期前葉: 177.7g	石皿: 1点 加工剥片: 1点 凹石皿: 2点 黒曜石剥片: 8点 チャート剥片: 2点		第56図
46		IID01	93	(75)	69	(不整形楕円形)	鍋底状	前期初頭: 57.2g 前期前葉: 506.4g	加工剥片: 1点 黒曜石剥片: 7点		第56図
47		IID01	108	96	18	不整形楕円形	鍋底状				第57図
50		I W13	18	—	(10)	円形?	不明			SB64を切る、SK43に切られる	第57図
51		I W13	17	15	(40)	円形	柱底状			SB64・SK53を切る	第57図
54		I W07	--	--	40	不明	鍋底状			SB73を切る	第57図

SK 3・6・29・33・48・49・52・53は欠番

第5表-2 土坑一覧表

2. 特徴

(1) 時期

検出された43基の土坑のうち、SK 4を除く42基が出土遺物の時期が前期初頭～前葉に所属する点、ほかの前期初頭～前葉の遺構と同一範囲に分布する点、遺構外出土遺物に前期初頭～前葉以外のものがほぼ認められない点などの理由により、前期初頭～前葉の所産と推測される。

また、SK 4は前期初頭～前葉の遺構分布範囲からかなり外れたII E 13・18グリッドに位置し、覆土から中期後葉の上器が出土している。

(2) 分布

前期初頭～前葉の土坑は竪穴住居跡や方形柱穴列などの遺構とともに同一範囲に分布し、集落あるいは居住域を構成する施設の一部であったと考えられる。土坑はその範囲に漠然と分布しているのではなく、以下のように一定の場所である程度まとまりをもつ。

・IQ 13グリッド

SB 37とSB 69に挟まれた、22×12m範囲の一面で、SK 5・7・8・10～16が分布する。この範囲には、土坑以外に遺構は存在しない。

・IQ 25～IR 21～IW 01グリッド

SB 41・46・50・54・56・57、ST 2に囲まれた、18×5m範囲の空間に、SK 17～20・22～

28・30～32が分布する。

・ I W 13・14 グリッド

S B 64・67、S T 8 付近で9×3mの範囲に、S K 35・36・42・43・50・51が分布する。

・ I X 21～II D 01 グリッド

S B 70・71と切り合う6.4×2.8mの範囲に、S K 44～47が分布する。

この中で、I Q 13 グリッドに位置する以外の土坑には、ほかの遺構と重複するものが存在する。しかし、遺構の重複は前期初頭～前葉にわたる集落変遷の結果と判断されるので、変遷上のある段階ではI Q 13 グリッドのように、土坑が単独で分布する位置・範囲であった可能性も高い。こうした状況から、集落あるいは居住域の一面に、土坑が群を成して占拠する位置・範囲があったとみることでもできる。

一方、中期後葉と推測されるS K 4は湿地との境界に近い、II E 13・18 グリッドに位置する。湿地は調査区外の北～東側に向かって広がりをもつとみられ、不明確だがこの湿地をとりまくように中期後半の土坑が分布する可能性も考慮したい。さらに、中期後半の集落は国史跡の範囲で検出されており、その集落と湿地付近の関係も気になるところである。

(3) S K 44の遺物出土状況

土坑では様々な遺物が出土した(第5表参照)。しかし、出土位置・レベルが覆土の中～上部で、土器は小破片の状態を呈するなど、土坑の機能とは無関係のものが多いと考えられる。その中で、S K 44には注目すべき遺物の出土状況がみられる。

S K 44から出土した遺物は、前期前葉の小形完形土器1個体(972)と石匙1点(237)で、土器は口縁部を斜め上方へ向けた状態で東側の壁際から、石匙は土器口縁部の前面からそれぞれ出土した(第56図、P L 14)。出土レベルは、土器が底面のほぼ直上となり、石匙は底面から10cmほど高い。土器内部の土を洗浄した結果、大きさは揃わないが、直径5cm以下の小礫が多量に詰まっていた。重さは合計1.5kgである。小礫は全て自然礫で、加工痕や使用痕が認められるものは1点も存在しない。また、遺隔地から持ち込まれたようなものではないと思われる。こうした出土状況は、目的は不明だが、小礫が詰め込まれた小形土器と石匙が、土坑底面付近に埋置されたことを示している。

第6節 黒曜石集積遺構

S K 25(第53図、P L 13) 位置：I R 21 グリッド

形状・規模：形状、規模ともにS K 19に切られて不明。残存部から推測すると、直径45cm以上の円形を呈する掘り込みか。深さは7～8cm。

検出：検出面となった基本層序の第II b層では把握できず、第II c層で検出。当初、S K 19との切り合いがわからず、S K 19・25を合わせて同一遺構と考えていた。調査を進めた結果、S K 25の底部でS K 19のプランが確認され、S K 25の底部をS K 19が壊して掘り込むとの判断から両遺構を分離した。

遺構の重複：S K 25(旧)→S K 19(新)。上記の理由による。

遺物出土状況：黒曜石の原石4点と剥片1点(P L 29)が、S K 25の南西壁際から中央の範囲にかけて、まとまりをもって出土した。黒曜石が出土したすぐ東側をS K 19が掘り込むので、それにより消滅した黒曜石が存在していた可能性はある。黒曜石は産地同定分析の結果から、全て諏訪星ヶ台群産であること

が判明している（本報告付録 DVD を参照）。原石は塊状を呈しており、大きさは 5 cm 大が 2 点、6 cm 大が 1 点、7 cm 大が 1 点で、総重量は 396.41 g、1 個体あたりの平均重量は約 99 g である。

特徴：直径 45cm、深さ 7～8 cm を超える円形状の掘り込みに、黒曜石原石と剥片を集積した遺構。

時期：不明確だが、前期初頭～前葉の遺構分布範囲内に位置し、周辺にほか時期の遺構が存在しない点から、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第7節 屋外炉

1. 概要

検出された屋外炉は S F 1～20 の合計 20 基を数える。それぞれの屋外炉がもつ属性は、以下の一覧表のとおりである。

SK No	時期	位置	規模 (cm)			形状		出土遺物		備考	掲載図 図No.	産 PL No.
			長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	土器	石器			
1	前期	1R16	111	102	11	地床炉	不整形	前期初頭: 33.0g 前期前葉: 263.0g	石器: 1 点 加工剥片: 2 点 黒曜石剥片: 38 点	S854 を切る	第 58 図	
2	前期	1R22	(81)	39	9	地床炉	不整形	前期初頭: 13.8g 前期前葉: 58.5g	角礫石器: 3 点 原石: 1 点 黒曜石剥片 7 点	S850 を切る	第 58 図	
3	前期	1R 22 1W02	86	65	17	地床炉	楕円形	前期初頭: 163.9g 前期前葉: 33.6g	石器: 1 点 角礫石器: 1 点 加工剥片: 2 点 凹石器: 1 点 石皿: 2 点 テーラート剥片: 1 点 黒曜石剥片: 1 点	S850 を切る	第 58 図	
4	前期	1W03	102	92	14	地床炉	円形	早期末葉: 17.3g 前期初頭: 36.0g	石器: 1 点 黒曜石剥片: 5 点		第 58 図	
5	前期	1W02	78	56	15	地床炉	不整形	前期初頭: 11.3g 前期前葉: 4.5g			第 58 図	
6	前期	1W10	66	(47)	12	地床炉	不整形円形	早期末葉: 10.6g 前期前葉: 102.4g	黒曜石剥片: 6 点		第 59 図	
7	前期	1W08	75	62	12	地床炉	楕円形	早期末葉: 16.1g 前期初頭: 3.4g 前期前葉: 13.7g			第 59 図	
8	前期	1W02	177	89	18	地床炉	不整形	前期初頭: 276.9g 前期前葉: 5.0g	石器: 1 点 角礫石器: 4 点 加工剥片: 1 点 原石: 1 点 黒曜石剥片: 32 点	S843 を切る	第 59 図	
9	前期	1W03	62	48	11	地床炉	楕円形	前期初頭: 157.7g 前期前葉: 556.9g	石器: 3 点 スクレイバー: 1 点 石匙: 2 点 角礫石器 1 点 加工剥片: 1 点 石核: 1 点 原石: 2 点 黒曜石剥片: 17 点	S851 を切る	第 59 図	
10	前期	1W03	156	60	7	地床炉	不整形	前期初頭: 71.7g 前期前葉: 204.5g	石器: 1 点 角礫石器: 4 点 加工剥片: 1 点 石核: 6 点 黒曜石剥片: 29 点	S851 を切る	第 59 図	
11	前期	1R 21	56	45	11	地床炉	不整形	前期初頭: 33.7g	黒曜石剥片: 5 点	S858 を切る	第 60 図	
12	前期	1W02	108	71	15	地床炉	楕円形	前期初頭: 82.8g	黒曜石剥片: 1 点	S843 を切る	第 60 図	
13	前期	1R 22	50	42	9	地床炉	円形	前期初頭: 40.4g 前期前葉: 126.8g	石器: 1 点 黒曜石剥片: 3 点	S850 を切る	第 60 図	
14	前期	1Q20	57	44	8	地床炉	不整形円形	前期初頭: 16.5g 前期前葉: 29.5g	黒曜石剥片: 4 点	S842 を切る	第 60 図	
15	前期	1W01 (39)	30	30	14	地床炉	円形				第 60 図	
16	前期	1W03	45	30	11	地床炉	不整形円形	前期初頭: 20.6g 前期前葉: 14.7g			第 60 図	
17	前期	1W03 (27)	(21)	5		地床炉	円形?	前期初頭: 30.5g 前期前葉: 4.6g		S851 を切る		
18	前期	1W03 (102)	60	11		地床炉	不整形	前期初頭: 118.2g		S858 を切る	第 59 図	
19	前期	1W03	36	28	8	石皿炉	多角形				第 61 図	PL 15
20	前期	1W14	46	44	15	石皿炉	多角形			S T 8 内側検出	第 49 図	PL 10

第6表 屋外炉観察表

2. 特徴

(1) 概要

20基の屋外炉の内、地床炉が18基（SF1～18）、石囲炉が2基（SF19・20）を数える。

地床炉は浅いくぼみを伴い、若干の焼土ブロック・粒子、炭化物が広がる程度で、深く掘り込み被熱痕跡が明瞭で、火床が広がるようなものは存在しない。検出面は基本層序の第Ⅱb層である。平面検出のみでは範囲を把握しづらかったため、ある程度の範囲を押さえた後にトレンチを入れ、断面観察からも焼土ブロック・粒子、炭化物の広がりを検討した。覆土は焼土粒子や炭化物を含む黒褐・暗褐色土上部に、焼土ブロックを含むものが多い。その焼土ブロックから、焼土粒子や炭化物を含む黒褐・暗褐色土の範囲を深さとして計測すると、5～18cmの範囲に収まる。しかし、被熱痕跡が残るなどして、底面を確定できた例があまり存在せず、この深さがそのまま地床炉の深さを示すのかは疑問が残る。その中で、SF1・3は底面の一部に被熱痕跡が認められ、それによって深さが計測できた数少ない例である。

石囲炉は2基ともに、基本層序の第Ⅱb層では検出できず、第Ⅲ層上部～第Ⅲ層に到達する直前の時点（第Ⅱc層中か?）で検出された。SF19では炉縁石として、長軸方向に1点、短軸方向に2点の平石を多角形状に組み合わせ、底面にも平石を敷く。この炉縁石と底面の平石は接合できる。覆土は焼土ブロック・粒子、炭化物などを含まず、底面や炉縁石の被熱痕跡も不明確である。SF20はST8柱穴の内側に位置する。炉縁石は長・短軸方向に1～2点の石皿と平石を組み合わせられていると思われるが、やや崩れており、西側部分は平石が存在せず円礫が遺存していた。平石は底面にも敷かれている。覆土はSF19と同様に、焼土ブロック・粒子、炭化物などは含まれず、炉縁石や底面の被熱痕跡も不明確である。

(2) 分布と性格

屋外炉はIQ20～IW14グリッドに至る長さ約50m、幅約13mの範囲に分布し、特に隣接しているIW02・03・08グリッドには、SF3～5・7～10・12・16～19の12基が集中する。屋外炉の分布範囲は遺構密度の高い調査区中央で、竪穴住居跡・方形柱穴列とともに分布する傾向が強い。実際、SF1～3・8～14・17・18の12基が竪穴住居跡と重複し、同時性は不明確ながらSF20はST8柱穴配置の内側で検出された（本章第4節参照）。竪穴住居跡と屋外炉の新旧関係は、重複する全ての屋外炉が竪穴住居跡の覆土上限で検出されたので、全体的に屋外炉の方が新しいと判断される。また、遺構密度の高い範囲内において、当初からほかの遺構が存在しないような場所にも分布し、さらに調査区の遺物出土状況（第4章第1節）と屋外炉の位置を比較すれば、遺物がより集中するグリッドと屋外炉の重なる例がいくつかみられる。以上から、屋外炉は竪穴住居跡や方形柱穴列とともに、遺構密度が高い居住域の主体部とも呼べる場所や、遺物の集中地点に位置する例が多いといえる。

屋外炉の性格は不明だが、形態として地床炉・石囲炉が存在する点では竪穴住居跡と同様である。また、平面形状・規模が竪穴住居跡の炉に近いものが認められ、深さ、覆土の状態、壁・底面に残る被熱痕跡の度合いについても竪穴住居跡の炉と共通する。

地床炉ではSF1・8など、平面形状が不整形を呈するものは竪穴住居跡の炉よりも大形なので、単独で機能したと考えることもできよう。それに対して、竪穴住居跡の炉に平面形状・規模などが近いものは、竪穴住居跡の炉であった可能性が残る。地床炉と竪穴住居跡は、ともに基本層序の第Ⅱb層で検出されたが、仮に、竪穴住居跡の中に第Ⅱb層よりも上部（例えば第Ⅱa層中）から掘り込まれ、第Ⅱb層中に床面を形成するものが存在した場合、炉は第Ⅱb層に作られた状況が想定できる。竪穴住居跡の床面は、貼床や硬化面が認められるものは少なく、柱穴にも比較的浅いものが存在するので、そうした竪穴住居跡であった場合、黒褐色土をベースとする第Ⅱb層中で検出するのは非常に困難である。また、地床炉の分布が竪穴住居跡の分布範囲に含まれる点では、居住域の中で屋外炉が単独で機能する場面とともに、屋外炉

が検出から漏れた竪穴住居跡の施設であったことも想起させる。加えて推測を深めるならば、前期初頭～前葉において存在するか否かは不明だが、平地住居跡の存在を示唆している可能性はないだろうか。

石囲炉のSF 19は調査当初、第Ⅲ層上面付近で検出されたこともあり、竪穴住居跡を見逃して掘り下げ石囲炉が残ったと判断した。竪穴住居跡の痕跡を求めて周辺部を精査した結果、柱穴・周溝・床面など、竪穴住居跡に伴う施設が検出されず、さらに、SF 19が検出された第Ⅲ層上部を床面と仮定しつつ、面のレベルを追ったところ、4mの範囲で25～30cmの高低差（傾斜）をもつことが判明した。こうした状況から、調査ではSF 19を屋外炉と認定したが、貼床・硬化面の認められない床面が第Ⅱc層下部～第Ⅲ層上部に形成された場合、床面や竪穴住居跡の壁の立ち上がりを検出するのは困難である。掘って、SF 19は竪穴住居跡に付属する石囲炉であった可能性は残る。また、第Ⅲ層上部で検出されたSF 20にも同様の理由から、竪穴住居跡施設の可能性や、方形柱穴列（ST 8）に伴う可能性（本章第4節参照）が指摘される。

第8節 配石遺構

SH 1（第61図）位置：IW 01グリッド

検出：基本層序の第Ⅱc層で検出。平石や円礫はほかの地点でも多くみられるが、本遺構のように平石2点と円礫4点がまとまりながら検出されたものは存在しない。また、A-Bセクション図で示すとおり、平石と礫は検出面に対してほぼ水平に遺存する点から、置かれたものとして配石遺構の可能性を考えた。

規模：長さ150cm、幅72cm、高さ15cm。いずれも、平石と円礫が遺存する範囲を示す。

遺構の重複：なし 遺物出土状況：SH 1に伴う出土遺物は存在しない。

時期：不明確だが、SH 1の周辺には前期初頭～前葉の遺構が濃密に分布し、前期初頭～前葉以外の遺構・遺物が存在しない点などから、前期初頭～前葉の所産と考えたい。

第9節 流路跡

1. 概要

NR 1（第61図、PL 14）位置：IID 10・IIE 06・IIE 11グリッド

調査の経緯：基本層序第Ⅲ層上面で、流路跡覆土と第Ⅲ層にみられる色調などの差異から検出した。

形状：IID 10・IIE 06グリッドを起点に、北西～南東方向へと流れる。小さく蛇行しながらIIE 11グリッドに至り、そこでプランが不明確となる。断面形は皿状を呈するが一定ではない。

規模：長さ11.0m以上、幅0.7～2.0m、深さ5～30cm 主軸方向：N-40°-W 遺構の重複：なし。遺物出土状況：覆土から、多量の10～30cm大の礫と伴に遺物が出土した。土器は前期前葉が主体で、出土総量312.6g中、前期初頭が27.7g、前期前葉が187.5g、中期後葉が97.4gを量る。石器はスクレイパー1点、挟入石器2点、両極石器22点、加工痕の有る剥片1点、原石1点、凹石類2点、

石皿1点、石棒1点、黒曜石剥片132点、チャート剥片1点が出土した。石棒は中期後葉で特徴的にみられるものである。

時期：不明確で時期を決定できるような根拠はない。覆土出土土器の主体となる時期からすれば、前期前葉の所産となろうが、中期後葉の遺物も一定量が存在する。

NR2（第61図、PL14）位置：II E 07・II E 17グリッド

調査の経緯：基本層序の第III層上面で、流路跡覆土と第III層にみられる色調などの差異から検出した。

形状：調査区外からII E 07・12グリッドへと至る直線的な流路跡で、北～南方向へと流れ、II E 12グリッドの南側においてプランが不明確となる。断面形は血状を呈するが一定ではない。

規模：長さ10.0m以上、幅1.3～1.5m、深さ10～20cm 主軸方向：N-3°-W

遺構の重複：なし。遺物出土状況：覆土から少量の10～20cm大の礫とともに遺物が出土した。土器は前期初頭が主体で、出土総量111.8g中、前期初頭が109.4g、前期前葉が2.4gを量る。石器は両極石器3点、加工痕の有る剥片2点、凹石類3点、黒曜石剥片27点、チャート剥片1点が出土した。

時期：不明確で、時期を決定できるような根拠がない。覆土出土土器の主体となる時期からすれば、前期初頭の所産となろうか。

2. 特徴

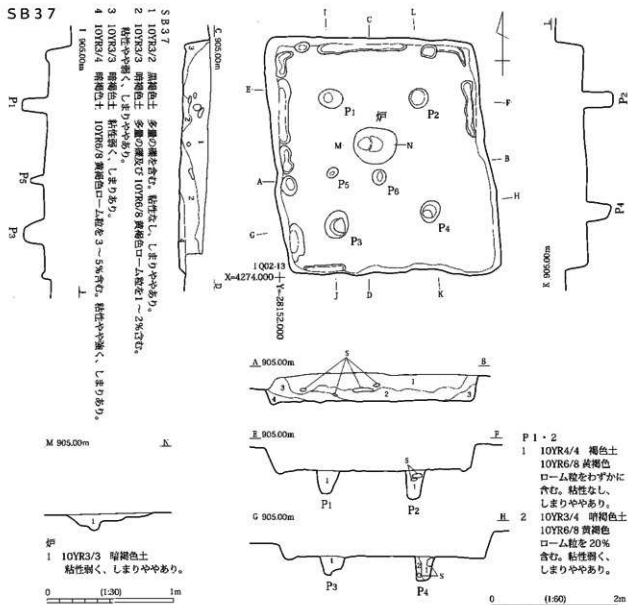
NR1・2は壁線が小さく蛇行するほか、アメーバー状を呈する部分が認められるなど、意図的に掘り込まれたものではないような状況がみられたので溝跡ではなく、流路跡として扱った。流路跡は竪穴住居跡や方形柱穴列など、集落の居住域を構成する遺構の分布範囲からは離れた、調査区東側の湿地へと続く緩やかな斜面上に位置する。この斜面では前期初頭～前葉、中期後葉の遺物が少量出土したほか、遺構は中期後葉の土坑1基（SK4）が検出されたのみである。流路跡はこうした遺構分布の空白部に位置し、上記した形状の特徴などから、自然流路であった可能性が高いと思われる。NR1は湿地に向かって、NR2は湿地との境界に沿って流れており、湿地へと流れ込む、または湿地付近を流れる小河川の一部であったと考えておきたい。なお、流路跡で出土した遺物は、摩滅したものが存在しないので、礫とともに投棄されたものが含まれている可能性がある。

第10節 その他

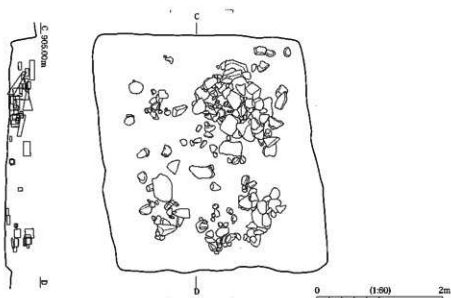
以上のほかに、風倒木痕と思われるSX1～3がII E 12グリッド、II E 06・11グリッド、IW01グリッドで検出された。風倒木痕の時期は不明だが、SX1はNR2を切る。また、SX1では中期後葉の上器破片113.3g、SX2ではチャート剥片1点それぞれ出土している。

第3章 縄文時代の遺構

SB 37

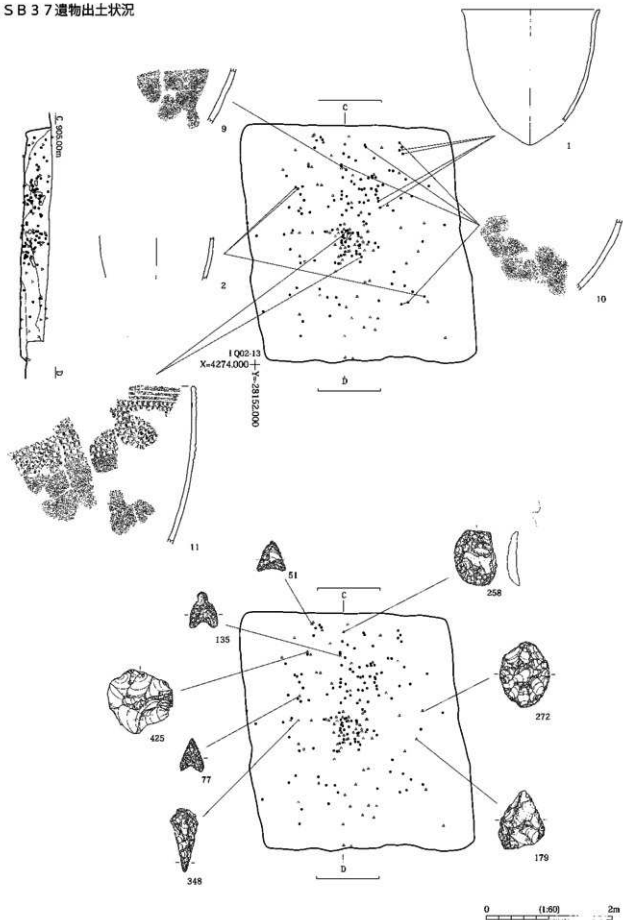


SB 37 礫出土状況



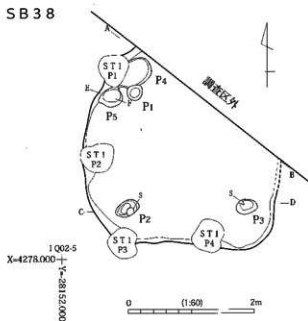
第13図 第37号竪穴住居跡 (SB 37) 1

SB 37 遺物出土状況



第 14 図 第 37 号竪穴住居跡 (SB 37) 2

SB 38



SB 38

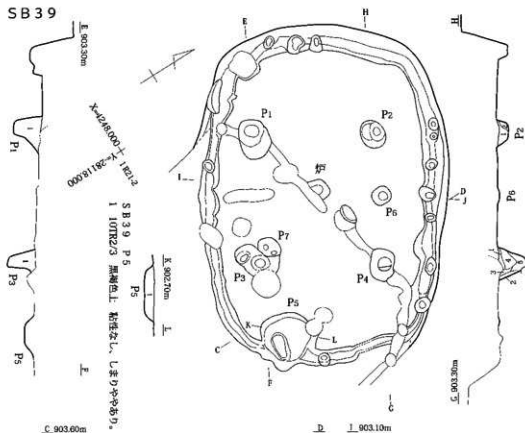
- 1 10YR3/2 黒褐色土 径2~3cmの小礫を10%含む。粘性なし、しまりあり。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性やや弱く、しまりややあり。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5~10%含む。粘性やや弱く、しまりあり。



SB 38

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性やや弱く、しまりややあり。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを10%含む。粘性弱く、しまりややあり。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを10~15%含む。粘性弱く、しまりあり。

SB 39



- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、しまりややあり。
- 2 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10~15%含む。粘性なし、しまり強。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを25~30%含む。粘性弱く、しまりややあり。
- 4 10YR2/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%含む。粘性なし、しまり強い。
- 5 10YR4/4 褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5%含む。粘性なし、しまり強い。

SB 39

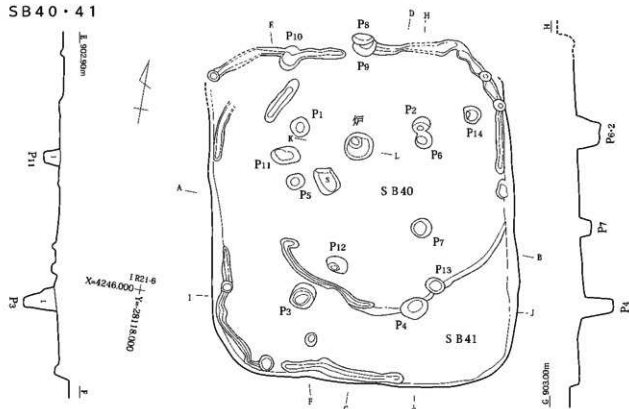
- 1 10YR3/1 黒褐色土 礫を多く含む。粘性・しまりともになし。
- 2 10YR2/2 黒褐色土 礫を含むが1層よりは少ない。粘性なし、しまりややあり。
- 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし、しまりややあり。
- 4 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%含む。粘性強く、しまりあり。

SB 41

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒・ブロックを20%。炭化物わずかに含む。粘性・しまりともにあり。

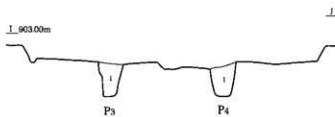
第15図 第38・39号竪穴住居跡 (SB 38・39)

SB40・41



SB41

- 1 10YR3/1 黒褐色土 径3cm以下の小礫を50%含む。黒曜石の微細削片を多量に含む。粘性なし、しまり弱い。
- 2 10YR2/2 黒褐色土 径10cm程度の礫を10%含む。粘性なし、しまり強い。
- 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし、しまり強い。
- 4 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を2%含む。粘性なし、しまり強い。
- 5 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%含む。やや砂質。粘性なし、しまり強い。



I 903.00m

I'

P3・P4・P11

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし、しまり弱い。

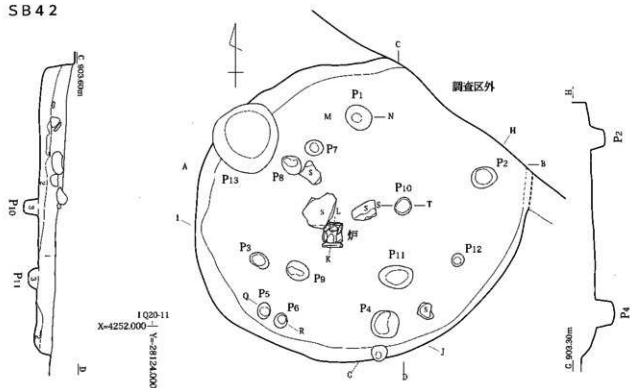
塀

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒・ブロックを20%、炭化物をわずかに含む。粘性・しまりともにあり。

0 (150) 2m

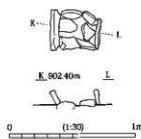
第16図 第40・41号竪穴住居跡 (SB40・41)

SB42



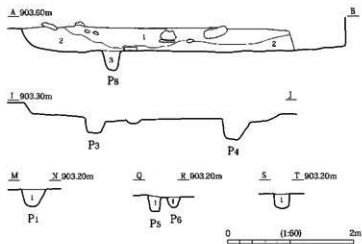
SB42

- 1 10YR2/3 黒褐色土 径50~80cmの楕及び、10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性なし、しまり普通。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 径1cmの楕小塊を30%含む。砂質。粘性なし、しまりややあり。
- 3 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性なし、しまり弱い。



SB42 炉

- 1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを2%含む。粘性なし、しまり弱い。

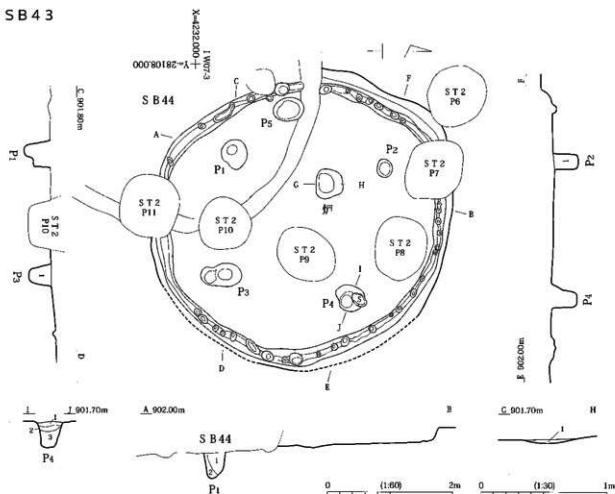


P1

- 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20%含む。砂質。粘性なし、しまりあり。
- P5・6
- 1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5%含む。やや砂質。粘性・しまりともになし。
- P10
- 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性なし、しまり弱い。

第17図 第42号竪穴住居跡 (SB42)

SB 43



P 1

1 10YR3/4 暗褐色土 径 2mm 以下の小礫を 20%、10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 2~3% 含む。粘性なし、しまりややあり。

2 1 と同質だが、明黄褐色ローム粒を 1 よりも多く含む。

P 2

1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 10% 含む。粘性ややあり、しまり普通。

P 3

1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒・ブロックを 20% 含む。粘性・しまりともにあり。

P 4

1 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 1% 含む。粘性なし、しまりややあり。

2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 2% 含む。粘性弱く、しまりややあり。

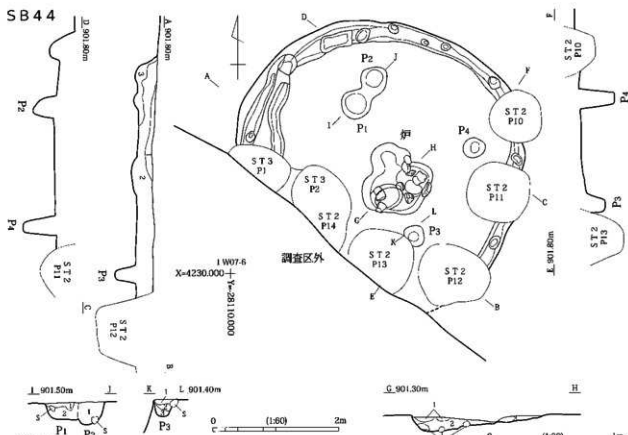
3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 20~30% 含む。粘性なし、しまりなし。

如

1 10YR3/3 暗褐色土

10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを若干、小礫を 10% 含む。粘性・しまりともになし。

第 18 図 第 43 号竪穴住居跡 (SB 43)



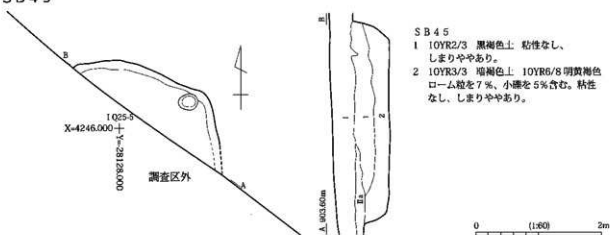
SB 44

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を若干含む。粘性あり、しまりややあり。
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5%、焼土粒子・炭化物を多く含む。粘性・しまりともにあり。
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5~10%、焼土粒子・炭化物を多く含む。粘性・しまりともにあり。
- P1
- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%、小礫を20%、及び炭化物をわずかに含む。粘性あり、しまりややあり。
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒子を2%程度含む。粘性あり、しまりややあり。
- P2
- 1 P1の1と同色。粘性あり、しまりややあり。径5cmの重円礫を含む。
- P3
- 1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2~3%、炭化物をわずかに含む。粘性・しまりともにややあり。
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性・しまりともになし。
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性・しまりともにややあり。

β

- 1 7.5YR5/8 焼土 粘性ややあり、しまりなし。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを5%、焼土粒を1%、炭化物を2%含む。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 灰をブロック状に含む。

SB 45

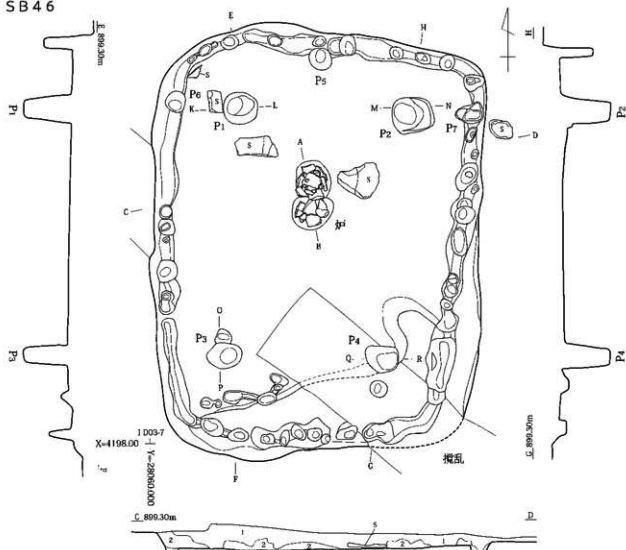


SB 45

- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、しまりややあり。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を7%、小礫を5%含む。粘性なし、しまりややあり。

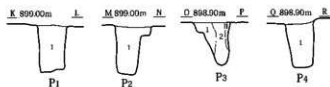
第19図 第44・45号竪穴住居跡 (SB 44・45)

SB46



SB46

- 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を3~5%、炭化物を5%含む。やや砂質。粘性なし、しまり普通。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを30~40%含む。粘性ややあり、しまりあり。
- 3 10YR4/4 褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を3~5%含む。粘性・しまりともにあり。



P1

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5~7%、径さ10cm 弱の礫を1~2%含む。粘性・しまりともにあり。

P2

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10~15%含む。粘性・しまりともにあり。

P3

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を7~10%含む。粘性・しまりともにあり。

2

- 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を10~15%、炭化物を2~3%含む。柱痕。粘性・しまりともにあり。

P4

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を3~5%含む。粘性・しまりともにあり。

0 (1:50) 2m



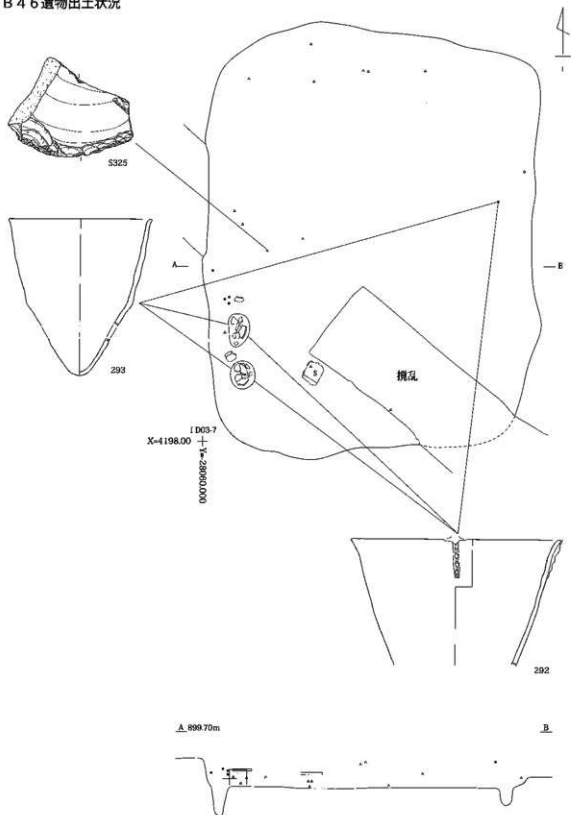
0 (1:30) 1m

※

- 1 10YR3/2 黒褐色土 やや砂質。粘性なし、しまり普通。
- 2 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を3~5%含む。粘性なし、しまり普通。

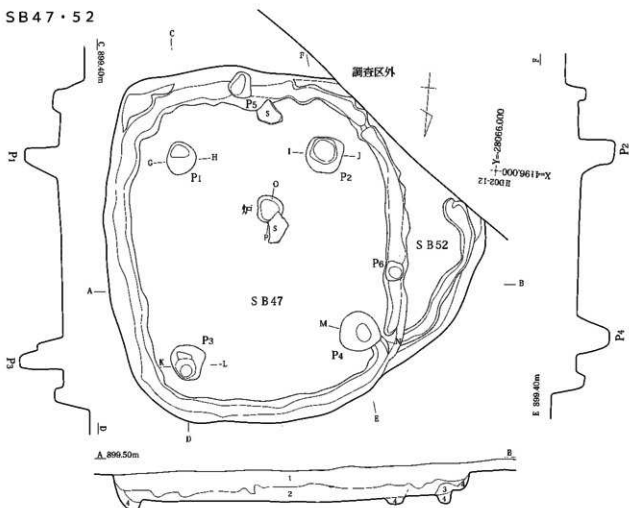
第20図 第46号竪穴住居跡 (SB46) 1

SB46 遺物出土状況



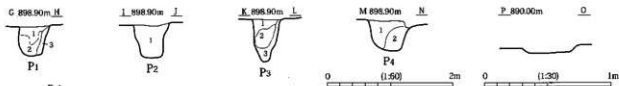
第21図 第46号竪穴住居跡 (SB46) 2

SB 47・52



SB 47・52

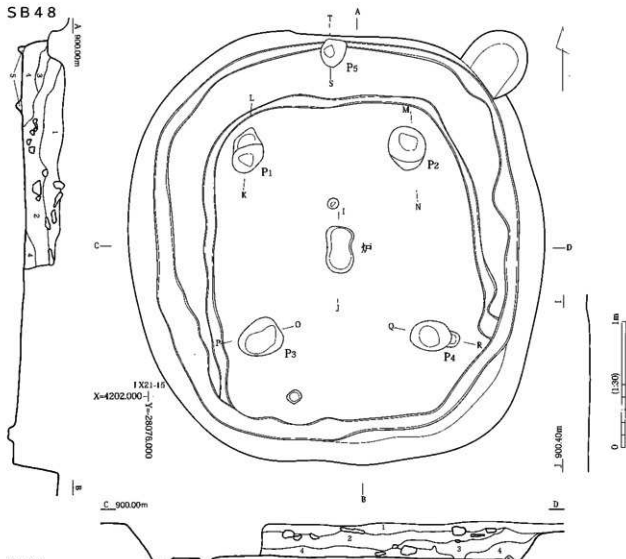
- 1 10YR3/2 黒褐色土 白色粒子を15～20%、3cm大の礫を2～3%含む。やや砂質。粘性なし、しまりあり。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を20～25%含む。粘性なし、しまりあり。
1層下部～2層上部にかけて、礫大～長さ50cm大の礫を多く含む。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10～15%含む。粘性なし、しまりあり。
- 4 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを7～10%含む。粘性なし、しまりあり。



- P 1
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を15～20%含む。粘性なし、しまり普通。
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を3～5%含む。粘性なし、しまり普通。
 - 3 10YR6/8 明黄褐色土 10YR4/3 にぶい黄褐色ブロックを10～15%含む。粘性なし、しまり普通。
- P 2
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10～15%含む。粘性なし、しまり普通。
- P 3
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を15～10%含む。粘性なし、しまり普通。
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を3～5%含む。粘性なし、しまり普通。
 - 3 10YR6/8 明黄褐色土 10YR4/3 にぶい黄褐色ロームブロックを10～15%含む。粘性なし、しまり普通。
- P 4
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を15%含む。粘性なし、しまり普通。
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を3～5%含む。粘性なし、しまり普通。

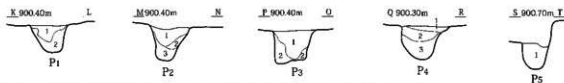
第22図 第47・52号竪穴住居跡 (SB 47・52)

SB 48



SB 48

- 1 10YR3/2 黒褐色土 礫大の礫、白色粒子を2~3%含む。やや砂質。粘性なし、しまりややあり。
- 2 10YR2/2 黒褐色土 礫大~径20cmの礫を10~15%含む。やや砂質。粘性なし、しまりややあり。
- 3 10YR3/1 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色ロームブロックを3~5%含む。やや砂質。粘性なし、しまり普通。
- 4 10YR3/1 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色ロームブロックを15~20%、礫大~人頭大の礫を5~7%含む。やや砂質。粘性なし、しまり普通。
- 5 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし、しまり普通。



P 1

- 1 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を10~15%含む。粘性なし、しまり普通。
- 2 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを30~40%含む。粘性なし、しまりあり。

P 2

- 1 10YR3/1 黒褐色土 礫大~人頭大の礫を15~20%含む。粘性なし、しまりあり。
- 2 10YR3/1 黒褐色土 礫大~人頭大の礫を15~20%、10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを10~15%含む。粘性なし、しまりあり。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20~25%含む。粘性なし、しまりあり。

P 3

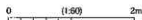
- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を15~7%含む。粘性なし、しまりあり。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20~25%含む。粘性なし、しまりあり。

P 4

- 1 10YR3/1 黒褐色土 礫大~人頭大の礫を15~20%含む。粘性なし、しまりあり。
- 2 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを10~15%含む。粘性なし、しまりあり。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20~25%含む。粘性なし、しまりあり。

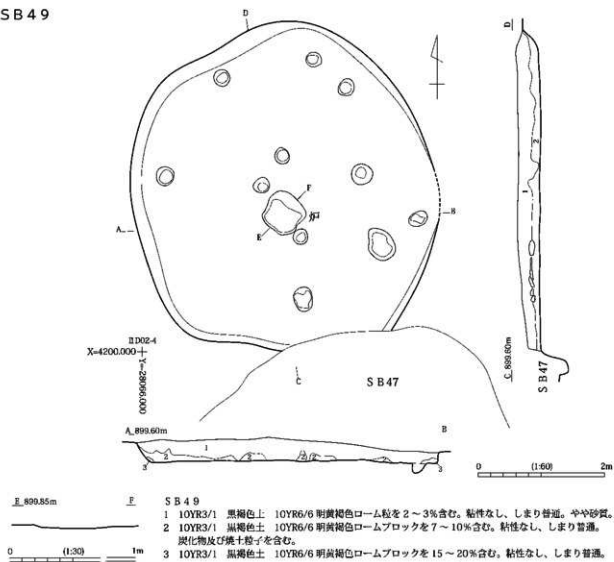
P 5

- 1 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを7~10%含む。粘性なし、しまりあり。



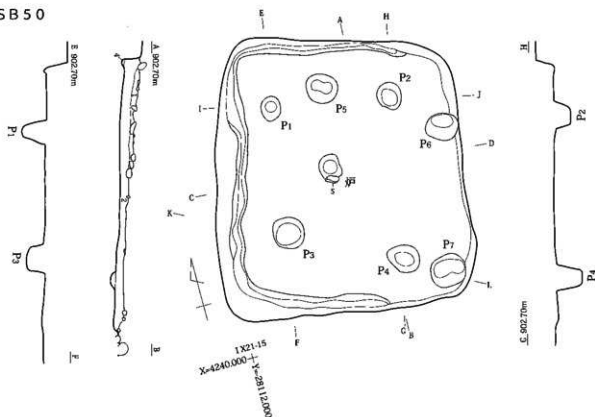
第23図 第48号竪穴住居跡 (SB 48)

SB 49



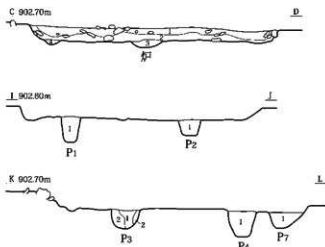
第 24 図 第 49 号竪穴住居跡 (SB 49)

SB50



SB50

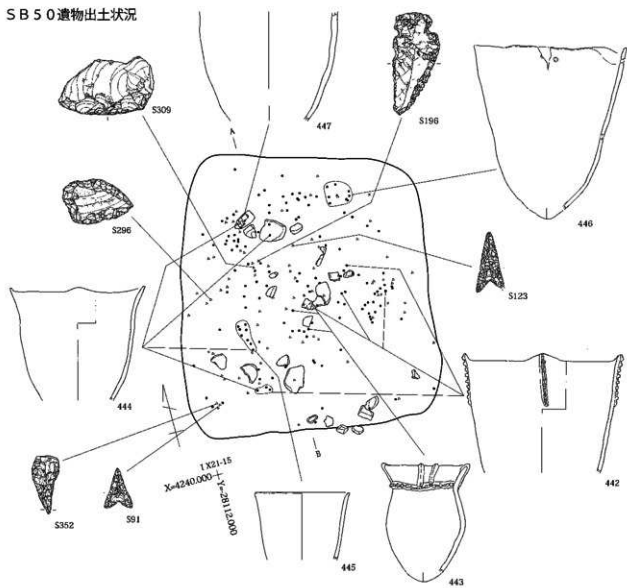
- 1 10YR2/3 黒褐色土 炭化物、10～20cm 大の礫を多く含む。粘性ややあり、しまりあり。
- 2 10YR2/3 黒褐色土 径5～10cm 大の重円礫を含む。粘性・しまりともにあり。
- 3 10YR2/3 黒褐色土 径3～5cm 大の礫を含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
- 4 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり、しまり弱い。



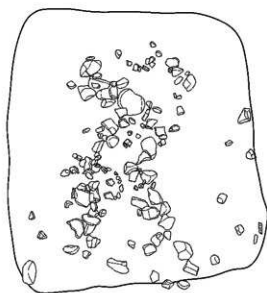
- P1
1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックおよび径3cm以下の礫を2%含む。粘性・しまりともなし。
- P2
1 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり、しまりあり。
- P3
1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%含む。粘性・しまりともにあり。
2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを多く含む。粘性・しまりともにあり
- P4
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性・しまりともにあり。
- P5
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性・しまりともにややあり。
- P6
1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを含む。粘性・しまりともにあり。
- P7
1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを2%含む。粘性ややあり、しまり普通。

第25図 第50号竪穴住居跡 (SB50) 1

SB 50 遺物出土状況



SB 50 礎出土状況

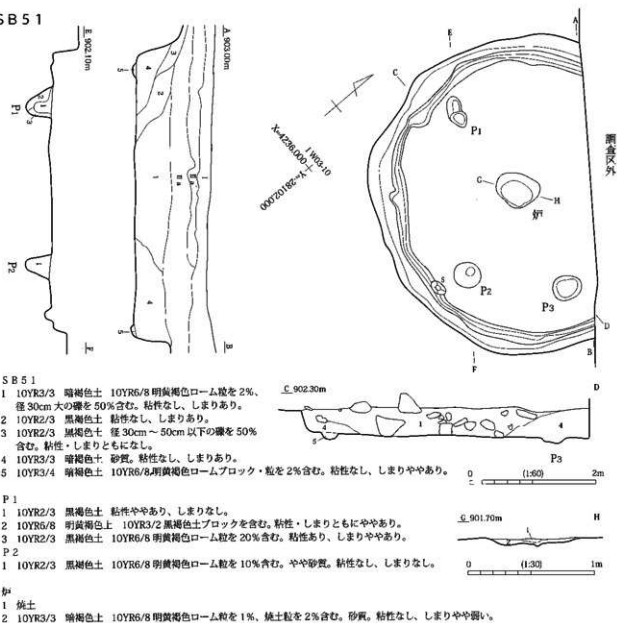


0 (1:60) 2m

0 (1:60) 2m

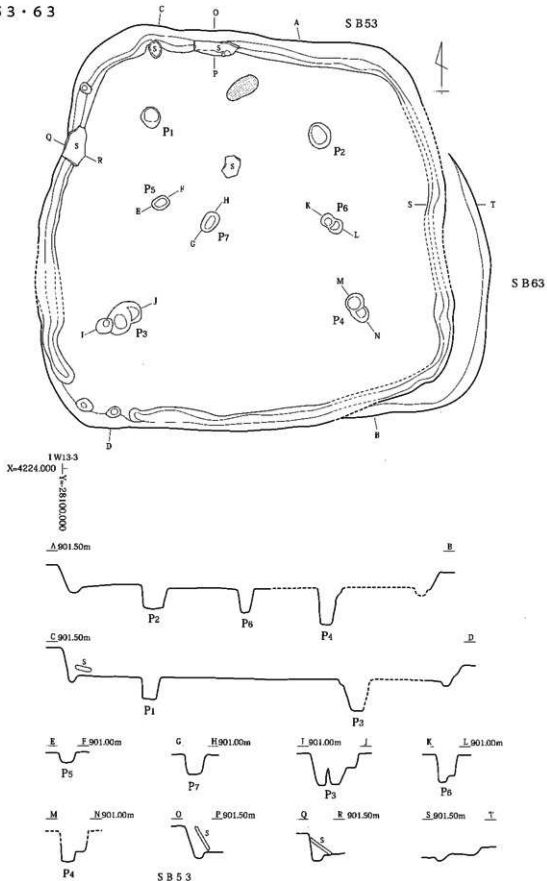
第 26 图 第 50 号竖穴住居跡 (SB 50) 2

SB 51



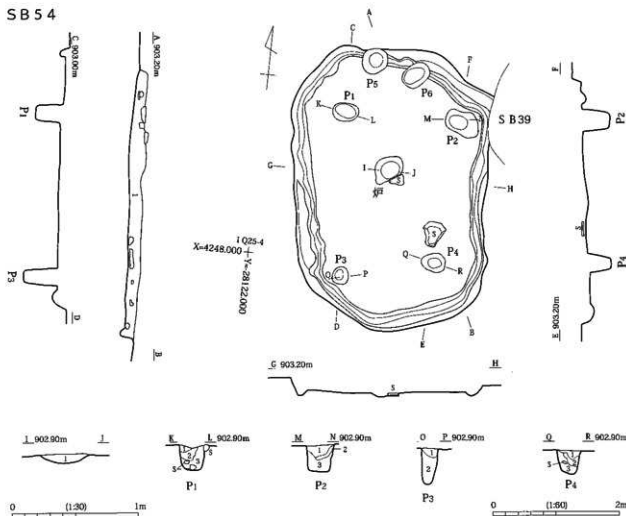
第27図 第51号竪穴住居跡 (SB 51)

SB53・63



第28図 第53・63号竪穴住居跡 (SB53・63)

SB 54



SB 54

1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 2～5%、小礫を 3% 含む。また、1 層上部に径 20～30 cm の礫が多く見られる。

P 1

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを 30% 含む。粘性なし、しまりややあり。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒子を 10% 含む。粘性なし、しまりややあり。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを 10% 含む。粘性なし、しまりややあり。

P 2

- 1 10YR3/3 暗褐色土 砂質。10YR 明黄褐色ロームブロックを若干含む。粘性なし、しまりなし。
- 2 10YR2/1 黒色土 粘性あり、しまりなし。
- 3 10YR4/4 褐色土 砂質。10YR6/8 明黄褐色ローム粒子を 50% 含む。粘性なし、しまりなし。

P 3

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 2～3%、径 1cm 程度の小礫を若干含む。粘性ややあり、しまりなし。
- 2 10YR4/4 褐色土 やや砂質。粘性なし、しまりややあり。

P 4

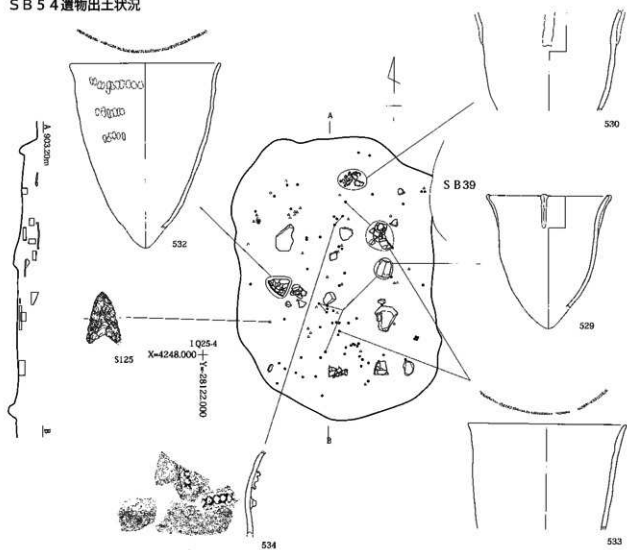
- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 2% 含む。粘性なし、しまりなし。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8 黄褐色ロームブロックを含む。粘性、しまりともにややあり。
- 3 10YR4/4 褐色土 やや砂質。10YR6/8 明黄褐色ローム粒子を 20% 含む。粘性なし、しまりなし。

部

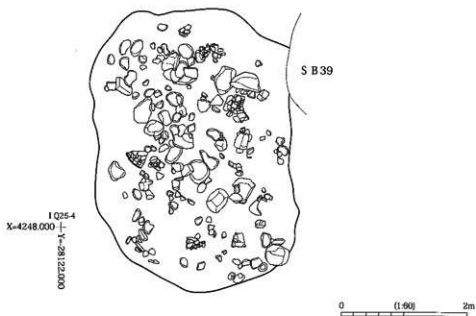
- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を 10% 含む。粘性なし、しまりややあり。

第 29 図 第 54 号竪穴住居跡 (SB 54) 1

SB 54 遺物出土状況

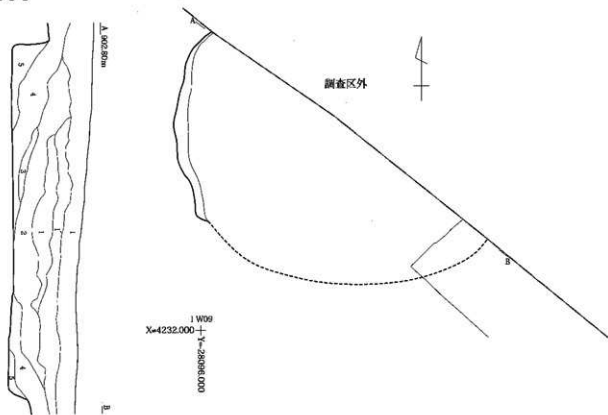


SB 54 礫出土状況



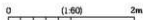
第30图 第54号竪穴住居跡 (SB 54) 2

SB55



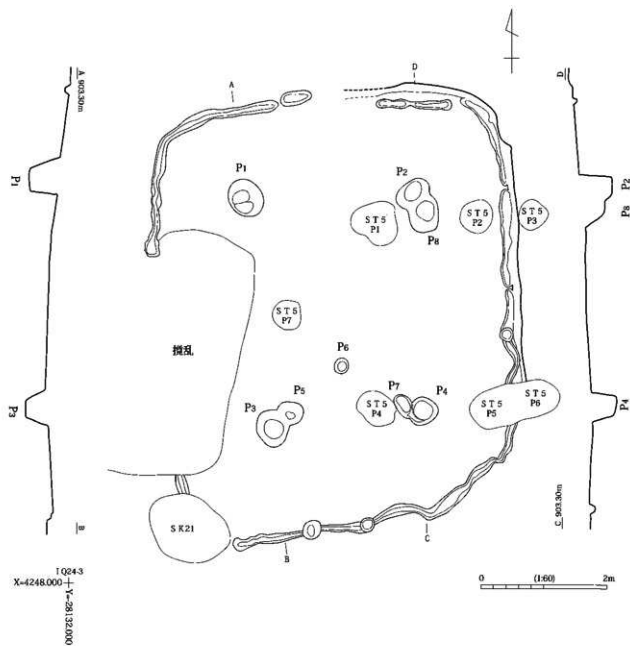
SB55

- 1 10YR2/3 黒褐色土 径5cm以下の小礫を20～30%含む。粘性・しまりともなし。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 径30cm以下の礫（IIa層礫に由来か?）、径10cm以下の礫を5%、10YR6/8明黄褐色ローム粒を1%程度含む。粘性なし、しまりややあり。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 4層同質だが礫の混じりが少ない。粘性なし、しまりなし。
- 4 10YR2/3 暗褐色土 径30cm程度の礫を多く含む。粘性なし、しまりなし。
- 5 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を5%、径1cm以下の小礫を5%含む。粘性・しまりともにややあり。



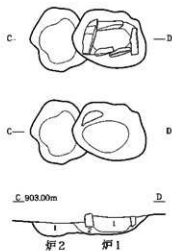
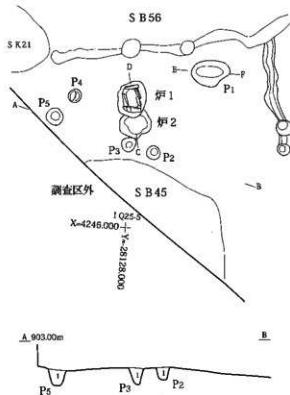
第31図 第55号竪穴住居跡（SB55）

SB 56



第 32 图 第 56 号窑穴住居跡 (SB 56)

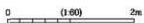
SB 57



- 炉1
 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%、白色粒子を5%含む。粘性、しまりともにややあり。
 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を1%含む。粘性なし、しまりなし。
 炉2
 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を1%、焼土粒を2%含む。粘性なし、しまり弱い。

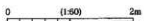
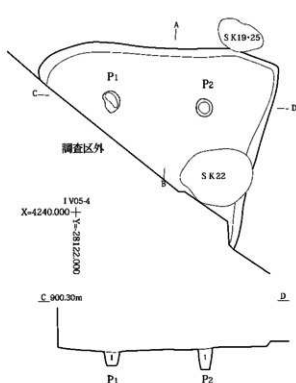


- P1
 1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%、小礫を2%含む。粘性弱く、しまりややあり。
 P2・3・5
 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を1%含む。粘性なし、しまりややあり。



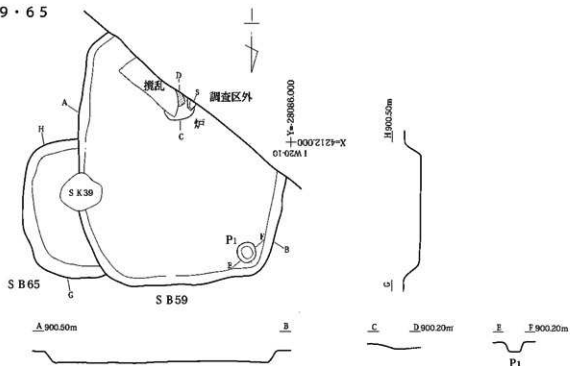
SB 58

- SB 58
 1 10YR2/3 暗褐色土 粘性なし、しまり強い。
 P1・2
 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%、小礫を20%含む。粘性なし、しまり強い。



第33図 第57・58号竪穴住居跡 (SB 57・58)

SB59・65



SB59

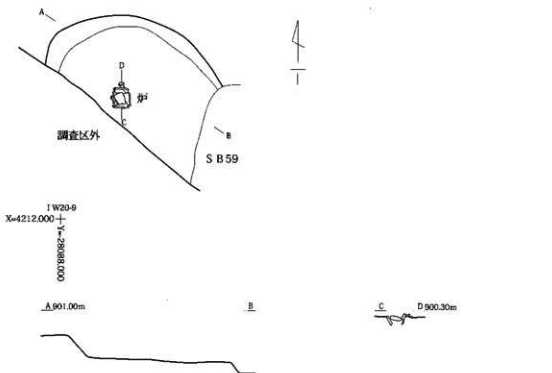
1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を2～3%含む。粘性なし、しまりややあり。

SB65

1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を3～5%含む。粘性なし、しまり弱い。

0 (1:60) 2m

SB60



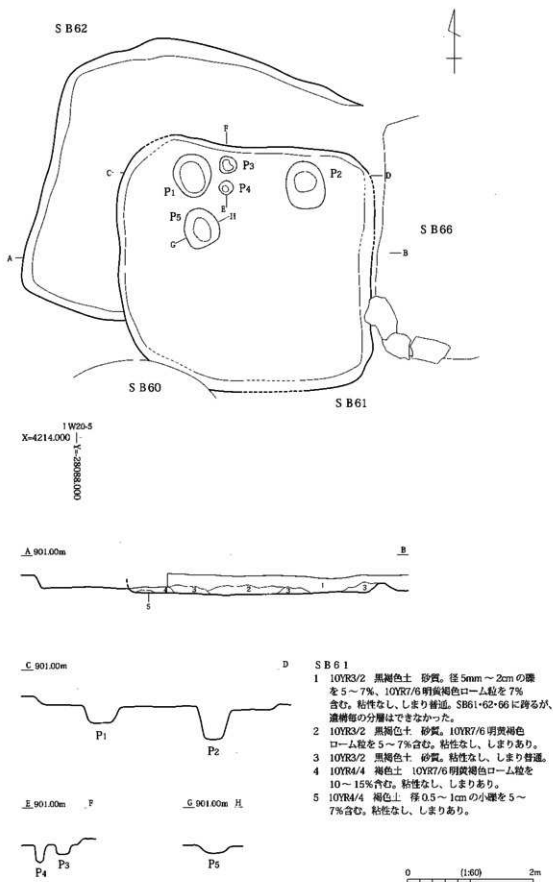
SB60

1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を3～5%含む。粘性なし、しまりややあり。

0 (1:60) 2m

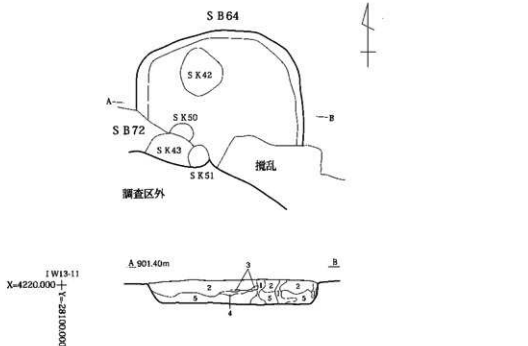
第34図 第59・60・65号竪穴住居跡 (SB59・60・65)

SB 61・62



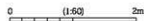
第35図 第61・62号竪穴住居跡 (SB 61・62)

SB64

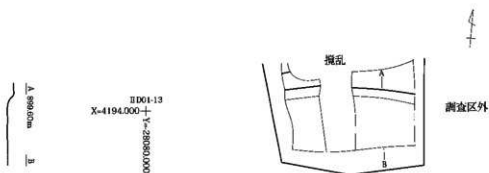


SB64

- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。攪乱（木根？）か。
- 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、しまりあり。
- 3 5YR5/6 明赤褐色土 粘性なし、しまりあり。堅い。
- 4 10Y2/3 黒褐色土 5YR5/6 明赤褐色焼土粒を30%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 5 10YR3/3 暗褐色土 炭化物を2~3%含む。粘性なし、しまり普通。

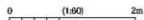


SB68



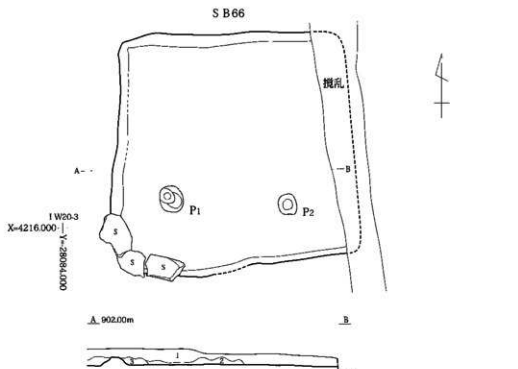
SB68

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし、しまり普通。



第36図 第64・68号竪穴住居跡 (SB64・68)

SB66

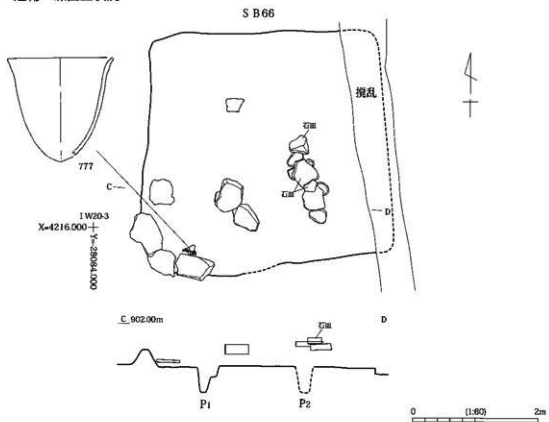


SB66

- 1 10YR3/2 黒褐色土 砂質。径5mm～2cmの礫を5～7%、10YR7/6 明黄褐色ローム粒を7%含む。粘性なし、しまり普通。SB61・62に跨るが、遺構毎の分離はできなかった。
- 2 10YR3/2 黒褐色土 砂質。10YR7/6 明黄褐色ローム粒を5～7%含む。粘性なし、しまりあり。
- 3 10YR3/2 黒褐色土 砂質。粘性なし、しまり普通。

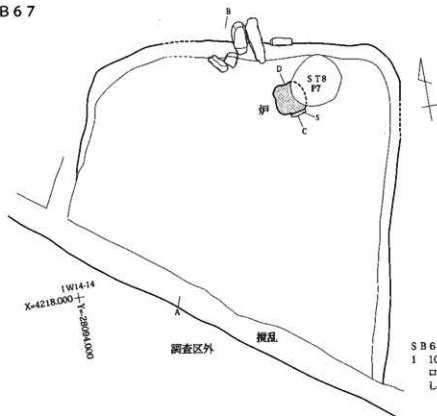
0 (1.50) 2m

SB66 遺物・礫出土状況



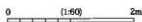
第37図 第66号竪穴住居跡 (SB66)

SB 67

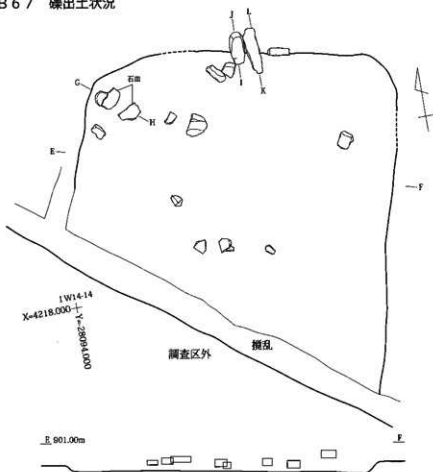


SB 67

I 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色
ロームブロックを3~5%含む。粘性なし、
しまりあり。



SB 67 礫出土状況



C 901.00m D



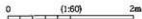
C 901.00m H



I 901.20m J

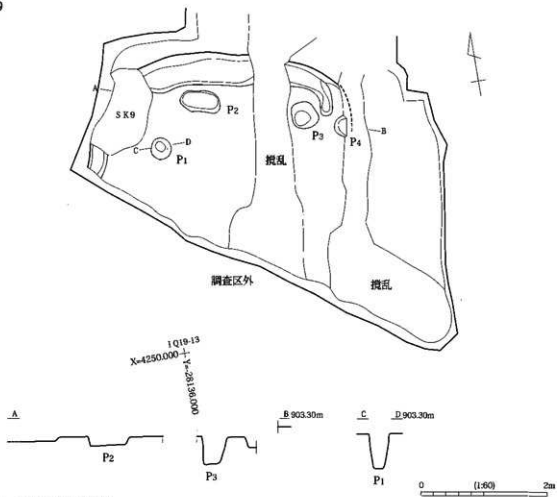


K 901.20m I



第 38 図 第 67 号竪穴住居跡 (SB 67)

SB 69

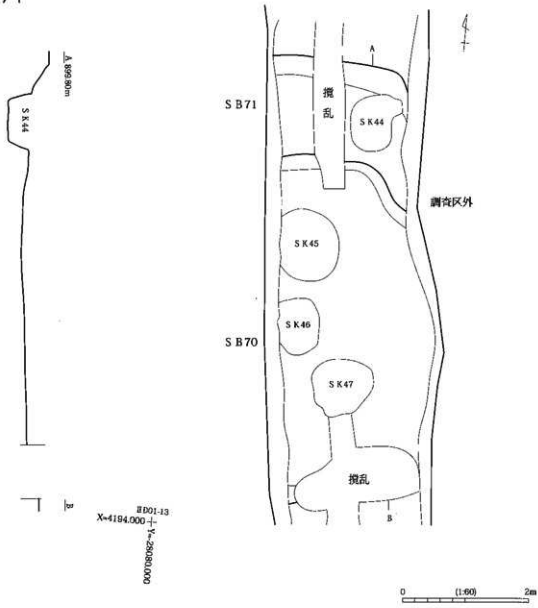


SB 69 黒曜石出土状況

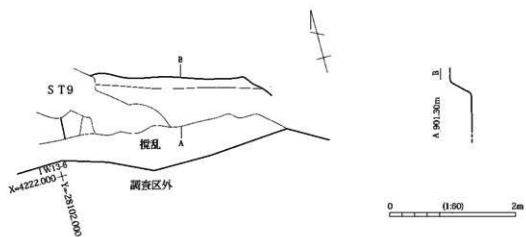


第39図 第69号竪穴住居跡 (SB 69)

SB70·71

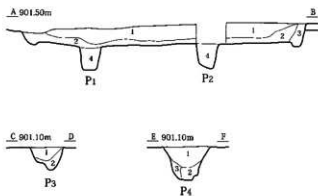
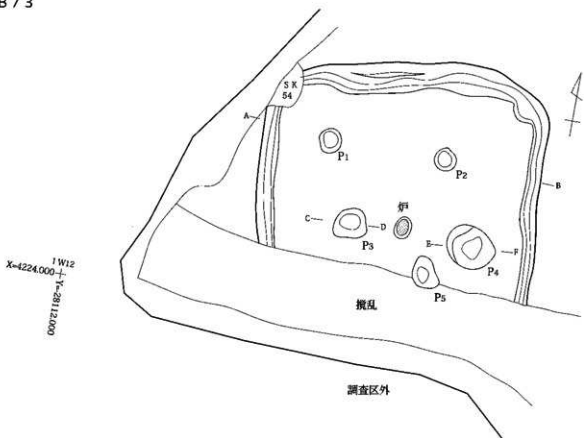


SB72



第40图 第70·71·72号整穴住居跡 (SB70-72)

SB73



SB73

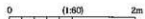
- 1 2.5Y4/2 明灰黄色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を1~2%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 2 2.5Y4/2 明灰黄色土 10YR6/8 明灰褐色ローム粒を3%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 3 2.5Y7/6 明黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを3%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 4 2.5YR4/2 明灰黄色土 粘性なし、しまり弱い。

P3

- 1 2.5Y4/2 明灰黄色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを1~3%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 2 2.5Y4/2 明灰黄色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを5%含む。粘性なし、しまり弱い。

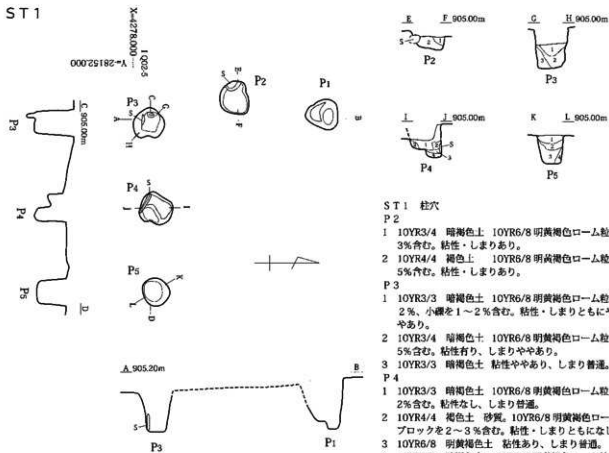
P4

- 1 2.5Y4/2 明灰黄色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを1~3%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 2 2.5Y4/2 明灰黄色土 10YR6/8 明灰褐色ロームブロックを5%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 3 2.5Y7/6 明黄褐色土 粘性なし、しまり弱い。

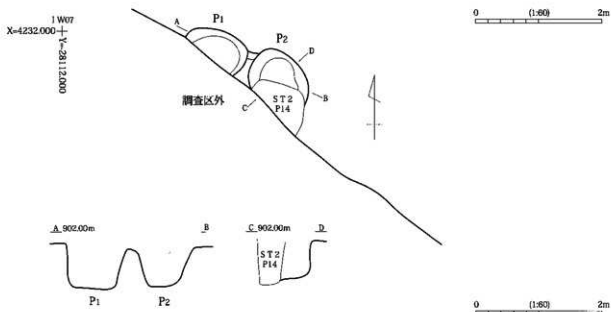


第41図 第73号竪穴住居跡 (SB73)

ST 1

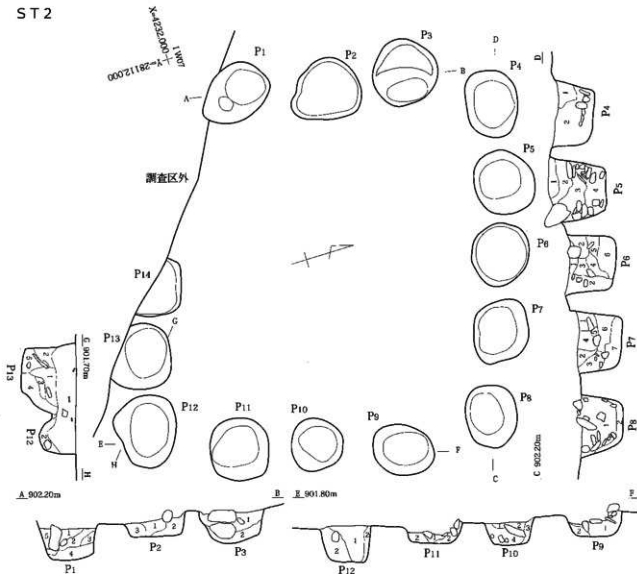


ST 3



第 42 図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST 1・3)

ST 2

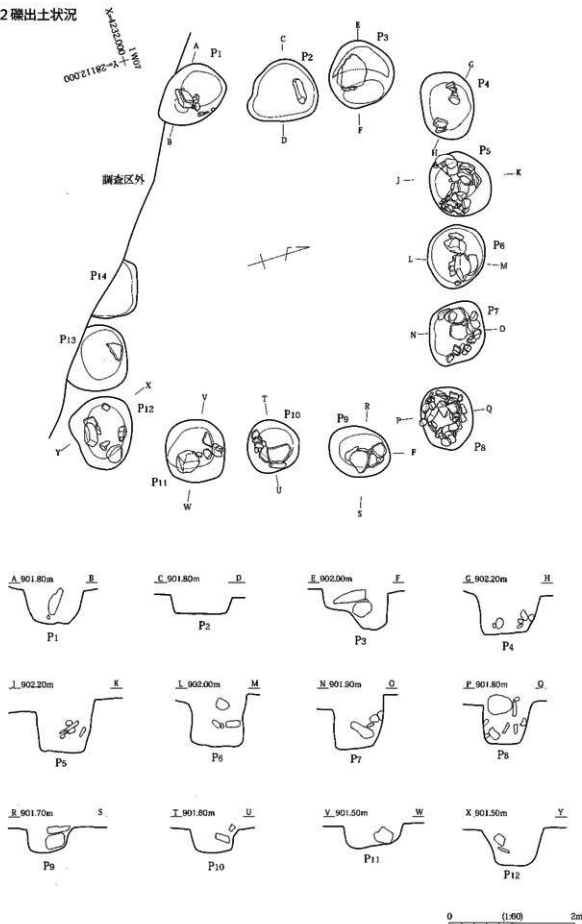


ST 2 柱穴

- | | |
|---|--|
| <p>1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%、径5cmの圓門を10%含む。粘りなし、しまり甚強。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>3 10YR3/6 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。</p> <p>4 10YR4/4 褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を20%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>P 2</p> <p>1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を10%含む。粘性中あり、しまり甚強。</p> <p>3 10YR4/2 赤褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロックを含む。粘性・しまりともにあり。</p> <p>P 3</p> <p>1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>2 10YR4/3 褐色土 径5cm程度の礫を含む。粘性・しまりともになし。</p> <p>3 10YR4/4 褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性強く、しまり強い。</p> <p>P 5</p> <p>1 10YR2/3 黒褐色土 径10cm程度の礫、及び10YR6/8明黄褐色ローム粒を1%含む。粘性・しまりともになし。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を5~10%、及び径3cm以下の小礫を少量含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>3 10YR2/3 黒褐色土 径5~10cmの礫、及び10YR6/8明黄褐色ローム粒を1%含む。粘性あり、しまり甚強。</p> <p>4 10YR2/3 黒褐色土 砂質。10YR6/8明黄褐色ローム粒を2%含む。3との間に表分の層が多少あり。粘性なし、しまり強。</p> <p>P 6</p> <p>1 10YR2/3 黒褐色土 径10cm程度の礫、及び10YR6/8明黄褐色ローム粒を1%含む。粘性・しまりともになし。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を3~10%、及び径3cm以下の小礫を少量含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>3 10YR2/3 黒褐色土 径5~10cmの礫、及び10YR6/8明黄褐色ローム粒を2~5%含む。また、ごくわずかに炭化物を含む。粘性あり、しまり甚強。</p> <p>4 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、しまり甚強。</p> <p>5 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を2%、及び径10cmの礫を含む。粘性なし、しまり甚強。</p> | <p>6 10YR3/3 暗褐色土 砂質。10YR6/8明黄褐色ローム粒を2%含む。粘性なし、しまり有り。5との間に表分が凝結して硬い。</p> <p>P 7</p> <p>1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を3~5cmの礫を含む。粘性・しまりともになし。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を5%含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>3 10YR3/4 暗褐色土 2両翼だがロームブロック・粒の割合が多い。</p> <p>4 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を2%、及び炭化物をわずかに含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>5 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、しまり甚強。</p> <p>6 10YR3/4 暗褐色土 径5cm程度の礫を含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>7 10YR3/3 暗褐色土 砂質。粘性なし、しまり有り、強い。</p> <p>P 8</p> <p>1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を5%含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 粘性強く、しまり甚強。</p> <p>P 9</p> <p>1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を2~5%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>P 10</p> <p>1 10YR6/8 明黄褐色土 粘性なし、しまり甚強。</p> <p>2 10YR2/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>4 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性強く、しまり甚強。</p> <p>P 11</p> <p>1 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を2~5%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>2 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を40%含む。粘性なし、しまり甚強。</p> <p>P 12</p> <p>1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性・しまりともに有り。</p> <p>2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を20%含む。粘性・しまりともに有り。</p> <p>P 13</p> <p>1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性あり、しまり甚強。</p> <p>2 10YR4/4 褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性あり、しまり中や有り。</p> <p>3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロック・粒を1よりも多く含む。粘性あり、しまり甚強。</p> <p>4 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8明黄褐色ロームブロックを5%含む。粘性あり、しまり甚強。</p> <p>5 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり、しまり甚強。</p> |
|---|--|

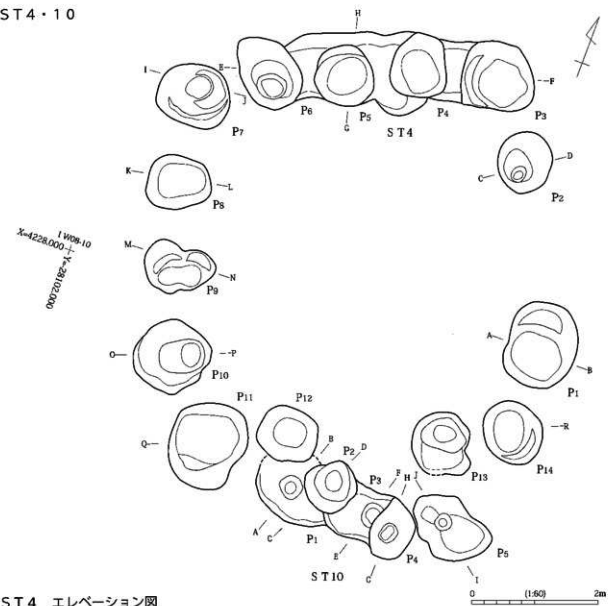
第43図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST 2) 1

ST 2 出土土状况

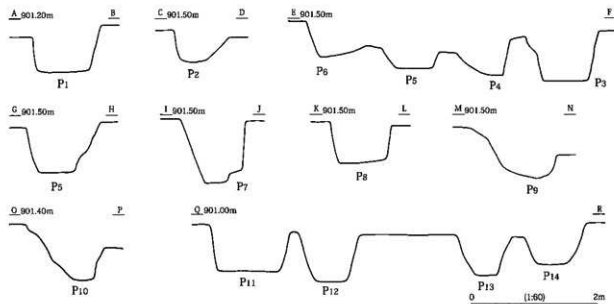


第 44 図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST 2)

ST4・10

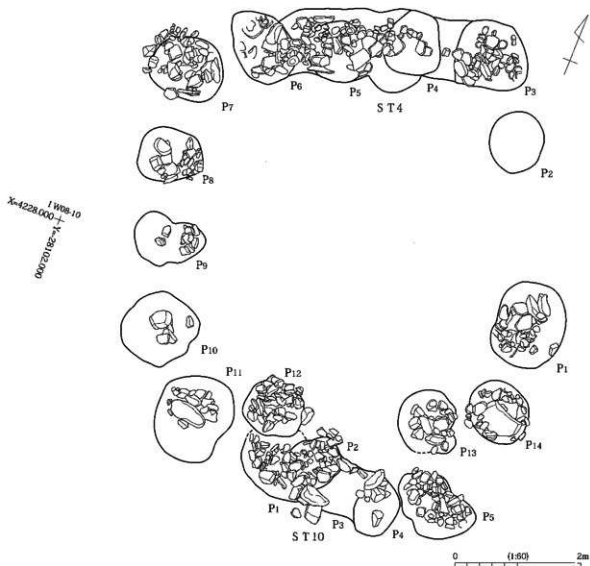


ST4 エレベーション図

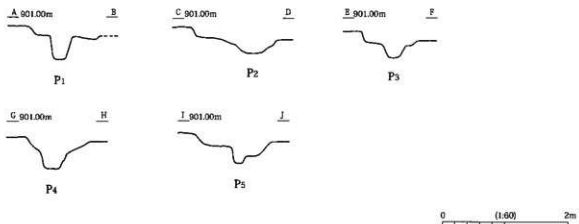


第45図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST4・10) 1

ST4・10 礫出土状況



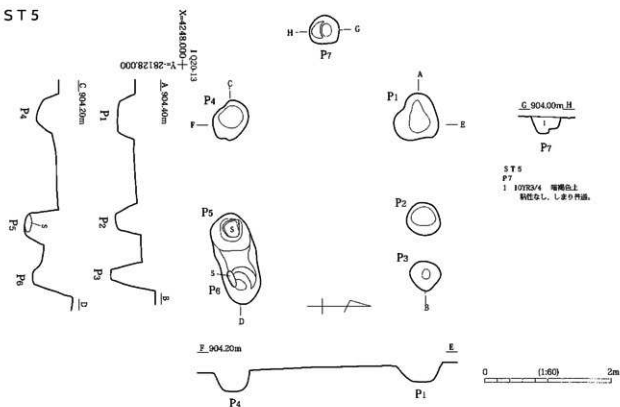
ST10 エレベーション図



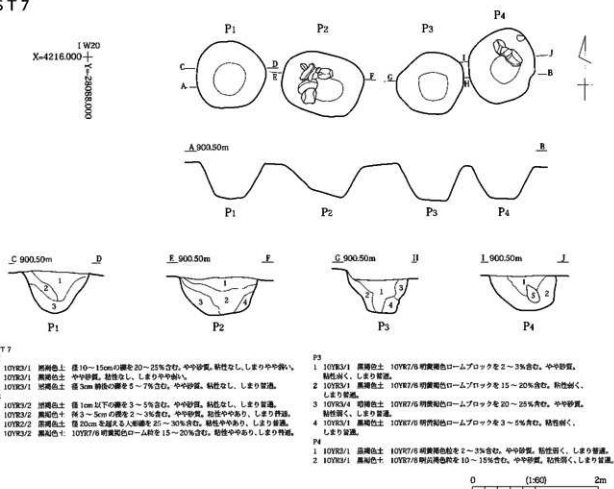
第46図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST4・10) 2

第3章 縄文時代の遺構

ST 5



ST 7



ST 7

- P1
 1 10YR3/1 黒褐色土 厚10～15cmの層を20～25%含む、やや砂質、粘性なし、しまりやや弱い。
 2 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし、しまりやや弱い。
 3 10YR3/1 黒褐色土 厚3cm前後の層を5～7%含む、やや砂質、粘性なし、しまり普通。
 P2
 1 10YR3/2 黒褐色土 厚1cm以下の層を3～5%含む、やや砂質、粘性なし、しまり普通。
 2 10YR3/2 黒褐色土 厚3～5cmの層を2～3%含む、やや砂質、粘性ややあり、しまり普通。
 3 10YR2/2 黒褐色土 厚20cmを超えたる人形跡を20～30%含む、粘性ややあり、しまり普通。
 4 10YR3/2 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色ローム殻を15～20%含む、粘性ややあり、しまり普通。

P3

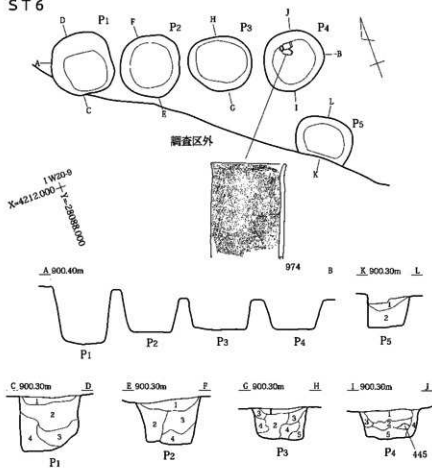
- 1 10YR3/1 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色ロームブロックを2～3%含む、やや砂質、粘性強く、しまり普通。
 2 10YR3/1 黒褐色土 10YR3/6 明黄褐色ロームブロックを15～20%含む、粘性強く、しまり普通。
 3 10YR3/4 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色ロームブロックを20～25%含む、やや砂質、粘性強く、しまり普通。
 4 10YR3/1 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色ロームブロックを3～5%含む、粘性強く、しまり普通。

P4

- 1 10YR3/1 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色土を2～3%含む、やや砂質、粘性強く、しまり普通。
 2 10YR3/1 黒褐色土 10YR7/6 明黄褐色土を10～15%含む、やや砂質、粘性強く、しまり普通。

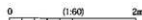
第 47 図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST 5・7)

ST 6

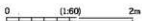
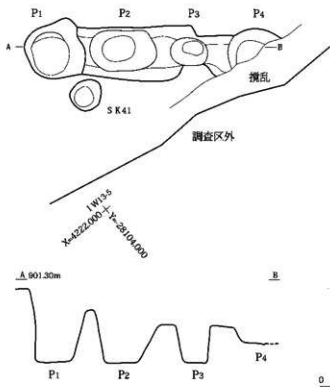


ST 6

- P1
- 1 10YR2/3 黒褐色土 砂質。径2cmの円鑿を1~2%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 2 10YR2/4 暗褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒を5~7%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 3 10YR3/2 暗褐色土 粘性なし。しまり普通。
 - 4 10YR3/2 暗褐色土 10YR7/6明黄褐色ロームブロックを7~10%含む。粘性なし。しまり普通。
- P2
- 1 10YR2/3 黒褐色土 砂質。径2cm大の円鑿を1~2%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 2 10YR2/4 暗褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒を7~10%及び円鑿1~2%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒・ブロックを10~15%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 4 10YR5/4 赤い・黄褐色土 円鑿を3~5%含む。粘性あり。しまり普通。
- P3
- 1 10YR2/3 黒褐色土 砂質。径2cm大の円鑿を1~2%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒を7~10%及び円鑿1~2%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒・ブロックを10~15%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 4 10YR5/4 赤い・黄褐色土 円鑿を3~5%含む。粘性あり。しまり普通。
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒を3~5%含む。粘性なし。しまり普通。
- P4
- 1 10YR2/3 黒褐色土 砂質。径2cm大の円鑿を1~2%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒を5~7%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒を2~3%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 4 10YR2/4 暗褐色土 砂質。径2~5cm大の鑿を2~3%含む。粘性なし。しまり普通。
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 砂質。10YR6/6明黄褐色ローム粒2~3%及び径5cmの鑿を1~5%含む。粘性あり。しまり普通。
- P5
- 1 10YR2/3 黒褐色土 径2cm大の円鑿を1~2%含む。砂質。粘性なし。しまり普通。
 - 2 10YR2/4 暗褐色土 10YR7/6明黄褐色ローム・ブロックを7~10%含む。粘性なし。しまり普通。

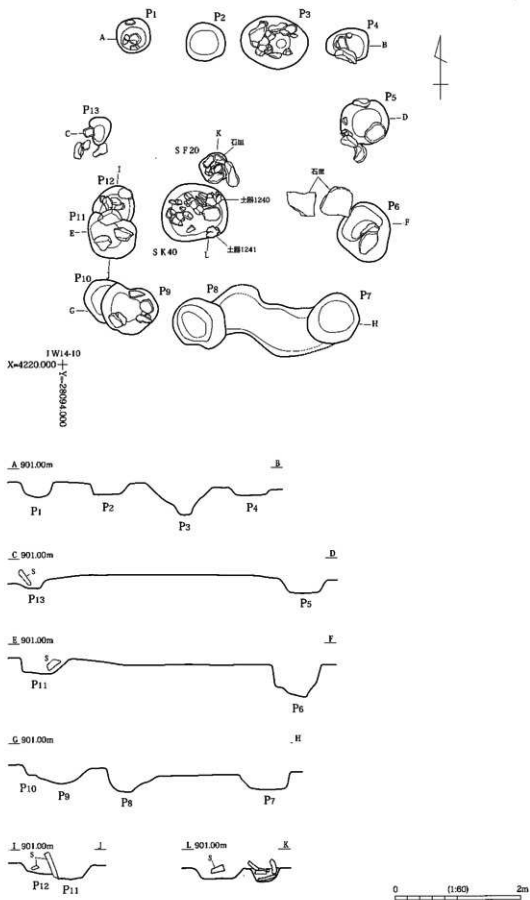


ST 9

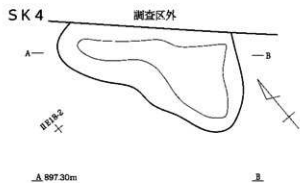


第48図 掘立柱建物跡・方形柱六列 (ST 6・9)

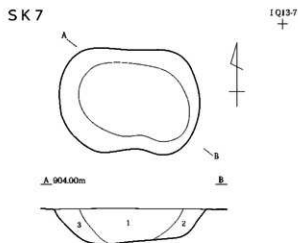
ST 8



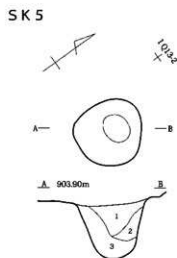
第49図 掘立柱建物跡・方形柱穴列 (ST 8)



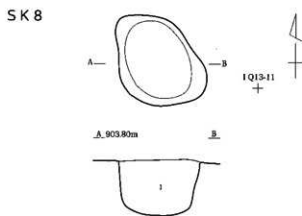
SK 4
1 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし、しまり普通。



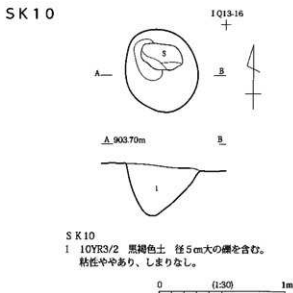
SK 7
1 10YR2/3 黒褐色土 黄色粒を3%、径3~5cmの小礫を若干含む。粘性弱く、しまりあり。
2 10YR3/3 暗褐色土 黄色粒を若干含む。砂質。粘性弱く、しまりあり。
3 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり、しまり普通。



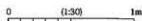
SK 5
1 7.5YR3/3 暗褐色土 小礫を若干含む。粘性ややあり、しまり普通。
2 10YR4/4 褐色土 黄色粒を均質に含む。粘性ややあり、しまり普通。
3 10YR3/3 暗褐色土 黄色粒を7~10%含む。粘性・しまり、ともにあり。



SK 8
1 10YR3/2 黒褐色土 径5~10cm大の礫を含む。粘性ややあり、しまりなし。

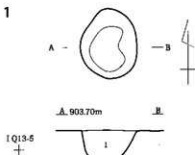


SK 10
1 10YR3/2 黒褐色土 径5cm大の礫を含む。粘性ややあり、しまりなし。



第50図 土坑 (SK 4・5・7~10)

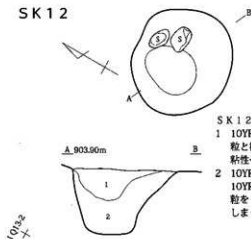
SK 11



SK 11

- 1 10YR3/2 黒褐色土
径 5 cm 大の礫を含む。粘
性ややあり、しまりなし。

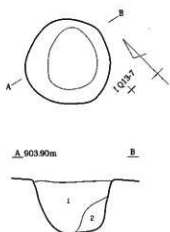
SK 12



SK 12

- 1 10YR2/3 暗褐色土 黄色
粒と軽小礫を若干を含む。
粘性ややあり、しまりあり。
2 10YR2/3 暗褐色土
10YR6/8 明黄褐色ローム
粒を 20% 含む。粘性あり、
しまりあり。

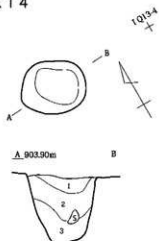
SK 13



SK 13

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック
及び小礫を含む。粘性あり、しまりあり。
2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色粒を含む。粘性
強く、しまりあり。

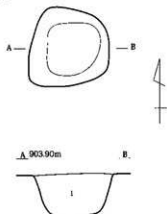
SK 14



SK 14

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性
ややあり、しまりあり。
2 10YR3/3 暗褐色土
10YR6/8 明黄褐色ローム
粒を 20% 含む。粘性あり、
しまりあり。
3 10YR3/3 暗褐色土
10YR6/8 明黄褐色ローム
ブロックを 15% 含む。粘
性あり、しまりあり。

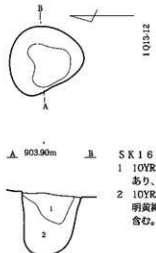
SK 15



SK 15

- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色
ロームブロックを含む。

SK 16



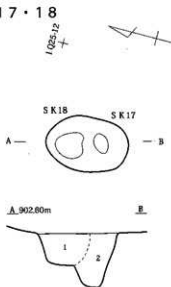
SK 16

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや
あり、しまりあり。
2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/8
明黄褐色ロームブロック・粒を
含む。粘性あり、しまりあり。

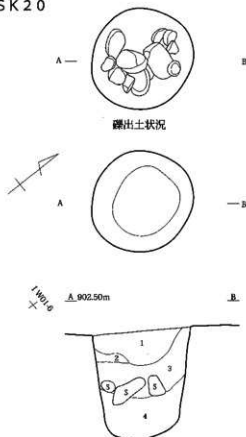
第 51 図 土坑 (SK 11~16)

0 (1:30) 1m

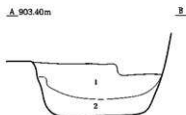
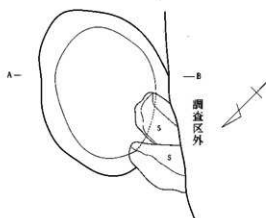
SK17・18



SK20



SK21



SK21

- 1 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を2%及び炭化物を1%含む。粘性なし、しまり普通。
- 2 10YR3/2 黒褐色土 砂質。10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を5%含む。粘性なし、しまりあり。

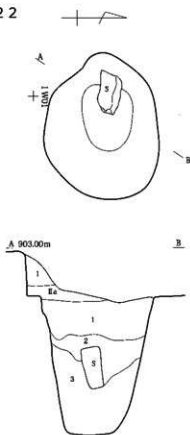
SK20

- 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性・しまりともに弱い 径2mm以下のローム粒を20%含む
- 2 10YR6/8 黄褐色土
- 3 10YR4/4 褐色土 ローム粒20%含む。粘性・しまりともにやや有り。しまりやや良い 粘性やや有り
- 4 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック粒を20%含む。粘性有り、しまり良い。

第52図 土坑 (SK17・18・20・21)



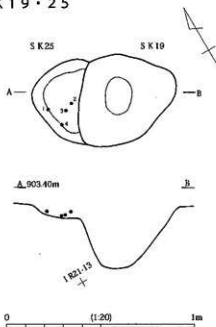
SK 22



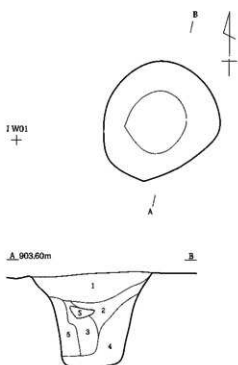
SK 22

- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5%、極小礫を5%、炭化物を極少量含む。粘性弱く、しまりあり。
- 2 7.5YR3/2 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を7%含む。粘性なし、しまりなし。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を15%含む。粘性なし、しまりなし。

SK 19・25



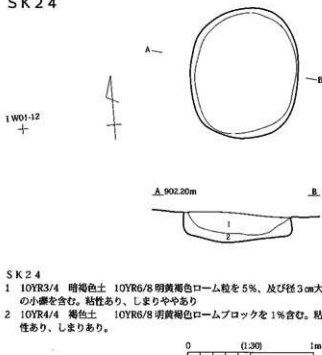
SK 23



SK 23

- 1 10YR3/4 暗褐色土 径3~5cmの小礫を含む。粘性あり、しまり普通。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を10%含む。粘性あり、しまりなし。
- 3 10YR4/4 褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5~10%、及び径3cm大の小礫を含む。粘性なし、しまりなし。
- 4 10YR4/6 褐色土 砂質。10YR6/8 明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性なし、しまりなし。
- 5 10YR4/6 褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を20%含む。粘性なし、しまりなし。

SK 24



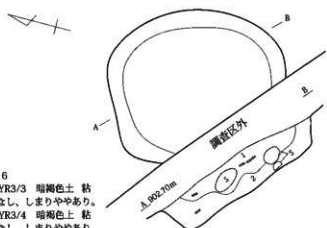
SK 24

- 1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を5%、及び径3cm大の小礫を含む。粘性あり、しまりややあり
- 2 10YR4/4 褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを1%含む。粘性あり、しまりあり。

第53図 土坑 (SK 19・22~25)

I025-7

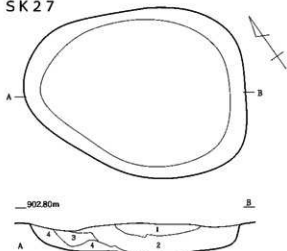
SK 26



SK 26

- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし、しまりややあり。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、しまりややあり。

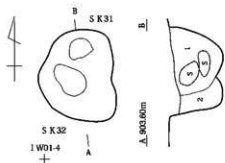
SK 27



SK 27

- 1 10YR2/3 黒褐色土 径3cm大の小礫を含む。粘性なし、しまりなし。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 10YR3/3 明黄褐色ローム粒を2%含む。粘性なし、しまりなし。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 10YR3/3 明黄褐色ローム粒を3%含む。粘性なし、しまりなし。
- 4 10YR3/4 暗褐色土 10YR3/3 明黄褐色ローム粒を20%含む。粘性ややあり、しまりややあり。

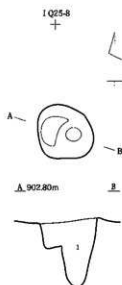
SK 31・32



SK 31

- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりやや強い 粘性なし ローム粒2%程度含む。

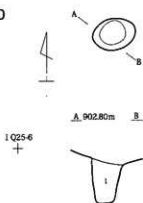
SK 28



SK 28

- 1 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを含む。

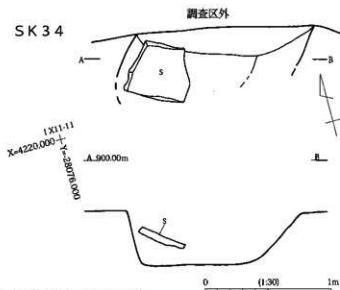
SK 30



SK 30

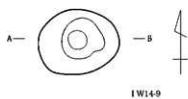
- 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。

SK 34



第54図 土坑 (SK 26~28・30~32・34)

SK 35

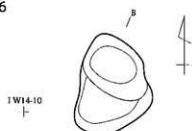


A 901.00m

B



SK 36

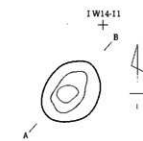


A 901.00m

B



SK 37

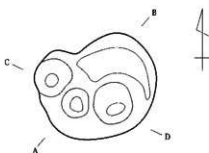


A 901.00m

B



SK 38



IW14-15

A 901.00m

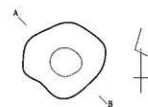
B



C 901.00m

D

SK 39



A 900.40m

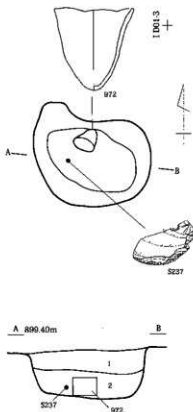
B



0 (1:30) 1m

第55図 土坑 (SK 35~39)

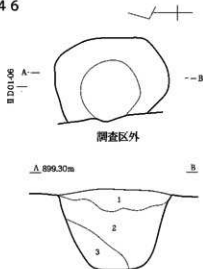
SK 44



SK 44

- 1 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロック・粒を5~7%含む。粘性あり、しまりあり。
- 2 10YR4/4 褐色土 10YR3/1 黒褐色ブロックを3%含む。粘性あり、しまりあり。

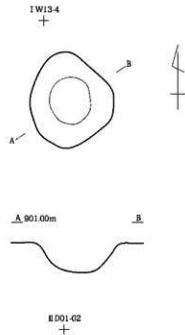
SK 46



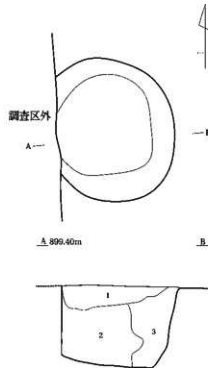
SK 46

- 1 10YR3/1 黒褐色土 やや砂質。粘性弱く、しまり普通。
- 2 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを5~7%含む。粘性あり、しまりあり。
- 3 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを3%前後含む。粘性あり、しまりあり。

SK 42



SK 45



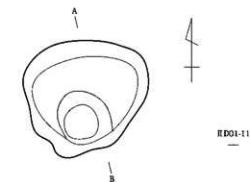
SK 45

- 1 10YR3/1 黒褐色 やや砂質。粘性弱く、しまり普通。
- 2 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを3%前後含む。粘性あり、しまりあり。
- 3 10YR3/1 黒褐色土 10YR6/8 明黄褐色ロームブロックを5~7%含む。粘性あり、しまりあり。

0 (1.30) 1m

第56図 土坑 (SK 42・44・45・46)

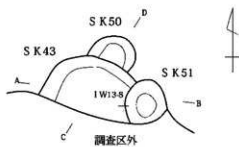
SK47



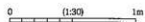
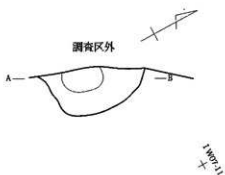
SK47

- 1 10YR3/1 黒褐色土 やや砂質、粘性弱く、しまり普通。
 2 10YR4/4 褐色土 粘性あり、しまりあり。

SK43・50・51

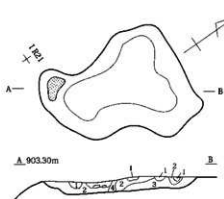


SK54



第57図 土坑 (SK43・47・50・51・54)

SF 1



SF 1

- 1 5YR5/6 明赤褐色焼土。
- 2 10YR3/2 黒褐色土 焼十粒及び径2cm以下の小礫を2%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 3 10YR3/2 黒褐色土 径2cm以下の小礫を含む。粘性なし、しまり弱い。
- 4 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。攪乱(木板?)か。

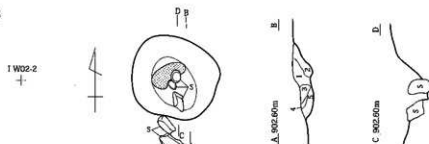
SF 2



SF 2

- 1 7.5YR5/8 明黄褐色焼土。
- 2 7.5YR4/3 褐色土 炭化物を含む。粘性普通、しまりあり。
- 3 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を1%、炭化物を20%含む。粘性普通、しまりあり。
- 4 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を1%以下、炭化物を3%含む。粘性普通、しまりあり。

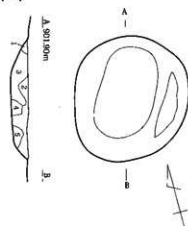
SF 3



SF 3

- 1 10YR3/2 黒褐色土 焼十粒を2%含む。粘性なし、しまりなし。
- 2 7.5YR4/3 褐色土 焼土粒、炭化物を2%含む。粘性なし、しまりなし。
- 3 5YR5/8 明赤褐色焼土
- 4 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を2%含む。粘性なし、しまりなし。
- 5 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒を5%含む。粘性なし、しまりなし。

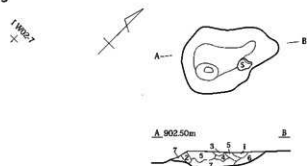
SF 4



SF 4

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし、しまり弱い。
- 2 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を3~5%含む。粘性なし、しまり弱い。
- 3 10YR4/4 褐色土 焼土粒を7~10%、骨片をわずかに含む。粘性なし、しまり弱い。
- 4 10YR7/8 黄褐色焼土 粘性なし、しまりあり。強い。
- 5 10YR3/3 明褐色土 焼土粒を7~10%含む。粘性なし、しまり弱い。

SF 5



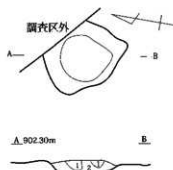
SF 5

- 1 5YR6/8 橙色焼土 粘性なし、しまりあり。
- 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、しまりあり。攪乱(木板?)か。
- 3 10YR3/3 黒褐色土 焼土粒を含む。粘性なし、しまりなし。
- 4 7.5YR4/6 褐色土 焼土ブロックを含む。粘性ややあり、しまり普通。
- 5 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒を2%含む。粘性なし、しまりなし。攪乱(木板?)か。
- 6 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を1%含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 7 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒およびローム粒を含む。粘性ややあり、しまりあり。

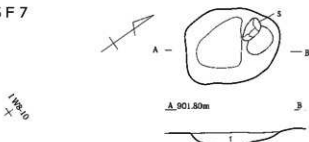
0 (1:30) 1m

第 58 図 屋外炉 (SF 1~5)

SF 6



SF 7



SF 7

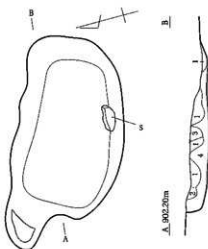
1 10YR2/3 黒褐色土 焼上ブロック・粒子を7～10%含む。粘性なし、しまり普通。

SF 8

SF 6

- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 焼上粒を20%含む。粘性あり、しまり普通。
2 10YR2/2 黒褐色土 焼上粒・炭化物を1%含む。粘性ややあり、しまり普通。

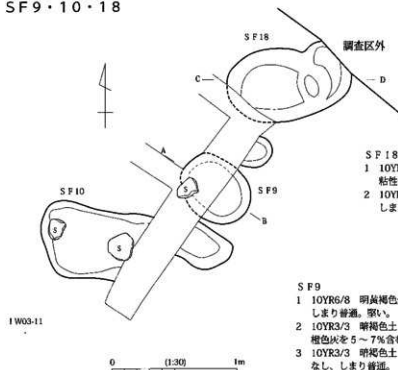
1W06-9



- SF 8
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、しまり弱い。
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、しまりあり。
3 10YR7/8 黄褐色焼土 粘性なし、しまりあり。
4 10YR2/3 黒褐色土 焼上粒を3～5%含む。粘性なし、しまり普通。

1W07-3

SF 9・10・18



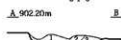
1W03-11



SF 18

- 1 10YR6/8 明黄褐色焼土 10YR6/3 黄褐色灰を含む。粘性ややあり、しまりなし。
2 10YR3/3 暗褐色土 焼上粒を10%含む。粘性なし、しまり普通。

SF 9

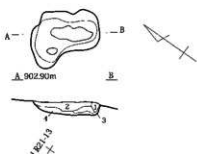


SF 9

- 1 10YR6/8 明黄褐色焼土 10YR6/3 に近い黄褐色灰を含む。粘性なし、しまり普通。弱い。
2 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/6 明黄褐色焼土粒及び 10YR6/3 に近い黄褐色灰を5～7%含む。粘性なし、しまり普通。
3 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/6 明黄褐色焼土粒を2～3%含む。粘性なし、しまり普通。

第59図 屋外炉 (SF 6～10・18)

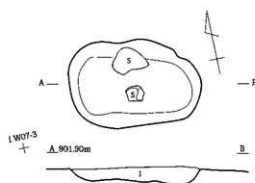
SF 11



SF 11

- 1 焼土
- 2 10YR3/2 黒褐色土 径2cmの焼上ブロックを含む。粘性・しまりともにややあり。
- 3 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物を2%含む。粘性・しまりともにややあり。
- 4 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物を1%含む。粘性・しまりともにややあり。

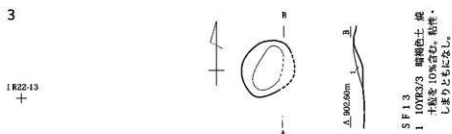
SF 12



SF 12

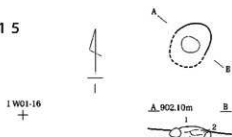
- 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR7/2 に近い黄褐色灰を20～25%含む。粘性なし、しまり普通。

SF 13



- SF 13
- 1 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を10%含む。粘性・しまりともになし。

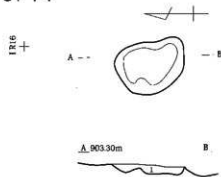
SF 15



SF 15

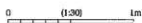
- 1 5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性あり、しまりなし。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり、しまりなし。掘乱(木根?)か。
- 3 7.5YR5/6 明褐色土 焼土粒を1%、小礫を2%含む。粘性・しまりともにあり。

SF 14

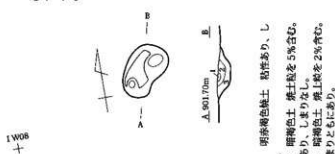


SF 14

- 1 10YR3/4 暗褐色土 砂質。径1cmの小礫を30%、焼土粒をわずかに含む。粘性なし、しまりややあり。



SF 16

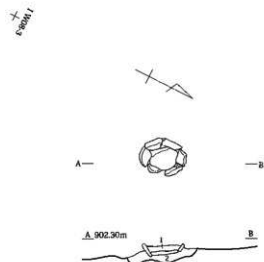


SF 16

- 1 5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性あり、しまりなし。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を5%含む。粘性ややあり、しまりなし。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を2%含む。粘性・しまりともにあり。

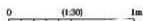
第60図 屋外炉 (SF 11-16)

SF19

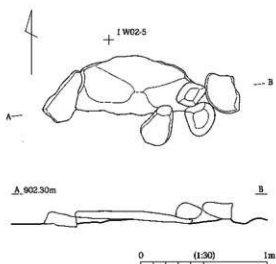


SF19

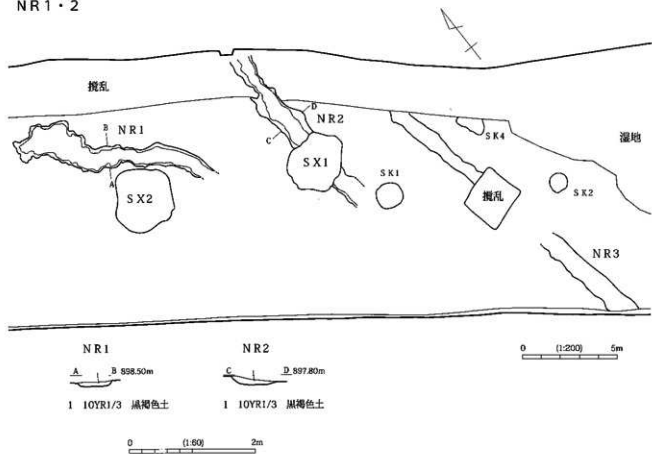
- 1 10YR3/4 暗褐色土 炭化物を1~2%含む。粘性弱く、しまり普通。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR6/8 明黄褐色ローム粒を3%含む。粘性・しまりともなし。



SH1



NR1・2



第61図 屋外炉、記石遺構、流路跡 (SF19, SH1, NR1・2)

第4章 縄文時代の遺物

第1節 遺物出土状況

1. 縄文土器

今回の調査で出土した縄文土器の総重量は598.8kgを量る。時期は早期後葉～末葉、前期初頭～前葉、前期後葉～末葉、中期後葉、後期前葉だが、主体は前期初頭～前葉で、そのほかは合計しても1%に満たない。前期初頭～前葉土器は無文や全面縄文施文の破片資料が多く、小破片では個体識別を明確に行うことができないので、土器の出土量は個体数ではなく重量比で表現した。

遺構出土土器には早期末葉、前期初頭～前葉、中期後葉が認められ、その内の早期末葉と中期後葉は断片的な資料にすぎない。第3章で出土土器の時期を重量比で示したとおり、ある一時期・段階の土器が単独で出土した例はほとんどなく、重量の差異はみられるが、主体となる前期初頭～前葉、あるいは早期末葉と時期幅をもちながら出土した例が圧倒的に多い。しかし、出土状況は、早期末葉～前期前葉における全ての段階の土器が満遍なく出土するのではなく、前期初頭の土器（早期末葉を含む場合もある）と前期前葉のある段階と考えられる土器が、混在する状況である。また、土器の遺存状態についても、破片の状態が早期末葉～前期前葉の土器が出土するような例と、例えば早期末葉～前期前葉の破片と前期前葉の略完形個体が1～複数個体出土するような例がみられる。

遺構外出土土器は、圧倒的な量を誇る前期初頭～前葉土器に混在して、極めて少量の早期後葉～末葉、前期後葉～末葉、中期後葉、後期前葉土器がみられた。第62図は、2mグリッドごとの出土重量を、1000g単位で示している。前期初頭～前葉土器は調査区全体で出土し、IQ20グリッド付近からIW20グリッド付近に至る長さ約61m、幅約13mの範囲で出土したものが多く、特に、調査区中央からやや西側のIW03・08・09・14グリッド付近と、IQ20・25、IR16グリッド付近には分布が集中してみられる。竪穴住居跡・方形柱穴列・屋外炉などが位置するグリッドや、そうした遺構に挟まれたグリッドの出土量が極めて多く、さらに、調査区中央から南東・北西方向へと遺構分布密度が薄くなるに従い、土器の出土量が極端に減少するといった傾向が読み取れる。この状況から、前期初頭～前葉土器の分布は、遺構の分布と重複するといえそうである。

土器は破片の状態で出土したものが多く、接合作業を経て個体として復元されたものは、全重量からすればごく少量に止まる。前期初頭～前葉において、各時期・段階で纏まりをもつ、あるいは特定地点に集中するといったような傾向は認められず、混在しながら出土した。また、層位的には、基本層序の第IIb層を主体としながら、第IIa層下部と第IIc層上部に跨って出土し、各時期・段階によって出土層序・レベル等が異なるような状況はない。

量的にはごく少量の、前期初頭～前葉以外の土器も層位的に分かれることなく、第IIb層を主体に前期初頭～前葉土器とともに出土したが、出土位置については纏まる傾向が認められる。中期後葉の土器は、分布が調査区全体には及ばず、北西側と南東側の両端に近いIQ08・13・14グリッド付近と、II10グリッドよりも南東方向のグリッドに比較的纏まる。特に、II10グリッドよりも南東方向は、湿地に至る緩斜面であり、湿地縁辺のII18グリッドでは中期後葉と推測される土坑(SK4)が検出されている。

後期前葉ではIQ18グリッドの、調査区境南壁付近において、ほぼ完形に近い1個体の土器が潰れた

状態で出土した(第129図1273)。周辺部の精査を実施したが、遺構等の痕跡は把握できなかった。しかし、後期前葉土器は個体で遺存していた状況から、前期初頭～前葉土器を包含する基本層序第Ⅱb層を掘り込む遺構が存在して、その遺構に伴う遺物であった可能性も考えられる。

2. 石器

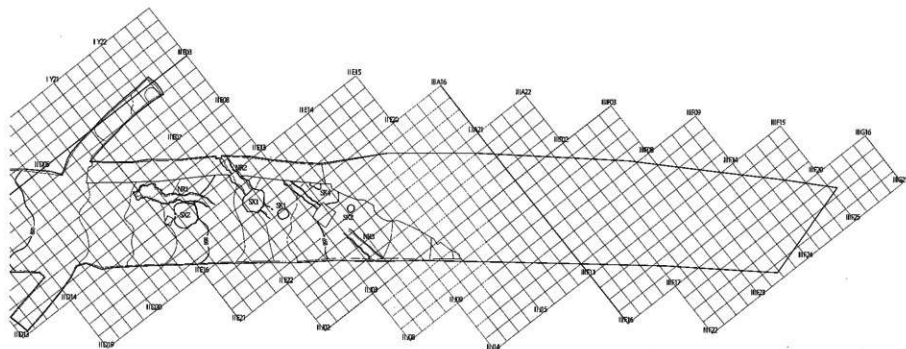
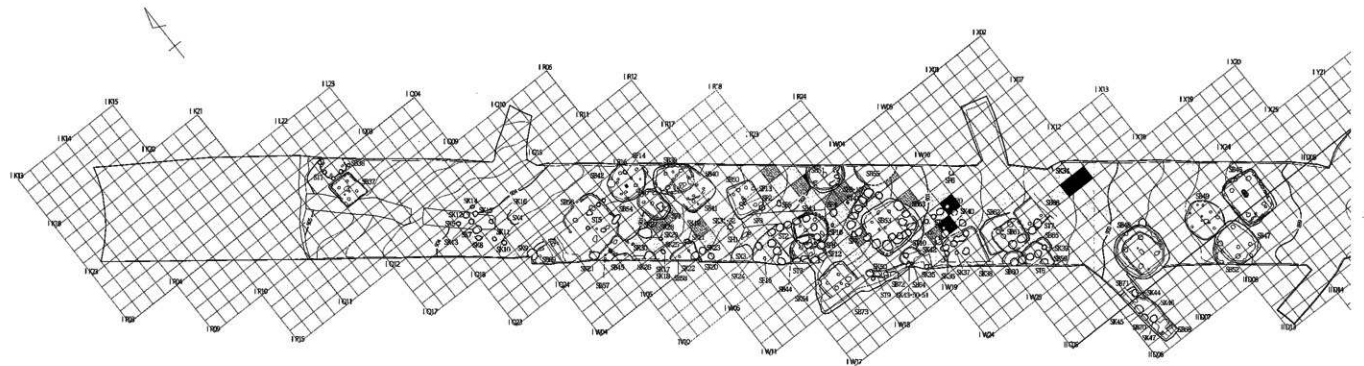
今回の調査で出土した石器の総数は、57,147点を数える。出土量について、土器は重量をもって示したが、石器は点数で示す。石器の時期は、遺構・遺構外ともに出土した土器の主体が前期初頭～前葉なので、石器も前期初頭～前葉に所属するものが多いと考えられる。しかし、遺構については早期末葉、遺構外については早期後葉～末葉、前期後葉～末葉、中期後葉、後期前葉の土器が若干認められるので、そうした時期の石器が含まれている可能性は高い。

遺構出土石器は覆土において、土器とともに出土した。各遺構の出土点数は、本文第3章で触れたとおりである。その中で、第69号竪穴住居跡(S B 69)では、床面から覆土にかけて、黒曜石製の石鏃など小形石器とともに、合計36点、総重量2173.11gの黒曜石原石、石鏃未製品、両極石器、凹石類、840点の剥片類が出土し、黒曜石製の石鏃製作工程を示すと推測される資料がみられる点に注目される(これについては後述する)。

遺構外出土石器については剥片類を除き、出土量を第63図に2メートルグリッドごと、50点単位で示した。石器の分布は調査区全体に及ぶが、I Q 19・20グリッド付近からI W 20グリッド付近に至る範囲に多く、特にI Q 20・25、I R 16グリッド付近やI W 03・08・09・14・15グリッドに集中する。遺構が存在するグリッドや、遺構に挟まれたグリッドでの出土量が極めて多く、遺構分布密度が薄いグリッドへと移行するに従い出土量が減少するなど、土器と同様の傾向を読み取ることができる。この状況から、石器の出土量が多いグリッドでは、前期初頭～前葉を主体とする土器の出土量も多く、石器のみが遺存していたような状況は存在しなかったといえる。また、石器の特定器種のみが、遺存するような状況もみられず、例えば石鏃が多く出土したグリッドでは、スクレイパーなどほかの器種並びに剥片類も総じて多く、さらに前期初頭～前葉主体の土器の出土量も多い、といった状況が指摘できる。出土層序も、基本層序の第Ⅱb層を主体に、第Ⅱa層下部と第Ⅱc層上部に跨る。

3. 遺構外出土遺物の性格

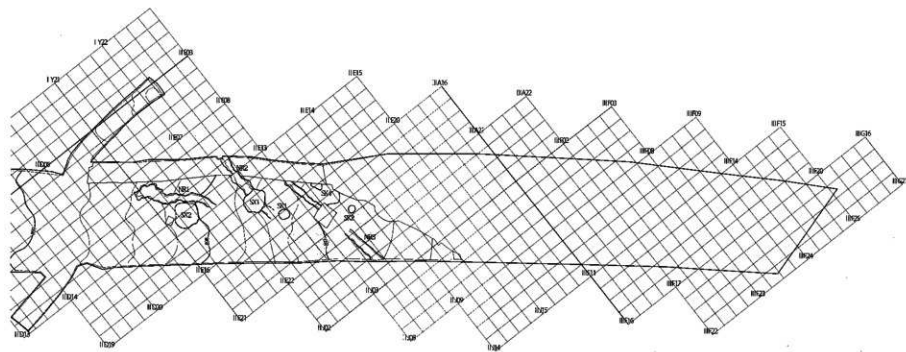
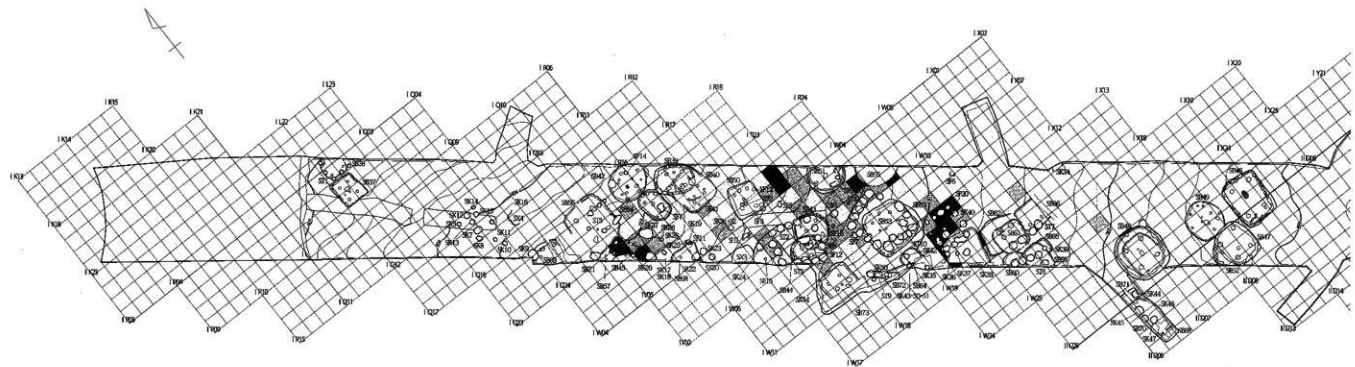
遺構外遺物が多く出土した、グリッド(位置・範囲)の性格は不明といわざるを得ない。しかし、遺構密度の高い範囲と遺物量の多いグリッドが一致し、グリッドと竪穴住居跡の覆土で、前期初頭～前葉土器と石器が混在して出土するなどといった共通性が指摘されることから、可能性の一つとして遺構との関係が考慮される。遺構は土器が多量に出土した、基本層序第Ⅱb層で検出され、第Ⅲ層を掘り込み、床面を形成する例が多い。しかし、調査では不明確であったが、第Ⅱb層よりも上部から掘り込まれ、第Ⅱb～c層に底面や床面を形成した遺構が存在すれば、第Ⅱb層の一部は遺構覆土であった可能性も生ずる。竪穴住居跡を例にみると、床面に貼床や硬化面を伴うものは少数で、第Ⅲ層を掘り込み、床面を形成するものでなければ、第Ⅱb～c層中で壁の立ち上がりや床面を検出するのは困難である。また、屋外炉の一部が竪穴住居跡の炉と同一規模・形態で、さらに遺物分布量の多いグリッドに位置するのは(第3章第7節参照)、そうした検出漏れの竪穴住居跡が存在した可能性を示唆する要素の1つでもあろう。その一方で、遺構と重複して遺構外遺物が出土するのは、ほかの地点に位置する、あるいはほかの時期に所属する遺構の、捨て場的性格をもつ場であった可能性も考えられる。



- 0~1000 g
- 1001~3000 g
- 3001~5000 g
- 5001~6000 g
- 7001~8000 g

0 1:500 10m

第62図 遺構外出土路の重量分布図(1:500)



- 0 ~ 50 点
- 51 ~ 100 点
- 101 ~ 200 点
- 201 ~ 300 点
- 301 ~ 点

0 1:500 10m

第63区 遺構外出土石器の点数分布図(1:500)

第2節 縄文土器

1. 土器の分類

縄文時代早～後期の土器が出土し、在地系の土器とともに東海系・関東系・新海系と推測される土器が認められる、駒形遺跡出土の縄文土器を分類するにあたり、「群・類・種」の項目を設定する。「群」は時期を、「類」は地域の系統を、「種」は型式あるいは通常用いられている土器の名称で纏まる土器をそれぞれ示し、さらに種の中を文様要素・構成など土器の属性をもって細分した。また、「類」が示す地域の系統とは、その地域で主体となる、いわゆる在地系の土器群（1類）と、それに伴出した東海系（2類）・関東系（3類）の土器群を指す。その中で、東海・関東系としたものは、それが即「搬入品」とであるといった背景はなく、あくまでも分類上の概念で用いる。駒形遺跡出土の縄文土器は、以下のように分類される。

第I群：早期後葉土器群

第1・2類：在地系・東海系土器群 今回の調査では、該当するような資料は出土していない。

第3類：関東系土器群

第1種：器面内外に条痕調整を施し、口唇部を刻み、単沈線で鋸歯状等の文様を口縁部に構成するもの。鶏ヶ島台式に該当する。

第II群：早期末葉土器群

第1類：在地系土器群

第1種：いわゆる「絡糸体疋痕文土器群」を一括する。型式名を提唱する動きはみられるが（中沢1997）、定着していない。絡糸体疋痕文のAが主体で、B～Dが組成する。

A：絡糸体疋痕文で口縁部の文様を構成するもの。

B：沈線で口縁部の文様を構成するもの。

C：燃糸文を施文するもの。器面全面に燃糸文を施文するものと、本来はA・Bの胴部であった破片が含まれる。

D：縄文を施文するもの。Cと同様、器面全面に縄文を施文するものと、本来はA・Bの胴部であった破片が含まれる。

E：条痕のみが認められるもの。Aの胴部であった破片が含まれる。

第2類：東海系土器群

第1種：刺突列で波状等の文様を口縁部に構成するもの。石山式、あるいは例えば、石山式を模倣して製作した土器と考えられる。

第2種：櫛歯状工具で、波状の文様を口縁部に描くもの。天神山式に該当する。

第3種：偏平隆帯で口縁部の文様を構成し、隆帯上部へ貝殻によると思われる刺突を行うもの。木島Ⅱ式（渋谷1983）に該当する。

第4種：口唇部直下へ、口唇部に沿った断面三角形の細隆帯を貼付するもの。胎土に繊維を含まず器厚が薄手な点から本類と推測したが、型式名は不明。

第III群：前期初頭土器群

第1類：在地系土器群

第1種：口縁部に横位・逆T字状の隆帯文を貼付し、縄文もしくは燃糸文を施文するもの。胎土には繊維を含む。塚田式（下平・費田1994）に該当する。

第2種：口縁部が肥厚口縁となり、縄文もしくは捺糸文を施文するもの。4単位波状口縁の場合は波頂部に垂下肥厚部を形成する。胎土には繊維を含む。中道式（児玉1984）に該当する。

第3種：口縁部に横位を主体とし、弧状・波状等の隆帯文を貼付するもの。縄文・捺糸文は施文されず、稀に条痕が認められる。胎土には繊維を含む。従来は、下吉井式に含まれてきた、あるいは周辺地域の下吉井式、信州在地の下吉井式などと呼ばれてきた土器だが、近年、富士見町坂平遺跡（富士見町教委2004）で良好な資料が出土したことに伴い、遺跡名を冠して「坂平式」を設定しようとする動きがある（渋谷2006）。

第2類：東海系土器群

第1種：細隆帯・偏平隆帯で波状等の文様を口縁部に構成し、貝殻と推測される条痕を施すもの。木島Ⅲ式（渋谷1983）に該当する。

第2種：細隆帯・偏平隆帯で波状等の文様を口縁部に構成し、櫛歯状工具によると思われる条線を施すもの。木島Ⅳ式（渋谷1983）に該当する。

第3類：関東系土器群

第1種：捺糸側面瓦痕文で口縁部の文様を構成するもの。花積下層式に該当する。

第2種：波状・円状などの沈線文や結節沈線文と横位の隆帯文で口縁部の文様を構成するもの。下吉井式に該当する。

第IV群：前期前葉土器群

第1類：在地系土器群

第1種：中厚手で器面内外に指頭正痕を残し、口縁部を無文にするもの、単沈線もしくは2～3条の平行沈線で斜格子目文を描くもの、および縄文を施文するもの。胎土は基本的に無繊維だが、繊維を含むものも存在する。中越式に該当する。

A：頸部に段を作出する器形を呈するもの

B：頸部が大きく括れて、口縁部が外反する器形を呈するもの。

C：頸部の括れが浅く、口縁部が比較的短く外反する器形を呈するもの。

D：頸部の括れがほぼ消滅し、全体が逆三角形に近い器形を呈するもの。

第2種：櫛歯状工具による連続刺突文・条線を組み合わせて口縁部の文様を構成するもの。また、単節のほか、附加条、多段ループ文、東の縄文を施文するもの。胎土に繊維を含まない。神ノ木式に該当する。

A：連続刺突文・条線で口縁部の文様を構成するもの。

B：単節、附加条、多段ループ文、東の縄文など、縄文を施文するもの。本来、Aの胴部であった破片も含まれる。

第3種：櫛歯状工具による列点状刺突文・条線、あるいは半截竹管状工具による爪形刺突・平行沈線で文様を構成するもの。有尾式に該当する。

A：列点状刺突文・条線で口縁部の文様を構成するもの。胎土に繊維を含まない。

B：爪形刺突・平行沈線で口縁部の文様を構成するもの。胎土に繊維を含む。

C：Bに組成する可能性がある、縄文施文のもの。胎土に繊維を含む。

第2類：東海系土器群

第1種：頸部に段を作出してつまみ痕や刺突を施し、櫛歯状工具による条線で斜格子目文などを口縁部に描くもの。木島Ⅶ・Ⅷ式（渋谷1983）に該当する。

第2種：頸部に段を作出してつまみ痕や刺突を施し、口縁部は口唇部直下に刺突をもつ以外は無文

になるもの。木島Ⅸ式（渋谷 1983）に該当する。

第3種：口縁部上端に幅狭の文様帯を形成し、斜位方向・矢羽状の刺突を行うもの。いわゆる清水ノ上Ⅱ式（山下 1976）とされてきたものに該当する。

第3類：関東系土器群

第1種：撚糸側面圧痕文、単沈線、刺突、円形刺突、隆帯、刻入細隆帯、ボタン状貼付文等を組み合わせて、口縁部の文様を構成するもの。また、多段ループ文、緩い結節の縄文を施文するもの。二ツ木式に該当する。

- A：撚糸側面圧痕文と刻入細隆帯、円形刺突で口縁部の文様を構成するもの。
- B：単沈線とボタン状貼付文で口縁部の文様を構成するもの。
- C：隆帯と刺突で口縁部の文様を構成するもの。
- D：多段ループ文、緩い結節等、縄文を施文するもの。

第2種：半截竹管状工具による梯子状沈線・平行沈線、ボタン状貼付文等で、口縁部の文様を構成するもの。また、単節、複節、附加条、正反の合、多段ループ文、組紐等の縄文を施文するもの。関山式に該当する。

- A：梯子状沈線・平行沈線、ボタン状貼付文等で文様を構成するもの。
- B：縄文地上に、平行沈線を主体とした文様を構成するもの。
- C：単節、複節、附加条、正反の合、多段ループ文、組紐等の縄文を施文するもの。

第4類：新潟系土器群

第1種：角状の刺突列で口縁部の文様を構成するもの。巻町新谷遺跡で出土した土器（寺崎 1999）に類似する。

第V群：前期後葉～末葉土器群

第1類：在地系土器群

- 第1種：縄文地上に、刻みをもつ浮線文を貼付するもの。諸磯b式に該当する。
- 第2種：矢羽状沈線、ボタン状貼付文で文様を構成するもの。下島式もしくは諸磯c式に該当する。
- 第3種：半隆起線、連続した刺突文で文様を構成するもの。晴ヶ峯式に該当する。

第VI群：中期後葉土器群

第1類：在地系土器群

第1種：隆帯や刺突を組み合わせて文様を構成するもの。唐草文系土器群に該当する。

第2類：東海系土器群 今回の調査では、該当する資料は出土していない。

第3類：関東系土器群

第1種：隆帯およびその両脇を沿う沈線で、U字・逆U字状の文様を構成するもの。また、U字・逆U字状の文様内部には縄文を施文する。加曾利E式に該当する。

第VII群：後期中葉土器群

第1・2類：在地系・東海系土器群 今回の調査では、該当するような資料は出土していない。

第3類：関東系土器群

第1種：2条1対とした単沈線、および円形貼付文で文様を構成するもの。堀ノ内式に該当する。

第Ⅰ～Ⅶ群の中で、駒形遺跡では第Ⅲ・Ⅳ群が主体となる。質・量ともに豊富で、当該期の良好な資料と評価できる。また、量的にはわずかだが第Ⅱ群も存在しており、第Ⅱ～Ⅳ群を統合すれば、駒形遺跡における早期末葉～前期前葉土器群の様相を大枠で把握することが可能である。

以下、第Ⅱ～Ⅳ群土器の様相を明らかにし、前期初頭・前葉については段階を設定しながら、土器の変

遷や周辺地域との関係等を整理する。なお、本節で提示する土器分類や変遷図は、土器編年の構築が目的ではなく、駒形遺跡を評価するための基準（時間軸の設定）である点を付記しておく。

また、第Ⅱ～Ⅳ群以外の土器については、全て断片的な資料なので、一括して概略を述べる程度に止める。縄文土器個々の属性は、本書付録DVDに収録された土器観察表を参照されたい。

2. 第Ⅱ群土器（早期末葉）の様相

(1) 各土器の特徴（第64図）

第Ⅱ群土器は、竪穴住居跡の覆土や遺構外において、第Ⅲ・Ⅳ群土器に混在しながら出土した、少数の断片的な資料である。その出土状況からして、時期の一括性や土器の纏まりなどが保障されるような資料ではないが、以下のように分類される。

第1類

第1種A（1～4）

絡条体圧痕文を施文するものを一括する。1は内外面に縦位方向の絡条体圧痕文を施文するもので、外面は不明確だが、内面には条痕調整がみられる。2は縄文の地文上に、斜位方向の絡条体圧痕文を施文する。内面はナデ調整と推測される。3は横位多段・鋸歯状構成の絡条体圧痕文で、外面の地文・調整は不明確だが、内面はナデ調整である。4は弧状の絡条体圧痕文が施文されている。外面の地文・調整は不明確だが、内面はナデ調整とみられる。

第1種B（5・6）

沈線文で口縁部の文様を構成するものである。5・6は条の密接な燃糸文を地文とし、沈線文で文様を描く。6はさらに、細い隆帯文を貼付する。内面は、ともに条痕調整がみられる。

第1種C（7）

燃糸文を施文するもので、7は口縁下部に低い隆帯文を貼付し、条の密接な縦位方向の燃糸文を施文する。内面はナデ調整である。

第1種D（8・9）

縄文施文のもので、8・9はともに単節縄文を横位方向に施文しており、内面には横位～斜位方向の条痕調整がみられる。

第1種E（10～16）

横位・縦位・斜位方向の条痕調整のみで、11～14の器面内外、10・15・16の外面のみのものが認められる。外面のみの3点は、内面がナデ調整となる。10は口縁下部に、段を作出する。

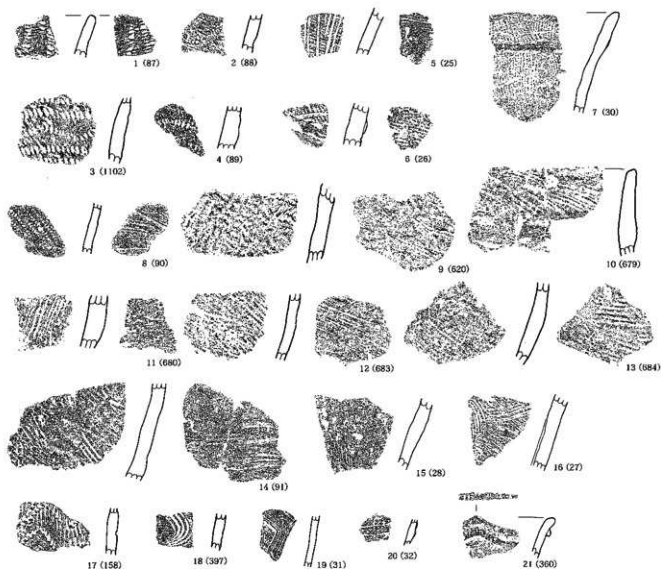
第2類

第1～4種（17～21）

東海系土器群である。17は第1種となり、幅広の板状工具による刺突列で、波状の文様を構成する。波状に沿った隆帯文の痕跡が明瞭ではないので、入海Ⅱ式というよりは石山式、あるいはそれに並行する土器と考えたい。18・19は第2種で、櫛歯状工具により波状文を描く天神山式に該当しよう。20は第3種で、偏平隆帯上に貝殻と思われる刺突を施した木島Ⅱ式（渋谷1983）である。21は第4種で、口唇部直下に断面三角形の細隆帯を貼付するものである。隆帯文の特徴や、胎土に繊維を含まず、器壁が薄いうえに堅緻であるなどの点から、東海系土器群に分類したが、該当する型式名は不明。岡谷市梨久保遺跡23号住居跡出土土器（岡谷市教委1986）の中に、類似する資料がみられる。

(2) 第Ⅱ群土器の評価

第Ⅱ群土器は纏まりをもつような資料ではないので、個々の土器の特徴をもとに、個別に早期末葉土器



第64図 第II群土器

群に対する従来の見解と比較しながら評価せざるを得ない。

長野県における早期末葉土器群は、粕畑式～天神山式並行期の絡条体圧痕文土器群に対する編年研究の成果によって、土器編年が構築されつつある(百瀬 1988)(中沢 1994・1997)(綿田 1993・1996)。絡条体圧痕文土器群は出土資料が少ないうえに、その多くは破片資料といった状況から、共伴した東海系土器群を時期細分の指標としつつ、絡条体圧痕文の地文や、それに伴うとされる条痕・燃糸文・縄文施文土器の有無、器面調整等に注意が払われ編年が構築されている。その内容は、概ね下記のとおりである。

- ① 粕畑式～入海式並行期の土器群は、器面内外に明瞭な貝殻条痕・絡条体条痕を施すものが多い。
- ② 上の山式並行期では、鶴ヶ島台式や茅山式に組成する縄文に系譜が求められると考えられる、縄文施文の土器が認められる(綿田 1993)。
- ③ 入海Ⅱ式～石山式並行と思われる土器が共伴した、岡谷市膳棚B遺跡1号住居出土資料(百瀬 1988)には、燃糸文施文や絡条体圧痕文の地文に燃糸文が認められる。燃糸文は、絡条体圧痕文の原体を引きずる手法(条痕)から、回転する手法(燃糸文)へと変化し発生した可能性が高い。
- ④ 石山式・天神山式が共伴した岡谷市梨久保遺跡23号a・b住居出土資料、松本市坪ノ内遺跡出土資料(松本市教委 1990)には、燃糸文に加えて絡条体圧痕文の地文に縄文が認められる。内面に条

痕調整を施すものは少量で、ナデ調整が多い。また、口縁部に幅広の文様帯を形成し、沈線文でX字状・弧状などの文様を描く土器や、口縁部に隆帯文を貼付する土器が出現する。

上記①～④の内容を第Ⅱ群土器と比較したい。第Ⅰ類では、第Ⅰ種Aである絡条体圧痕文の2が、縄文を地文とすることから、②か④に該当する。また、内面調整について、1は条痕調整、2～4はナデ調整となり、1は①と、2～4は④とそれぞれ一致する。2は内面調整から②ではなく、④に限定できると思われる。第Ⅰ種Bの5・6は、擦糸を地文とし、沈線文で文様を構成する点から④である。内面は条痕調整だが、④では少量とされる。第Ⅰ種C・Dでは、擦糸文の7は③・④、縄文の8・9は②か④である。縄文は、後述する第Ⅰ種Eに、①と推測される資料が存在し、鶴ヶ島台式の小破片が出土しているなど、②と④の区別を明確にするのは困難である。第Ⅰ種Eでは、器面内外に条痕が施される11～14は①、外面条痕調整、内面ナデ調整の15・16は④となる。10は内面ナデ調整だが、口縁下部に段を作出する器形は、茅山上層式もしくは下層式と類似し、④までは下らないと考えたい。①と④の条痕を、第Ⅰ種Eと比較すると、①のほうが④よりも太く、粗い条痕を施す傾向がみえる。続いて、第Ⅱ類では、石山式、あるいは石山式並行と推測される第Ⅰ種、天神山式の第Ⅱ種、天神山式に並行するとされる木島Ⅱ式の第Ⅲ種、④の基準資料である梨久保遺跡23号住居跡に類例が出土している第Ⅳ種が認められ、全て④の資料と位置付けることができる。

以上から、第Ⅱ群土器は第Ⅰ類Ⅰ種Aに①と④、同Bに④、同Cに③・④、同Dに②もしくは④、同Eに①と④が存在する点から、粕畑式～入海式並行期の①・②の一群と、石山式～天神山式並行期の④の一群に細分される可能性が高い。特に、後者は、第Ⅱ類が石山式・天神山式およびそれに並行する土器群で構成されている点も、編年的な位置を判断するための強力な材料となろう。

また、第Ⅰ類は④をみると、縄文・擦糸文、隆帯文など、次の前期初頭塚田式に認められる要素が揃っている。この点から、塚田式は絡条体圧痕文土器群を母体に成立した土器型式と考えられる。

3 第Ⅲ群土器（前期初頭）の様相

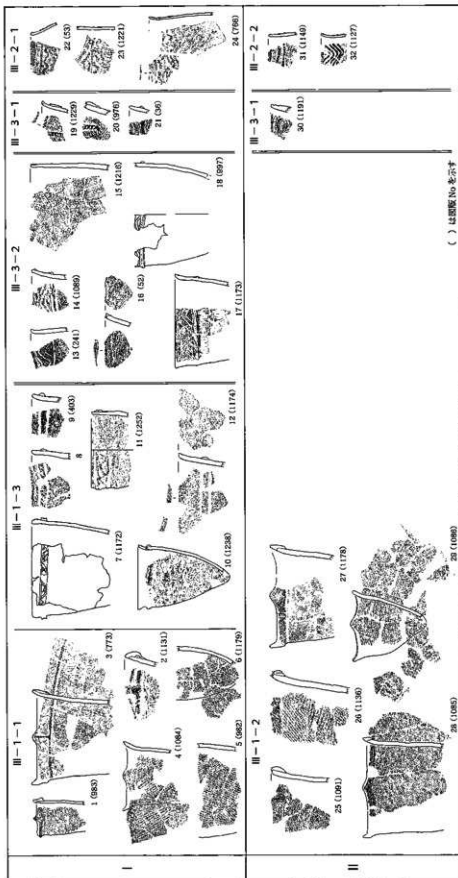
第Ⅲ群土器は遺構・遺構外で多くの資料が出土し、第Ⅳ群とともに駒形遺跡出土土器の主体の一面を占める。しかし、その出土状況は、第Ⅲ群単独で出土する例は遺構・遺構外ともにほとんど存在せず、第Ⅳ群と混在しながら時期幅をもって出土している。そのため、駒形遺跡のみで第Ⅲ群の時間軸を設定することや、各系統の纏まりあるいは細分を検討するには限界が生ずるので、当該期における従来の土器編年（下平・賛田1994）に第Ⅲ群土器の分類を対比させることで、第Ⅲ群土器の変遷を示したい。当該期は、花積下層式と並行する在地系の羽状縄文尖底土器群、塚田式（下平・賛田1994）と中道式（児玉1984）の段階である。塚田式の段階をⅠ段階、中道式の段階をⅡ段階とし、第Ⅲ群土器を各段階に細分する。

（1）Ⅰ・Ⅱ段階の様相（第65図）

Ⅰ段階（1～24）

前期最初頭の段階で、御代田町塚田遺跡（下平1994）・下弥堂遺跡（賛田1994）出土土器が基準となって型式設定された、塚田式（下平・賛田1994）の段階である。この段階は、第Ⅰ類第Ⅰ・Ⅲ種と第Ⅱ類第Ⅰ種、および第Ⅲ類第Ⅰ・Ⅱ種が該当する。

1～6は第Ⅰ類第Ⅰ種の塚田式である。1～3は4単位波状口縁の波頂部に合わせた、逆T字状を構成する隆帯文を貼付し、3のように隆帯上に斜位方向に刻むものが存在する。また、隆帯文には隆帯文をもたない4が組成する。縄文は横位斜構成・羽状構成が主体で、2の縦条の縄文や5の異方向施文が伴う。縦条の縄文と異方向施文は、この段階に認められる特徴的な縄文である。縄文原体は単節がほとんどで、無節が小数加わり、結節節をもつ原体や0段多条の原体も存在する。擦糸文は3・4・6の交互に斜行す



第65図 第三土器の変遷

るものがみられ、構成が5の異方向施文と類似している。燃糸文の原体はR+L、L+L、R+Rの、2本揃えが多く、早期末葉にみられた条の密接したものはほとんど存在しない。

7～12は第1類第3種の隆帯文土器で、口縁部の隆帯文が特徴だが、塚田式のように縄文・燃糸文は施文しない。口縁部形態は平縁で、波状口縁の有無は駒形遺跡では不明である。隆帯文は、タガ状のものを1条貼付する7～10が主体で、そのほかに幅狭の口縁部文様帯内部へ波状構成の隆帯文を貼付する11が認められる。隆帯文は1条のものに、上部をX字状・斜位方向に刻む例が多い。胴部は基本的に無文だが、器面内外へ部分的な条痕を施すものが少数みられる。また、胎土に多量の繊維を含む点の特徴である。その中で12は、隆帯文の形状がタガ状ではなく低い台形状を呈し、器面内外（特に外面）に明瞭な条痕を施すなど、ほかの隆帯文とは異なる要素がみられる。この隆帯文は、17など下吉井式の沈線文下部に貼付されたものと類似するので、下吉井式の可能性もあろう。しかし、下吉井式に分類されたものは、胎土に繊維を含まず、それに対して12は繊維を多量に含むなど、下吉井式との違いも指摘できる。

13～18は第3類第2種の下吉井式である。口縁部形態は平縁と考えられるが、13には波状の可能性がある。口縁部文様は、口縁下部を13・15のように沈線文、もしくは14・17・18のように断面カマボコ状・台形状の隆帯文で区画し、内部に沈線文や押し引き手法による結節沈線文で、波状・円状などの文様を組み合わせて描く。器面はナデ調整だが、条痕調整が時々みられる。胎土には繊維を含んでいない。

19～21は第3類第1種の花積下層式で、隆帯文で区画された幅狭の口縁部文様帯へ、環状・直線状などの燃糸側面圧痕文を施文する。燃糸側面圧痕文の原体は、L+Rの2本揃えを用いる。口縁部文様帯幅が狭い点や燃糸側面圧痕文が多段構成にならない点から、花積下層Ⅰ式（谷藤1994）に該当しよう。

22～24は第2類第1種の木島式で、文様を偏平隆帯で構成し、口縁へ胴上部にかけて縦位・斜位方向などの貝殻条痕を施す。内面には指頭圧痕が顕著である。木島Ⅲ式（渋谷1983）に該当しよう。

Ⅱ段階（25～32）

長和町（旧長門町）中道遺跡（児玉1984）出土土器を基準に設定された、中道式の段階である。この段階は第1類第2種、第2類第2種、第3類第1種が該当する。

25～29は第1類第2種の中道式である。口縁部形態は4単位波状口縁と平縁で、25～28の肥厚口縁と29の単純口縁が存在する。4単位波状口縁で肥厚口縁を呈するものには、25・26のように波頂部へ垂下肥厚部を形成するものが認められる。文様は口縁部から底部にかけて、器面全面に縄文・燃糸文を施文する。縄文は横位斜構成・羽状構成で、羽状構成には施文帯の上下左右で盛りを変えた菱形構成もみられる。原体は単節が主体となり、無節も一定量が存在する。結節の頻度は高く、羽状構成では上段の施文帯へ、結節部を重ねて下段を施文するので、一見すると結束羽状構成のようにも見える。しかし、結束の原体は、中道式には基本的に存在しない。燃糸文はR+L、L+L、R+Rの2本揃えの原体が多く、横位・斜位方向に施文している。また、縄文と燃糸文を同一個体に施文し、横位羽状を構成する26のような例も稀にみられる。

30は第3類第1種の花積下層式で、渦巻き状の燃糸側面圧痕文を施文する。小破片でやや不明確だが、燃糸側面圧痕文はⅠ段階の19～21よりも幅広く施文されていると思われ、その特徴から花積下層Ⅱ式（谷藤1994）の可能性が高い。

31・32は第2類第2種の木島式で、文様を細隆帯・偏平隆帯で構成し、櫛歯状工具による斜位方向の条痕を施す。こうした特徴から木島Ⅳ式（渋谷1983）に該当しよう。

（2）塚田式と他型式の比較（第65図）

ここで、Ⅰ段階における第1類第1種の塚田式と、第1類第3種の隆帯文土器、および第3類第1・2種の花積下層Ⅰ式・下吉井式を、型式間で比較してみたい。

塚田式・隆帯文土器の在地系土器群と、花積下層式・下吉井式の関東系土器群には、隆帯文で幅狭の口縁部文様帯を区画するといった共通点が認められる。しかし、区画内部には、各型式を特徴付ける要素や文様構成、施文手法が現れている。塚田式と隆帯文土器は、口縁部を区画する隆帯文自体が、口縁部の主文様であり、区画内部は無文とするのが特徴である。胸形遺跡では出土していないが、稀に、区画内部へ沈線文で弧状・波状・渦巻き状などの文様を描いたものが存在する。それに対して、花積下層Ⅰ式は惣糸側面圧痕文で、下吉井式は沈線文・結節沈線文で、弧状・波状・渦巻き状などの文様を組み合わせて構成している。惣糸側面圧痕文は花積下層式の、沈線文・結節沈線文は下吉井式の大きな特徴といえる。塚田式に、稀に存在する、沈線文で文様を描くものは、文様が弧状・波状・渦巻き状など花積下層式や下吉井式と共通し、沈線文による施文手法が下吉井式的であり、関東系土器群との折衷的な要素が認められると評価することも可能であろう。

(3) 口縁部にみられる塚田式と中道式の系統性 (第65図)

次に、第1類第1種の塚田式と、第1類第2種の中道式の、口縁部にみられる型式変化について触れる。

塚田式と中道式は、隆帯文と肥厚口縁・垂下肥厚部など、口縁部に型式の特徴を備える。塚田式の隆帯文で、逆T字状のものは、波状口縁の波頂部から垂下する縦隆帯文と、口縁部を巡る横隆帯文を連結することで逆T字状を構成する。この構成を中道式の口縁部と比較すると、塚田式の横隆帯文と中道式の肥厚口縁下部の位置、塚田式の縦隆帯文と中道式の垂下肥厚部の位置が、それぞれ完全に一致し、中道式の肥厚口縁・垂下肥厚部は、塚田式の逆T字状を構成する隆帯文をベースとしながら、派生したことが考えられる。つまり、塚田式と中道式は、在地系の羽状縄文尖底土器群として、Ⅰ段階からⅡ段階にかけて、塚田式から中道式へと系統的な型式変化を遂げたものと推測されよう。

4 第Ⅳ群土器 (前期前葉) の様相

当該期は分類で示した第Ⅳ群土器の段階で、変遷図のⅢ～Ⅵ段階が該当する。胸形遺跡の主体となる段階で、資料的にはかなり充実している。土器は遺構・遺構外ともに時期幅をもって出土したものが多く、第1類の略完形個体が纏まって出土した例や、遺構の重複関係などから、ある程度の土器の纏まりと変遷を推測することが可能である。

以下、遺構の出土状況を根拠に、土器の纏まりや変遷などを検討する。また、そうした遺構からの出土状況で不明確な部分は、当該期における従来の研究成果や周辺遺跡の出土状況などと比較しながら、補足していく。

(1) 第Ⅳ群土器の出土状況

第Ⅳ群土器を検討するうえで、注目すべき第1類の土器と出土状況は次のとおりである (第67図)。

- ・ 第52号竪穴住居跡の覆土下部から出土した土器 (33)。
- ・ 第47号竪穴住居跡の覆土で主体となる土器。および第53号 (42) 竪穴住居跡の床面出土土器。
- ・ 第46号 (64・65)・53号・67号 (66・67・70～72) 竪穴住居跡の覆土で主体となる土器。

以上の第1類と、第1類が出土した竪穴住居跡には、下記の出土状況と遺構の重複が認められる。

- ・ 第47・52号竪穴住居跡の2軒は重複し、第47号竪穴住居跡のほうが第52号竪穴住居跡よりも新しいと判断される。第52号竪穴住居跡出土の第1種 (33) は、頸部に段を作出するといった器形的な特徴からAに分類され、また、第47号竪穴住居跡出土の第1種は、頸部に括れをもつ器形からB・Cに分類される。この結果、頸部に段を作出するAは、頸部に括れをもつB・Cよりも古い段階のものであることが推測される。
- ・ 第53号竪穴住居跡では、床面から第1種 (42) が、覆土上部では第1・2種が出土した。床面出

士の第1種(42)は、器形が大きく括れるBである。一方、覆土上部出土の第1種は、口縁部のみの破片で器形は明確ではない。しかし、第1種とともに、第2種が出土した点は重要である。つまり、床面と覆土の差から、頸部が大きく括れる器形の第1種Bより、第2種のほうが新しい段階と判断される。この状況は、第1種B・Cが出土した第47号竪穴住居跡出土土器に、第2種が含まれていない点とも矛盾しない。

- ・ 第46号竪穴住居跡では、覆土から第1・2種が出土している。第1種(64・65)は頸部の括れがほぼ消滅し、全体が逆三角形に近い器形を呈するもので、Dに分類される。同様に、第67号竪穴住居跡でも覆土から第1・2種が出土し、第1種(66・67)は頸部の括れが消滅し、逆三角形の器形を呈するDである。以上から、逆三角形の器形を呈するDは、第2種と出土することから、第2種と時間的に並行するものであった可能性が指摘できる。
- ・ 以上3点を統合すると、第1種には①頸部に段を作出するA→②頸部に括れをもつB・C→③逆三角形の器形を呈するDの、①～③の段階が存在すると推測され、さらに③の段階には第2種が出土する、すなわち、③と第2種は時間的に同一段階と考えられる。
- ・ 第IV群第1・2種の①～③段階には、下記の資料が該当する。

①：第52号竪穴住居跡覆土下部出土土器(33)

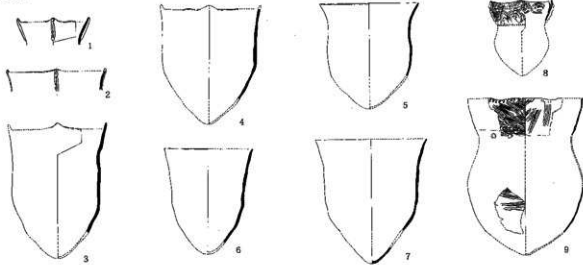
②：第37・47・48・50・54・66・70号竪穴住居跡出土土器、および第53号竪穴住居跡床面出土土器(40～45・47・48・50・51)

③：第46・53・67号竪穴住居跡覆土出土土器(64～68・70～2)

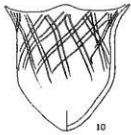
上記が駒形遺跡から知り得る、第IV群土器の状況である。

ここで、周辺遺跡の状況から、いくつかの点を補足したい。第53号竪穴住居跡の覆土では、第1類第1・2種と、第3種の有尾式が出土した。有尾式は、神ノ木式に後続する土器型式である。周辺遺跡の出土状況において、有尾式と第1種中越式の共存・並行関係は明確でない(中越式の下限が有尾式期までは下らない)ので、有尾式は上記の③段階に後続する土器と評価したい。また、第70号竪穴住居跡では、第1種に頸部が括れ、その括れがかなり長く伸びるもの(49)が存在する。この土器は、胴上部～口縁部にかけての個体資料と、頸部に括れをもつと思われる口縁部の破片など(第110図)と出土したが、器形全体が把握できない資料では、評価にあたり不安が残る。そこで、宮田村中越遺跡第37号竪穴住居跡の土器をみると(宮田村教委1990)、括れが長く伸びる中越式(第66図4・6)と、頸部が括れる中越式(5)が、纏まりながら出土している。駒形遺跡第70号竪穴住居跡の、胴上部～口縁部にかけての個体資料(第110図919)も、その点だけを見れば、中越遺跡第37号竪穴住居跡出土の中越式(第66図7)とよく類似した器形を呈する。こうした点から、括れが長く伸びる中越式も、頸部が括れる第1種中越式のB・Cと同じ段階のものと判断しておきたい。次に、第1種B・Cについて、駒形遺跡では不明確であったが、括れが大きいBと、括れが比較的浅く口縁部の外反が短いCには、時間差が介在する可能性を指摘したい。長和町(旧長門町)明神原遺跡(長門町教委2001)の第14号竪穴住居跡では、括れが大きいBに該当する中越式(第66図10)と、関東系の二ツ木式(11)が出土している。それに対して、原村阿久遺跡29・40・44号竪穴住居跡では(第66図)、括れが浅く口縁部が短く外反するCの中越式(12、14～17、20)が出土し、それと関東系の関山I式(13、18・19、21)が伴出している。従って、第1種Cは、第1種Bに後続する可能性があり、第1種Bの括れが浅く、口縁部の外反が短くなることで、第1種Cが派生し、括れが消滅して第1種Dが出現するといった、器形変化の方向性が看取されよう。そのほか、図版等で図示はしないが、第1種Dと第2種が纏まった、上記③段階と一致する良好な資料が、阿久遺跡63号竪穴住居跡、北杜市(旧白州町)上北田遺跡第20号竪穴住居跡(白州町教委1993)に認められる。

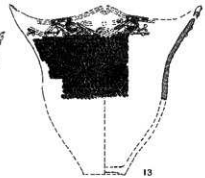
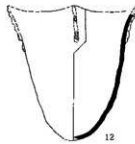
中越 37住



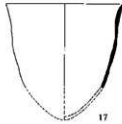
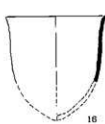
明神原 14住



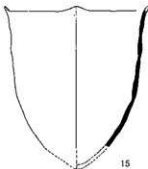
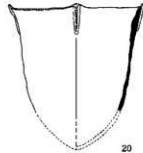
阿久 40住



阿久 44住



阿久 29住



第 66 図 周辺遺跡の出土事例

以上、第IV群土器について第1類を中心に検討し、第1種の器形変化から①～③段階の変遷を把握することができた。また、第1・2種と第3種の関係から、③に後続する段階が想定された。それをもとにしながら、次に、第IV群土器全体の変遷と各段階の様相を示す。段階を示す数字は、前期初頭からの連続的な変遷を追うため、続き数字(Ⅲ段階～)を使用する。第1種の、上記①～③段階をⅢ～Ⅴ段階と置き換え、③に後続させた第3種の段階をⅥ段階とする。その結果、第IV群土器はⅢ～Ⅵ段階の変遷を想定できる。

(2) 第IV群土器の変遷 (第67図)

Ⅲ～Ⅵ段階の変遷は下記のとおりである。

Ⅲ段階 (33～38)

第1類第1種の、中越式を主体とする段階である。

33は第1類第1種Aの中越式で、頸部に段を作出する器形が特徴といえる。頸部の刺突で、口縁部文様帯を区画し、ヘラ状工具で斜格子目文を描く。

本段階は該当する資料がほかの段階と比較して少なく、詳細は不明確である。また、第1類に並行すると思われる第2・3類を明示できるような、出土状況にも恵まれていない。第1類と並行する第2類について、渋谷昌彦氏は頸部の段につまみ痕あるいは刺突を施し、口縁部へ櫛歯状工具による条線で斜格子目文を描く木島Ⅷ式を挙げ、さらに木島Ⅷ式は、関東系の花積下層Ⅲ式(谷藤1994)並行と指摘する(渋谷1991)。駒形遺跡では、第2類第1種が木島Ⅷ式に該当し(35～38)、第Ⅲ群第3類第1種の中に花積下層Ⅲ式が含まれているので(34)、両者をとりあえずⅢ段階の第2・3類と位置付けたい。

Ⅳ段階 (39～63)

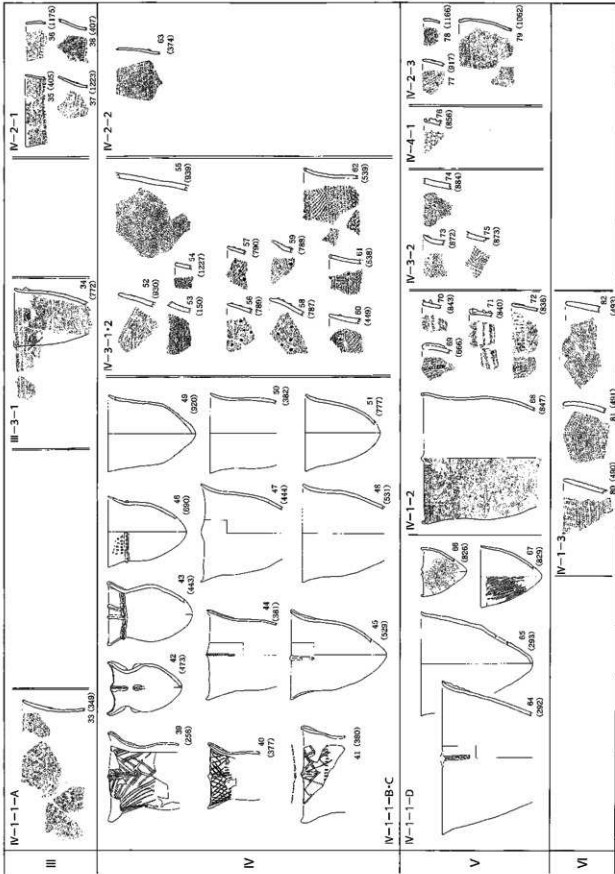
第1類第1種B・Cの、中越式を主体とする段階である。前述のとおり、第1種B・Cはさらに細分される可能性をもつが、駒形遺跡ではそれについての詳細な検証はできないので一括しておく。

39～51は第1類B・Cの中越式で、前段階にみられた頸部へ段を作出するものは存在しない。器形には、頸部で大きく括れて口縁部が外反する39～48、頸部の括れが長く延びて口縁部が外反する49、頸部の括れが浅く口縁部が比較的短く外反する51が認められる。39～41は口縁部に斜格子目文を描き、垂下粘土紐を貼付するもので、40・41は頸部の刺突が口縁部文様帯の下端を区画する。40・41の刺突は、前段階の33と同一位置に認められることから、頸部の段が括れへと変化する過程で、残存した要素と理解したい。39は刺突が消滅し、それにより口縁部下端の区画がなくなるので、口縁～胴上部にかけて幅広く斜格子目文を描いている。42～45は口縁部に斜格子目文を描かず、垂下粘土紐のみを貼付する。42は垂下粘土紐の下部に、瘤状の突起を貼付し、43は垂下粘土紐が2条で、さらに頸部にも横位の粘土紐を巡らせる。47～51は、斜格子目文と垂下粘土紐を口縁部にもたないもので、完全に無文である。46は頸部に横位の粘土紐を巡らし、口縁部は刺突列を充填する。

第2類は第1類のように良好な資料が存在せず、不明確な部分が多い。後に述べる第3類には、二ツ木式と関山Ⅰ式が認められ、渋谷昌彦氏は二ツ木式・関山Ⅰ式と木島Ⅸ・Ⅹ式を並行関係に置く(渋谷1991)。駒形遺跡では、断片的な破片資料だが、第2類第2種が木島Ⅸ式に該当すると思われる(63)、それをⅣ段階として位置付けたい。

第3類は第1種の二ツ木式(52～55)と、第2種Aの関山Ⅰ式(56～62)が該当する。第1種のうち、52・55は第1類第1種の49とともに第70号竪穴住居跡の覆土で、第2種Aのうち、56～59は第1類第1種の51とともに第66号竪穴住居跡で、60は第1類第1種の46・47とともに第50号竪穴住居跡の覆土で、61・62は第1類第1種の45・48とともに第54号竪穴住居跡で、それぞれ出土した資料である。

Ⅴ段階 (64～79)



第 67 図 第 IV 科土器の分布

第1類第1種Dおよび第2種の中越式と神ノ木式を、主体とする段階である。

64～67は第1種Dの中越式で、器形は頸部の括れが顕著ではなく逆三角形で、66・67のように完全に消滅したのも存在する。口縁部に垂下粘土紐を貼付する64とともに、無文の65、縄文施文の66、斜位方向の粗い条痕を施す67が認められる。

68～72は第2種Aの神ノ木式で、櫛歯状工具による連続刺突文・条線で口縁部文様を構成する。さらに、69～71の、垂下粘土紐や横位隆帯文を貼付するものが認められる。68・70～72は、第1類第1種Dの中越式(66・67)とともに、第67号竪穴住居跡の覆土から出土した資料である。

77～79は第2類第3種の東海系土器群の、いわゆる清水ノ上Ⅱ式に該当する。胸形遺跡出土の当該資料は、小破片かつ断片的で、第1・3類と共存するような良好な資料は存在しない。しかし、周辺遺跡における出土状況から、第1類第2種の神ノ木式と時間的に並行するので、77～79もV段階に置く。

73～75は第3類第2種Bの関山Ⅱ式である。73は正反の合、74は組紐を施文し、75は組紐の地文上に平行沈線で文様を描く。いずれも第67号竪穴住居跡の覆土で、第1類第1種D、第2種の中越式・神ノ木式とともに出土した。

76は第4類の新潟系土器群と思われるもので、口縁部文様を角状の刺突列で構成する。第4類は、この1点が出土したにすぎない。第67号竪穴住居跡の覆土で、第1類第1種D・第2種、第3類第2種Bの中越式、神ノ木式、関山Ⅱ式とともに出土した資料である。

VI段階(80～82)

彫形遺跡における前期前葉の最終段階で、第1類第3種の、有尾式の段階である。纏まりをもつような資料は存在せず、第53号竪穴住居跡などで、そのほかの土器群と時期幅をもって出土した。

80・81は第3種Aに分類されるもので、櫛歯状工具による列点状刺突文・条線により文様を構成する。また、82は第3種Bの有尾式で、半裁竹管状工具による平行沈線で口縁部の文様を構成する。

以上、第IV群土器に段階を設定して、段階ごとの様相や変遷を追った。Ⅲ～Ⅵの各段階は、第2～4類の東海・関東・新潟系土器群に顕著であるように、同一・等間隔の時間幅ではない。例えば、Ⅳ段階は、再三述べたが第1類B・Cに器形変化がみられ、加えて第3類関東系土器群に二ツ木式～関山Ⅰ式が含まれるなど、さらなる細分の可能性が指摘される。しかし、調査された遺構・遺構外の出土状況は、その細分を検証できるようなものではないので、今回は時期幅をもたせて扱った。

前期初頭～前葉土器は、変遷を通すとⅠ～Ⅵの6段階にわたる。しかし、その変遷には在地系土器群が前後する段階において、系統的かつ連続的には繋がらない部分が認められる。前期初頭のⅡ段階は、中道式が主体となる段階である。しかし、中道式は、前期前葉の中越式が主体となるⅢ段階において、その存否は明確ではない。中越式は、中道式から派生した土器型式とするのは考えにくいので、早期末葉土器群を母体に塚田式から中道式へと変遷を遂げた、前期初頭土器群とは違う系統の土器型式と理解される。同様の状況が、中越式にも認められる。中越式の最終段階であるⅤ段階には、同じ在地系の神ノ木式が存在する。神ノ木式は、中越式から派生したのではなく、別系統の土器型式と理解され、Ⅵ段階の有尾式へと系統的な変遷を辿る。この結果、在地系として分類された土器群は、Ⅰ系統が連続的な変遷を繰り返すのではなく、早期末葉絡条体丘痕土器群から前期初頭塚田式・中道式(Ⅰ・Ⅱ段階)に至る系統、中越式(Ⅲ～Ⅴ段階)の系統、神ノ木式・有尾式(Ⅴ・Ⅵ段階)の系統といった、3つの異なる系統がそれぞれの段階において変遷を遂げたことになる。量比でみると、前期初頭の母体となる早期末葉、中越式が出現するⅢ段階、有尾式が出現するⅥ段階において、土器の出土量が前後の段階と比較が少ない。また、遺構の時期と対比できそうなのは、Ⅲ～Ⅴ段階である。

5. 第Ⅰ・Ⅴ～Ⅶ群土器の様相(第129図)

冒頭で述べたとおり、第Ⅰ・Ⅴ～Ⅶ群の、早期後葉・前期後葉・末葉・中期後葉・後期前葉土器群は、資料数が少量なので一括して触れる。

第Ⅰ群：早期後葉土器群(1265)

第1・2類の在地系・東海系は存在せず、第3類の関東系が1点のみ出土した。1265は鴨ヶ島台式で、口唇部を刻み、口縁部には単沈線で鋸歯状の文様を構成する。器内内外に、横方向の条痕調整がみられる。今回の調査で出土した、最も古い時期の土器である。

第Ⅴ群：前期後葉～末葉土器群(1266～1270)

第1類に該当する在地系が出土した。1266は第1種の諸磯b式で、縄文RLの地文上に刻みをもつ横位浮線文を貼付する。諸磯b式に該当する資料は、図示したこの1点のみである。1268・1269は第2種の下島式もしくは諸磯c式で、横位方向に展開する矢羽状沈線を描いており、1268は小形のボタン状貼付文が付く。1267・1270は第3種の嘴ヶ塚式となり、1267は半隆起線で、1270は連続した刺突文で文様を構成する。前期末葉の第2・3種は、図示した4点のみの出土である。

第Ⅵ群：中期後葉土器群(1271・1272)

第1・3類の在地系・関東系が出土し、第2類の東海系は存在しない。1271は第1類の唐草文系で、細い隆帯・沈線・刺突などを組み合わせて、U字状などの文様を構成する。1272は第3類の加曾利E3式で、隆帯およびその両脇に沿う沈線により、U字・逆U字状の文様を構成する。U字・逆U字状の内部には、縄文LRを縦位に施文する。第Ⅵ群は図示した資料のほかに、30～40点前後の小破片が出土した。

第Ⅶ群：後期前葉土器群(1273)

第1・2類は存在せず、第3類の関東系が出土した。1273は堀ノ内I式で、口縁部の一部が欠損するほかは、ほぼ完形の個体である。頸部付近に2条の沈線を引き、円形貼付文を付ける。円形貼付文は、頸部1周で5単位と推測される。底部には網代痕が残る。

第3節 石器

1. 各器種の概要(第130～162図、P L 21～30)

駒形遺跡から出土した石器を石鏃、石匙、スクレイパー、石錐、抉入石器、両極石器、鏝器、打製石斧、磨製石斧、凹石類、石皿、石棒、砥石、器種不明、加工痕の有る剥片、抉状耳飾、石核、原石、剥片類に分類した。時期は石器とともに出土した土器の様相から、ほぼ縄文時代前期初頭～前葉に位置付けることが可能と思われる。しかし、ごく少数だが前期末葉、前期後葉～末葉、中期後葉、後期前葉の土器が出土し、さらに、石鏃に凸基が存在する点、形態的な特徴から中期に位置付けられそうな石棒が出土した点などを考慮すると、前期初頭～前葉以外の石器が混在している可能性はある。

以下、各器種について、資料を抽出しながら概要を述べる。なお、石器個々の属性は、本書付録DVD収録の石器観察表を参照されたい。

石鏃(1～139、P L 21・22)

1001点が出土し、その内の139点を掲載した。基部の形態から分類すると1～20は平基、21～137は凹基、138・139は凸基である。量的には凹基が圧倒的に多く、凸基は図示した2点のみである。

凹基は凹部の挟り込みが浅いものと、比較的深いものが存在し、比較的深いものの方が主体を占める。また、128～135のように先端が細く突出するもの、136のように側縁上部を両端から挟るものが存在する。137は局部磨製石鏃であり、中央に研磨痕が観察される。

石材は、9・15・16・28・30・38・53・62・101・118・127・130・131がチャート、122が珪質凝灰岩で、それ以外は全て黒曜石である。

石鏃未製品 (140～185, P L 22)

石鏃未製品と推測されるものは671点が出土し、その内の46点を掲載した。140～185を石鏃未製品とした理由は、形状が石鏃と同様に三角形・二等辺三角形を呈する点、長さ・幅・厚さが石鏃を上回る点、加工剥離が石鏃よりも粗い点、後述する両極石器（石鏃製作に関わると推測される資料）と大きさが同一あるいはやや小形である点、石材が石鏃と同様に黒曜石を主体とする点（石鏃95%、未製品97%）、などである。さらに、石鏃（製品）との分離にあたり、基部の形態が平坦、もしくは丸状を呈する点も、凹基を主体とする製品の中では、未製品とする一つの根拠とした。しかし、1～21など、平基の製品も一定量が存在するので、未製品としたものの中に、平基の製品が含まれている可能性は否定できない。また、形状・大きさ、断面の厚さなどによっては、小形のスクレイパーと類似するものがみられる。でも、スクレイパーは表裏どちらかの片面に加工剥離を施すものが多いのに対して、石鏃未製品は表裏両面に加工剥離を施すものが多い点で異なる。

石鏃製作には、石核から素材となる剥片を得て、加工剥離を行いながら製品へと仕上げる工程と、後述する、両極打法と加工剥離を併用しながら、製品へと仕上げる工程が存在するものと思われる。石鏃未製品は工程が進むほど、加工剥離によって、剥片素材としての剥離面や、素材を作るための両極剥離面が不明瞭となるので、未製品がどちらの工程に属するのかが製品から判断するのは難しい。しかし、例えば140・151・152・161・162などは、未製品の中央に大きな剥離面が観察され、側縁からは比較的細かな加工剥離が入る。中央の大きな剥離は1方向からのものであり、上下・左右といったいわゆる両極からの剥離が認められないので、石核から素材となる適切な剥片を得て加工剥離を行う工程の、未製品とみることもできよう。

石材は圧倒的に黒曜石で、図版に掲載したものも全て黒曜石製だが、そのほかにチャート、石英、珪質凝灰岩がごく少量認められる。

石匙 (186～240, P L 23・24)

134点が出土し、その内の54点を掲載した。刃部の位置・形状から、186～201はいわゆる縦形、202～237・239は横形、238・240は斜め45度に近い角度で刃部が作り出される、斜刃形と思われるものである。各形状には、基部の位置・大きさ、刃部の位置・範囲などに様々な種類が認められるので、細かな形状分類を行うのは困難である。石匙は一般的に、リダクションの激しい石器とされているので、細かな形状の差異は、リダクションを示す可能性がある。

石材は187・203・222・231が珪質凝灰岩、188・211・213・237・240が凝灰岩、200・205・209・210・214・216・223・224・238がチャート、201・202・218・220・232・235が珪質泥岩、217・230が凝灰質砂岩、221が砂岩と、チャート・チャート系を主体に、多様な石材が利用されている。また、上記以外のものは黒曜石である。

スクレイパー (241～332, P L 25・26)

698点が出土し、その内の92点を掲載した。刃部と推測される部分の幅や角度などから、241・242・284～287、297～332を削器、243～283・288・291～296を搔器とした。しかし、部位により刃部の角度が異なるものや、同一個体で縁を変えて削器的な刃部の幅・角度と、搔器的な刃部の幅・角度を

併せ持つものが存在するなど、両者の区別は厳密ではない。形状は、掘器・削器ともに素材剥片の形状に大きく左右されるものの、掘器では円形・楕円形状に近いものが多く、削器では掘器よりもさらに縦長・横長剥片の形状を留めるものが多い。大きさは、掘器よりも削器の方が、概して大形である。

石材は 284・329 が凝灰岩、287・289・291・296・298・301～303・305・312・314・316・319・321・331 がチャート、322・323 が珪質凝灰岩、324～326・328 が砂岩、327 が安山岩、330 が無斑晶質安山岩で、それ以外は全て黒曜石製である。

石錐 (333～384, P L 27)

218 点が出土し、その内の 52 点を掲載した。332～371 はつまみ部をもたないもの、372～377 はつまみ部をもつもの、379～381 は錐部を上下 2 方向にもつもの、382～384 は剥片の一端にごく短い錐部をもつものである。つまみ部をもたないものは、素材剥片の全体にわたって加工剥離が行われているものと、361・363・365 などのように加工剥離が錐部や側縁部に比較的集中するものがみられる。370 は素材剥片の形状を生かし、加工剥離で錐部のみを作り出す。

石材は 339・359・370・372・373・377・378 がチャート、357 が砂岩、371 が珪質泥岩、375 が珪質凝灰岩で、それ以外は黒曜石である。つまみ部をもたないもの、および錐部が短いものに黒曜石製が多く、つまみ部をもつものにチャート、珪質泥岩・凝灰岩などのチャート系石材が多い傾向にある。

挟入石器 (395・396)

50 点が出土し、その内の 2 点を掲載した。剥片の側縁部 2～3 ケ所に挟りをもつものである。395 は表面に原石面を残し、両側縁部と下端部に、396 は縦長剥片の両側縁部に、それぞれ挟りが観察される。石材は、いずれも黒曜石製である。

器種不明の製品 (385～394, P L 27)

上記以外のものを器種不明として一括した。

385～387 は縦長の剥片を素材とし、上端の両側縁 1～2 ケ所に挟りを入れて有頭部を作る。石材は、いずれも黒曜石製。

388・389 は両側縁と基部を挟り、外側に開く脚部が作り出される。石材はともに黒曜石製。

390 は石鏃 136 と同様の形状を呈する。しかし、長さ・幅・厚さの全てが石鏃を大きく上回る。石材はチャート製。

391～394 は長楕円形状を呈する石器である。しかし、大きさや断面形状が 391・393 はレンズ状、392 は三角形、394 は角棒状とそれぞれ異なる。393 は両側縁が細かな鋸歯状を呈する。石材は、いずれも黒曜石製。

両極石器 (397～413, P L 28)

2953 点が出し、その内の 17 点を掲載した。両極打法による剥片剥離がみられるもので、楔形石器、両極石器、ピエス・エスキューなどと呼ばれてきたものを一括している。

最も多く出土したのは、ほぼ長辺の上下方向に、両極打法による剥片剥離が観察されるもので、大きさや平面・断面形状は様々である。

しかし、実測図を掲載した 17 点は、特徴がこれとはやや異なるもので、大きさ、平面形状、両極剥離の方向、加工剥離の有無などから、以下のように分類される。

1 類 (397～410)

長さ 3.0～5.3 cm、幅 2.0～3.5 cm、厚さ 0.5～1.2 cm を測り、板状で長方形、あるいは長方形の一辺が斜行するような平面形状を呈するもの。両極打法によると思われる上下方向の剥離と、向きを 90 度変えて行ったと推測される直角方向（上下方向に対して左右方向）の剥離が表・裏面に認められる。長さの最

大は 409 だが、通常は 4.0 cm 以下のものが圧倒的に多い。

2類 (411～413)

長さ 3.5 cm 以下、幅 2.0 cm 前後、厚さ 0.5～0.8 cm で、1類よりもやや小形である。平面形状は、石鏃未製品に分類したものと近い。両極打法によると思われる剥離のほかに、側縁部に石鏃未製品と類似した加工剥離が認められる。1類に、加工剥離を施し始めたものと推測される。

1・2類は、石鏃の素材であったと推測される資料である。原石、あるいは適切な大形剥片に対して、両極打法による剥離を加えたものが1類、それを製品へと仕上げるために、加工剥離を加え始めたものが2類と思われる。1類は石鏃未製品と同等、あるいはそれよりもやや大形、2類はより石鏃未製品の大きさに近い。原石と、石鏃未製品・製品で報告した資料の間に、上記の1・2類を挿入することで、石鏃製作工程の一例を復元することが可能と思われる。この、石鏃製作工程については後述する。

1・2類は、当初から全てを両極石器としては扱っていなかったため、両極石器以外にも石核や加工痕の有る剥片に分類されてしまったものが存在する。それ等を考慮すると、出土点数が上記よりも増加することを付記しておく。なお、石材は全て黒曜石製である。

石核 (414～436, P L 29)

1863 点が出土し、その内の 23 点を掲載した。414～427・431・432 は、剥片の剥離された面が表 1 面の石核で、打面は 1～2ヶ所と思われる。裏面や側面は、自然面を残すものが多い。428～430・433～436 は、剥片の剥離された面が 2 面以上の石核であり、429 の表裏 2 面のものや、430・434～436 のように表裏 2 面のほか、側面が加わるものも存在する。打面は 1～4ヶ所である。石材は、全て黒曜石製である。

原石 (巻頭カラー 2, P L 29)

927 点が出土し、石英製 3 点、チャート・石英岩・珪質頁岩・流紋岩製各 1 点以外は、全て黒曜石であった。その内、黒曜石の原石 13 点を巻頭カラーと、写真図版 (P L 29) に掲載した。

巻頭カラー 2 (上段) は、I Q 07 グリッドと S B 69 から出土した黒曜石の原石である。①は I Q 07 グリッド出土で、駒形遺跡最大の原石となり、長さ 13.0 cm、幅 11.0 cm、重さ 1340.0 g を測る。しかし、この大きさのものは、遺跡全体で 1 点が出土したにすぎない。②～⑨は、S B 69 の覆土と床面から出土した黒曜石の原石である。S B 69 では合計 36 点、総重量 2173.11 g の黒曜石原石が出土した。その内容は、欠損と思われる部分が観察される 7 点を除くと、②の長さ 9 cm 大 (長さ 9.7 cm、幅 9.3 cm、厚さ 4.7 cm、重さ 336.53 g) が 1 点、③・④の 6.5～7 cm 大 (長さ 6.7～7.7 cm、幅 5.9～6.3 cm、厚さ 2.5～5.4 cm、重さ 117.82～280.28 g) が 5 点、⑤・⑥・⑨の 5～6.5 cm 大 (長さ 5.2～6.3 cm、幅 1.8～3.3 cm、厚さ 1.5～3.0 cm、11.21～72.43 g) が 8 点、⑦・⑧の 5 cm 以下 (長さ 5.0 cm 以下、幅 1.6～3.9 cm、厚さ 1.0～2.8 cm、重さ 4.22～38.41 g) が 15 点である。長さが 10 cm に近いものは 1 点のみで、5～7 cm 大になると一定量が存在し、5 cm 以下が最も多いという傾向が認められる。原石の形状はほとんどが塊状で、⑨のような板状を呈するものが 3 点存在する。色調は黒色を基本とし、②～④の表皮には黄褐色粒子がみられる。

写真図版 (P L 29) の原石 1～4 は、黒曜石集積遺構 (S K 25) から出土したものである。大きさは②・④が 5 cm 大、①が 6 cm 大、③が 7 cm 大で、総重量は 396.41 g、1 個体あたりの平均は約 99 g である。いずれも塊状を呈する原石で、色調は黒色である。

駒形遺跡出土の黒曜石原石には、大きさが 10 cm を超えるものは極わずか、5～7 cm 大になると一定量が存在し、5 cm 以下のものが多いといった傾向が認められる。S B 69 の原石は、そうした傾向をよく示しているといえ、さらに黒曜石集積遺構 (S K 25) 出上の原石は、一定量が存在する 5～7 cm 大のもの

を揃えて集積したと評価できる。また、稜が鋭い角礫状の原石は存在しないので、原石の採集地としては第1次産地（露頭・岩脈）ではなく、第2次産地（2次堆積層など）であったと推測される。黒曜石の顔つきは、黒色のもの、表皮に黄褐色粒子を含むもののほかに、縞状のものが入るもの、赤色が混じるものなどがみられ、黒曜石産地同定分析で諏訪星ヶ台産とされたものの中には、こうした顔つきのものが全て含まれている。この結果は、黒曜石産地同定分析で諏訪早ヶ台産とされたものであっても、原石の採集された地点が原産地内部で異なる可能性を示唆するものと思われる。

礫器 (437)

2点が出土し、その内の1点を掲載した。横長を呈する大形剥片の縁辺に、表裏両面から加工剥離を行い、刃部と思われる部分を作出する。石材はホルンフェルス製である。

打製石斧 (438～447、P L 27)

21点が出土し、その内の10点を掲載した。438・439は完形である。ほぼ同様の大きさで、全体形状を長方形に整える。440～447は欠損品で、440・441は頭部、443・446・447は刃部が残存し、442は頭部と刃部、444は右縁辺、445は刃部を欠損する。石材は438が無斑品質安山岩、439・440が凝灰岩、441・447が砂岩、442・444・445が緑色片岩、443が凝灰質砂岩、446がホルンフェルスである。

磨製石斧 (448～464、P L 27)

36点が出土し、その内の17点を掲載した。17点中、449～451・455～458・460・461・463・464の11点は欠損品のため、全体形状・大きさは不明確である。しかし、大きさには長さ2.5cm、幅1.8cmの448、長さ5.0cm、幅4.0cmの452、長さ9～10cm前後、幅4～5cm前後の453・454、欠損品だが長さ10cm以上、幅6cm前後の463と、長さ2.5cm大、5.0cm大、10cm大、それ以上の大きさが存在するようである。また、448～453・455・457は側面に平坦な面がみられるのに対して、456・461・463・464などは側面がより丸状を呈する。462は研磨がみられず、表裏・両側面に敲打痕を、下端部に剥離痕をもつ点からみて、木製品と推測される。459は研磨されてはいるが、下端部に剥離痕、表裏面の中央に敲打痕が認められ、磨製石斧の欠損品に2次加工を施した可能性が指摘される。

石材は458が混在岩、461は絹雲母片岩、462は安山岩である。また、448～457・459・460・463・464については原山智氏の石材鑑定により、変質したチャートとの見解を得た。しかし、それ等は従来、蛇紋岩と呼ばれてきた石材を含んでいる。

敲き石 (465)

敲き石は、安山岩製の凹石類に分類した凹石・磨石の機能を併せ持つものが多く、敲き石単独としての機能をもつものは少ない。安山岩製のものは、次で報告する。465は、偏平礫の下端部に使用痕が観察されるもので、石材は球質凝灰岩製。球質凝灰岩の偏平礫を素材とする敲き石は、この1点のみである。

凹石類 (466～485、巻頭カラー2、P L 30)

519点が出土し、その内の20点を掲載した。石材は全て安山岩製である。凹石類とは凹石・敲き石・磨石を含み、その3者はそれぞれ個別の石器としても存在するが、多くは凹部と磨面・敲打痕が同一個体に観察され、複数の性格を併せ持つので、凹石類の名称のもとに一括した。

素材の平面形状には、466の角状、467～476・484の楕円形状、477・478の長方形状、479～483の石鱗状、485の円形状を呈するものが存在する。466は下端部に敲打痕が観察され、凹部・磨面が顕著ではない点から、主に敲き石として機能したことが考えられる。472・473は断面形が三角形状で、3面に凹部をもつ。石鱗状のものには481～483など、断面形の1面が平坦で、もう1面が丸状を呈するものが存在する。この凹石類は凹部が1面の場合、平坦な面の方に凹部をもつ。丸状を呈する面には、顕著な磨面をもっている。474・476・478は、凹部に円～楕円形状の凹みとは異なる、横位方向の線状

痕が観察できる（P L 30、接写部分を参照）。線状痕に、板状を呈する両極石器1類（両極石器の項を参照）を置くと、収まりよく固定でき、さらに、この3点は第69号整六住居跡（S B 69）の覆土から、両極石器1類、黒曜石原石、多量の剥片類とともに出土した。この点から、黒曜石の原石・剥片類に対して、両極打法を行う台であった可能性を指摘したい。

なお、巻頭カラー2（下段）で掲載したように、凹石類には赤色顔料と思われるものが付着した例がみられる。それについては、ほかの赤色顔料関係資料とともに第6章で触れる。

石皿（486～492、P L 30）

382点が出土し、その内の7点を掲載した。石材は全て安山岩である。486～488は楕円形状を呈し、機能面に窪みをもつもので、形状に注目すれば、素材となる安山岩の形状をより残す486と、楕円形状に整えられた487・488の2者に分けることが可能である。489～492は盤状を呈し、機能面が平坦になるもので、駒形遺跡出土の石皿はほとんどがこれに該当する。この4点には、使用痕が顕著に観察されるが、ほかの盤状を呈する石皿には、使用痕が顕著でないものも存在する。使用痕が顕著でないものは、これまでは台石などと呼称されてきた。しかし、駒形遺跡出土のものには、台石としての機能が推測できるような使用痕は認められない。また、486・492の機能面に、黒色物質が付着する（スクリーントーンの範囲）。黒色物質は機能面・使用痕の範囲と重複し、石皿の機能に関わる物質と推測されるが、その成分は不明である。

軽石製品（493、P L 29）

掲載した1点が出土したのみである。三角形状を呈しており、両側縁部に研磨痕が認められる。

石製円盤（494、P L 29）

掲載した1点が出土したのみである。周縁部に加工を施し、円形状に整えたとと思われる。機能・性格などは不明だが、富士見町坂平遺跡（富士見市教委2004）に出土事例がみられる。

砥石（495～498）

7点が出土し、その内の4点を掲載した。形状は盤状または角状で、砥面は全体的に浅く凹む。495は盤状を呈し、表裏2面に砥面が観察される。496・497は角状を呈するもので、496は5面に砥面を、497は1面に砥面と2面に敲打面をもつ。498は有孔の砥石で、砥面は4面である。石材は全て砂岩製。

扶状耳飾（499～501、P L 29）

4点が出土し、その内の3点を掲載した。平面形状は、円形もしくは円形に近い形状を呈すると思われるが、欠損品のため不明確である。しかし、中央の孔が大きい499・500と、孔が小さい501といった分類は可能であり、501はさらに断面形が扁平である。499は欠損部付近に1個の孔が穿たれるが、欠損面に再加工の痕跡が認められないので、いわゆる補修孔となろう。500は切れ目付近に、磨切痕（途中）のような、線状痕がみられる。石材は499・501が変質したチャート製、500は葉蠟石製である。

石棒

未掲載だが、石棒が出土している。安山岩製の2点で、NR1の覆土から出土した1点（管理No.32）と、表面採集資料の1点（管理No.71）である。NR1出土の石棒は長さ19.8cm以上、太さ11.9cm、重さ2240gで、下端部を欠損する。採集資料の石棒は長さ14.1cm以上、太さ8.1cm、重さ1040gを量り、こちらも下端部を欠損する。いずれも無頭の石棒である。時期は、採集資料については不明確だが、NR1の石棒は覆土で前期前葉と中期後葉の遺物が出土しており、石棒の大きさを考慮すると中期後葉の所産と推測しておきたい。

2. 器種組成 (第7表)

今回の調査で出土した石器は合計 57,147 点を数える。その内訳は、剥片類が 45808 点で 80%、原石・石核が 2790 点で 5%、残り 8563 点の 15%が石器の各器種に該当する。

石器は前述のとおり、石鏃、石匙、スクレイパー、石錐、抉入石器、両極石器、礫器、打製石斧、磨製石斧、凹石類、石皿、砥石、石棒、加工痕の有る剥片、抉状耳飾、石核、原石、剥片類に分類され、各器種の個体数を第7表に示した。この内、剥片類と両極石器、加工痕の有る剥片については、次のような条件が付帯する。

- 剥片類については一通りの観察を行ったが、個々についての詳細な検討が充分とはいえず、加工痕の有る剥片などに本来分類されるべきものが含まれている可能性が残る。
- 加工痕の有る剥片についても、詳細な観察は行っていない。いわゆる2次加工のある剥片、微細な刺痕を有する剥片、器種不明など、様々なものが混在する。
- 両極石器は、板状を呈するもの(1類)の一部を当初は両極石器として扱っていなかったために、石核あるいは加工痕の有る剥片に分類されたものが存在する。

以上の状況から、石核、加工痕の有る剥片、両極石器、剥片類の個体数については第7表で示した数値に若干の変更を伴う。しかし、器種組成の傾向が大きく変わるような事態は生じないと思われ、特に定形的な石器はより実態に近いデータを示すと考えられる。なお、器種不明としたものは、上記からすれば加工痕の有る剥片に含めるべきだが、13点は報告資料なので敢て別に抜き出した。

定形的な石器で、最も多く認められるのは石鏃であり、未製品と推測される資料を加算すれば、個体数はさらに増加する。石鏃、スクレイパー、石匙、石錐、抉入石器、打製石斧、磨製石斧、凹石類、石皿、抉状耳飾、砥石、石棒の、定形的な石器の合計 3,744 中、石鏃は 45%と約半数を占める。それに次ぐのはスクレイパーの 19%だが、最も多い石鏃とはかなりの開きが認められる。また、凹石類が 14%、石皿が 10%となり、この2器種も一定量が組成する。比率上、10%を超えるのはこの4器種のみで、4器種は合計で 88%に達するので、石鏃、スクレイパー、凹石類、石皿が駒形遺跡における主要な定形石器とみなすことができる。その中でも、石鏃が極めて高比率な点が特徴といえる。

3. 石材と器種の関係 (第8・9表)

石器 57,174 点で確認された石材は黒曜石、チャート、珪質泥岩、珪質凝灰岩、石英、砂岩、凝灰岩、安山岩、無斑晶質安山岩、緑色片岩、泥岩、流紋岩、絹雲母片岩の 13 種類である。その比率は、黒曜石が 55,325 点と 97%を占め、そのほかの石材 12 種類は加算しても 1,868 点、全体の 3%に止まる。

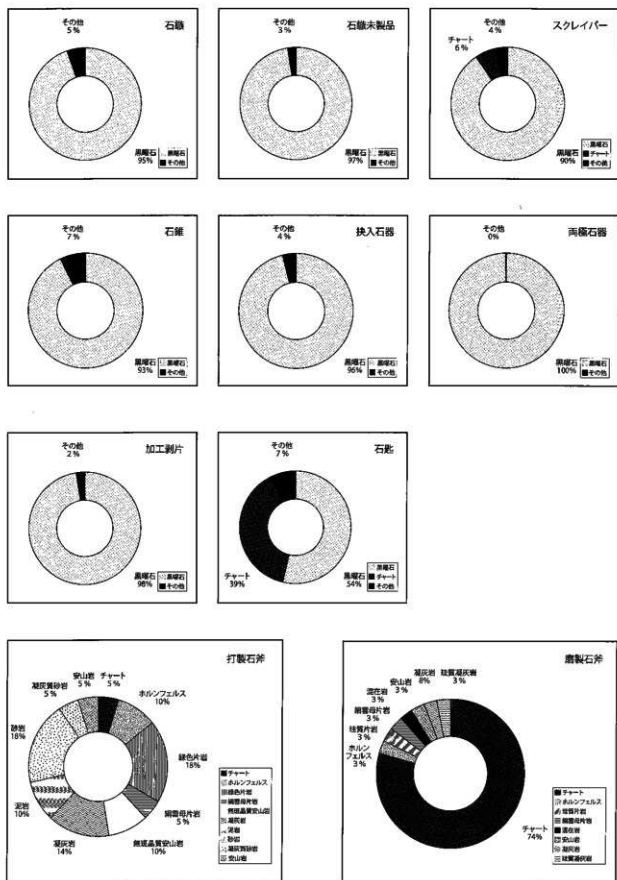
石鏃は 1001 点中、947 点が黒曜石、54 点はそのほかの石材で、黒曜石が全体の 95%を占める。そのほかの石材としては、チャートが 47 点と最も多く、珪質凝灰岩が 2 点、以下、石英、凝灰岩、無斑晶質安山岩、珪質泥岩、流紋岩が各 1 点ずつとなる。珪質凝灰岩・泥岩はチャート系石材なので、それをチャートに加算すると比率上は 5%になり、黒曜石とチャート・チャート系石材でほぼ 100%に達する。

石鏃未製品は 671 点中、654 点が黒曜石、17 点はそのほかの石材で、黒曜石が全体の 97%を占める。そのほかの石材はチャート 13 点、珪質泥岩 2 点、石英 2 点で、石鏃と同様に多量の黒曜石とわずかなチャート・チャート系石材で構成する。

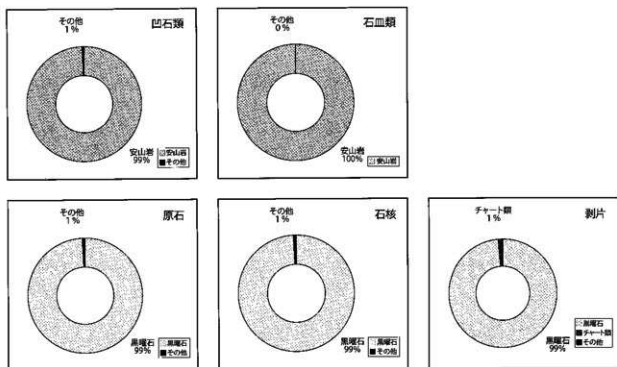
器 種	個体数
石鏃 (未製品を含む)	1672 点
スクレイパー	698 点
石匙	134 点
石錐	218 点
抉入石器	50 点
両極石器	2953 点
加工痕の有る剥片	1868 点
打製石斧	21 点
磨製石斧	36 点
凹石類	520 点
石皿	382 点
抉状耳飾	4 点
砥石	7 点
器種不明	13 点
原石・石核	2790 点
石棒	2 点
剥片類	45808 点

第7表 石器の器種組成

第4章 縄文時代の遺物



第8表 石器と石材の関係(1)



第9表 石器と石材の関係(2)

石鏃のように、石材の中で黒曜石が90%以上と高比率な傾向をみせるものは石鏃、スクレイパー、挟入石器、両極石器、加工痕の有る剥片である。

石鏃は218点中、202点が黒曜石で93%、そのほかの7%はチャート、珪質泥岩、珪質凝灰岩、砂岩となり、砂岩1点以外は全てチャート・チャート系石材に該当する。スクレイパーは698点中、全体の90%を占める632点が黒曜石である。残りの10%にはチャート、石英、ホルンフェルス、絹雲母片岩、混在岩、安山岩、無斑晶質安山岩、凝灰岩、珪質泥岩、珪質凝灰岩、砂岩、凝灰質砂岩、流紋岩と多様な石材が認められ、その中でチャート・チャート系石材は合計で6%になるが、チャート・チャート系以外も合計すれば4%に達する。スクレイパーは、小形のものや播器に黒曜石が多く、大形のものや削器にはチャート系を主として黒曜石以外のものも一定量が存在するといった傾向がみられる。

挟入石器、両極石器、加工痕の有る剥片は、石鏃、スクレイパーよりもさらに、石材の中で黒曜石が占める比率が上昇する。挟入石器は50点中、48点が黒曜石で96%、そのほかの2点はチャートと砂岩である。両極石器は2,953点中、2,944点が黒曜石で、チャート6点と石英3点が存在するものの、比率上では黒曜石で100%になる。また、加工痕の有る剥片は1,868点中、1,823点の98%が黒曜石で、それ以外はチャート35点、石英3点、流紋岩1点、無斑晶質安山岩1点、珪質泥岩1点である。

以上の小形石器は、黒曜石の比率が極めて高いものであったが、これとは異なる状況が石匙にみられる。石匙は134点で、最も多いのは黒曜石だが、全体の比率は72点、54%に止まる。その次は、チャートと珪質泥岩・凝灰岩といったチャート系石材となり、合計52点で39%に上る。残りの7%は凝灰岩、砂岩、凝灰質砂岩の10点で、石匙は黒曜石と、チャート・チャート系石材の比率が高い点特徴となろう。

次に、黒曜石やチャート系を主な石材としない石器の様相について触れる。該当する石器は打製石斧、磨製石斧、凹石類、石皿、石棒である。

打製石斧は21点で、第8表に示した10種類の石材がみられる。その中では、緑色片岩と砂岩がそれぞれ18%とやや多い傾向を示している。磨製石斧は36点中、27点の74%がチャートである。しかし、

このチャートはスクレイパーや石匙のチャートと同一ではなく、緑色で変成作用を受けたチャートと鑑定されているが、従来は蛇紋岩と呼称されてきたものを含んでいる。それ以外は、7種類の石材が認められるが、比率的には全て10%以下である。

凹石類は520点中、517点の99%が安山岩、3点の1%が砂岩、また、石皿は382点の全点、100%が安山岩といった結果を得た。石棒は出上点数が2点と少ないが、ともに安山岩製である。

また、石器（製品）ではないが、剥片類は黒曜石、チャート、石英、珪質泥岩、砂岩、凝灰岩、珪質凝灰岩、安山岩、無斑晶質安山岩、緑色片岩、泥岩、流紋岩、絹雲母片岩といった石材が認められ、45,808点中、45,235点の99%が黒曜石、そのほか12種類の合計が1%である。石核は1863点中、1848点の99%が黒曜石、原石も927点中、920点の99%が黒曜石であった。

剥片類、石核、原石の99%が黒曜石で一致する状況は、原産地から選ばれた黒曜石の原石が、駒形遺跡からさらに持ち出された可能性があるものを除いて、駒形遺跡で石器製作が行われていたことを示す可能性が高い。黒曜石の比率が90%を超える石鏃、石錐、スクレイパーなどの器種が、駒形遺跡で製作された石器と推測されようか。それに対して、そのほかの石材、特にチャートやチャート系は原石や石核がほとんどみられず、その比率が高い大形削器、石匙の素材となるような剥片が得られる大きさのものは存在しない。さらに、剥片類にもその大きさは認められず、小形のものばかりである。この点から、チャート・チャート系石材の大形削器と石匙は、駒形遺跡で製作された明確な痕跡がなく、ほかの遺跡から製品が持ち込まれた可能性が指摘される。少量が存在する、小形のチャート・チャート系剥片類の一部は、仮に大形削器や石匙の刃部再生などによって生じたものと理解すれば、駒形遺跡では大形の削器や石匙は製品として持ち込まれ、刃部再生を行いつつ使用されたとする推測も可能であろう。

以上から、石器の石材は石鏃、スクレイパー、石錐、挟入石器、両極石器、加工痕の有る剥片といった小形石器に黒曜石の占める比率が極めて高く、スクレイパーの大形削器と石匙にはチャート・チャート系石材の比率が高いとすることができる。小形の黒曜石製石器は、駒形遺跡で製作された可能性が、チャート・チャート系の大形削器や石匙には、製品が駒形遺跡へと持ち込まれた可能性が推測される。また、打製石斧には多様な石材の利用が認められるのに対して、磨製石斧は編成作用を受けたチャート（従来の蛇紋岩を含む）が主体で、凹石類と石皿、石棒は、ほぼ安山岩を選択している点が特徴である。

4. 石鏃製作の可能性

(1) 第69号竪穴住居跡出土石器と両極石器

第69号竪穴住居跡の覆土では、スクレイパー、石匙、石錐、挟入石器、加工痕の有る剥片、石核、打製石斧、石皿、挟耳飾、多量の剥片類とともに、黒曜石製の石鏃と石鏃未製品、両極石器、黒曜石原石、凹石類が出土した。この中で、注目されるのは両極石器である。両極石器には、長辺の上下方向に両極打法によると思われる剥片剥離が観察され、通常、ピエス・エスキューなどと呼ばれているものと、板状を呈し上下・左右方向に両極打法によると思われる剥片剥離が観察されるものの、2者が認められる。特に、板状を呈するものについては、前項の両極石器の概要説明において1・2類に分類した。

第69号竪穴住居跡出土の両極石器は、397・398・400・402・405（第149図）などが1類に、413（第150図）などが2類に該当する。2類は、両極打法による上下・直角（左右）方向の剥片剥離をもつ1類に対して、加工剥離を施し始めたものと推測され、さらに、2類が存在することは、1類が加工剥離を行うための何かの素材になっていた可能性が指摘される。この、「何かの素材」を推測するにあたり、両極石器1・2類の形状と、加工剥離の状態に注目してみたい。

形状について、1類には長方形のものと、長方形の1辺が斜行するものが存在した。長方形の1辺が斜

行するものとは、397・399・407・410などで、掲載した図版の向きを90度変えてみると、二等辺三角形に近い形状を呈するといえる。また、2類にみられる加工剥離は、側縁部からやや細かな加工剥離が表裏両面に施されており、石鏃や石鏃未製品（特に石鏃未製品）の加工剥離と類似している。加えて、形状が1類よりもさらに二等辺三角形形状を呈する。2類が、1類に対して加工剥離を施したものであれば、長方形もしくは二等辺三角形形状の1類が素材となり、石鏃・石鏃未製品に類似したやや細かな加工剥離を、側縁部から表裏両面に施し、より二等辺三角形を志向するといった、加工の工程が浮上する。石器器種の中で、二等辺三角形形状を呈するものは石鏃であり、加工剥離で二等辺三角形形状を作出する工程は、まさに石鏃製作の工程と考えることができよう。

ちなみに、両極石器と石鏃未製品、石鏃製品の大きさを比較すると、両極石器1類は石鏃未製品よりも大きく、両極石器2類は石鏃未製品とほぼ同等あるいはやや大きい、石鏃未製品は石鏃よりもやや大きいといった傾向が認められ、両極石器1・2類→石鏃未製品→石鏃製品と徐々に小形化する。以上の状況から、「何かの素材」と思われる両極石器1類は、石鏃の素材であって、両極石器2類は石鏃製作のために1類に対して加工剥離を施したものと推測したい。

(2) 石鏃製作工程

① 原石から両極打法によって素材を作り、素材に加工剥離を行う工程

第69号竪穴住居跡出土資料から推測される石鏃製作工程は、両極打法による剥片剥離と、加工剥離の両者が認められるものであり、以下のような工程が推測される。

- ① 原石・剥片
↓ 両極打法による剥片剥離
- ② 両極石器1類
↓ 加工剥離
- ③ 両極石器2類・石鏃未製品
↓ 加工剥離
- ④ 石鏃（製品）

①は、石鏃を製作するための黒曜石原石を獲得することから始まる。また、②へ移行するにあたり、両極打法による剥片剥離が可能な剥片が、原石とともに準備された可能性がある。前述したとおり、黒曜石の原石は、長さ10.0cmを超えるものはほとんど存在せず、長さ5.0～7.0cm大になると一定量が存在し、長さ5.0cm以下のものが多い。②の両極石器1類は、長さ3.0～5.3cm（4.0cm以下が多い）、幅2.0～3.5cmなので、一定量が存在する5.0～7.0cm大と、量的に多い5.0cm以下の中で、両極石器1類よりも大形の原石が、上記の工程によって石鏃を製作するために選択されたことが推測される。②は、①に対して両極打法による剥片剥離を行ったもので、直接石鏃の素材となり、③へ移行するための加工剥離を行うことが可能な大きさと、石鏃としての大体の形状および大きさを備える。③は、②に対して加工剥離を行い、両極石器2類・石鏃未製品へと進捗したと考えられる。加工剥離によって、さらに石鏃としての大きさ・形状に近づく。そして、細かな加工剥離が行われて、④の製品が仕上がる。

石器の器種分類において、それぞれ個別に分類された原石、両極石器1・2類、石鏃未製品、石鏃（製品）が、各器種の間に両極打法と加工剥離といった技術を挿入することで、一連の関係資料としての繋がりが生ずる。また、凹石類で指摘した、凹部に線状痕が観察されるものは、②の両極石器1類を線状痕上に置くことによりよく固定でき、両極打法を行うための台であった可能性を指摘しておきたい。

こうしてみると、第69号竪穴住居跡（S B 69）覆土出土の石器は、様々な器種が存在する中で原石、両極石器1・2類、石鏃未製品、石鏃（製品）、そして線状痕をもつ凹石類など、上記の製作工程を説明

できる資料が揃っていると評価され、さらに多量の剥片類に、両極打法や加工剥離から生じたものが含まれている可能性は高い。出土状況からみて、第69号竪穴住居跡の中で石鏃製作が行われたとはいえないが、近隣で石鏃製作が行われ、埋没過程にある第69号竪穴住居跡の窪地へ、石鏃製作に関係する遺物が一括廃棄された、などの状況が推測される。

② 原石から剥片素材を得て、素材に加工剥離を行う工程

駒形遺跡の石鏃は、全て両極石器を素材としたものではない。前項の、石鏃未製品の概要で触れたとおり、151・152・161・162などは、表・裏面中央に大きな剥離面が観察され、側縁部からは比較的細かな加工剥離が入る。中央の剥離は1方向からにより、上下・左右といったいわゆる両極方向からの剥離は認められない。そのため、中央の剥離面は、石核から素材剥片を獲得した際の面で、素材剥片に対して加工剥離を行い、石鏃を製作したことが推測される。

携って、駒形遺跡では、両極石器そのものを素材とする工程とともに、石核から獲得した適切な剥片を素材とする工程の、2つの方法によって、石鏃製作がなされていたと考えられる。

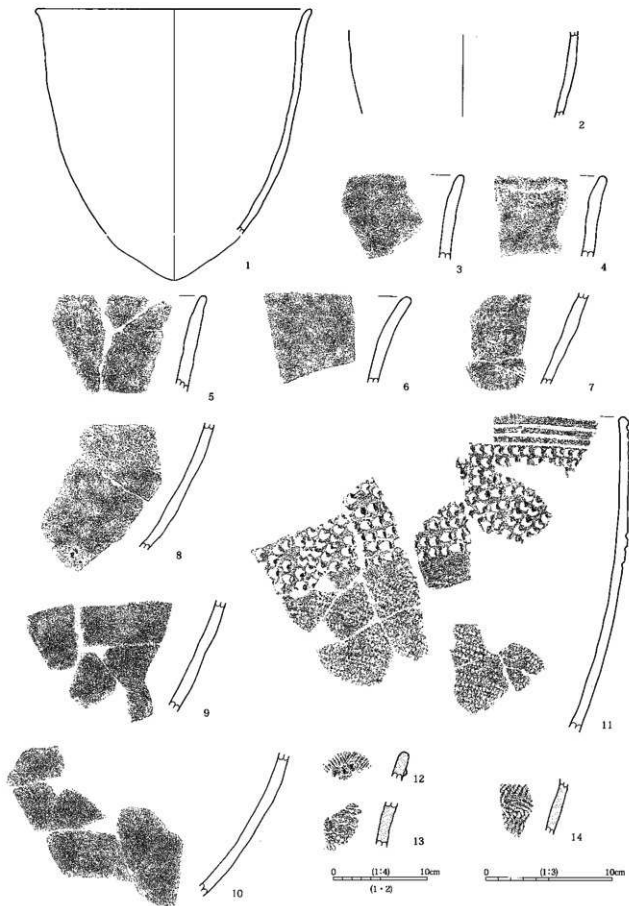
(3) 石鏃製作に関する若干のまとめ

石鏃製作について、両極石器を素材とする工程と、石核から獲得した剥片を素材とする工程を推測してみた。その内、剥片を素材とする製作工程は、石鏃に限定されたものではなく、ほかの剥片石器に対して通常みられる工程である。しかし、それだけではなく、両極石器を素材とする製作工程が実際に存在したとすれば、何らかの理由があるはずである。

石核から獲得した剥片に対して加工剥離を行い、石鏃（製品）を仕上げるためには、どれ位の大きさの剥片が必要であったのか。駒形遺跡で石鏃（製品）としたものは、長さ1.2～3.0cm、幅1.0～2.0cm前後の範囲にほぼ収まるものである。また、石鏃未製品は、長さ1.5～3.5cm前後、幅1.5～2.5cmの範囲に含まれるものが多い。従って、石核からの剥片を素材とするならば、少なくとも剥片は石鏃未製品よりは大きいものが必要になる。駒形遺跡の黒曜石原石は、再三にわたって述べたとおり、長さ5.0～7.0cm大のものが一定量存在し、長さ5.0cm以下のものが最も多い。こうした原石から、石鏃製作に都合のよい大きさの剥片を獲得することは可能であろうか。剥片素材と思われる、石鏃未製品が現に存在するので、適切な大きさの剥片が獲得できれば、剥片に対して加工剥離を行い、石鏃を製作したのであろう。しかし、仮に、この大きさの原石では、素材として十分な剥片が獲得できなかった、あるいは獲得しづらかった場合に、両極石器を素材とする工程で、石鏃製作がなされた可能性は考えられないだろうか。また、剥片を原石から獲得するよりも、両極打法によって直接素材を作り出すほうが効率的、といった考えも浮かぶ。

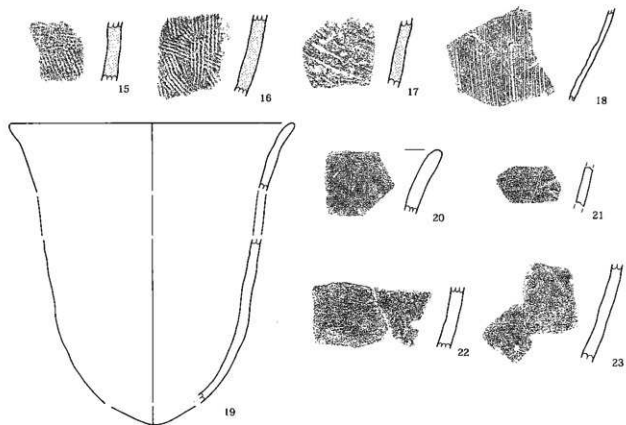
宮坂清氏によれば、縄文時代晩期の例ではあるが、諏訪星ヶ塔黒曜石原産地遺跡で出土し、「石鏃未製品の可能性のある石器」と呼んだものに、駒形遺跡の両極石器や石鏃未製品が類似するという。さらに、宮坂氏は、星ヶ塔黒曜石原産地遺跡出土のこうした資料が、石器製作を示すものであれば、駒形遺跡出土の両極石器、および両極石器を石鏃の素材とする製作工程は、原産地的な石器製作である、と指摘する。駒形遺跡の位置は霧ヶ峰周辺および和田峠などの、黒曜石原産地に近く（第2章参照）、「原産地的な石器製作」との指摘は無視できないものがある。

以上、石鏃製作工程について述べてきたが、現状では推測による部分が非常に多い。特に、両極石器を石鏃の素材とする製作工程について、剥片類の観察を行いながら製作工程で生じたと考えられる小剥片を探す、あるいは周辺遺跡において同様の資料が出土しているのかなどといった、今後、検証すべき課題を多く残している。

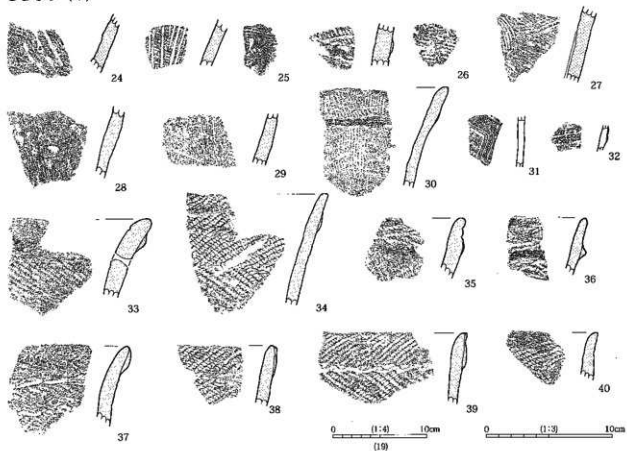


第 68 图 第 37 号整穴住居跡出土土器

SB38

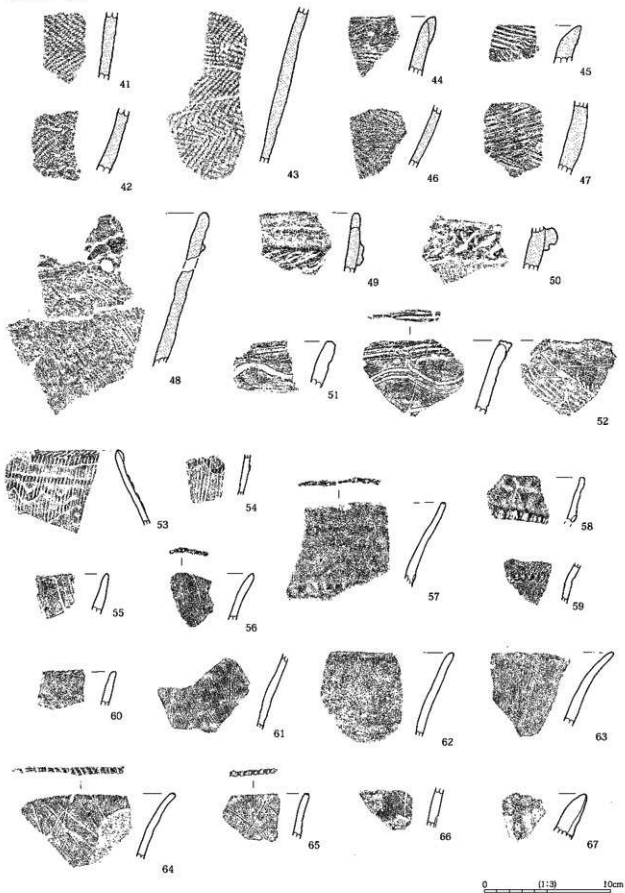


SB39 (1)



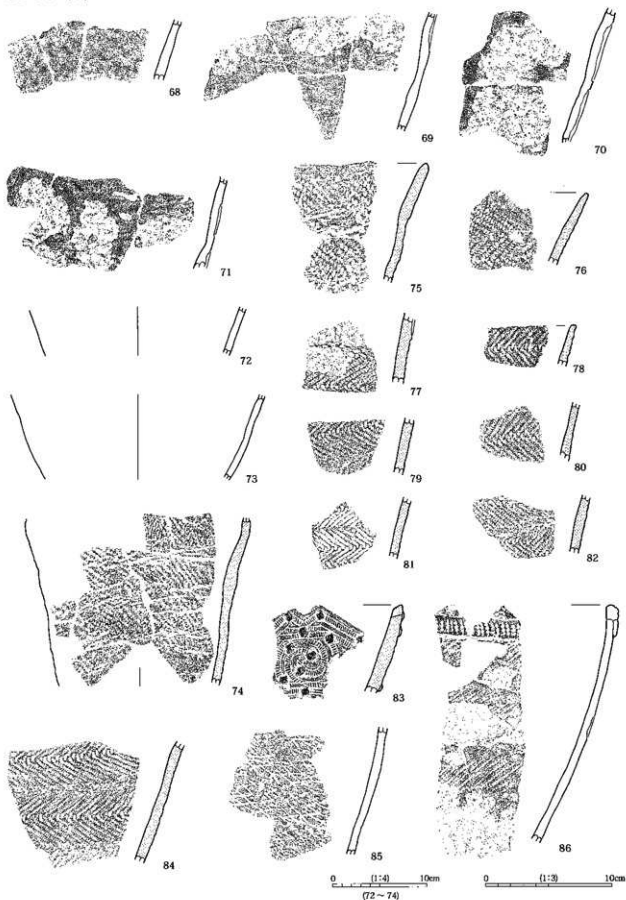
第69図 第38・39号(1) 野穴住居跡出土土器

SB39 (2)



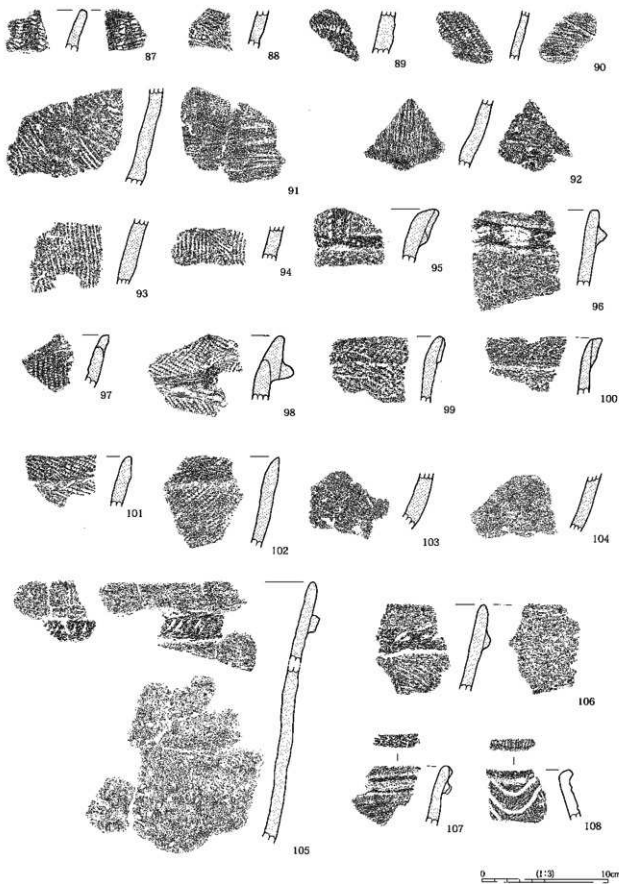
第70图 第39号(2) 壁穴住居跡出土土器

SB39 (3)



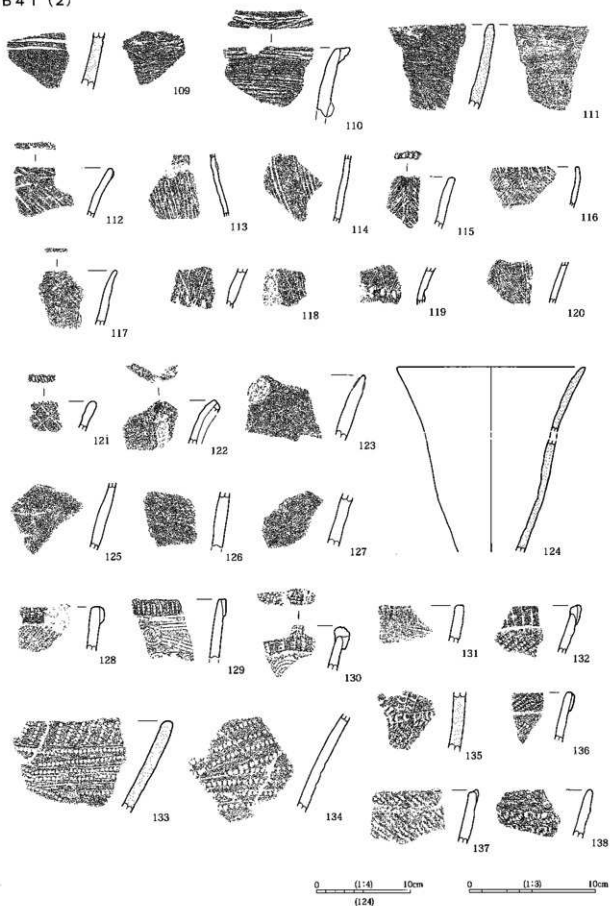
第71図 第39号(3) 竪穴住居跡出土土器

SB41 (1)



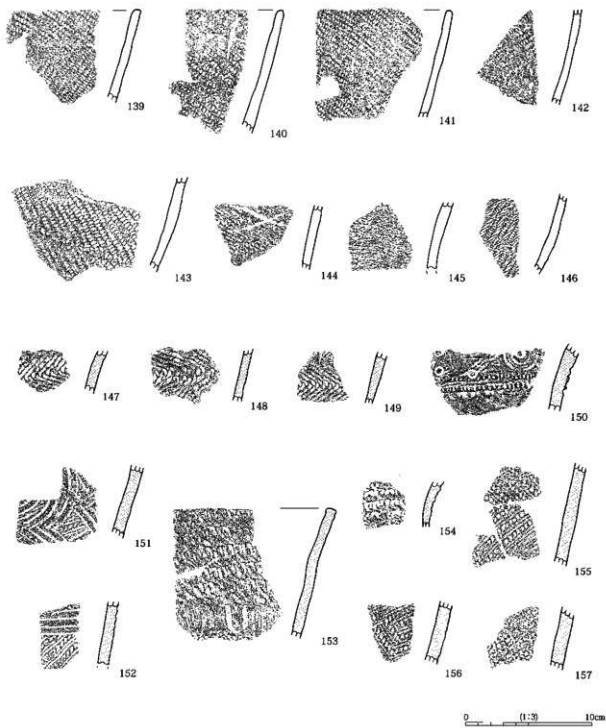
第72图 第41号(1)竖穴住居跡出土土器

SB41 (2)



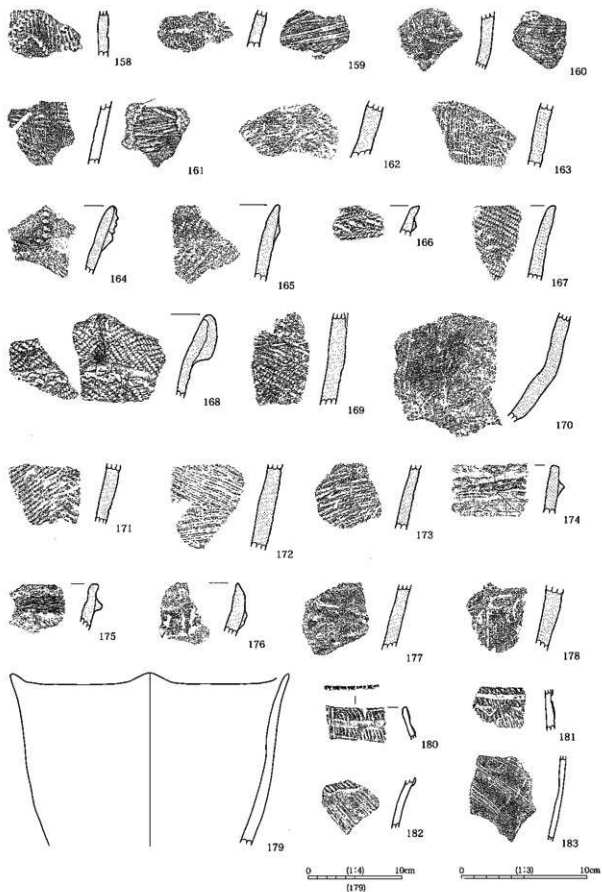
第73図 第41号(2) 雙穴住居跡出土土器

SB41 (3)



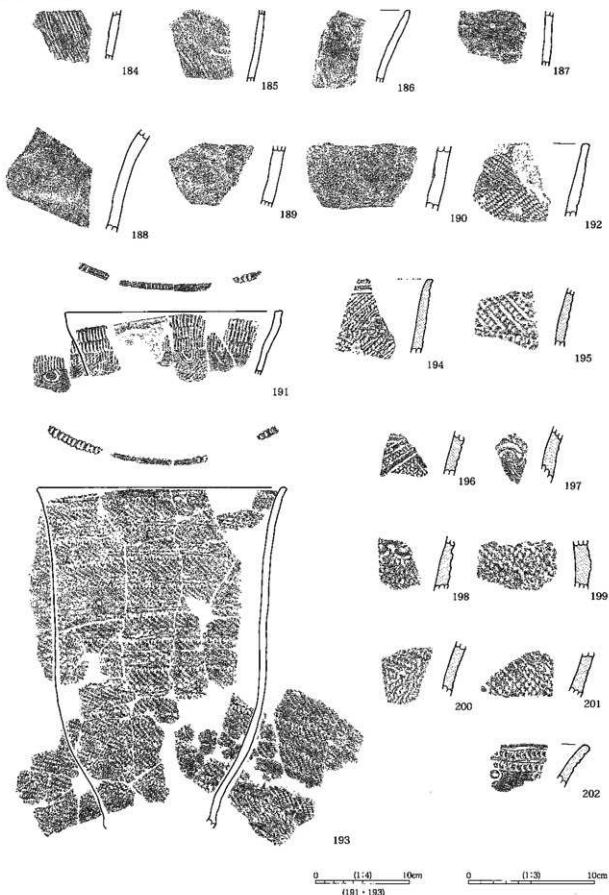
第74圖 第41号(3) 竪穴住居跡出土土器

SB42 (1)



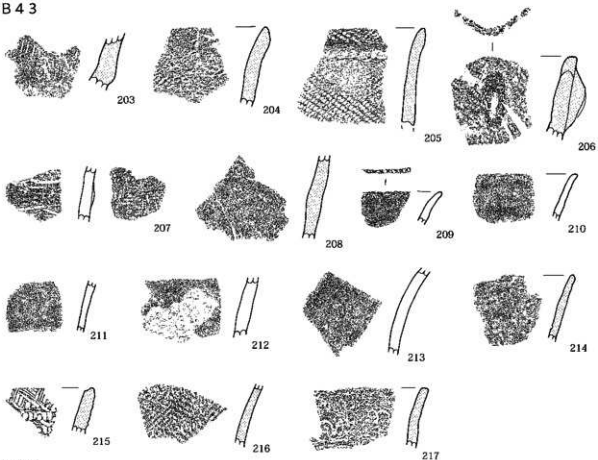
第75図 第42号(1) 竪穴住居跡出土土器

SB42 (2)

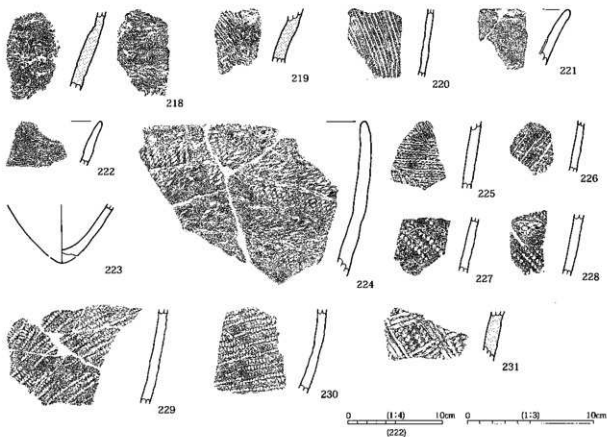


第76图 第42号(2) 竖穴住居出土土器

SB43



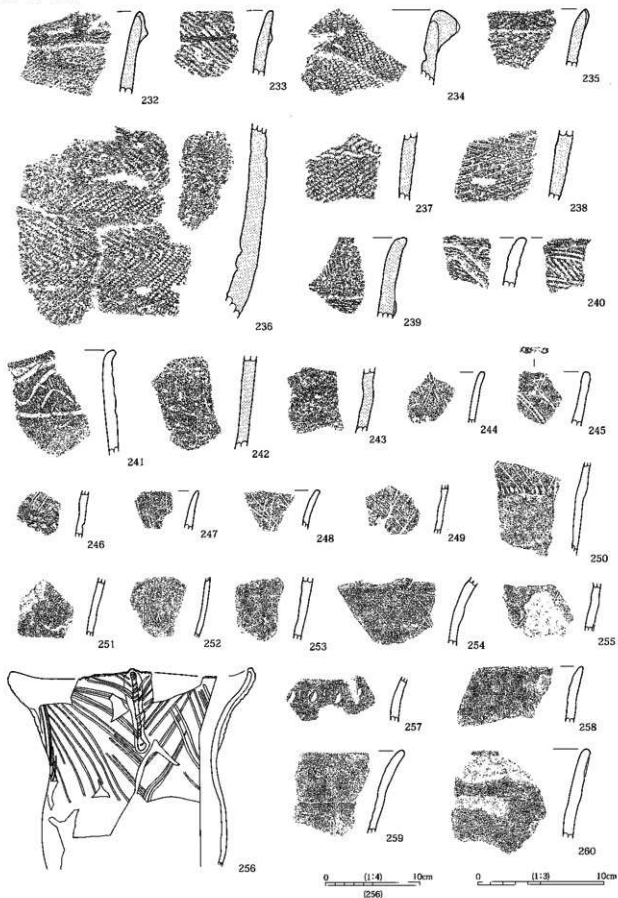
SB45



0 (1:4) 10cm 0 (1:3) 10cm
(222)

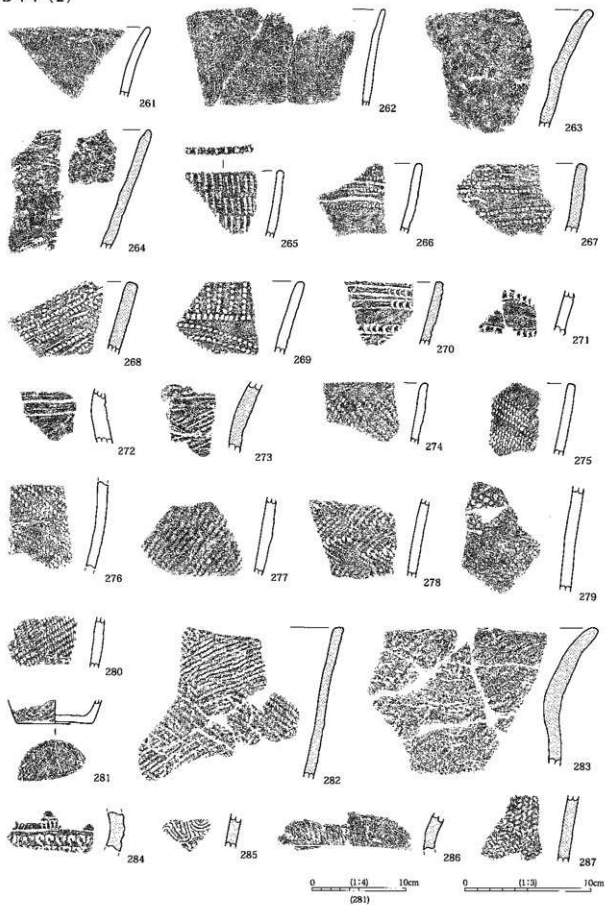
第77図 第43・45号壺穴住居跡出土土器

SB 44 (1)



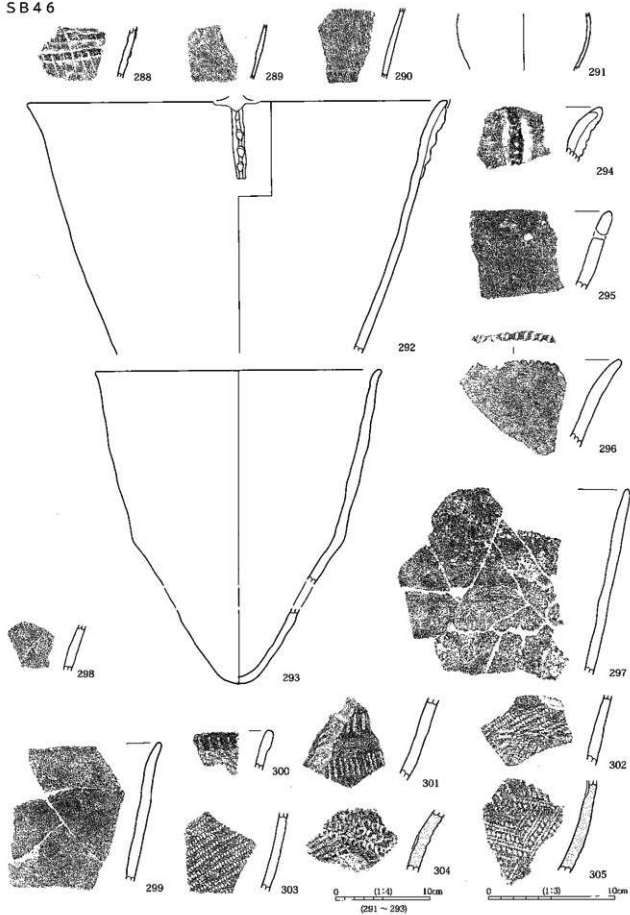
第 78 图 第 44 号 (1) 竖穴住居跡出土土器

SB44 (2)



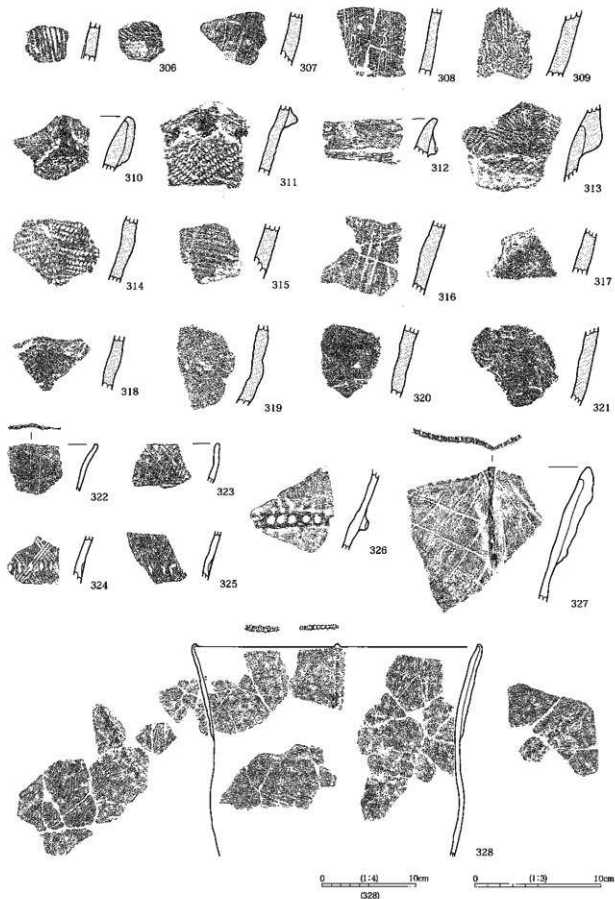
第79図 第44号(2) 竪穴住居跡出土土器

SB46



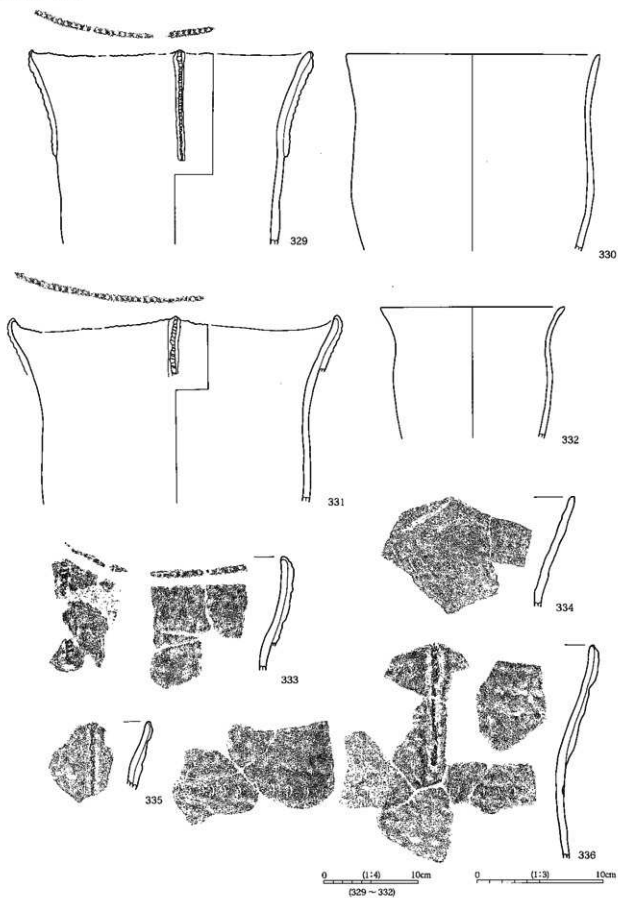
第80圖 第46号壑穴住居跡出土土器

SB47 (1)



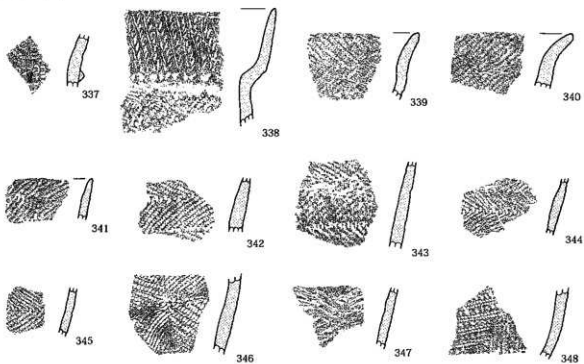
第81図 第47号(1) 竪穴住居跡出土土器

SB 47 (2)

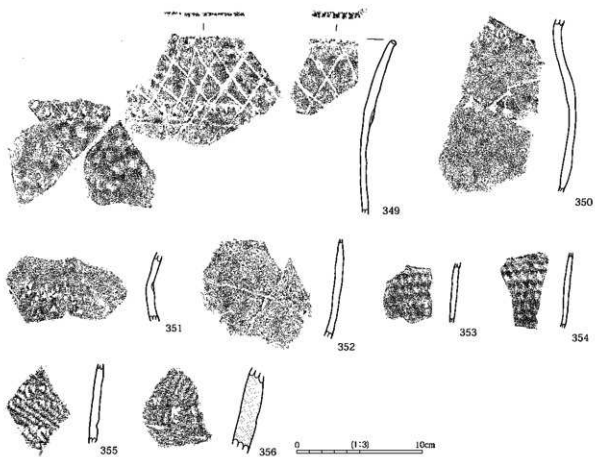


第 82 图 第 47 号 (2) 竖穴住居跡出土土器

SB47 (3)

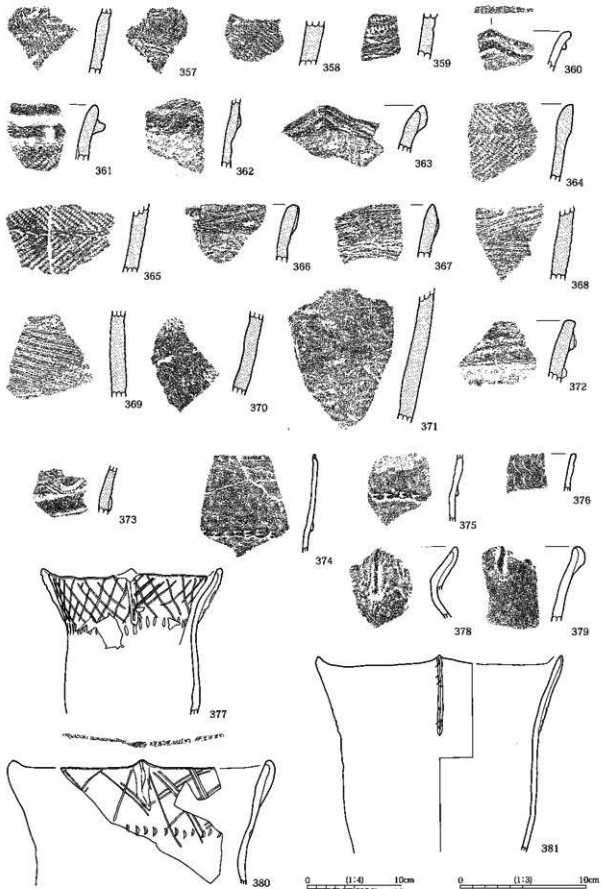


SB52



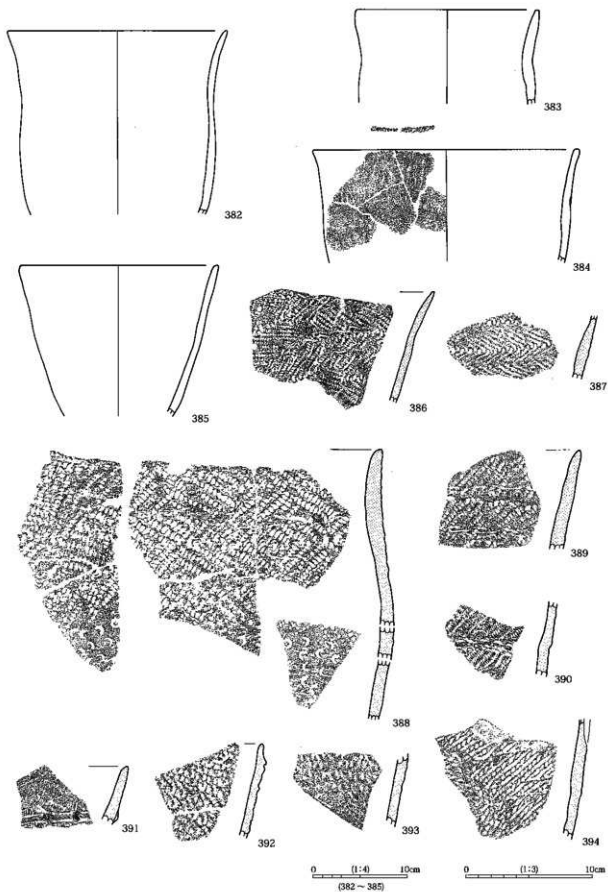
第83図 第47号(3)・52号竪穴住居跡出土土器

SB48 (1)



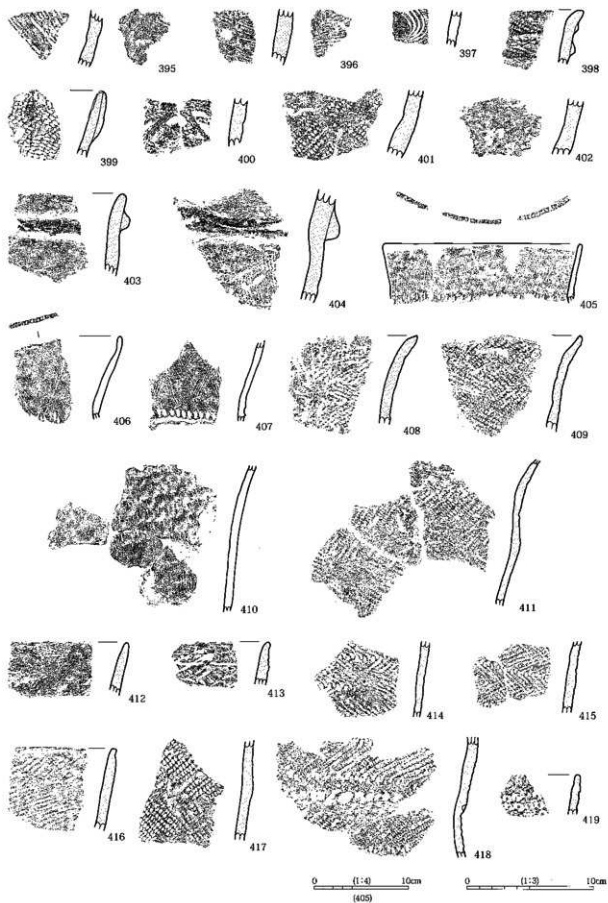
第84图 第48号(1)号整穴住居跡出土土器

SB48 (2)



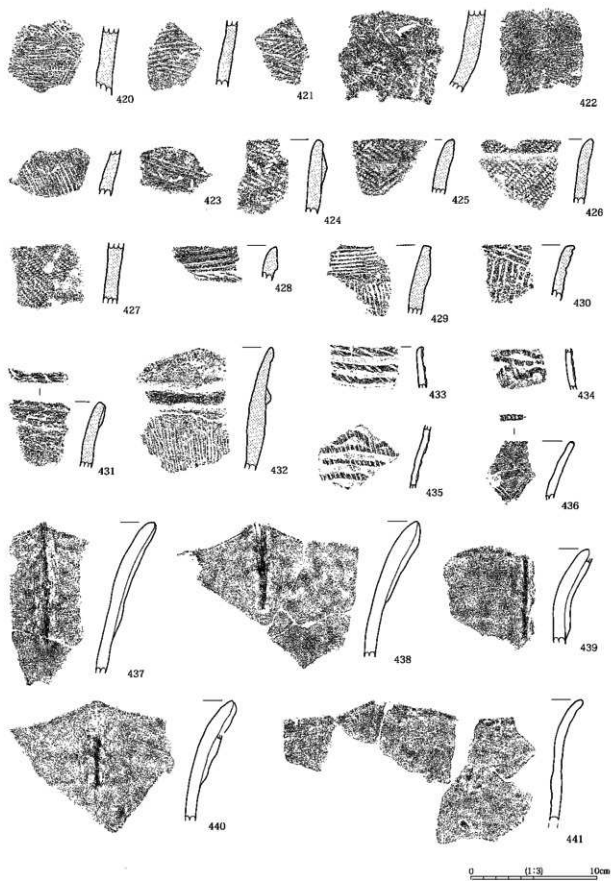
第85図 第48号(2)号竪穴住居跡出土土器

SB 49



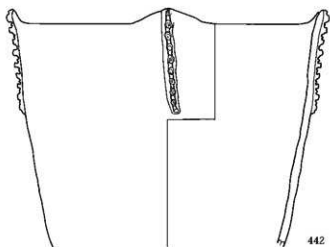
第 86 图 第 49 号墓穴住居跡出土土器

SB50 (1)

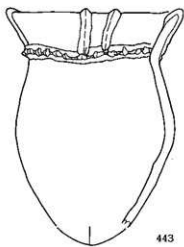


第87図 第50号(1) 竪穴住居跡出土土器

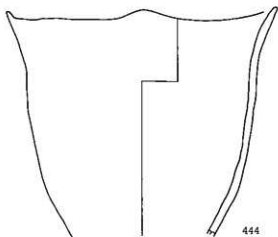
SB 50 (2)



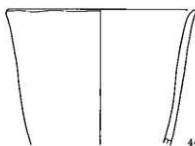
442



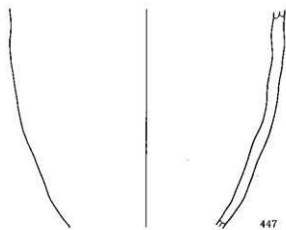
443



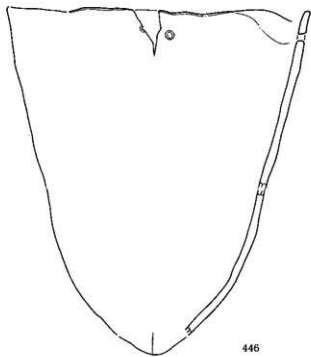
444



445



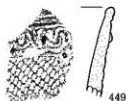
447



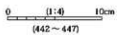
446



448



449

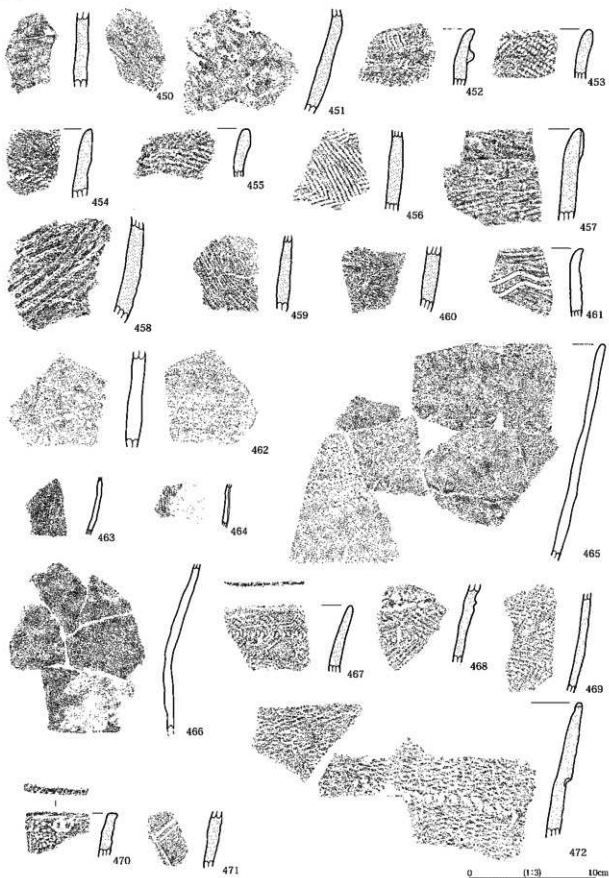


(442~447)



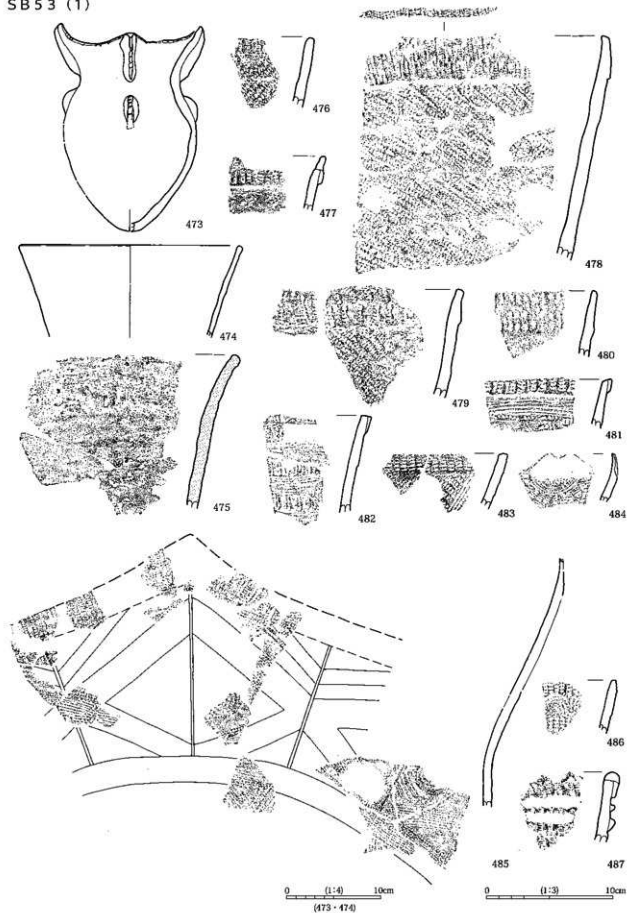
第 88 图 第 50 号 (2) 寝穴住居跡出土土器

SB 51



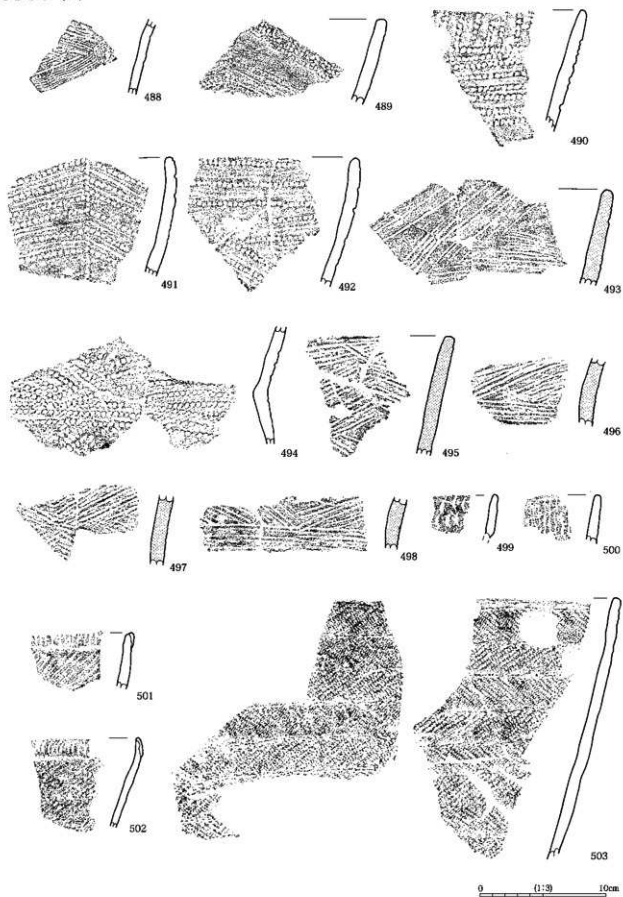
第89圖 第51号竪穴住居跡出土土器

SB53 (1)



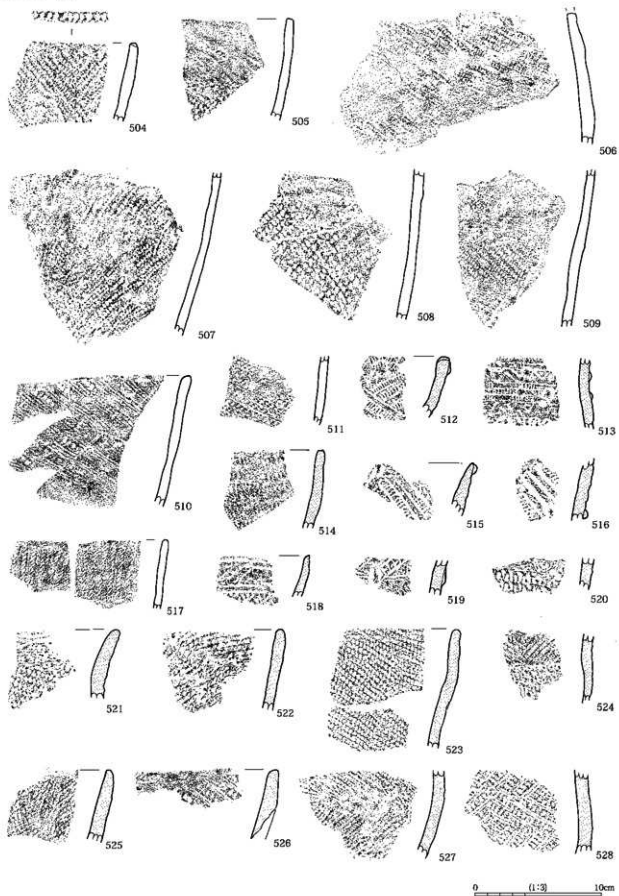
第90图 第53号(1) 竖穴住居跡出土土器

SB53 (2)



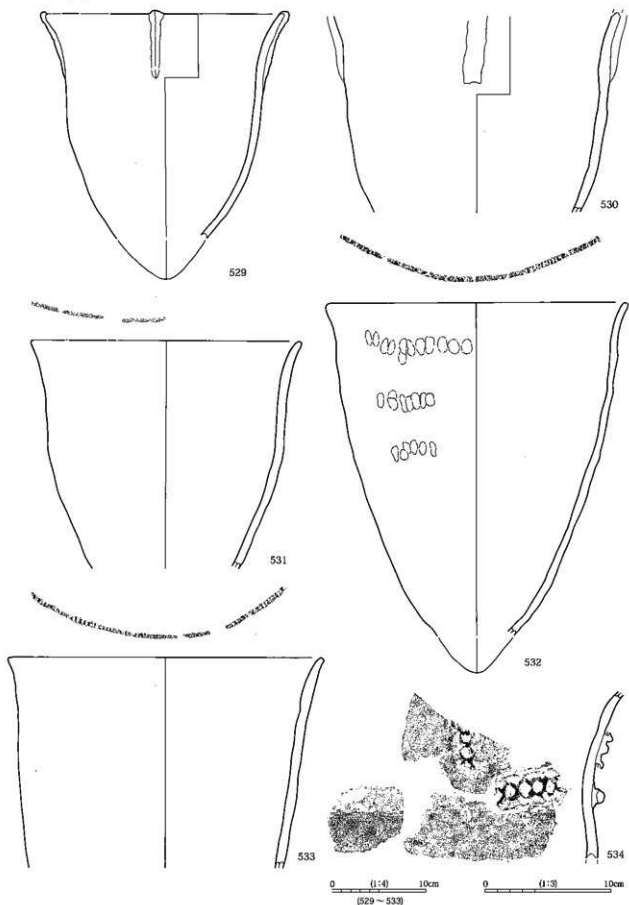
第91図 第53号(2) 竪穴住居跡出土土器

SB 53 (3)



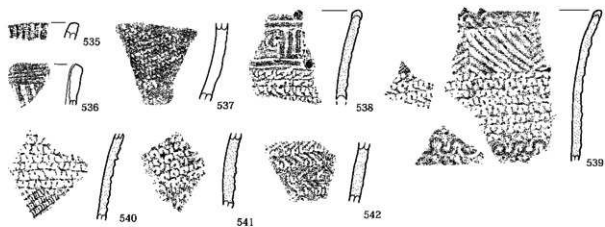
第 92 图 第 53 号 (3) 竖穴住居跡出土土器

SB54 (1)

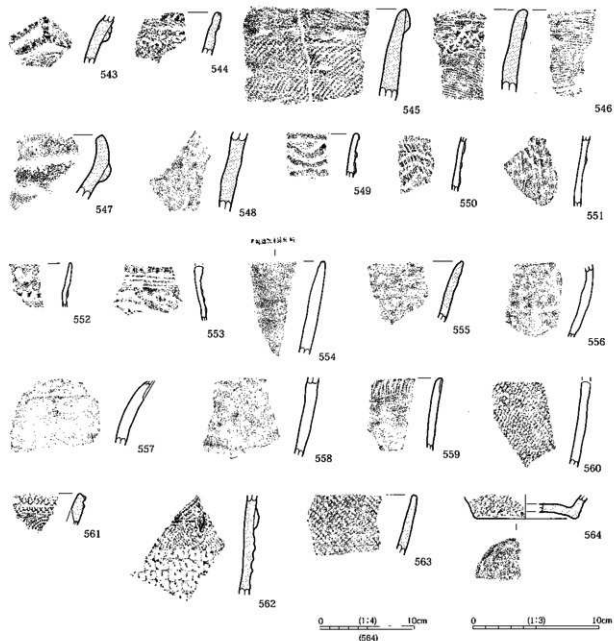


第93図 第54号(1) 竪穴住居跡出土土器

SB 54 (2)

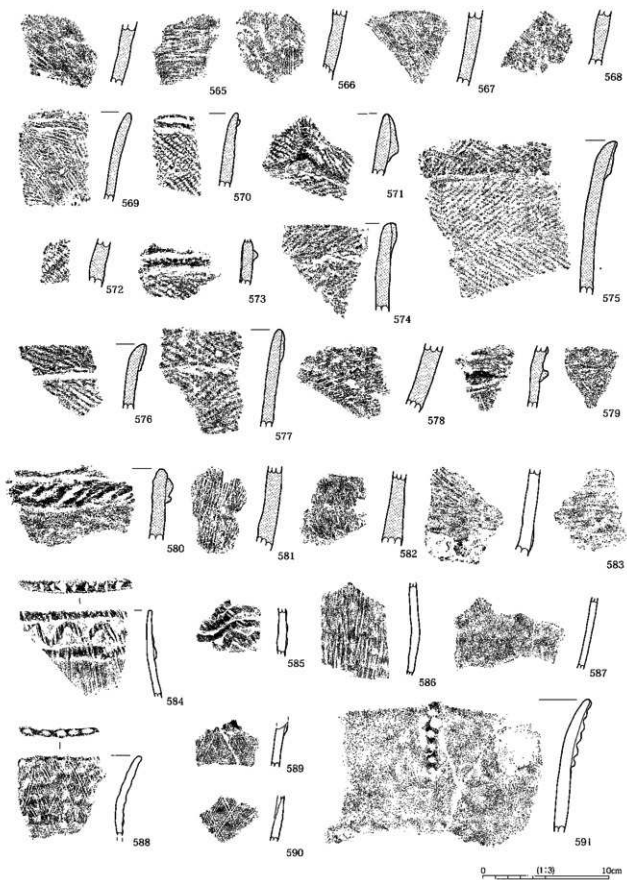


SB 59



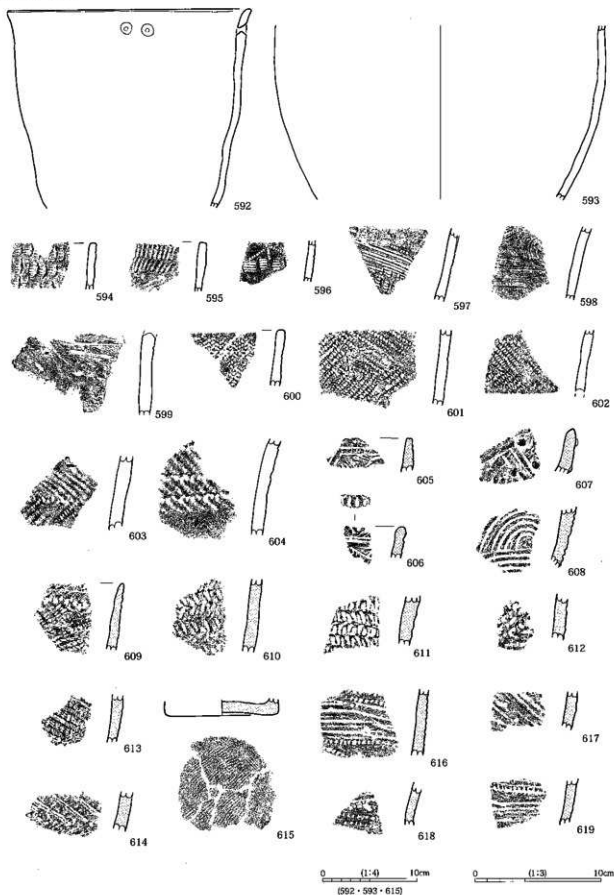
第94图 第54号(2)·59号竖穴住居跡出土土器

SB55(1)



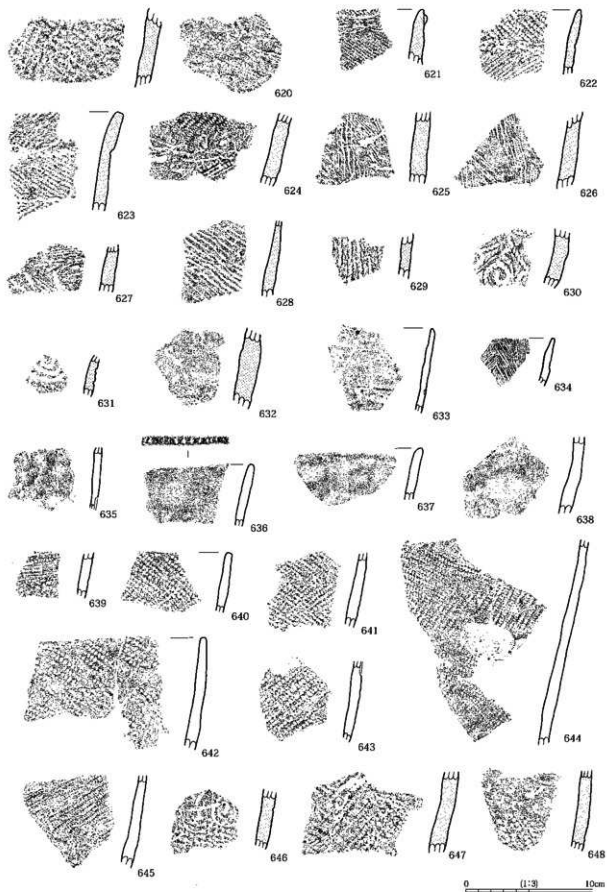
第95図 第55号(1) 壺穴住居跡出土土器

SB55 (2)



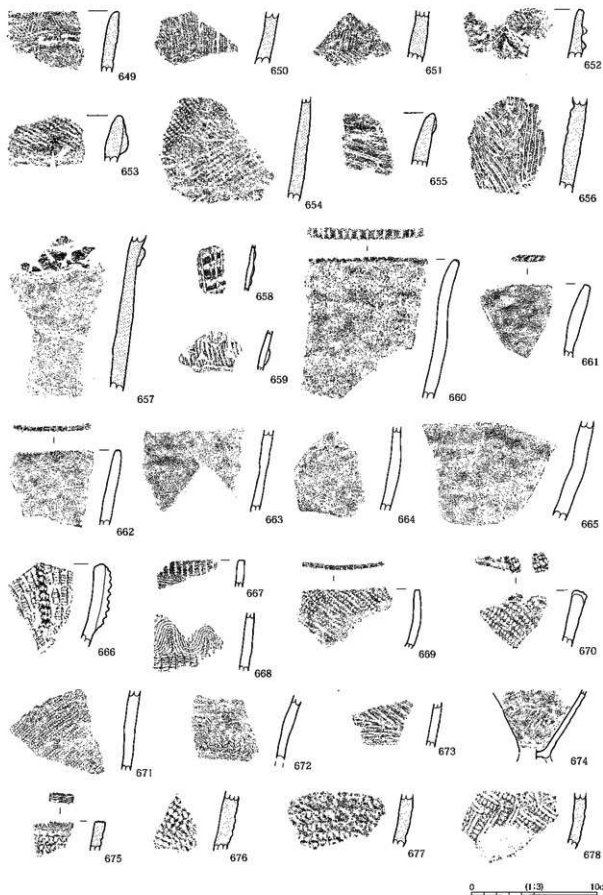
第96图 第55号(2) 壁穴住居出土土器

SB 56



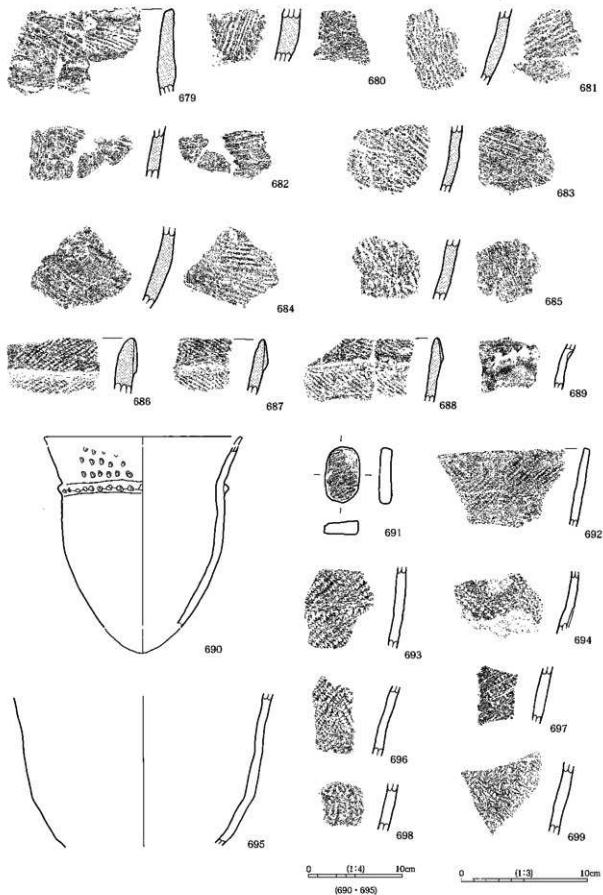
第97図 第56号竪穴住居跡出土土器

SB 57



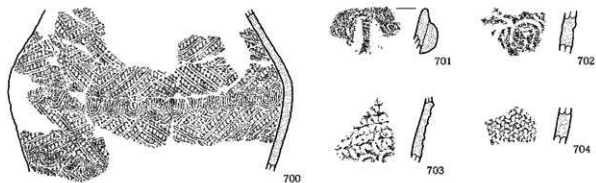
第 98 图 第 57 号窑穴住居跡出土土器

SB58 (1)

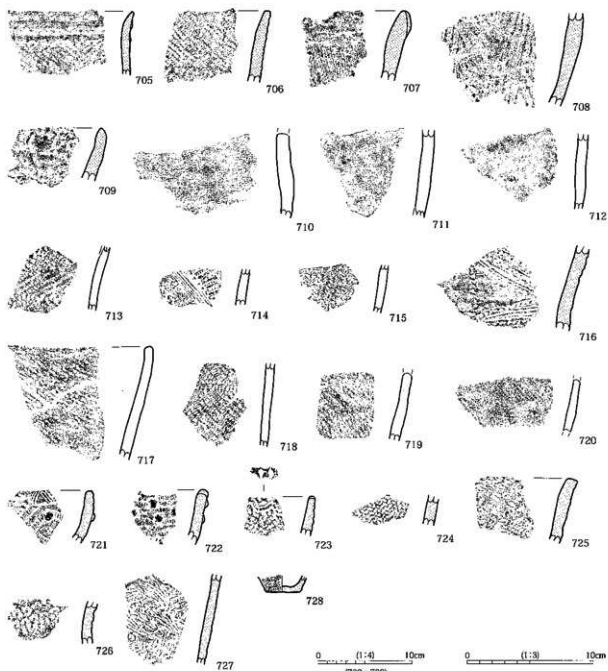


第99図 第58号(1)竪穴住居跡出土土器・土製品

SB58 (2)

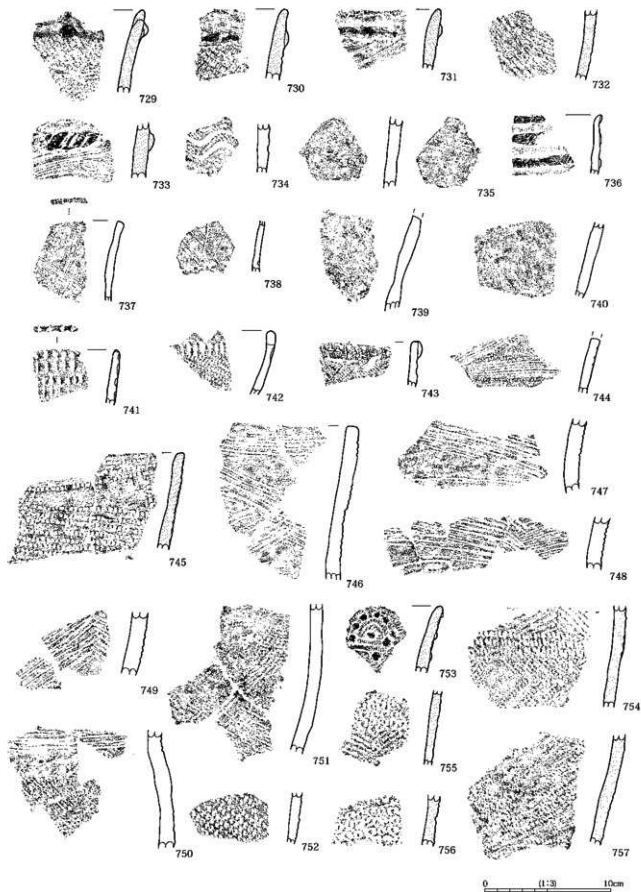


SB60



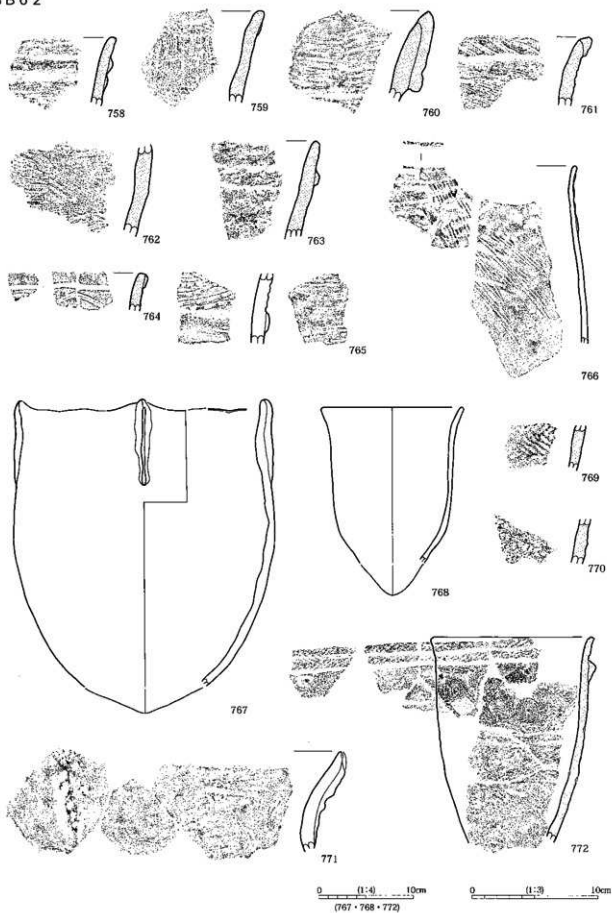
第100图 第58号(2)·60号竖穴住居跡出土土器

SB 61



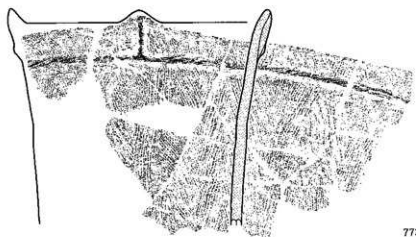
第101図 第61号竪穴住居跡出土土器

SB 62



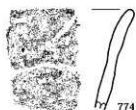
第102圖 第62号竪穴住居跡出土土器

SB 64



773

SB 65



774



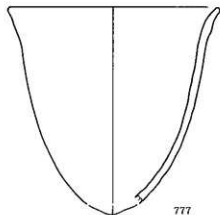
775



SB 66 (1)



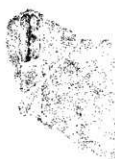
776



777



778



779



780



781



782



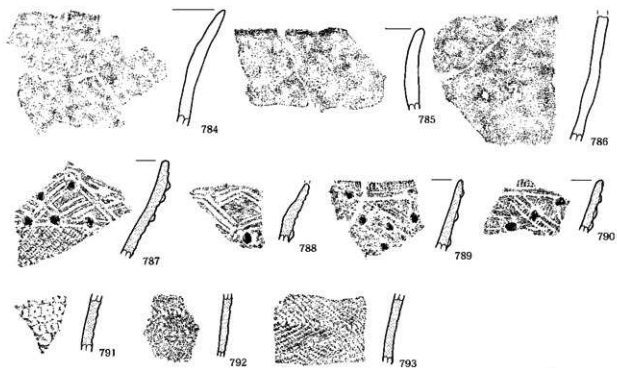
783

0 (1:4) 10cm
(773・777)

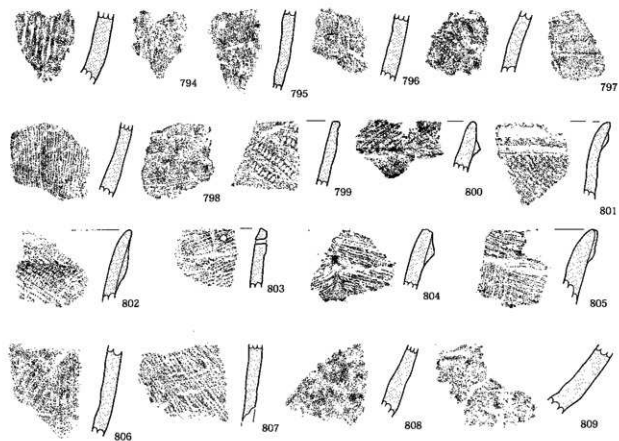
0 (1:3) 10cm

第103図 第64・65・66号(1) 整穴住居跡出土土器

SB 66 (2)



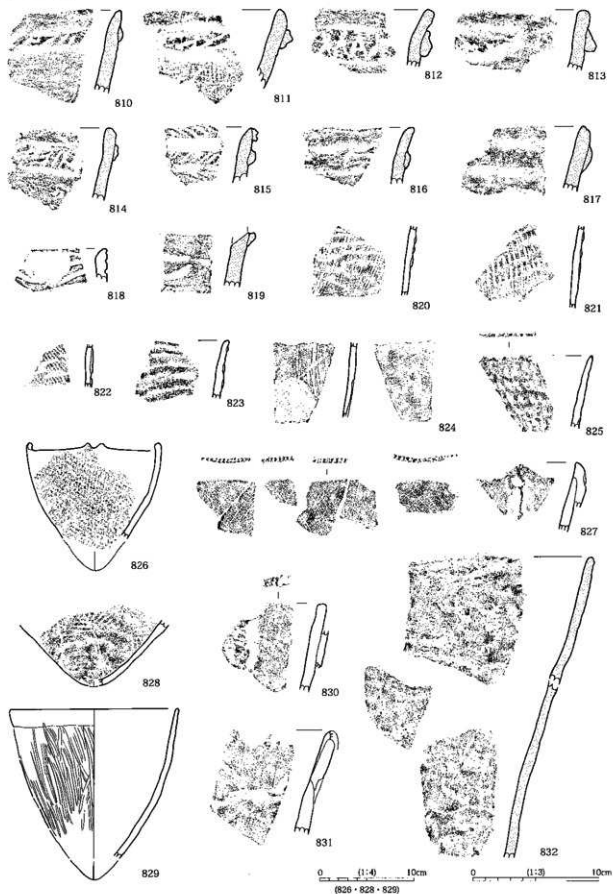
SB 67 (1)



0 (1:3) 10cm

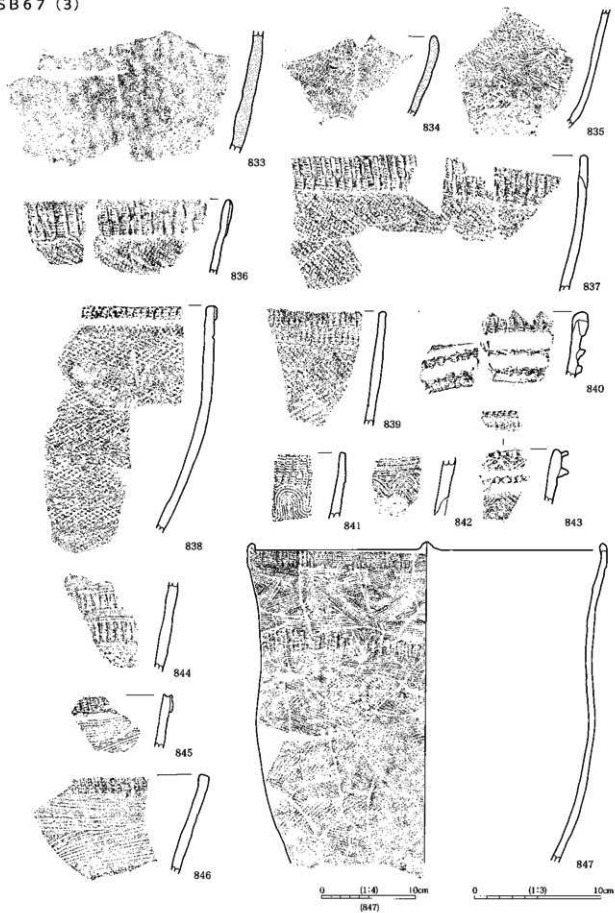
第 104 图 第 66 号 (2) · 67 号 (1) 竖穴住居跡出土土器

SB67 (2)



第105図 第67号(2) 豊六住居跡出土土器

SB 67 (3)



第 106 图 第 67 号 (3) 整穴住居跡出土土器